收容書目

三貨圖彙

坤　巻

日本經濟叢書

卷二十八

日本經濟叢書刊行會

日本經濟叢書卷二十八目次

目次終

解題

三貨圖彙（坤卷）

本叢書前卷には、三貨圖彙第一卷より第二十卷（假りに乾卷として）までを收容せしが、本卷（坤卷となし）には、其の物價之部十卷・附錄之部九卷・及遺考之部三卷、合計二十二卷を收容したれば、是れにて三貨圖彙全部四十二卷を完結せるものなり、さて本卷に收容せる物價之部は、前卷の記事とは、大に其の性質を異にし、題目に表する通り、全く物價の沿革を述べたるものなり、然れども其の主要の點は、金銀貨の位の高下、及錢の相場の昂低に從つて、一般の物價、就中米穀の直段に、多大の變動を及ぼしたることを詳說し、且つ米相場の取締に關し、時の當局者が種々の干涉を試みたることなどを、最

も適切に評論したるものにして、學者の參考に資すべきこと少なからざるなり、著者は物價に就ては元來放任主義の論者にして、其の米價を論ずるや、「安キモ天、高キモ天ニテ、天地ハ不爲一物枉其時、日月ハ不爲一物晦其明、豐凶高下ハ天地消長ノ道ナリ、樂極レバ則悲ミ、悲極レバ則樂シム、夏アレバ冬アリ、何ゾ一般ニ豐熟ノミヲ得ンヤ、能屈スルモノハ能伸ビ、米價下落極ル時ハ、又人氣起リテ令セザレドモ、後ノ高カラン事ヲ思ヒ、安キヲ見込、必ズ市民買置ノ心出來、自然ト高直ニナルモノ也、……米價ノ高下モ金銀ノ融通モ、天理ノ自然ニテ人力ノ儘ニハ成リ難シ、然レバ士民恒ニ其覺悟アル可キ事ニテ、米價ノ高下ハ捨置テモ可ナラン」と云へるが如きは、眞に經濟界の實驗上に得たる卓見なりと云はざる可らず、又是れは直接物價には、關係せざることなれども、嘗て肥後の堀平太左衞門が「借財ハ借財セザル爲メノ借財」と云ひし言を引證して、借金の利用を說き、「儉約ノ發起ト云ハ、元來借財ノ多キヨリ起リシ事ニテ、則借財ハ儉約ノ守リ本尊ト云ベシ、程ヨク道

筋ヲ立テ借財ヲ表ニシテ儉約スベシ、然ラザレバ家中下民迄、質素ノ風化行ハレズ、借財一錢モコレナク、國家豐饒ナルトキハ、上ハ勿論士民迄モ、何トナク心緩ビ、自然ト質素ノ風薄クナリ、果ハ奢リニ長ジ、却テ國家ノ煩ヒトナル、仍テ借財ハ儉約ノ基ト立テ、年々借財高ヲ諸侯ノ上聞ニ達シ、驕リノ長ゼヌ樣ノ壓石トスベシ」と喝破したるなどは、言、稍々矯激に涉るに似たりと雖も、亦一理なきにあらざるなり、初めより全然無借金で濟むことならば、勿論之れに勝ることなきは、著者の認むる所なれども、世間普通の人は、無益の借金をなして、借金に借金を累ぬるの愚策に出づることを戒め、借金するからは、大に之を利用すべしと云ふの意味に外ならざることは、著者が「借財ヲ死物ニスベカラス」と云ふの一言に依つて、明白なりと云ふべし、蓋し此等の言は、借金を以て重き罪惡と思惟し居たる當時に在つては、餘程思切つたる言語にして、非常の脫俗者にあらざれば云ふ能はざる所なり、而して本書物價之部、第一卷は專ら右等の大體論を述べ、第二卷は大正年間に於ける金

銀錢三貨の比價を考證して、米價其他の物價に論及し、第三卷は紀州湯川氏家藏の古文書、多門院日記及五奉行連書の書面等に依て、第二卷の主意を補足して、慶長末年までの記事に及び、第四卷は先づ初めに支那の常平倉、及我國の屯倉等、和漢備荒の大略を述べ、それより續いて、又本問題なる米金物價の關係を、最も詳細に記述したるは、我々經濟史を研究する者の爲めに、頗ぶる重要の資料にして、著者も亦此の點に重きを置きたることは、三貨圖彙著作の目的、此にありと云へるの言（本卷五四頁）に徴して明なりとす、第五卷は藏元・米問屋の說明より、米賣買受渡に關する取締、堂島米相庭の由來を記し、最後に著者の先代が、家に傳へたる米市場濫觴の記を掲げ、第六卷は第四卷の主旨を續ぎ、支拂金銀（通貨）の種類に依て、米相場に差違あることを詳述し、且古來各地方に於ける時々の天災豐凶等に從て、相場に高低ありたる事實を對照して、其の狀況を說明し、第七卷以下第十卷に至る迄、皆沿革的に同樣の事を記載し、文化十二年を以て記事の終りとせり、之を要す

るに如上物價之部十卷は其の記事、多少の錯雜を免かれずと雖も、德川初代より凡貳百年間に於ける、主もに米價の高低、就中貨幣の品位如何が之に及ぼしたる影響を記述して、最も詳備したるものなり

次ぎは附錄之部九卷にして、其の第一卷第二卷は、權量の事を記し、初めは我が國史及古今の雜記を引いて、度量衡を考證し、中には小判一兩と黃金一兩と差異ある事、幷に匁は錢の字の古字にして、昔は匁目と書きしを、元和寬永の頃より、目の字を省略したる事などを述べ、(第一卷)次ぎには、升に宣旨升・武佐升・古升・京升等の差ある事、及諸國の古文書、又は實物に付き各々其の形圖を示して、詳かに升の由來を說き、(第二卷)第三卷は紙幣及爲替の濫觴を記し、越後屋八郎右衛門が所謂六十日切爲替を始めたる元祖なる事、及當時の爲替組十二人の名前などを揭げ、それより又德政の事を、古今の諸書に徵して、最も詳細に記述し、第四卷は田畑屋敷の永代賣、及金錢の貸借等に關する古證文類を集錄し、第五卷は唐船及紅毛船の舶齎せる外國金

銀圖を揭げて、關係の記事を述べ、其の卷尾に森島中良の發行したる「魯西亞錢譜」を收め、第六卷は靑木昆陽の錢幣略記(元文四年の作)を收め、第七卷は新井白石の「本朝寶貨事略」を「國朝舊章錄」より轉載し、且其の卷尾には小瀨道喜の輯錄せる「太閤記金賦之事」とて、秀吉が天下一統の後、莫大の金銀を公卿及諸大名に分與したる事を記したる短篇を載せ、第八卷には白石の「寶貨事略」に續きて、寶永六年より明和二年に至る間に、長崎より外國へ持渡りたる金銀銅の計數を揭げたるものにて、其の原本は「天壽隨筆」と題し、長崎の吏員たりし佐久間某が、其の公務の餘暇に記し置きたるものを、後人が復た再び追補したるものを收容し、(此の追補は別に光被錄として坊間に寫傳す)第九卷は松平樂翁が天明年間に著作したる「庶有編」を採錄して、三貨通用の狀況等を示したるものにして、如上の諸書は、何れも著者が本書に關係を有する參考書として、附記したるものなれども、今は「天壽隨筆」外一二のものを除き、他は皆刊本又は寫本にて、多く坊間に傳はるものにして、格別重要

なるものにあらず

最後の遺考之部三卷は物價之部の補遺にして、文化十三年より文政八年まで、十年間に於ける物價（主として米價）の變動、金銀錢の相庭、及其の吹直等に關する詳細の事を記るしたるものにして、米價の高低及其の原因等を研究するには、物價之部と同じく、最も重要なる參考資料なり、著者は大阪の人にして（略傳は乾卷にあり）當時同地の經濟界に於ける、樞要人物の一人なりしかば、其の記述する所、皆實際に適切にして、殊に通貨と物價の關係を明にするに於て、頗ぶる意を用ゐたるの跡あるは、我々の大に感服する所なり、三貨圖彙は此の遺考之部三卷を以て、全部を完了す、草間家所藏の原本に就て之を推測すれば、本書は猶未定稿に屬し、書中往々著者の補筆を待たざる可らざるもの、鮮なからざりしが如しと雖、之を要するに、斯くの如きは、所謂璧玉の微瑕にして、本書の價値を左右するに足らざるなり、今此に圖彙全部の發行を完了するに際し、重ねて一言して草間家の厚意を謝す

大正五年九月

瀧本誠一

解題終

三貨圖彙

物價之部

附錄

遺考

草間直方著

三貨圖彙物價之部卷之一

草間直方輯録

書經洪範ノ八政ヲ初メ、經史・傳記ニ、食貨ヲ以テ政事ノ基本トスル事擧テ數ヘ難シ、士農工商ニ至ル迄、米價・貨物ノ高下ヲ考ヘ、儉素ヲ守リ、量レ入以制レ出ノ計籌ナクシテハ、必ズ國家安穩ナラズ、然レドモ我等如キノ者惡ク心得ヌレバ、吝嗇ニ落チ入米金交易ノ損益ニノミ心ヲ入ル故、夫ニテハ融通ノ道塞ガリ、又却テ安穩ナラズ、米穀ハ人命ヲ粮フモノユヱ、貨物第一ニシテ論ズルニ及バズ、金銀ハ實ニ以テ、飲食ノ代リトナラズ、衣服ノ替リニモナラズ、宣化紀ニ「黄金萬貫不レ可レ療レ飢、白玉千箱何能救レ冷」ト、何ノ用ニタヽヌモノナレドモ、是レヲ以世ノ中一切ノ用ヲ辨備サスル聖人ノ工夫故、金銀珠玉ハ米穀ニ次デ寶トセシモノニテ、金銀ノ用ハ一切ノ事ヲ融通サスルガ根本ナリ、然レバ融通ノ道偏ヨレバ、必ズ國家ノ煩トナル、大學平天下ノ章ニモ財ノ偏ナキヲ以テ、平ノ字ヲ解ケリ、則平等融通ノ道ナリ、米穀ハ豐凶ニヨルト雖モ、年々限リナク地ヨリ生ジ、金銀ハ限アルモノ故、人民貯ヘガタシ、仍テ米穀ノ德金銀ニ及バズシテ、豐熟ヲ踈ムニ至ル、是時世ヲ考ヘザル過チナリ、五十年以前迄ハ、豐凶大抵十ケ年平均ニシテ六十目ニ至レドモ、五十年以來ハ、山谷ヲ開キ、海濱ヲ築

出シ、水理ヲ考ヘ、沼池ヲ埋メ、新田トナシシ事幾十萬石ト云事ヲシラズ、コレニ仍テ海內豐熟ノ聞エアル時ハ、津々浦々米穀充滿シ、五十年以前ノ豐熟ニ比シテハ、今又廣大ノ增ナラン、仍テ米價下落スル時ハ、三四年モ打續キ、士民却テ迷惑ニ及ブ事有ベシ、天明七年四五月ノ頃、諸國一統米穀拂底ニテ、士民飢渴ニ及シヨリ、彌新田開發ノ企有テ、前文ノ通豐熟ト云ヘバ、米穀東西ニ充ツ、其後豐熟ヲ考ルニ大抵六七步ノ作ニテ、相庭一石ニ付、七八十目ニ至ル事間々アレドモ、其翌年新穀ニナリテハ、多分五十目代ノ位ニテ前年トハ二三十目ノ違ヒナリ、尤其年ノ豐熟ニ依ルトハ雖ドモ、計多ノ違ヒナリ、是諸國豐作トイヘバ、米穀充滿スル故也、當時六七步ノ作ト云ハ、五十年前ノ七八步ニ當リ、七八步ハ九步十步ノ作ニシテ、右天明七年後、年々諸國ノ樣子ヲ聞ニ、上々ノ作歲ト云モ、七八步ノ作ニテ、十步ノ豐作ト云事ナシ、七八步ノ作ニテ、米穀海內ニ充滿スルハ、全ク新地米多キ故ナラン、海內ノ人民モ亦五十年以前トハ增倍セシナラン、國々其食料ヲ除キテ、市ニ糶ニ津々浦々ニ滿ルヲ以テモ知ルベシ、然レバ今米價下落ニ依テ、容易ノ買米有テモ、其功有ベシトモ思ハズ、尤金銀融通宜キ時節ナレバ其効モアルベキナレドモ、不融通ノ時節ニテハ、彌金銀ノ位貴クナリ、米穀位賤ク、人氣騷立、却テ米價下落ニ及ブベキ歟、安キモ天、高キモ天ニテ、天地ハ不㆘爲㆓一物㆒枉㆗其時㆖、日月不㆘爲㆓一物㆒晦㆗其明㆖、豐凶高下ハ天地消長ノ道ナリ、樂極レバ則悲ミ、悲極レバ則樂シム、夏アレバ冬アリ、何ゾ一般ニ豐熟ノミヲ得ンヤ、能屈スルモノハ能伸ビ、米價下落極ル時ハ、又人氣

起リテ令セザレドモ、後ノ高カラン事ヲ思ヒ、安キヲ見込、必ズ市民買置ノ心出來、自然ト高直ニナルモノ也、金銀ノ用ハ一切ノ事ヲ融通サスルガ專用ナリ、故ニ都會市民ノ者ヘ申渡シ、其貯ノ金銀ヲ以テ買米仰付ラレテハ、無レ據米價高直ニ成ベキ道理ナレドモ、又金銀ノ用塞リ、東西ノ諸侯始メ、士民迄ノ融通滯リ迷惑ニ及ブ、コレニ仍テ又自然ト米價ノ引立トナラズ、然レバ今通用ノ外、別々ノ金銀ヲ以テ買米アラバ、兩樣トモ差支ナクシテ、士民トモ穩成ベキナレドモ、夫ニテハ不益多ク、如何トモナシ難シ、宋ノ代王安石宰相ニテ政事ヲ執シトキ、五百里ノ大湖ヲ埋メ、新田ニ開キナバ廣大ノ益ナラント、其事ヲ創ントセンニ、此大湖ノ水ヲ落スベキ工夫ナク、案ジ煩ヒケルニ、客ノ中ニ劉貢父ト云ヘル者、是ヲ聞テ此水ヲ落サン事、最易キ事也ト云、安石悦テ如何ト問ニ、答テ云、大湖ノ水ヲ落サントナラバ、其大湖ノ傍ニ今一ツ別ニ大湖程ノ湖ヲ鑿リテ、夫ヘ其水ヲ落サバ、忽大湖ハ潟水スベシト云、安石是ヲ悟リ大笑シ、其企罷シトカヤ、米價ノ高下モ金銀ノ融通モ、天理ノ自然ニテ人力ノ儘ニハ成リ難シ、然レバ士民恒ニ其覺悟アル可キ事ニテ、米價ノ高下ハ捨テ置テモ可ナラン、然ルトキハ金銀ノ融通手廣ク、却テ高直ニ成ルベキ哉、所謂若レ烹二小鮮一ノ喩ナラン、尤米價ノ高下モ其年ノ豐凶ニヨルト雖ドモ、其土地ノ融通ニヨリ、又少シ高下アリ、何レ融通ノ道塞ルトキハ其害多シ、相庭ハ人氣陽化ノ活物ナレバ、陰氣ニテハ引立難シ、元來相庭ハ商賈ノ私ヨリ起リ、公道ノ意ニヨラズ、其商高下アル故、商家ノ業モ勤リ、商賈ノ勤ニヨリ、金銀ノ融通モ出來、公私ノ用モ辨ズルモノ

ニテ、是定理也、心ヲ勞スル者ハ人ヲ治メ、力ヲ勞スル者ハ人ニ治メラル、人ニ治メラル、者ハ人ヲ養ヒ、人ヲ治ムル者ハ人ニ養ハル、、士・農・工・商、皆上有テ下立ツ、下有テ上立ツ、天地ノ用如レ是、其中貴ハ鮮ク賤ハ多シ、是天ノ物ヲ生ズル自然ノ理ニテ、鐵ヨリ銅ハ少ク、銅ヨリ銀ハ少ク、銀ヨリ金ニ至リテハ彌貴ク、人亦如レ是、米穀ニ於ルヤ金銀珠玉ニ超エ、貨物第一ノ貴キ物ニテ、鮮キ時ハ尊卑一日モ過シガシク、然レバ多年ノ豐熟モ願フベキ事ナラズヤ、如レ是貴キモノ故、恒ニ心ヲ用ヒ、凶年ヲ兼テ思ヒ計ルベシ、又凶作モ右豐作ニ准ジ、廣大ナル事ニテ、士民飢渇ニ及ベシト思ヘドモ、必其時ハ天ノ助ヲ得テ、國所ニヨリ豐作有モノ也、旱ハ濕地ニ益アリ、雨ハ乾地ニ益アリ、山谷ノ陰所ハ風災ニモ傷マズト云ヘバ、先ヅ當時ハ米價下直ヲ常トスベシ、然ラズシテハ俸祿ノ武家ハ、猶以テ迷惑アルベシ、然ルニ五十年以前モ今モ同樣ノ事ト思ヒテハ、諸侯ノ作廻齟齬スベシ、下民ハ無祿ノ者故武家ト違ヒ、米價ハ下直程、高キ算當ヲ以テ餘銀ヲ引ノケ儉約セザレバ、渡世齟齬スル事アリ、士ト民トハ心得天地ノ違アリ、偖金銀ノ用ハ一切ノ事ヲ融通サスルガ根本ニテ、商賈ノ用ハ其金銀ノ融通滯ラザルヤウ、萬物交易スルガ專務ニテ、蒼海ノ干鰯ヲ以テ、陸田ノ稻麥ヲ肥シ、材木銅鐵ヲ以テ、蒼海船楫ノ用トシ、百千萬ノ米穀ヲ初メ、貨物ヲ運送シ金銀ニ替、田野ノ菽・麥・麻・綿ヲ市ニ到シムル迄、皆商人ノ事務トスル處也、予ハ愚ニシテ他邦ノ情ヲ知ラズ、攝阪（攝ハ字彙ニ云、靜謐ナリ、漢書ニ云、攝然天下安、以象二天下靜謐一義）ノ攝津ノ地ハ、往古仁德ノ御代其德化ヲ慕ヒ、蕃夷ヲ始メ、萬民奉貢、海內ノ貨船、玆ニ入津ス、（但源家開基、祥瑞

ノ事ハ、庶有編並可レ考今以テ連綿トシテ、諸國交易ノ貨物相庭モ當地ヲ根本トシ、繁昌他ニ超エ、實ニ海內ノ天府ト云ベシ、コレニ仍テ賈民ニ至ル迄、義氣凛々タル一癖アリテ、能人ヲ育シ財ヲ分、萬物ヲ交易シ、海內諸侯方ノ仕送リヲ初メ、臨時非常公私ノ用銀ニ到ルマデ、賴談ニマカセ、纔一紙ノ契券ヲ以テ、莫大ノ金銀ニ引替ルコト、武家ノ信約ヲ失ハザルハ常ト知リテモ、義烈ノ人氣コレナクテハ成シガタキ事也、故ニ自他ノ幸トナリ、金銀融通シ自然ト大阪ノ繁昌他ニ超エタルハ此謂ニテ、必ズ地理ノ然ラシムルニモアラズ、大阪衰微スレバ海內ノ衰微トナル、白川公庶有編並セ可レ考、今五十年以來ヲ考ルニ、海內金銀ノ有數廣大無量ノ事ナラン、然レドモ契券印證ノ不義理ニナリテ返濟滯リ、反古同樣ニ相成、銀高ト茶器・絹布ヲ始メ、諸道具ノ代リトナリシ、金銀ノ員數等是亦廣大ノ事ニシテ、天下ノ金銀半ハ是ガ爲ニ名ノミナリ、又海・川・山・野ニ人ノシラズシテ埋レ捨リヌル物多ク、是等ハ正金銀ノ滅ジタルニテ、惣體ニテハ天下ノ人民モ歲々多ク相成、分限相應ニ奴婢ニ至ルマデ、貯持ヌ者ハナシ、サレバ正金銀ハ年々不自由ニ成ベキ也、大阪モ諸侯方ノ契券不信ニヨリ、五十年以來ハ莫大ノ正金銀滅ジタラン、依テ市民モ契券ノ不信ヲ怖レ、恪貯ヘ自ラ金銀ヲ出サヌ樣ニ計ルニヨリ、東西ノ諸侯方公私ノ用モ不便利ナラン、是迄契券ノ不信ヨリ借財融通ノ成リ難キヲ考ヘ、臨時非常ノ用度乏シカラザル樣ニ、諸侯モ其備ヲ設ケ、現金銀ノ他邦ヘモレザル樣ニ計ル、右等ニテモ自然ト偏ル方アラン但明和年以後、四文錢初メ錢幣シクナリ、其後ニ朱銀又金銀ノ吹増アリテ、天文以前トハ天下ノ金銀增倍シ、三幣トモ豐ナルベキチ、文化三四年ノ頃ヨリ、金至テ高直ニナリ、六十四五匁ヨリ、六七匁ニ至ル、是何故トハナクシテ、自然ニ相庭上レリ、全ク金

(ノ國々ニ偏リ、私底ナル意モアラン歟、金ノ部ニモ記ス)

右偏リ不融通トナル根元ハ、契券・印證ノ不信ヨリ起レリ、五十年以前迄ハ多分聞カザル權家ノ名目銀ヲ以テ貸、或ハ諸侯方正米出切手ヲ引當、又入津ノ國產土藏其儘市民ニ封印付サセ、何レ引當質物コレナクテハ貸ザル樣ニナリ、年々諸侯方モ借財ノ不納ヨリ借入レ手狹ニ成リテ、金銀融通甚不自由ナリ、其中ニモ正米切手ヲ以テ、相對ノ貸借ハ第一公令ヲ輕ンジ、双方トモニ憎ムベキ事也、後々ハ諸國銀鈔ノ如ク、正金銀ハナク成リテ、出切手ノミ年々多ク相成、市中ノ賣買モ空米多ナリテ、自然市中公用圍持等コレアル時ハ、多分其空米切手行ハレ、買持正米圍ノ主意、無益ニ成ベキ事モ後々ハ出來スベシ、然ルトキハ其土地ノ法令モ立難ク、大ナル騷動トナルベキモ知ルベカラズ、密ニ嚴令ヲ下シテ正サマホシ、是等總テ契券ノ不信ヨリ起ル事也(名目銀、居催促等ノ事ハ、庶有編並可レ考)

或藩中ニ、侯ノ借財ノ債ヲ責タリシカバ、契券ノ不信ハ、氣ノ毒ナガラ此方ヨリ貸セト云トキ、根元ハ貸スガ不調法ナリ、貸サヾレバ其方ニモ迷惑ナク、此方モ義ヲ失フ程ノ事ハ有ルマジ、然レバ其方ニモ貸スト云誤リアレバ、了簡ハ致シウチト云テ取アハズ、箇樣ニ人氣モ不信義ニ成テハ、金銀ノ融通ハ勿論、年々薄情ニナラン、歎テモアマリアリ、尙儉撮要ニ云、財ヲ借リ用ルトキハ、產ヲ破ルノ基也、成ベキ程ハ艱難辛苦シテ惡衣惡食ヲ耻忍ビ、他借スベカラズ、自然センカタナクシテ借リ用ヒナバ、朝夕心ニ掛ケテ早ク返スベシ、始メ借タルトキノ恩ヲ思ヒ、慇ニ返シ償フベシ、貸ス人モ萬苦千辛中ヨリ出セル財ナルヲ、我ハ借用テサヘ足ラザルニテ、推シテ知ルベシ、人ノ辛苦シテ貯シ財

ヲ、借用ヒテ返サズ、一旦不義ノ利潤ヲ得ルトモ、是盜賊ノ比ヲ免レズ、後來ノ餘殃亦遁ルベカラズト云ヘリ、然レバ常ニ儉約ヲ用ヒテ、何事モ堪忍ビ、他ノ借財ハセザル樣專ラ心ニ掛クベシ、然レドモ業ノ爲ニ借リ、又貸ヲ業トスル者有リテ、互ニ信義ヲ失ナハザルヤウニ守ルハ、融通ニテ天ノ道ナリ、運ハ精心ニアリ、必勤メ勵ムベシ、前ニモ云如ク、近來貸借ノ道、一統不信義ニナリ、引當テ質物コレナクテハ、貸サヾル樣ニナレリ、然レドモ田地始メ諸道具等質物ニ入レ、借財スルハ宜シカラズ、年々高利ヲトラレ、終ニ元銀ヲ返スニ至ラズ、其質流トナリ、富ルモノハ彌富ミ、貧シキ者ハ彌貧シウシテ相續出來難シ、質物ニ入レンヨリハ、安クトモ賣拂方ヨシ、尤先祖ヨリ讓リノ物ヲ賣シロナスハ、不本意ノ樣ナガラ、其相續ノ爲家ニ遺シ置モノ故、賣代ナシテ再ビ其家ヲ起サント勵勤ムベシ、然ラザレバ先祖ヘ不孝ノ汚名ヲ殘スナリ、再ビ家ヲ起サバ、又再ビ買戻スベシ、先祖ヨリノ義理ヲ思ヒ、放サヾル時ハ質ノ利息重リテ猶々損失多シ、今見ルニ十ノ内八九ハ質ヲ入レテ借財シ、其銀ヲ以テ家ヲ起シ、再ビ質ヲバ取返サズシテ、彌貧ニ迫ルモノ多シ、諸道具ノ類ハ、縱ヒ名物ノ器ト雖ドモ無益ノモノ多ク、子孫ヘ驕奢ノ端ヲ殘ス禍アリ、身上不如意ト知ラバ、早ク賣代ナスニハシカズ、必ズ心ヲ止ムベカラズ、眞ノ寶ト云ハ、讓リノ田地ナレバ、賣ニハ忍ビザルコトモ有ベシ、又永代賣渡スコトハ、昔ヨリ制禁ニテ、國史ニモ其事出タリ、然レドモ後世ニ及ビテ賣買アリ、是以テ其損益ヲ考ヘ、早ク賣テ用ヲ辨ジ、又先祖ヘノ不孝ヲ顧ミ、勵勤メテ遠カラズ取返スベシ、多クハ

年々ノ利ヲ量リテ、其家退轉ニ及ブモノナリ、成形圖說ニ云、「昔延喜二年停下止買ニ取百姓田地舍宅一、占中諸閑地荒田上、格曰、賂遺之所レ費、田地遂爲ニ豪家之莊一、奸構之所レ損、民烟長失ニ農業之地一、（中略）八埏之地有レ限、百王之運無レ究、若削ニ有限之壤一、常奉ニ無究之運一、則後代百姓可ニ得而耕一乎」ト見エ、或ハ曰、富メル民田質ヲトリ、貧民ニ金ヲカシカケ、高利ヲ取テ、終ニハ彼レノ田地ヲ取ホス故、富メルハ彌富テ、貧ハ彌貧ヲ憂ナリ、然レバ田地ノ持高一町ニ足ラザル民ヘハ、買添ユルコトヲ免シ、賣渡スコトヲ禁ジ、其中間ハ賣買心ニ任セナバ、人ノ生理三十年ヲ經レバ、十ニ六七貧富地ヲ易ルモノナレバ、終ニ强雄ノ大富モナク、存シ難キノ極貧モナク、平等ニシテ獄訟モ少ナカラン、貧シキ百姓ト云ヘドモ、買人ヲ禁ズルトキハ、賣ラズシテ立行ナリ、小祿ニテモ士ハ賣渡スコト叶ハネバ、相續スルヲ見テモ知ル可シ、百姓ハ賣事心マカセニナルモノ故、コラヘズシテ賣ツクシ、終ニハ路頭ニ立ツト云ヘリ、其如ク兎角我モノト心得、我儘ニ賣買ナル故、富メルモノハ彌富ミ、貧シキハ彌貧シ、皆我モノニハコレナク、先祖ヨリノ預リモノト云事ヲ辨ヘザル故ナリ、郡官相議シ究民ヲ救フ術ハ、如何程モ仕法アルベキ歟、工商ハ無祿ニテ、我產業ニ精力ヲ盡スト盡サヾルニテ、貧富幸不幸有テ、士農トハ又異ナリ、依テ身上平等ニハ押移リ難シ、農民トイヘドモ耕作ニ怠ル時ハ、商家モ同ジク衰フル事勿論ナリ、田地持高一町ト定メ、其餘ノ賣買ハ心ニ任セ、猶法則ヲ立ルトキハ、三五十年ニ貧富地ヲ易大富極貧モコレナク、農民身上平等ニナルベキ理モアラン、然レドモ身上ヨキモノ貧究ニ及ブト云ハ、

其モノ、運不運ニヨルト雖ドモ、元來ハ耕作ニ怠ル歟、驕奢ニ耽ル歟、才覺ノ宜シカラザル歟、何レ其根元有ルベシ、天災・地妖ノ禍アラバ、其モノ、田地ニ限ルベカラズ、一村同ジカルベシ、又水旱ノ災ハ天地消長ノ道理有テ、何時ト云事ヲ知ラズ、別シテ農民ハ兼テ其覺悟ナクシテハ叶ハザル事也、是迚モ人力ヲ盡スト盡サヾルニテ、又損益有、幸・不幸・運・不運トイヘドモ小夫ハ勤ニ有リ、太古ハ福善禍惡モ人々性直ニシテ、善ハ善惡ハ惡ト一筋ナル故、能ク其筋目モ違ハザレド、次第ニ後世ハ人氣サカシク、善惡モ一筋ナラズ、善惡交ルガ故、善ニモ禍シ、惡ニモ福ス、此事ハ白石先生モ論アリ、然レバ幸不幸福善モ心ニカケズ、唯一筋ニ己ガ職分ヲ守リ、勤メ勵ムニハシカズ、貧福平等ナラヌモ天理ニテ、平等ナラヌ故貴賤トワカチ、士・農・工・商、皆夫々上下アリテ天地ノ用ヲナス、是貴賤貧富平等ニセザル天ノ命助ナリ、古語ニ「富足生ニ於儉約ニ、貧困起ニ於奢侈ニ」ト云ヘリ、市民ハ猶以無祿ノモノ故、産業ヲツトメ勵ミ、儉約セザレバ必家ヲ破リ、後ニハ不義ヲモ不義トハ思ハズ、利欲ノ爲メニ其身ヲ亡ボス愼ムベキ事也、又五十年以來奢侈ヲモナサズ、諸侯方契劵不信ニテ、廣大ノ正金銀ヲ貸失ヒ、家ヲ倒ス者少カラズ、仍テ五十年以前ト引クラベテハ、大阪ノ土地モ都テ衰ヘタラン、（白川公、庶有編、並可レ考）然レバ農・工・僧・醫ノ外、商賈タラン者ハ、彌儉約ヲ守リ、無益ヲ省キ、勤メテ貨殖スベシ、然レドモ天理ニ叛ク不實ノ商ハ、堅ク致スベカラズ、其道ヲ能考ヘ勵ミテ勤ムベシ、諺ニモ貪ハ諸道ノ妨ト云ヘリ、又倉廩滿テ禮節起ルトモ云ヘリ、大商ハ國ノ飾ニシテ用ヲナシ、諸工ハヨク其利ヲ得テ必國富、

今昇平隆盛ノ御代ニシテ、天地氣ヲ和シ、人事交泰シテ米穀年々倉廩ニ滿ルト雖ドモ、金銀不融通ナレバ市民衰微セリ、其衰微ノ元ハ、右不融通ヨリ起ル、不融通ノ元ハ契劵・印證ノ信約ヲ失フヨリ起レリ、其信約ヲ失フモ、據ナキ臨時・非常ノ費用ヨリ返濟ノ約ヲ失フニ至ル、尤國家治平久シキ時ハ、自然ト驕奢ニ長ジ、必國用不足シテ民ヲ聚歛ス、漢武帝ノ時、國家財用不足シテ、縣官府庫大ニ空虛シ、府君皆首ヲ俯シテ、富商大賈ニ借財ヲ求ム、古今ノ情態異事ナシ、經濟ニ心ヲ用ヒテ、國家困窮ノ基ヲ正シ、萬事改革シテ儉素ノ道ヲ興シ、柱石トナシ、仁傑モ亦稀也、借貸ノ事モ治國・齊家ノ專用ナレドモ、其ノ仕法惡シキ故行ハレズ、借錢ハ借錢セザル爲メノ借錢ト、肥後ノ大夫云ヘリ、是金言也、凡ソ國家衰微セシ時再興セン工夫モ、第一借財ニ心付ク故、智モ工夫モ出デズ、空シク手ヲ束ネテ、年々國衰フ、仍ツテ國家安泰ノ再興ハ、經濟ニ委シク大量ナラデハ行ヒ難シ、學者ノ理屈ニテモ、又賈人ノ利發ニテモ行ハレズ、至ツテ六ケ鋪モノト思ハル、天和年、熊澤氏、備州ニテ國政ヲ執ラレシニテモ知ルベシ、當時ハ御勝手直シト稱シ、諸侯方經濟ニ功者ナル者ヲ召抱ヘ、國政ヲ任ゼラル、事有レドモ、多分家中新參ヲ嘲侮シ、歸服セズシテ却テ騷動ニ及ブ事間々有リ、無益ト云フベシ、然レバ他ヲ求メズ、其家中ニテ人才ヲ撰ビ任セ行フベシ、金以レ火試、人以レ事試、必不レ可レ不レ撰レ人、治レ國安レ家得レ人也、亡レ國破レ家失レ人也、借財ノ事モ、天下金銀ノ融通ナレバ、大借トテ屈スルニ足ラズ、經濟ト云フハ其大借ヲ國家再興ノ用ニ活ケテ用ル歟、又死

物ニスル歟、死活ノ仕法ハ、其司ドル者ノ智略ニアリ、其借財ヲ再興ノ用ニ立ルト云大量ナクテハ、大功モタテ難シ、儉約ノ發起ト云ハ、元來借財ノ多キヨリ起リシ事ニテ、則借財ハ儉約ノ守リ本尊ト云ベシ、サレバ程ヨク道筋ヲ立テ借財ヲ表ニシテ儉約スベシ、然ラザレバ家中下民迄、質素ノ風化行ハレズ、借財一錢モコレナク、國家豐饒ナルトキハ、上ハ勿論士民迄モ、何トナク心緩ビ、自然ト質素ノ風薄クナリ、果ハ奢リニ長ジ、却テ國家ノ煩ヒトナル、仍テ借財ハ儉約ノ基ト立テ、年々借財高ヲ諸侯ノ上聞ニ達シ、驕リノ長ゼヌ様ノ壓石トスベシ、然レバ借財モ儉約ノ用トナリ、返濟ノ信約モ失ハズ上下平等ニシテ、治國齊家ノ基本トモナルベシ、必借財ヲ死物ニスベカラズ、活物ニスル工夫アルベシ、是金銀融通ノ妙用ナリ、右ノ考ヘコレナキ故、多分契券印證ノ信約ヲ失ヒ、公私臨時非常ノ財用ニ事ヲ缺グ也、商家ハ貨物ノ高下ニテ損得アレドモ、元銀ヲ失フニハ至ラズ、損アレバ又得アリ、唯契券ノ約ヲ失フ程怖ルベキハナシ、何千貫目ト云モ纔ニ印紙一枚ナリ、コレニ仍テ家產ヲ失フ者、繁昌ノ土地程多シ、今公訴スルヲミルニ、十ノ八九ハ金銀ノ出入ナリ、然レドモ貸借融通コレナクテハ、金銀偏ヨリ用ヲナサズ、易繫辭ニ、「理レ財正レ辭、禁ニ民爲レ非曰レ義、」貸借ハ互ニ信義ヲ失ハズシテコソ用ヲナセ、金銀ノ用偏リ一切ノ用調ハズシテハ、平天下ト云難シ、玆ヲ以テ食貨ハ八政ノ基トスル事勿論ナリ、國家金銀拂底ニテ、用度乏キ時ハ民ノ煩トナル、コレニ仍テ金銀ヲ貴重ス、然レドモ亦沿革アリ興廢アリ、國々ニ紙札行ハレ、萬民安カラザル事アリ、慶長以

前迄ハ金銀貴ク、士民皆錢ヲ以テ萬物交易ス、仍テ士民モ儉素ヲ守リシ也、御一統後御治世ノ厚德ニヨリテ、次第ニ金銀出デ、海內ニ充滿スルニシタガヒ、自由成ニ任セ、イツトナク士民驕奢ニ長ジ困究スルニ至ル、金銀ノ多キモ又得失アリ、此圖彙ニ往々古代ヨリノ交易ヲ記ス、金銀ノ部ニ記ス、此物價ノ部、倶ニ並セ考フベシ、享保ノ頃ハ金銀多品ニシテ、金ニ慶長・元祿・乾金・新金、（但シ今云古金ナリ）ノ四品アリ、銀ニ慶長・元祿・寶永・二ツ寶・三ツ寶・四ツ寶・新銀（但シ今云古銀ナリ）ノ七品アリ、此內慶長ト新金銀ハ同ジ位ニシテ、甲乙無レ之通用ストイヘドモ、又新古ノ違ヒアリ、慶長銀ハ年數ヲ經テ、或ハ火ニ燒又ハモノニスレテ、極印全カラズ、此二品ト雖ドモ、市民新古ノ撰ビ强ク、交易モ區々ニシテ融通穩ナラズ、右數品ノ金銀ヲ以テ交易ス、仍テ市民ノ煩ヒ其時勢推シテ知ルベシ、金銀ノ部ニ其大概ヲ記ス、並セ考フベシ、元文元年、改鑄ノ善政ニヨリ、今通用ノ金銀一列ニナリ、天下煩ナク公私便ナル事謹デ思フベシ、星霜ヲ經ルニ隨ヒ、古代ノ事知者希ニシテ、昔モ今ノ樣ニ思フ人多シ、譬ヘバ東鑑ニ上品八丈絹、一疋代二十文、紺布、二反代四文、又慶長四年、古田兵部ノ請取書ニ、米十石代百目、一石ニ付十匁替、或ハ室町殿日記ニ、兵庫津ノ賣買米一石六匁三分五厘、木綿一疋一匁五分、百練抄ニ、「寬喜二年六月二十四日、以ニ錢一貫文一、米一石之由、被レ下ニ宣旨一、同三年自ニ去春一天下飢饉、此夏死骸滿ニ道路一、治承以後、未レ有ニ如レ此之飢饉一」（但大飢饉ナレドモ、錢百文ニ米一斗ナリ）太平記ニ、元亨元年夏、天下大旱シ、錢三百文ヲ以テ、粟（但シ玄米ナルベシ）壹斗買フ、（但シ大凶年ナレドモ、錢百文ニ三升三合三勺ナリ）多門院日記ニ、永祿九年八月晦日、あかね屋、酒

三斗三升代、三百卅文、同十年六月二日、米一石ウル、代八百廿七文、小麥七斗六升代四百文、同十二年十二月六日、紫ノ小袖仕立絹表代、六百五十文、裏絹三百五十文、紫染賃二百五十文、綿四百文、同綻賃五十文、キヌ絲十二文、合一貫七百十二文ニテ、紫ノ小袖モ出來シナリ、又天正時代、米一石代、二十目替、茲ヲ以テ昔ハ米モ下直ニテ諸物モ賤シク、其上萬ノ事質素ニテ、四民モ一年暮シ能ク、昔ハ結搆ナル時節ナリ、今ハ米下直ニテモ、大抵六十目前後、木綿一疋拾四五匁、士民トモ暮シガタシト思フハ尤ニテ、予トテモ如ナリ、是皆古ヲ稽ヘザルニヨリ、カヽル治世廣大ノ恩ヲ忘ルヽニ至ル、右米ヲ始メ諸物ノ下直ナルハ、何ニモ下直ナルニテハナク、皆天下金銀ノ乏シキニテ、諸物賤シク金銀ノ位貴キ故也、其上天正年金銀切遣ヒニテ、又京目・田舍目ノ違ヒアリ、錢ニ精・鐚ノ上下アリテ、諸物交易不便利也、然ルニ二百年來、神祖ノ恩德ニヨリ、金銀天下ニ滿チ、財用豐ナル故、自ラ諸物ノ價高直ニナル道理ナリ、今ハ諸國山野或ハ海濱ヲ開キ新田トナシ、五穀ヲ始メ萬物海內ニ充滿セリ、仍テ今ハ萬物賤シキ筈ノ處、却テ昔ノ諸物下直ナルハ、是金銀ノ不自由ニテ位貴キ故ナリ、又保元以來文祿・慶長ニ至リ五百年來騷亂止事ナク、農民ノ耕モ諸國十分ナラズ、然レバ其時代米價高直ナラバ、サモアルベキニ、一石十匁前後、是以テ其理ニアタラズ、絹布ノ類モコレニ准ジ、下直ナルニテハコレナク、金銀ノ貴キ故也、今ノ人多分之ヲ知ラズ、既ニ此頃或人保元時代蒔繪ノ器物ヲ拂ハント、商家ノモノヘ見セシニ、銀八貫六百目ニ價ヲ付タリ、持主云フヤウ、是ハ先代ヨリ持傳ヘ、古

銀ニテ四十貫目ニ求メシ道具ニテ、甚高直ナル器物ナレバ、古銀半直ナラデハ拂ヒ難シ、八貫六百目ニテハ、若干ノ違ヒ故拂ヒガタシト云ヘリ、予是ヲ聞テ思フニ、昔ナレバ迚アマリ高直ナルモノ故、持主ニ古銀四十貫目トハ何ゾ證據アリヤト尋シカバ、買得シ時ノ證文アリト云ヘリ、コレヲ見ルニ享保三戌年十一月トアリテ、銀四十貫目ニ賣渡ス趣ナリ、是全ク四ツ寶銀ニテ、新銀十貫目、（但文銀ニテ十五貫目也）ニ當レリ、商家ノ者金銀ノ位ハシラザレドモ、其物ヲ見テ今ノ位ニ引アツル事ヲ感ジヌ、其交易ノ時代ヲ考ヘズ、古銀ト云ヘバ格別結構ナル事ニ思ヒ、其高下アル事ヲ知ラズ、米穀ヲ始メ諸物下直ナリトテ、昔ヲ羨ムハ時勢ヲ思慮セザル過チニテ、勿體ナキ事ナリ、往々此圖彙ニ記ス如ク、享保年迄ハ金銀多品ニシテ不便利ナリシモ、元文年間改鑄有テ、古代金銀ノ中庸ヲ得テ、今公私倶ニ便ナルハ、全ク治世ノ善政ナリ、コレニ仍テ彌古代ヲ稽ヘズ、金銀ノ自由ニマカセ、驕奢ニ耽リ、廣大ノ恩ヲ忘ルルニヨリ、此圖彙ヲ著ハシテ、古代ノ交易ヲ兒童ニ知ラシメント欲スル事初念ナリ、元來無智不學ナレバ、迂遠ノ漢言ハ、取ラズ幼稚ノ見安カランヲ要トス、三貨ノ事實圖品又交易ノタグヒ、精密ナル事ハ愚意ニ能ハズ、識者ノ考ヲ俟テ子孫改ムベシ、今三貨ノ因ニ古今物價ノ情態ヲ大率茲ニ記シ、附續スルモノナリ

三貨圖彙物價之部卷之二

草間直方輯錄

判金一枚ヲ黄金十兩トシ、代銀ヲ四百三十目ト立ル事ハ、大判金ノ部第十五卷ニ記ストイヘドモ、猶天正・慶長年ノ古文書ヲ考ヘ、後來檢閲ニ便ナランガタメ、左ニ記ス、（京師寺院ノ古帳、南都多門院ノ日記等ニモ、文明・天文・永祿・元龜年ノ物價記スト雖モ、事繁多ナレバコレヲ略シテ、天正・慶長年以後ナ記ス）無稽ノ臆説多ク、識者ノ譏ヲ顧ミズ、其大概ヲ記スノミ

金一枚（量目四拾匁金十兩ナリ）　代銀四百三十目

金一兩（量目四匁四分）　代銀四十三匁

但シ今ノ小判一兩ニアラズ、古書ニ何兩ト有ハ一兩ニテ（但砂金ノ一兩ハ十匁ニテ別ナリ）黄金一兩量目四匁四分、代銀四十三匁ナリ、多門院日記、其餘京都寺院天正年ノ古文書ニ、小判ト云名目ナシ、然レバ寶貨事略ニ、天正十六年小判ヲ作ルト有ハ疑シ、古文書ニ金何兩ト有ハ、譬バ右ニ記ニ

天正十五年十二月十三日、金子五匁ヲ七貫百五十ニウリテ、且七貫文甚五郎ニ渡レ之、十四日昨日渡シ殘リ金子四兩、鳥目五貫六百文、幷米四斗渡レ之、四十石ニ金子六兩ト米四斗トニ當ル、金ハ六貫三百文ヅヽ、米ニテハ金一枚、六十六石ノサウバニテ遣レ之

ト有リ、コノ算當リヲカンガフレバ、四十石ノ代銀二百六十目六分ナリ、コレハ金一枚ノ代銀四百三十目ニテ、六十六石ナレバ、一石ニ付六匁五分一厘五毛、四斗ニテハ二匁六分ナリ

金四兩ハ代銀百七十二匁（是ハ黄金四兩ニテ切金ナリ）

但シ金一兩ニ付、代銀四十三匁ナリ

錢五貫六百文、又七貫文

合十二貫六百文、金一兩ニ付六貫三百文ヅヽ、此代金ハ二兩ナリ

右二口合以上ニ金六兩トナル、此代銀二百五十八匁也、一兩ニ付四十三匁ヅヽ、米金代銀合二百六十目六分ニテ、前ノ四十石代ニ算當リ合ナリ

右ニテ金一枚ハ代銀四百三十目金一兩、代四十三匁ト知ラル、何兩ト有ハ黄金ノ一兩ニテ、小判ノ兩ニアラズ、尤代銀是定法ナレドモ、時々金銀ニ高下アリテ、代銀モマタ少々ヅヽ高下アリ、湯河ノ古文書ニモ高下アル樣ニ見ユ、左モ有ベキ歟、右日記モ熟讀セザレバ臆見ノミニテ、齟齬ノコト多カラン、博雅ノ考ヲ竢ツ、湯河古文書ニ、金うきト有ハ小判ノ事ナラント云説アレドモ、是モ切遣ヒノ金ノ事ナラン、黄金ヲコガネト云ヲ以テ、金ノ字ヲコトヨミ、金うきト書シナルベシ、其頃ニ小判アラバ小判ト書ベシ、多門院日記ニ、小判ト云コトナキヲ以ミレバ、金うきハ切遣ヒノ金ナルベシ、尙奧ニ記ス

天正二十年三月古文書（金銀圖錄引レ之）

からへ御陣有レ之時

貳兩二歩　馬之方へ

壹兩一歩　京へ

貳兩　錢之方へ

壹兩　米之方へ

御陣へ参リ壹兩　銀子之方へ一まいふん

右二分・一分トアルヲ以テミレバ、兩ハ小判ノコトノヤウニ見ユレドモイカヾアラン、多門院日記ニモ、永祿十二年七月廿四日ノ條ニ、坂授ヨリ狀コレ有、金一兩二分二朱遣候トアリ、水戸藥王院天正年ノ古文書ニモ、三兩一分一朱、信長へ兩度音信ノ事アリ、是第皆切遣ヒノ金ナリ、往古砂金行ハレシ時ノ一兩ト云ハ、量十匁（但シ四分ナリ）一分ト云ハ二匁五分（但シ六銖ナリ）、一銖ト云ハ四分一厘六毛餘也、後世次第ニ量目モ輕リ、今ノ二朱ト云ハ金一歩ノ半金ニテ、元祿二朱ハ量目六分、甲州二朱ハ五分ニテ、都テ兩・分・銖、往古ノ量目ト異ニテ、唯其古名ノミナリ、右永祿・天正ノ兩・分・朱ト云モ、砂金通用ノ時ノ古名ニテ、切遣金ノ量目ナリ、今通用金ノ兩・分・朱ニハアラズ、小判ノ事ハ寶貨事略ニ、天正十六年新ニ小判ヲ造ル由ミエタレドモ、天正十八九年ノ間、切遣ヒノミニシテ小判ト云名目ミエズ、前ニ引天正二十年ノ古文書ニ、何兩トアルハ圓金又ハ大阪一步ヲ以テ一兩トセシニヤ、又銀一枚ブンヲ一兩ト云ヲ以テミレ

バ、前ニ記ス黄金一兩四十三匁ト云ニ當ル、然レバ切遣ヒ金ノ兩目ナルベシ、太閤命ゼラレシ小判ト云事古ク云傳ヘタレド推量ノミニテ、聢ト據ナシ、遺老物語ニハ、小判ノ儀先祖庄三郎ヘ被ニ仰付ニ候以前、小判ト申事承リ及不レ申候、文祿四年、江戸・駿河兩所ニテ、初テ小判ヲ製ストアリ、成田氏ノ金銀譜ニ、天正九年、德乘小粒ヲツクリ、小判ハナシトモ云ヘリ、小判ノ事ハ敎閲私記ニモ、文祿二年、神君駿河ニテ命ゼラレ、同四年、江戸・駿河兩所ニテ初テ小判ヲ造ル、金ノ位小判一兩等ノ事、後藤庄三郎御直ニ奉レ窺トアレバ、小判ハ是ヲ始トス、量目四匁七分六厘、又四匁八分ト云モ、ミナ神君ノ命ニ依テ極ル所也、此一兩ノ量目ノ事、足利殿ノ世、始ハ四匁五分ト見ユ、其後文明年ノ末、西國邊ハ錢拂底ユヱ、代錢ニテノ賣買ハ、一兩ヲ五匁ニ立テ交易セシト見エタリ、(此事ハ第二十一卷ニ出ス)時バ金一兩量目四匁五分、代錢五貫八百五十文ナリ、(但シ切金一匁代錢一貫三百文ノ積リ)然ルニ錢ヲ貴ビ、一兩ノ量目五匁ニシテ、代錢五貫八百五十文ニ交易ス、如レ斯次第ニ時々量目モ替リ、終ニ又四匁四分ヲ黄金一兩ノ量目ト定メ、金一枚ヲ四十四匁トシ、黄金十兩ト立シ事、文明年以來ノ事ト見ユ、進退記(金銀圖錄ニ引レ之)ニ、板金ノ事五枚・十枚・百枚トミエタレバ、其頃既ニ大判金ハ有テ小判ハナシ、今往古ノ金數品殘タレドモ、一兩ノ量目四匁四分ナル小判ナシ、皆足利家ノ末ヨリ、諸侯私ニ鑄シモノユヱ、量目ノ定リナシ、太閤ノ世トナリテモ軍務ニイトマナク、金銀量目ノ制令ナシ、仍テ今命ゼラレシト云フ、金幣量目不同アリテ、諸侯ノ私ニ鑄シ金幣ト混ジ、名ノミ太閤小判ト云傳ヘテ、記錄等ニ據ナシ、圓金・歩判又大阪一歩ト稱スル類、實

ニ金色形製疑フベキモノニアラズ、此量目一匁二分ヅヽナリ、今ノ如ク四ツヲ以テ一兩トスル時ハ、一兩ハ量目四匁八分ニテ、圓金・歩判ハ、天正九年、大阪ニオイテ德乘之ヲ造ル歟、正三郎ハ天正十年ノ頃ヨリ、駿府ニテ金座免許セラレ、其後金銀トモカノ地ニテコレヲ鑄ル歟、金銀巴判・京目判ノ類其量目ノ事ハ相互ニ通ズルナラン、武德編年集成ニ、門人後藤庄三郎ト有ヲ以テ、光次但四郎兵衛ト云カ詳ベシ庄三郎但名乘ハコレモ光次ト云カ尋ヌベシ兩人ナラントノ臆見ナリ、右天正二十年ノ古文書ニ、一兩・二兩トアルハ小判ナルベキテレドモ、古金幣ノ中、量目四匁四分ト云小判ナシ、何レノ金ナルヤ知難シ、銀子ノ方ヘ一枚分トアレバ、黄金一兩代四十三匁ニテ、切遣ヒノ金ナルベキ歟、又一分・二分トアル時ハ、一兩・二兩ハ小判ノヤウニモ見ユ、朝鮮征伐ハ文祿元年天正二十年改元ニテ、此賞賜費用ノ爲、天正ノ末年ニ太閤命ジテ此時一歩判ヲ又造ラル、歟、所謂大阪一歩ナラン、寶貨事略ニ、慶長四年始テ一歩判ヲ造ルトアリ、是慥ナル證書アリテ記セシナラン、尤太閤ノ末年ニ、此事巧ミニ出サレ玉ヒテ、後世ニ行ハレシナラント、右ヲ以テミレバ、前ニ云天正廿年ノ古文書ノ一歩ハ、天正年ノ末ニ鑄ラレシニヤ、何レ軍務ノ用意ニ暇ナク、其形製ノ令ナキ故皆一樣ナラズ、銀モ又其如ク、博多銀・石州銀・公用銀ノ類數品アリテ、諸侯方國々ニ於テ、私ニ鑄テ賞賜ノ用トス、所謂譲葉銀ノ類、又數品アリテ其鑄所ヲ知ラズ、依テ太閤ノ命ゼラレシモ、諸侯ノ私ニ鑄モ混ジテ數品ノ古幣多シ、其中ニ駿河ニテ命ゼラレシ金銀幣ハ、駿河トアリテ、巴又ハ角ノ中ニ桐ノ紋アリ、金色・形製・刻鑿其正シキ事見ルベシ、巴ノ印刻ハ金生水ノ意ナラン、其餘武州判・

京目判・慶長判、倶ニ正品ニシテ自カラ他品ニ類セズ、三貨ノ體堅剛ニシテ、美ニシテ貴ク、人君ノ德ニ比ス、依テ慶長以後、當御世トナリテ佐渡・石見ヲ始メ、金銀ノ出ル事夥シク、今以テ財用豐ナルハ、偏ニ神君ノ御君ノ御恩德仰奉ルベキ者也

金一枚（量目四十四匁）　代錢凡五十貫文ヨリ、六十三貫文位、

金一兩（量目四匁四分）　代錢凡五貫文ヨリ、六貫三百文位

銀一枚　代銀四十三匁

銀一枚　代錢凡五貫文ヨリ、六貫三百文位

精錢一貫文　代銀凡八匁四五分ヨリ、十七匁三分五厘

但シ天正十六年ノ頃ハ右ノ通、慶長ノ頃ハ凡十三匁ヨリ二十目餘

鐚錢一貫文　代銀凡三匁六七分ヨリ、六匁位

但シ此六匁ト云ハ、中錢ノ代ナラン歟、中錢ノ事ハ奥ニ記ス

金一匁　代銀凡九匁七分七八厘ヨリ、十匁一分位

金一匁　代錢凡一貫三百文餘ヨリ、四百文餘迄

銀一匁　代精錢五十七八文ヨリ、七十五六文、中錢百五十文位ヨリ、百七十文

鐚錢二百七八十文位

金一枚　米凡廿八石五斗位ヨリ、六十六石位

但シ時々相庭高下アリ

金一兩　米凡三石三斗ヨリ、五石二斗位迄

銀一枚　右同斷

錢一貫文　米凡精錢ニテ五六斗ヨリ、一石位又鐚錢ニテ一斗五六升ヨリ、二斗位

但シ右同斷

金一匁　米凡六斗餘ヨリ、一石二斗餘

但シ右同斷

銀一匁　米凡七升位ヨリ、一斗二升位

但シ右同斷

凡天正ヨリ慶長ノ初年、金銀・米錢ノ交易也但シ慶長年、米錢ノ事ハ猶奥ニ記ス然レドモ金銀ニ共時々高下有テ、米錢又相庭アリ、一槪ニハ論ジ難シ、精密ナル考ハ愚案ニ能ハズ、相違ノミ多カラン、猶又見ルニ便ナル爲、年暦前後スレドモ、愚考ノ儘出ス、天正十六年、五奉行ヨリ大德寺古溪和尚ヘノ算用古文書ノ寫、左ニ記ス

古溪ヘ御預ケノ金銀、并八木算用之事

一金子　五十枚

按ニ、此代二十一貫五百目

一銀子　五百枚

按ニ、此代二十一貫五百目

一八木　千八百六十石

按ニ、此米代廿三貫九百七十六匁八分也、但シ米一石ニ付十二匁八分九厘ニ當ル、右三口合六十六貫九百七十六匁八分トナル

此銀五百五十七枚、廿五文目八分

按ニ、此代錢三千八百六十貫文也、但シ精錢一貫文ニ付、十七匁三分五厘ニ當ル

合三千八百六十貫文古溪御預ケ之分也

金子　五十枚上リ申候此處ニテハ金ハ出入ナシニナル

銀子　九十六枚、十文目三分、上リ申候

同　四百六十九枚且三人請取申候

同　三十四枚、卅三文目同請取申候

同合六百枚、三分請取分

此代銀廿五貫八百目三分也、按ニ、此銀一枚トアルハ、今ノ四十三匁ニ當ル、前ノ銀五百枚代二十

一貫五百目ト、米代ノ五百五十七枚、二十五匁八分、此銀二十三貫九百七十六匁八分トナル、右二口合四十五貫四百七十六匁八分也、此内六百枚、三分ノ代、二十五貫八百目三分ヲ引、殘十九貫六百七十六匁五分トナル、則チ奥ノ殘ト合ナリ

但此内金子六枚ヲ銀六十枚之方ニ上申候、按ニ、此金六枚ノ代リニ、銀六十枚トアレバ、金一枚ノ代ハ四百三十目ニ當ル

此内百枚ハ、米之方ヘ銀ニ且請取申候

殘而四百五十七枚、廿五文目五分

但シ此銀十九貫六百七十六匁五分トナル

一眞壺貳ツ大小（但金十九枚ニ賣、其金右上様ヘ上申候）

一小鳥ノ天目壹

以上三色（四百貫ノ爲、賣物請取置候也）

右之銀子御調候て御上候迄、預り置申候也

天正十六年三月八日

民部卿法印

増田右衛門尉

石田治部少輔

古溪和尙

御納所

右ニテ大判一枚代四百三十目ト知ラル、又米ノ直段一石十二匁八分、其餘前ニ記スゴトク、天正年米價甚下直トミユレドモ、全ク金銀位ヨク、世上拂底ユヱ、米ノ位金銀ニ及バズトミエタリ、室町殿日記ニ、御局方ハシタ衆ノ米十二石賣拂可レ申由被ニ仰越一候、此頃兵庫ノ賣買、石ニ付六匁三分五厘ノ由、イタ屋新右衞門申候トアリ、是ニテモ知ルベシ、大仙院金銀錢納下帳寫左ニ記ス

一天正三乙亥年三月

金一枚 四十四匁目　　此米廿七石

金一兩 四匁目四分　　米二石六斗ヨリ七斗

銀一枚 四十三匁目　　米二石四斗ヨリ五斗

金四匁目九分　　米三石六升六合

按ニ、金一兩ニ付二石七斗ヅヽ

銀三十五匁目九分　　米二石二升五合

按ニ、銀十匁ニ付五斗六升四合一勺ヅヽ

同八十六匁目　　米五石

按ニ、銀一枚ニ付二石五斗ヅヽ

金子拾匁目　米　五石六斗八升

按ニ、金一枚ニ付二十五石

銀子六枚（貳百五拾八匁目）　米十五石

按ニ、銀一枚ニ付二石五斗

一天正三乙亥四月十四日

金納百卅六匁目七分

內下行

百拾四匁目三分（米已上六十八石二斗四升二合八勺、十二日分、其餘入用銀）

六分　切減リ

殘而廿一匁目八分　常住金方へ返納

銀納壹貫九百四十匁目七分

內下行

壹貫四百二十一匁目七分五厘（米已上八十石一斗三升七合五勺、口々其外猶遲上）

十九匁目七分五厘　切減リ

殘而四百九十九匁目二分　常住方へ返納
錢十六貫文　米三石二斗
按ニ、錢一貫文ニ付二斗ヅヽ也、但シ鐚ノ中錢ノ類ナラン
一天正四丙子年八月
錢一貫八百文　米二斗八升八合
按ニ、一貫文ニ付三斗六升宛也、但右同斷
一同八庚辰年八月
錢二百八十二文　米一斗
按ニ、是ハ精錢ナラン歟
錢一貫九百三十四文　味噌七斗
錢五百四十文　白布二端
錢四百二十文　大工料二人分
一天正九辛巳年八月
錢七貫十三文　米一石一斗四升
按ニ、一貫文ニ付一斗六升ヅヽ、但シ精錢ナラン

一同十壬午年八月
錢百文又七十文　疊上表一枚代高下アリ
錢八十文又六十文　同壹枚代高下アリ
錢八十文又三十文　椶櫚箒一本高下アリ
錢三貫文　鹽之代貳石
按ニ、鐚ノ中錢ノ內ナラン、鹽一斗ノ代錢百五十文ニ當ル、然ルトキハ米ノ割ヲ以テミレバ、甚高直也
一天正十一癸未年八月
銀五十九匁目　米三石五斗六升七合
按ニ、銀一枚ニ付二石六斗ニ當ル
錢八貫七百八十二文　米三石一斗八升七合
按ニ、一貫文ニ付三斗六升三合、是ハ鐚錢ナラン
一同十五辛卯年八月
銀四十四匁目三分　米五石九斗三升五合
按ニ、銀一匁ニ付一斗三升四合

錢二貫百二十四文　　米二石五斗五升
按ニ、錢一貫文ニ付一石二斗、但シ是ハ精錢ナラン
錢七百文　　大豆九斗一升
按ニ、錢壹貫文ニ付一石三斗、是モ精錢ナラン
銀百九十九匁日五分錢廿三貫八百七十六文
按ニ、錢一貫文ニ付八匁三分五厘六毛、是モ精錢ナラン
一同二十壬辰年八月今年文祿ト改元
錢一貫百五文　　米一斗一升五合
按ニ、錢一貫文ニ付一斗四合、但シ是ハ鐚錢ナラン
錢四貫三百文　　銀子一枚ニ買也
錢一貫文　　米一石三斗
按ニ、是ハ精錢ナラン
右大仙院銀錢納下帳原本ヲ以略寫ス、其外龍翔寺・聚光院・惣見院等皆文龜ノ頃ヨリ文化迄、凡二百五十年ノ間、銀錢納下帳アリトイヘドモ、繁多ニシテ悉ク記ス事能ハズ、又國所ニヨリ相庭ノ高下有テ、一列ニハ論ジ難シ、無益ノ考ヘ故大概ヲ記ス、此後又多門院日記ヲ以テ、其算當リヲ考フ

一　天正二年十二月、銀一枚代三石八斗ニ買レ之、スワキ三斗

按ニ、銀一枚代四十三匁ニ、米三石八斗ニテハ、一石ニ付十一匁三分一厘餘ニ當ル、又スワキト云ハ、今ノ口錢世話料ニテ、時々双方相對ヲ以テ極ムルユヱニ定マラズ、三斗アレバ又二斗ノコトアリ、此時代相庭ト云フハ、金一枚ニ何十石トシテ其時々高下有シト見ユ、右スワキ三斗トアルハ、金一枚ノスワキナルベシ、銀一枚ノ代米、スワキニテハ甚過分ニ見ユ、奥ニ記ススワキヲ以テ考ノベシ

一　天正四年十二月、於二竹林院一銀三枚ニ九石九斗ニシテ貸シテ、大門所へ遣ス

按ニ、銀一枚代四十三匁ニ三石三斗ハ、一石ニ付十三匁三厘ニ當ル

一　同七年二月、銀二枚・金二兩、高助治郎へ渡代十三石程也

銀ハ三石三斗ヅヽ、金ハ三十四石子也

按ニ、銀ハ三石三斗ヅヽト有、是ハ銀一枚ニテノ價也、金ハ三十四石トアルハ、金一兩ニハ三石四斗ニテ、銀ハ貴ク金ハ卑シ、銀二枚・金二兩ニテハ、米十三石四斗ナラン、又金ハ卅四石ノ子也、トアルハ直也ト云事ニテ、金一枚相庭卅四石替ノ事也

一　同年五月、金三兩ニ三石三斗ヅヽ、今九石九斗ニ取リテ、長堅殿借米方ニ沙二汰之一

按ニ、金一兩ニ三石三斗ヅヽナレバ、銀一枚四十三匁ニモ、三石三斗ニテ、一石ニ付十三匁三厘餘也、然レドモ金銀ニ時々高下アリ、石數モ亦少々宛增減アリテ、一概ニハ論ジ難シ

一、同七年九月、銀三枚御報答ニ代三石七斗ヅヽ、フキチン九升減一文目五厘也

按ニ、銀三枚ニテハ米十一石一斗、銀一枚ニテ三石七斗也、此代銀百廿九匁、一石ニ付十一匁六分二厘餘ニ當ル、又フキチン九升ノ代ハ、右一石ノ相庭十一匁六分二厘ヲ以テスル時ハ、代一匁五厘ニ當ル也

一同年十一月、小川、大熊四郷御公用沽却代米廿一石九斗、請取金六匁之代也

按ニ、金一兩ニ付三石六斗五升、一石ニ付銀十一匁七分八厘、切金一匁ニ付凡八斗三升ニ當ル

一同年八月、金子一枚代寺升卅八石五斗

按ニ、此寺升ト云事、南都ニハ興福寺・東大寺ヲ始メ、寺々ニ有テ其寺領ノ收納ノ時用ユル升ニテ、寺々ニヨリ少々宛ノ增減アリシト見エタリ、今古升殘レリ、神護景雲年ノ升アレドモ、其時ノ升ニハアラデ四五百年以來ノモノニ古キ年號ヲ彫入レシモノト見ユ、疑フベシ、大概古升ノ分

左ノ通

般若寺年預方、マカリマチ升凡五寸弱四方、深二寸五歩許リ

文明八丙申十一月廿日ト有

藥師寺金堂升凡四寸四歩四方、深十二寸許

天文十五年丙午正月トアリ
青龍寺納升凡右同斷
天文六年丁酉
南圓堂白三ヶ庄ニ納ム之油升方、凡五寸二三歩四方、深サ三寸弱
彫銘不分明
一德房環原升凡五寸四方、深サ二寸四分許
永正十一甲戌正月廿三日
平群郡五百井村、大方新太郎所持
京升五寸五六歩四方、深サ二寸五歩七八厘四方、焼印アリ、又四寸九歩五厘弱、深サ二寸七分強
宇治五十概所藏古升六寸六分位四方、深サ三寸六七分位
世實納也ト四方ニアリ、長和壬子月
東寺稲荷升五寸二分位四方、深サ二寸七八分位
永正六年九月吉日
右ノ外東大寺・興福寺等ノ古升、無銘ニテ大抵五寸四方、四寸四五分四方ニテ上ミハ廣ク下モハ狹シ凡五百年以来ノ物ト見ユ、寺々ニヨリ大小アリ、是ヲ何寺ノ寺升ト云、大概寺升ノ一升ハ、今ノ八合程ナリ、

金一枚ニ代米卅八石五斗ナレバ、本升ニシテ卅石八斗程ナラン、寺升コレ有時ハ、別ニ定升有シト見ユ、此定升ト云モノ古升ニテ、通例定法有シナルベシ、多門院日記ニ、天正十四年十月十二日、奈良中賣買升を中坊より京番とて、悉郷内へ出され、家毎に如レ此升を用意して、判を可レ取、代二斗づつと云々、今迄之十合之二合入申候と、今出たる升に一石は、前之十合に一石二斗在レ之云々、珍舗難儀計被ニ申付一又同年十月十二日、和州一國之遣ひ升、京番に被ニ相定一於ニ中坊ニ十五日以前に升判を可レ取レ之、判賃二斗づゝ、當升にて可レ取レ之、（市十合に二合ロ）云々、此市十合ト云ハ、市古升ノ事ニテ、改後ノ升ハ古升ニテ、一升二合入ト見エタリ、又斗升モアリト見ユ、大正五年六月十一日、鹽二駄買レ之ト有レ之條ニ、十一合ノ斗升ト云事アリ、斗升ハ一斗一升入ナラン、右京判升ハ五百井村新太郎所持ノ古升ナルベシ、天正十四年以前ノ古升知ルベカラズ、今古升ト云ハ廣サ五寸四方、深サ二寸五歩也、右日記ニ、天正十六年十一月廿日、金十匁代、今升十石五斗ニウルトアルハ、前ノ京判升ナルベシ、今升ト云ハ廣サ四寸九歩四方、深サ二寸七分ナリ、古升ノ事亘細ニハ知レズ、形成圖說ニ、量秤ノ事委シク出タリ、第三十一卷權量ノ部並セ考フベシ

一　天正九年十二月朔日、先段與二郎ロ入ニ而借金一枚五十石ニ買取了

按ニ、此年十二月二十八日ニハ、金一枚ニ廿六石、八月ハ寺升ニテ卅八石五斗也、（但古升ニテハ、卅石八斗程ナラン）然ルニ金一枚ニ五十石ハ、餘程米卑シク金貴シト見ユ、（但此五十石モ寺升ナランカ）此時一文目五ツンノ利金、未

ダ不調トアレバ、此利金幷スワヰ・フキチン・判賃、悉クコメテ、貸金一枚五十石ニ請タル算用ナラン歟、何レ不レ詳

一　同年十二月廿八日、金子一枚買レ之、市兵衛借シ金返被レ遣了、代米廿六石、御門跡ニ而渡レ之、廿四石、幷スワヰ二斗、フキチン二斗、判チン二斗、合廿四石六斗、是ニ而引キ違テ渡濟了

按ニ、右スワヰハ、今云口錢、フキチンハ、米金引替ノ賃ナラン、判賃ハ、大判ニ後藤ノ判ヲ取賃ナラン歟、尤十二月朔日ノ條ニ、借ル時ノスワヰ二斗、貸ス方ヨリ沙二汰之一、其時ノフキチン二斗、今返スニフキチン・スワヰ、此方ヨリナリト有ヲ以テ見レバ、右フキチン・スワヰ・判賃等ハ、金子ノ貸借ノ時ノ事ニテ、平常米穀賣買ノ度毎ニ、右ノ出シ米是有トモ見エズ、然レドモスワヰ・フキチン共時ノ相對ニテ、賣渡米ノ内ヲ以テ、直ニ米ニテ受取モアリ、又其代銀ヲ以テ米ノ外ニ請取事モ有シトモ見ユレド、此日記、惣テ米穀ノ賣買度毎ニ、スワヰ・フキチン取シトモ見エズ、又判賃ノ事ハ、天正十六年九月、大納言殿へ樽八ツ・金子百枚、一々ニ後藤判有トアレバ、後藤ノ判賃トモ見ユレドモ、惣テ此文書ニ金一枚何十石相庭トシテ、賣買貸借悉ク記ストイヘドモ、其度度後藤ノ判賃取シ事見エズ、此條ニノミ判賃等ノ事アルヲ以テ見レバ、玆ニ云判賃ハ契券加印ノ判賃ナラン歟シラズ、又金子一枚ノ代米廿六石トアルニ、是ヲ廿四石六斗ニテ引違ヒテ渡濟ト有テハ、指引一石四斗ノ違アリ、疑ラクハ廿四石ノ前ニ、落字等アル哉、又一石四斗ハ利米ニテ、

是ヲ引去リ渡ニヤ不レ詳、此日記原本ヲ見ズ、モシ寫誤アル歟、前條天正二年、銀一枚代三石八斗ニ買レ之、スワキ三斗トアルハ、金子一枚ノ代米、スワキニテ銀一枚ハ其割三升ナリ、文祿四年十二月、銀一枚ヒセンヘロ入代五石六斗八升、スワキ二升遣ハストアリ、是ニテモ知ベシ

一同年十二月二日、金子半枚内一兩長堅殿方銀一枚調持參了

按ニ、此半枚ト云フハ、金五兩ノ事ニテ、代銀ハ五枚ナリ、別ニ半枚金ト云モノハナシ、右ノ内金一兩ヲ以テ銀一枚調持參ルニテ、黄金一兩ハ代銀一枚ナリ

一天正十一年十二月四日、銀四枚半餘此代銀百九十三匁五分、米十六石三斗ナリ　代三石六斗宛トアリ、尤モ銀一枚ニテノ事ナリ

但シ米一石ニ付十一匁九分四厘四毛、金一匁ニ付米八斗一升八合二勺、銀一匁ニ付米八升三合七勺二才、金一匁ニ付銀九匁七分七厘四毛

同年十二月廿日、金一枚ニ卅六石ノ相庭ト有、此積リヲ以テ右銀一枚ニ三石六斗ト云ヲ考レバ、金一枚但金十兩也、銀ニテハ十枚ナリ代四百卅目トシテ、此米卅六石也、右銀一枚ニハ代四十三匁ナリ、金ニテハ一兩ナリ此米三石六斗ニ算當合フナリ、是ニテモ金一枚四百三十目ト云事知ル、ナリ

三貨圖彙物價之部卷之三

草間直方輯錄

紀州湯川氏家藏古文書（青木敦書昆陽漫錄ニ出）

一 しろかね、事の外たかく候

一 金かねハやすく御入候

一 米ハ壹貫ニ壹斗八升ツヽ御座候

一 金かねハ、五拾貫仕候

一 金かねニしろかねハ、四百二十日仕候

一 半ノ金一まい、しろかね四百二十目ニてかわり

銀子是ニ而ひきおこし、八石五斗

右しろかねト云ヲ以テ推量スルニ、金かねハ白キニ對シテ金(コン)かねト云事ナルベシ、コンカネハ黃金(キカネ)ナリ、是ハ切遣ノ金ニテ、前ニ云五匁・三匁ナドノ金ノ事ナラン、（但シ天正十六年ニ、大判・小判ヲ造ルトアレドモ・小判ノコトハ詳ナラズ、此古文書ハ十二三年ノモノト見ユ、金かねハ小判ノコトトモ見エズ）此節銀ハ拂底ニテ高ク、切遣ノ金一枚（量目十四匁）代銀四百卅目ノ處、十匁銀高ク四百二

十匁スルト云事ナラン、半ノ金トハ後藤書判アリテ、小判ヨリハ重ク取扱フモノ故、急度四百卅目ニ引替ベキ所、銀高クシテ、切遣ヒ金同樣、四百廿目ニテかわり候ト云事ナラン、又銀拂底故米ノ相庭ひきおこし八石五斗、是ハ銀一枚ニテ八石五斗ナラン、彌銀貴シト見ユ、但天正十四年ハ、銀一枚ニ米六石一二斗也、此時ハ銀卑シト見ユ、是ヲ據トス然ル時ハ一石ニ付代銀五匁六厘ニテ、凡其時代ノ相庭ニ當ル、但天正十四年ノ頃、一石代凡七匁餘ニ當リ、銀一枚ニ六石一斗四升程ニテ銀卑シ、日々高下アルコト古今同ジ、國所ニヨリ相庭アリテ一概ニハ難レ論米ハ一〆ニ一斗八升宛御座候トアルハ、鐚ニテノ價ナラン、大仙院納下帳、天正四年、一貫文ニ一斗六升トアリ、同十二年ニ、一貫文ニ二斗五合トアリ、是等ハ鐚ノ通用ト見エタリ、但シ鐚ノ内ニ中錢ト下錢アリ、此事ハ奥ニ記ス多門院日記、天正七年八月、堺ニテ蜜三斤代、ビタ一〆ニ二百文、代米三斗ニ當ルトアリ、此算用ニテハ、ビタ一貫文ニ二斗五升ニ當ル、同八年正月、上々蜜三斤五十目ヲビタ一貫四百文、米ニテハ四斗九升ニ當ルトアリ、此算當リハ一貫文ニ三斗五升ニ當ル、聚光院納下帳、慶長八年ノ頃モ、鐚一貫文ニ一斗六升ナリ、然レバ右一斗八升ト云ハ、鐚ニテノ價ナルベシ、然ルニ多門院日記、天正十四年ノ條ニ、ピタ八斗五升トアリ、是モ一貫文ニテノ價ト見ユレドモ、餘程ノ違ヒ有テ、右ノ一斗八升ト云フニ又疑アリ、然レドモ十四年ノ條ニ、ビタ八斗五升トバカリ有テ、一貫文ニテト云事ナシ、疑ラクハ春日水屋神樂能下行入用等ノ割方ニテ、其時ノ相庭ニハアラザルカ、尙ホ天正十四年ノ條ニ記ス、扨金かねハ五十貫仕候ト云ハ、切遣ヒノ金一枚ノ代錢五十貫文ナラン、此五十貫文ハ精錢ナラン、精錢一貫文代銀八匁六分位、金一匁ニ精錢一貫百卅六文位、天正十五年十二月、金五匁ニ錢七貫

百五十文、金一枚ニ六十三貫文ニ當ル、然ルニ五十貫文ハ錢貴ク金卑シ、金かねハやすく御入候ト云ハ是等ト見ユ精錢ナルベシ、右金一枚ノ代、精錢五十貫文ナレバ、金一兩ニ代精錢五貫文ニテ、（但天正十五年、金一兩ニ六貫三百文ト有、今五貫文、金ハヤスク錢貴シ）銀ナレバ代四十三匁ナリ、大仙院納下帳、天正十九年、銀一枚ニ五貫百五十文ト有、銀少シ貴シ、鐚ハ天正八年ノ頃、銀一枚ニ十貫五百七十文、（但金銀圖録ニ、天正八年、此九月トアリ、多門院日記ニハ見エズ）大抵精ト鐚ト半分ノ直違ヒニ當ル、金かねハやすく候ト云ハ、切遣ヒノ金ヲ始メ、金ニテ取ヤリハ、殊ノ外ヤスク、金一枚ニテ精錢五十貫文程ノ取ヤリト云事ナルベシ、金一枚鐚錢ナレバ百五貫文餘ナラン、先强テ算當リヲタツレバ、大抵右ノ如クナラン歟、下根ノ愚考ニテハ勞屈シ算當ニアタハズ、其精密ナル當否ハシラズ、然レドモカヤウノ事ニ强テ理ヲ付ル事ハ宜シカラズ、古代ノ事情ヲ却テ失フナリ、此古文書年號ナシト雖ドモ、大抵天正十二三年頃ノ書ナルベシ、其時代ハ撰錢ノ事頻リニ强ク、錢ニ高下アリテ喧シ、既ニ永樂一錢ヲ以テ、鐚四錢ニ替ル趣ハ、武家盛衰記ヲ始メ古書ニ見エタリ、又時々高下アリテ、前ニ記ス如ク精・鐚半錢ノ違ヒアリ、又中錢・下錢等ノ事有テ、容易ノ考ニテハ齟齬ノミ多ク愚按ニ能ハズ、後ノ考ヲ俟、扨前ノ古文書白かね殊之外高くト云ヲ以テ見レバ、又黄金ノ高キ事モアリシナルベシ、依テ前ノ算當リヲ以テ、金ノ高キ事一二ヶ條考フル事左ノ如シ

一　多門院日記、天正十一年十二月廿日、金三匁四分四厘、代米二石八斗九升七合二勺ト有ヲ以テ考レバ、金一枚四百卅目トシテ、三十六石ノ相庭ニテハ、一石代十一匁九分四厘四毛替ナリ、右二石八

斗九升七合二勺ノ代銀ハ卅四匁六分餘ナリ

又長印殿方金二匁七分五厘、此米二石三斗一升三合ト有リ、此代銀ハ廿七匁六分六厘餘ナリ、右代銀ノ算當リハ、金一匁ヲ十匁五厘九毛ノ積リナリ、此時ハ少シ黄ガネ高クト云ベキ歟、前ニ云天正十二年ノ算當リハ、金一匁ヲ九匁七分七厘四毛ノ積リナリ、是ハ少々安キ方ナリ

一　天正十一年八月、入目ノ用銀三百十三匁ト金十六匁以上、銀ニ算用して十一枚ノ通リニ、寛舞へ渡スト有、右銀十一枚代ハ、（但銀一枚ニ付四十三匁ナリ）四百七十三匁ナリ、此三百十三匁ノ銀ヲ引ケバ、殘リ百六十目、此殘リハ金ニテ十六匁（但シ掛目一匁ナ、十匁ノ算用トミエタリ）此時ハ黄カネハ少シ高キ方ナリ、此餘モ有べキナレドモ、コレヲ略ス

右ノ通ノ算當ニテ、尤厘・毛・升・合、少シノ違ヒアレドモ、是亦金一枚四百三十目ト云ニアタル、猶天正・慶長年ノ古文書アレドモ、多分私ノモノユヱ、少々宛算當ノ違ヒ、又ハ書損落字等モアリテ、所詮古文書・多門院日記等ハ、微細ニアキラメ知事難シ、前ニ記ス金かね之類、米ハ一〆文ニ一斗八升トシテ、精・鐚シレズ、或ハスワキ・フキチン・ワシト云ノタグヒ

但シワシト云事ハ、東寺執行日記ニ、和市ト有テ市民米賣買ノ相庭ノ事ナリ、右日記ニ云

洛中米穀和市之事

右米穀者、民之天國之本也、頃年豐饒之處、近日依ニ和市之不ㇾ定、有ニ興廢之佩儺ニ云々、太不ㇾ可ㇾ然、

所詮新穀出現之程、任二弘安之例一、次宣旨一斗宛、錢百文、可二交易一者也、今度之此難不レ可レ准二弘安例一、以二寛宥之儀一如レ此所レ被二定下一也、於二違犯之輩一者、可レ有二衆議一也

元德二年五月二十一日

同年六月十一日

世間依二飢饉一、米穀商人以外、和市高云々仍勅載トシテ、去月被レ定二其法一以來、米穀不二出現一、商人又不レ出者也、仍彌世間飢饉無レ極ノ間、今日二條町東西ニ市ヲ被レ立、カリヤ公方ノ□也、五十餘間云云、此カリヤヘ商人ヲ被レ召テ、賣買セラルヽ也、然ル間諸人誠ニ喜悦ノ思ヲナシ、群集シテ誠ニ如レ市也

右ノ類繁多ニシテ、疑惑スクナカラズ、多門院日記ニ、天正十七年、大和大納言ヨリ、金子一枚ヲ代米四石宛ニシテト云事アリ、是等ハ金一兩ノ代米四石ヅヽト云事ニテ、金一枚ヲ四石ト云ニハアラズ、今時ノ人ハ金子一枚ニ付一兩ノ代米四石宛ニシテト書ベキ事ナレドモ、日々ニ記ス故、何トナク疎ニ成シ類モアリテ、甚ダ疑惑スル事多シ、前ニ記ス寺院ノ納下帳ハ、輪番所ノ算用書ニテ、今年ノ輪番ヨリ來年ノ輪番ヘ、勘定仕立相渡ス帳面故、厘毛ノ算用違ヒナシ、至テ精密ナルモノユヱ、古代ノ米金ヲ始メ、物價ノ證ニ引ク、然レドモ國所ニヨリ物價ノ高下有テ、一概ニハ論ジ難シ、前ニ記ス古溪和尚ヘ五奉行連書ノ書面ハ、官府ヨリ出シモノユヱ、疑ヒヲ缺テ證トス、此連書ヲ以

テ算當スレバ、前文ノ通リ是又金一枚四百三十目ニ當ル

一　天正十二年六月、金子五匁五分代三石四斗三升八合、源次郎より買レ之（二十七石相庭ナリ）トアリ、此金五匁五分ヲ代銀ニシテハ、五十四匁七分五厘ニアタルナリ、（但金一匁ニ付九匁九分五厘五毛替、此米二十七石相庭トアレバ、金一枚量目四十四匁）代四百三十目トシテ、一石ニ付十五匁九分二厘五毛ナリ、此相庭ヲ以テ金子五匁五分ノ米ヲハカレバ、三石四斗三升八合トナル、則此米代銀五十四匁七分五厘ニシテ、前ニ云金五匁五分ノ代米ニ合フナリ、金一匁ノ代銀少々宛ノ高下ハアレドモ、大抵九匁七八分ヨリ十匁餘ナリ、前ニ引古文書ニ白かねハ高く、金かねハやすく御入候ト云ニテ、高下アル事ヲ知ベシ、右等ニテモ金一兩ハ（量目四匁四分）代四十三匁、金一枚ハ（量目四十四匁、金十兩ナリ）代四百三十目ト云事詳ナリ

一　天正十四年正月、ヒセンより金子一兩買可レ申由、四石六斗ニ、善春口入にて取レ之

右ハ金一枚ニ四十六石ニシテ、金一匁ニハ米一石四升五合餘ニ當ル、銀ニテハ米一石九匁三分五厘替歟

一　同年四月、　水屋神樂能在レ之、一庵十石寄進にて調ト云誠歟、金五十五石六合、銀六石三斗、ビタ八斗五升ト申

按ニ、金モ銀モ一枚ニテノ事ナルベシ、然レドモ六合ト云端米アリ、又ビタ八斗五升ト云モ、一貫文ニテノ事ナルベシ、然レバ相庭ニテハコレナク、神樂能ノ下行等ニテ、其入用金銀高ニ米ヲ

配當セシモノ歟、右本文ノ續キニ思ノ外米多シト云事アレバ、全ク此年ハ米價下直ト見エタリ、然レドモビタ一貫文ニ八斗五升ニシテハ、算當合ザル歟、其頃大抵下直ノ時モ、ビタ一貫文ニ付三斗前後ナリ

一 天正十五年十二月十三日、金五匁ノ、七貫百五十ニ賣、且ッ七貫文甚五郎ニ渡レ之、金一枚六十六石相庭

按ニ、此且ツト云事ハ殘ラズ算用シ難ク、先何程渡シ置ト云事ニテ、今モ京大德寺ナドノ寺中ノ算用ノ時、且ト云事ヲ間々書コトナリ、右金子五匁ヲ、七貫百五十ニ賣トアル算當ヲ考レバ、翌十四日ノ條ニ、金ハ六貫三百文宛トアリ、是金一兩ノ代錢ナリ、此金一兩（量目四匁四分ナリ）代四十三匁トシテ、銀十匁ニハ錢一貫四百六十五匁ナリ、則金一兩ノ代錢六貫三百文ニナル、コレニ依テ右金五匁ヲ算當スレバ、金五匁ノ代銀四十八匁八分五厘、（但金一匁ニ付銀九匁七分七厘二毛替ニアタル）此代銀ニ十匁代ノ一貫四百六十五文ヲ以テ算當スレバ、金五匁ニ七貫百五十文餘トナル、則前ノ算用ニ合フ也

一 同十六年十一月、金子十匁代今升十石五斗ニ賣

右ニテバ金一枚ニ四十六石二斗ニアタル、但金一兩ノ代錢凡六貫三百文トシテ、金子十匁ノ代錢十五貫七百五十文ニ當ル、然レバ今升十石五斗ニテハ、錢百文ニ六升六合六勺六才ナリ、此年ハ聚樂ヘ行幸ノ年ニテ、米餘程高直ナリ

一　同十七丑年二月□□眞珠庵ノ納下帳ニ

四貫二百七十文　　米三石四斗二升（是ハ百文ニ凡八升程ニ當ル）

二百文　　米一斗二升五合買也（是ハ百文ニ凡六升二合五勺ニ當ル）

扨大判一枚ノ量目、信長公時代迄ノ事ハ知ザレドモ、天正判・大佛判・慶長判ニ至ル迄、悉ク量目四十四匁ナリ、大佛判ニハ間々三四分ノ高下アレドモ、天正判以來ハ、急度四十四匁ナリ（但シ奥ニ記ス書判・極印モナキ無銘ノ大判モ、量目ハ四十四匁ナリ、又京師何某方ニテ見シ大判モ、又四十四匁アリ、然レバ經濟錄ニ云ヽ判金ナルベキ歟）黄金十兩ニテ大判一枚ユヱ、黄金一兩ハ量目四匁四分ニ限リシモノ也、黄金一枚ノ代銀ハ前條ノ如ク、天正年ハ四百三十目ナレドモ、又金銀ニ時々高下アリテ、代銀ハ碇ト四百三十目ニハ決シ難シ、然レドモ金一枚又ハ金一兩或ハ金一枚等ノ量目ハ、皆夫々極リシモノニテ、金一枚代銀四十三匁何分、或ハ四十二匁何分ト、時々量目ノ替ル事ハナシ、何レモ其品物ノ方ヨリ高下ヲナシテ、譬ヘバ今東國ニテ、金一兩ヲ六十目ト建テ、兩ニ米何程油何程トスルガ如ク、其金ノ量目ハ替ル事ナク、皆シロ物ハ方ヨリ高下スル也、コレニ依テ古代米一石ノ代金ヲ求メ、金一枚ノ代米ヲ推ストキハ、其米ニ高下アル故、金一枚ノ重サ四十四匁ニ合ハズシテ四十二匁餘ニ當リ、又四十三匁餘ニモ當レバ、金一枚ノ量目ニ疑ヒ出來ルナリ、前條ノ如ク皆四百三十目ヲ以テ算當リ合ナリ、猶考フベシ、又慶長六年以後ハ、慶長銀世ニ行ハレテヨリ、黄金一枚ノ代銀モ亦高直ニナリシト見ユ、天正年ハ金銀倶ニ貴ク、金一枚ノ代銀モ十匁程ノ高下ナレドモ、

慶長銀世ニ行ハレ、銀潤澤ニナリシ故、金銭ノ代銀モ過分ニ成シト見ユ

一 大仙院、慶長十六年ノ納下帳ニ

銀五百三十匁目新丁銀金子一枚分

銀三十一匁　　買銭一貫五百十文

右ヲ以テ考レバ、黄金一枚ノ代銀、天正年ヨリハ、百目程高直ナリ、又銭代モ一貫文ニ付二十目五分五厘ニ當レリ、然レバ銀ハ賤ク金銭ハ貴シ、是ハ全ク其頃慶長銀専ラ世ニ行ハレシ故ナルベシ、黄金一兩ト云モ、天正年ハ代銀四十三匁、又銀一枚ト云モ今ノ如ク四十三匁ニテ、黄金一枚ノ代銀ハ四百三十目ナリ、其外ハ皆切遣ヒノ金銀ニテ、量目ノミ通法アリ、大判ノ外ニモ極印ヲ打通用セシ金銀、天下草創ノ間形製モ定リナク、諸侯國々ニテ私ニコレヲフキ、國用ノ便トスルノミ、京都・南都ノ天正年ノ古文書ニモ、古金銀形製ノ事見エズ、判金ノ外ハ皆切遣ヒノ金銀ト見エタリ、コレニ依テ京都寺院ノ古文書算用書ニモ皆切ヘリトアリ、是切遣ヒノ明證ナリ、諸侯ノ私ニ吹シ金銀ノ交易算用等ハ未ダ考ヘズ、五畿内邊ハ皆右ノ通切遣ヒナリ、判金一枚ノ量目四十四匁ト云ハ、今現存スル大佛判・天正判・慶長判ヲ見テ知ルベシ、適ニハ三四分ノ高下アルモ有レドモ、掛目四十四匁大法ナリ 但シ慶長六年ニ吹レシ金ヲ慶長金ト云、此金世ニ行ハレシ後ハ、黄金一兩ト云コトモ小判一兩ニテ、大判一枚ヲ慶長金十兩ニアテ、通用セシト見ユ、然レバ慶長金一兩ノ代銀ハ五十三匁位トミユ、 前ニ云フガ如ク關東筋ハ今以テ相庭其シロ物ノ方ヨリ高下ヲナス、是レ等ハ全ク大神君ノ關八州ヲ知シメシ、萬世迄

ノ金銀交易融通ノ道ヲ開キ玉ヒシ、天下一統ノ根本ノ土地ユヱ自然ト古代ノ風儀殘レリ、上ミ方ハ足利家衰微シ、赤松・三好・織田等ヲ始メ、東西國々ヨリ亂入シ、市民ハ他國へ走リ、又他國ノ者ハ京へ入込ミ、人氣一致セズシテ、室町家ノ法令モイツトナク崩ル、天正年ニ至テハ、市民金銀交易ナドモ一樣ナラズ、今二百年來治世ノ恩澤ニヨリ、市民太平ノ餘光ヲ以テ、萬貨交易ヲナストイヘドモ、人氣淳朴ナラズ、種々ト利慾ヲ貪ルニ付テ、金銀ヲオモンジ貨物ヲカロシムルニヨリ、上ミ方ハ慶長年ノ末ヨリ、貨物ノ品類ヲ表ニ立、米油等ヲ始メ升目ノモノハ、一石何程トシテ、金銀ノ方ヨリ高下ヲナスニ成タリ、前ニ云通リ關東筋ハ金ヲ表ニシテ、相庭ヲ升目ノ方ヨリ高下ヲ爲スナリ、依テ關東筋ハ金ト錢トヲ以テ交易融通シ銀ヲ用ユル事ハ少ナシ、京都ヨリ西國筋ハ銀ヲ貴ビ都テ交易ハ銀ヲ以テスルユヱニ、諸品物皆銀相庭立ナリ、天正年ヨリ慶長年迄ノ物價ハ、大德寺・妙心寺等ニ、四百年來ノ古文書殘レルニヨリ、是ヲ以テ其大概ヲ記スト雖ドモ、卷數繁多ニシテ悉ク見ル事アタハズ、仍テ多門院日記ヲ幷セ考へ、此書ニ記ス愚ガ臆見トイヘドモ、又後人考ヘノ一端マデニ記スナリ、又慶長年ニ至リテモ、天正年ト大抵米錢同樣ナガラ、見合セノ爲メ左ニ記ス

一大德寺方丈米錢納下帳　慶長二丁酉年五月朔日

二石三斗七升五合　飯米、銀子廿五匁目買也、就二十匁目一九斗五升宛

錢一貫文　銀子、三匁目ニ買レ之

同一貫文　　　　　　　石田治部少輔殿へ音信

按ニ、右ハ鐚ノ下錢ナリ

一　聚光院銀錢納下帳、慶長三戊戌年八月

五石五升三合　　　　　買米、銀六十二匁目七分
就二一石ニ十二匁四分一厘

一　大僊院銀錢納下帳、慶長六年八月

三十二匁目　　　　　米三石四斗賣歟三玄院へ

按ニ、一石九匁四分一厘

一　慶長七年二月

六匁目五分　　　　　錢一貫文ニ買レ之

按ニ、中錢ナラン、此中錢ノ事ハ奥ニ記ス

一　同年十一月

四拾八匁め七分　　　　大豆四石、味噌用也

按ニ、一石十二匁一分七厘五毛ニ當ル

一　聚光院銀錢納下帳　　慶長八癸卯八月

三十七匁目　　　　　惡錢、十貫文ニ賣、銀ニして也、桑山修理殿作善

按ニ、鐚一貫文ノ代、三匁七分ニ當ル

一　同九年十一月

二十八匁め五分五厘　大豆三石二斗七升八合

按ニ、一石八匁七分一厘

一匁め五分五厘ハ　度々カケヘリ

按ニ、慶長銀ニテ、此頃ハ切遣ヒノ事ハ止ミシト見エタリ

一　同十年己巳八月

四十三匁目　料足、三貫三百文ニ買レ之、但シ一貫文ニ付テ十三匁ツヽ也

按ニ、此錢ハ精錢ナリ

内

一貫文　養德百年忌香奠

二貫三百七文ハ　米一石三斗八升五合大仙院ヨリ買レ之、但シ一貫文ニ六斗也

一　同十一年丙午八月

參拾匁目　米一石五斗、飯米ノ用也

按ニ、此相庭一石ニ付廿目ナリ、此時ハ米價少々高直ト見ユ

七貫六百八十五文　宗有作善ノ代銀九十九匁目五分四厘　但シ一貫文ニ付テ十三匁ヅヽナリ

按ニ、此銭精銭也

二貫文　一弥和尚祠堂銀子　二百匁目ノ理子

但シ銀ニシ而廿六匁目

按ニ、精銭ニテ一貫文、代十三匁ニ當レリ

四貫六百五十七文　但シ悪銭、精銭ニシテ一貫二百卅文之　方ニ遣レ之、奉行存じの手板三十二間代

按ニ、此代ヲ以テ見レバ、鐚ハ直段愈賤シ、精銭一貫文ニ付、鐚銭ハ三貫七百八十文餘ニ當レリ

一　大僊院銀銭納下帳、慶長十三年戊申八月

三百匁目　買米十三石二斗、銀　十匁目ニ四斗四升宛

壹貫文　買銭、此銀　十五匁目

三匁目二分　銀分ケ入貨　但大根ノ故也

一　同十四年四月

卅七匁め六分六厘ハ丁銀　買米一石九斗五升九合一　匁めニ、五升二合ヅヽ也

按ニ、一石十九匁二分五厘

一 同十五年十月
百六十八匁め二分ハ丁銀 （賣米九石五斗八升七合）
按ニ、一石十七匁五分四厘餘

一 同十六年十月
四拾八文書院表畳一枚參十文畳絲布拾五文サシ賃

一 同十七年四月
九拾貳匁め三分五厘 （賣米六石九升五合一勺）
按ニ、一石十五匁一分六厘位

一 同年十二月
貳百匁目 （賣米十三石四斗代）
按ニ、一石十四匁九分三厘

一 同十八・十九年
五十四匁め三分 （大豆三石五斗味噌用也）
按ニ、一石十五匁五分三厘
十七匁め五分三厘 （晒布壹疋ヅヽ高野へ音信又政所衆へ）

按ニ、一反八匁七分六厘餘

四十八文　（鹽壹斗二升）

按ニ、一升四文

但古書ニハ今ノ匁ト書所ハ、皆匁目トアリ、匁ノ字ハ錢ト云字ノ古字ニテ、慶長・天正年ハ今ノ如ク銀何匁トハ云ハズ、皆何匁目ト云シナリ、慶長ノ末、元和ノ比ニ到リテハ、イツトナク今ノ匁ト書ヤウニナリ、目ノ字ヲ除ク、依レ之古書ヲウツストキハ、銀目ハヤハリ、匁目ト書ベキ事ナリ、又中錢ト云事アリテ、其價モ亦精・鐚ノ中庸ヲ以テ、物價ヲ極メシ事アリト見ユ

一大僊院錢納下帳、慶長八年癸卯八月

廿貫七百七十三文　先勘定（但惡錢也、閑尊庫之分ハ中錢也）

五百四十八文　（惡錢二貫百文也、此内中錢一メ四百四十八文ヲ、好錢五百文ニ賣レ之、下錢之分六百四十八文ハ、好錢四十八文ニ賣レ之）

錢ノ部ニ云如ク、東國筋專ラ撰錢強ク、鐚ノ分ハ皆上ミ方ヘ登リ、京地邊甚ダ鐚多シ、コレニ依テ又其鐚ノ中ヨリ、中錢ヲ撰テ通用セシト見ユ、左ノ算當リヲ考レバ、精錢一貫文ニ付、中錢凡二貫九百文、下錢凡十三貫文（但シ鐚ノ中又惡錢ト見ユ）慶長七・八・九年ノ間ニ、錢一貫文ノ代銀六匁五分トアリ、此代ハ中錢ノ相庭ト見エテ、精鐚ノ差別ハ知ズ、聚光院慶長八年納下帳ニ、鐚錢一貫文ノ代銀三匁七分トアリ、同十年ノ條ニ、精錢一貫文ノ代銀十三匁ト見エタリ、然レバ右ノ六匁五分トアルハ、中錢ノ

相庭荒增ヲ記ス、尤

相庭ナルベキ歟、是等ハ人ノ知ザル事ユヱ記シ置ナリ、右天正・慶長年ノ米錢相庭荒增ヲ記ス、尤
國國高下一定ナラズ、仍テ悉ク記ス事アタハズ

三貨圖彙物價之部卷之四

草間直方輯錄

相場ト云事ハ、法曹至要抄ニモ見エテ、今ノ直段定ノ事也、漢書食貨志ニ「農商倶レ利、平糴齊レ物、開市不レ乏、治國之道也」ト云ヘリ、然レドモ後世ニ及ンデ、豐凶米價高低ナク物價平ニテ、農商モ利ヲ倶ニシ、國家安穩ナルヤウノ經濟ハ行フコト難シ、萬物各貴賤高下アルヲ以テ、君臣農商マデモ用ヲ達シ、諸貨交易融通シ滯ルコトナキハ、治國齊家ノ道ニシテ、貴賤高下モ天ノ命助ナリ、米價ノ相庭ハ人氣陽化ノ天然ニシテ、オノヅカラ高下具ハルトイヘドモ、皆農商ノ私ヨリ起リ、又是ヲ以テ公私ノ用モ務マリタルモノニテ、公道ノ意ヲ以テ高低ハ押オヨボシ難シ、コレニ依テ米價ノ高下等シク上下損益コレナク、士民ヲ養フノ備儲トシテ、漢ノ神爵五年、耿壽昌ト云者、始テ常平倉ノ法ヲ行フ、本邦ニハ淡路帝始テ是ヲ置給フ、其法ハ國々所々ニ倉ヲ建置、米穀豐熟シ直段下落ノ時、價ヲ増シテ民ノ穀ヲ買取コレヲ納メ、又不熟シ高直ニテ、民飢渇ニセマルトキハ、直段ヲ下ゲテ民ヘ賣出シ、米穀豐凶ニ拘ラズ、價高カラズ低カラズ、民ヲ養フノ備トス、是ヲ常平倉ト云

三代實錄云、「貞觀九年四月、東西京始置二常平所一出二官米一而糶レ之、米一升直新錢八文、京邑之人來

買者如レ雲」

日本後紀云、「延暦十七年、勅曰、物有二貴賤價高下一、諸國糴糶、有レ利二於民一、无レ損二於公一、遣レ使開二倉廩一、准二賤時價一、糶二與百姓一、其二物價一者、收二貯國廩一、至二於秋收一、貿二成穎稲一、名曰二救急料一」トアリ、皆民ヲ養フノ仁政ナリ、又屯倉ト云ハ

日本紀、垂仁天皇紀云、「廿七年、興二屯倉于來目邑一」景行天皇紀云、「五十七年、令三諸國興二田部屯倉一」

宣化天皇紀云、「元年修二造官家那津之口一、又其筑紫・肥・豐三國屯倉、散在縣隔、運輸遙阻、儻如須要、難二以備一レ卒、亦宜下課二諸郡一分移、聚二建那津之口一、以備二非常一、永爲中民命上」ト見ユ、是ハ天子ノ御米ヲ國國ニ收メ、凶年ノ時飢民ノ死ヲ救ヒタマハン爲メノ備ナリ、又義倉ト云ハ、隋ノ開皇年、長孫平ト云モノ始テコレヲ興シ、本邦ニハ文武帝慶雲二年、始テ是ヲ置給フ、是ハ民ノ家ニヨリ、其貧富ニシタガヒ、毎年米一石ヲ出サシメ、是ヲアツメテ其倉ヘ納メ、常ニ積蓄ヘ、凶年或ハ困究ニ迫ルモノアルトキハ、是ヲ以テ其難ヲ救ヒ、民互ニ相シタシミ相タスクル故、是ヲ以テ義倉ト云、近年寛政元、大阪天滿川崎ト云所ニ土倉ヲ建ラレ、郷民ノ分限ニ應ジ、納米ヲ仰付ラル、コレニ依テ市民等云合セ、追追米金ヲ以テ土倉ニ納ム、又官米ヲモ差加ヘラレ、凶年飢渇ノ備ヘトセラル、是等義倉ナルベキ歟、但シコノ倉ノ米金ヲ以テ、近國ノ郷村、又ハ驛場等ヘ救ヒトシテ借渡シ、利米ヲ又積置ル、仍テ今社倉ト稱セラル、何レニモ善政ナルベシ右常平倉・屯倉ノコトモ、承平年、將門・純友ノ

亂ヨリ、天德年ニ至リ、內裏炎上シ、其後治承年マデ、凡二百四十年ノ間、炎上七ヶ度、其中間奥州前九年・後三年ノ合戰、或ハ飢饉等アリテ、次第ニ王道モ衰ヘ、常平・屯倉等モ賊ノ爲ニ奪ハレ、保元年以來、諸國亂レ遂ニ廢セリ、又社倉ト云ハ、唐ノ高祖、武德元年、始テ州縣ニ社倉ヲ置トイヘリ、其後南宋ノ淳熙八年、程朱熹、常平ノ倉米六百石ヲ府ヨリ受得テ、コノ社倉ノ法ヲ行フ、當代寬文年、會津侯・備前侯國家ノ爲、此法ヲ用ヒラル、上ミニ不益ナク下ヲ救フノ良法ニテ、上下利益アルヲ以テ行ハル、大抵其法府米六百石ヲ積置テ、食物乏キ者ノ人數田地ノ多少ヲ考テ、相應ニ貸ツケ其年ノ十二月ニ一割二歩ノ利足ヲ加ヘテ返納セシメ、其年不熟ナレバ半利ヲ免ズ、大不熟ナレバ利ナシニ元米計リ返サシム、或ハ豐年トイヘドモ、返サヾルハ罰ヲ加フ、右ノ如クシテ元米六百石ヲ貸ストキハ、十四年ニ至リ三千七百石トナル、此內六百石ノ元米ヲ府ヘ返シ、殘米三千百石ヲ、又利ナシ或ハ小利ヲ加ヘ貸アタヘ、年々利米ヲ積デ以テ民ヲ養フノ備トス、社トハ土地ノ神也、五穀ヲ生ジテ人民ヲ養フ故ニ、社壇ヲ儲ケテ是ヲ祭ル、土地ノ神ノ倉ト云フ心ニテ社倉ト云ナリ、夫ヲ司ドル役人正シカラザレバ必依怙偏執ノ禍出來、久シクハ行ハレズ、此法ハ元來後ニハ官米ヲ引上ゲ民ノ利米ヲ積デ其備ヘトス、是レ民ノ肉ヲ割テ、其民ヲ救フヤウナルモノユヱ、仁政ト思ハレズ、又至テ困究シ、貸米モ返サヾル程ノ者ニハ、自カラ貸サヌヤウニナリ、貸ラズトモヨキ程ノモノニハ、何程モオシ付テ貸スヤウニナリ、又貧民ノ內ニモ役人ノ依怙贔屓等アリテ、賄賂ノ沙汰ニ及ビ妬恨出來、國內穩カナラズ、

多クハ民服セズ、ヤ、社倉ノ法ハ廢レリ、義倉ハ畢竟手前ニ圍ヒ置クベキ米ヲ倉ヘ納メ置キ、自然困究ノトキハ、其名前ヲ正シ返シツカハシ、又豐熟ナレバ官ヨリモ穀ヲ增加ヘテ、年々積蓄ヘ返スニ小利ヲトラズ、誠ニヨキ備ヘ也、然レドモ國家ノ要務ハ常平倉ニシクハナシ、今モ國々ニ籾圍等アリテ、軍用ハ勿論、凶年飢歲ノ備儲トセラル、全ク治世ノ德廣大ノ仁慈有ガタキコトナリ、是等ヨク人ノ知處ニシテ玆ニアグルニ及バズトイヘドモ、米金物價ノ因ミニ記ス、前文天正・慶長年ノ金銀米價ノ荒增ヲ考ヘ記ストイヘドモ、產業ニ暇ナク、是ニ心ヲ用ユルコトアタハズ、依テ齟齬ノミ多カラン、又無稽ノ臆說ニテ、識者ノ譏ヲ受クルコトアルベキナレドモ、無益ノ論ハサシオキテ、只其時勢ノ損益ヲ考ヘ、當時善政ノ國恩ヲ思フノミ、御一統ノ後ハ慶長ノ金銀ヲ以テ、士民通用ストイヘドモ、元祿以來享保ニ至ルマデ、時世ニ依テ多品數度ノ沿革興廢アリテ、公私ノ辨用ハ勿論、市民金銀不融通ノ煩トナリシコトモ、元文年ノ吹替ニヨツテ、昔ノ交易不便利ナルヲシラズ、譬バ元祿年ハ米一石四十目、享保三四年ノ頃ハ、三十目餘ヨリ四十目餘、然レドモ慶・元兩銀、何レニテノ相庭ナルコトヲ知ラズ、或ハ正德年ニ金一兩八十目餘、享保三四年ノ頃ハ四十目餘、是又慶・元兩銀ノ內、何レニテノ相庭ナルヤ、知ラザルノ類ニシテ、米ハ至テ下直、金ハ至テ高直トノミ、今ノ文金銀ヲ以テ一列ニ思ヒ其ノ價位ノ高下有事ヲシラズ、コレニ依テ元文年以來、善政ノ益々有ガタキコトヲ思慮セズシテ、昔ヲ羨ムニ至ル、前ニモ云如ク、是等ヲ童蒙ノ者ニ悟サント思フ初念ヨリ、此三貨圖彙ヲ著ス、御一

統後天和ヨリ貞享・元祿八九年ノ頃迄ハ、慶長金銀ヲ以テ物價ヲ極メ、元祿八年ニ金銀吹替アリテ以來ハ、慶・元ノ兩金銀双ベ行ハル、夫ヨリ寶永年ニ至リ、追々吹替アリテ、物價ノ高下一定ナラズ、米金相庭ノ儀ハ、歲々時々寸陰ノ間ニモ替リ有テ、悉ク記スルコトアタハズ、コレニ依テ其大略ヲ以テ、元和以來米金交易ノ荒增ヲ記スコト、左ノ如シ

大光院・眞珠庵添菜、處々ノ留、并米銀納下帳、略シテコヽニ寫ス

元和二丙辰年、今年四月十七日、　大神君薨

拾匁目九分　玄米四斗三升五合八勺（一匁ニ四升ヅヽ也）

參匁目　代錢百八十三文（壹匁ニ六十文）

七匁目　米三斗五升（一匁ニ五升ヅヽ也）

貳百四拾八文　買錢（此銀四匁二分、百文ニ付テ壹匁七分ヅヽ也）

四拾八文　酒貳升

三拾六文　豆腐九丁

貳百拾壹匁目五分　賣米代（此米十一石六斗三升二合五勺、但十匁ニ付五斗五升）

四拾八匁目五分　賣米代（此米二石五斗、但十匁之時五斗一升ヅヽ、一石十九匁四分）

拾壹匁目　諸白一駄之代（桶・樽共、但慈雲院殿八朔之御禮）

四匁三分五厘　布二反代

五匁九分六厘　丁銀二百八十一匁細ニ替ル分、二分宛ノ入

但シ今ノ小玉打銀ノ事ニテ、其初メ久シキ事見ッベシ

同三丁巳年九月

三匁目四分三厘　米壹斗八升八合六勺五才壹匁ニ五升五合也

銭二百六十八文　代七匁五分買也一匁ニ六十文

七匁目壹分　此銀米ニシテ四斗二升六合一匁ニ六升ヅヽ也

五匁目　米二斗五升壹匁ニ五升ヅヽ也

同四戊午年

〔原本此間數行餘白〕

同五己未年

〔原本此間數行餘白〕

但シ今年四月廿日ヨリ、東南ノ間ニ毎夜白氣顯ハル、形チ牛ノ角ノ如ク、長サ數丈、又東北ヨリ慧星アラハル、長サ數百丈、冬ニ至リキエズ、五月三日ヨリ七月ニ至リ、諸國大旱魃、草木皆枯ル、五穀至テ不熟、人民疱瘡疫死多シ、八月又天下一統洪水、田畑大ニ損毛、民屋漂流、人馬溺死夥シ、十

二月天暑キコト六月ノ如ク、帷子ヲ着シ汗ヲ拭フ、今年天災・地妖前代未聞ト云（元寛日記ニ出）

同六庚申年

〔原本此間數行餘白〕

同七辛酉年

〔原本此間數行餘白〕

同八壬戌年

〔原本此間數行餘白〕

同九癸亥年

〔原本此間數行餘白〕

但シ今年七月、將軍家御上洛

寛永元甲子年（文和十年二月改元）

八十三匁目　賣米三石

但シ今年米價一石ニ付、廿七匁六七分

九匁壹分　諸白壹斗

貳匁五分　油壹升

四匁七分　　白布二反
同二乙丑年
拾七匁五分　　悪錢二貫文（但錢一貫文也）
但シ此代中錢二貫文ニテ、精錢一貫文ノ代ト見ユ
拾四匁七分八厘　　錢八百四十四文ニ買レ之（但百文ニ付一匁七分五厘也）
拾六匁目　　賣米一石代
三百貳拾一匁四分　　賣米十三石五斗
但シ今年米價十六匁ヨリ、廿三匁八分位
同三丙寅年
拾貳匁七分九厘　　錢七百三十文代（但百文ニ付一匁七分五厘也）
今年錢一貫文ニ付、十七匁五分ヨリ十六匁尤精錢ノ直ナリ
七匁目　　悪錢一貫文買レ之
但シ此悪錢ハ中錢ナラン
三百廿一匁四分　　賣米拾三石五斗
但シ今年四月ヨリ八月ニ至リ大旱、米價一石ニ付廿匁ヨリ廿三匁六分

同四丁卯年

四匁八分　錢三百文代但一貫文ニ付十六匁也

貳匁三分　油壹升

六十目二分五厘　大豆二石五斗但十匁ニ付四斗一升五合ヅヽ也

拾一匁一分　鹽一石代但一匁ニ付九升ヅヽ也

　但シ今年正月、關東筋地震、八月諸國洪水アリ

同五戊辰年

拾七匁一分　錢一貫文板倉周防守殿へ年禮

　但シ精錢ナリ、此以下買錢ノ分皆同樣

五百一匁二分六厘　賣米廿石八斗八升六合

　但シ今年米價一石ニ付廿三四匁ヨリ二十五匁ナリ

同六己巳年

拾七匁目　買錢壹貫文板倉周防殿へ年頭禮

廿九匁目四分四厘　大豆壹石五斗但一匁ニ付五升一合ヅヽ也

四匁二分八厘　鹽六升

八百貳拾三匁五分　賣米三十五石
　但シ今年米價一石ニ付廿三四匁
同七庚午年
拾七匁六分　錢一貫文板倉周防殿へ年禮
廿貳匁二分　大豆一石
貳拾四匁目　油壹斗
拾三匁三分五厘　諸白四斗但一匁ニ付三升ヅヽ也
壹匁八分　豆腐廿四丁
四百九十六匁四分五厘　賣米廿石八斗九升六合三勺八戈
　但シ今年米價一石ニ付廿三匁七八分
同八辛未年
拾八匁六分　錢一貫文板倉周防殿へ年禮
二十四匁五分　大豆一石
五匁七分　鹽四斗但一匁ニ付七升ヅヽ也
三百六十八匁五分　賣米拾五石代

但シ今年米價一石ニ付、廿五匁ヨリ三匁位

同九壬申年

拾八匁壹分　　錢一貫文板倉周防殿ヘ年禮

貳拾貳匁二分三厘　　大豆一石

三匁八厘　　鹽四斗

拾八匁　　油壹斗

百廿七匁四分六厘　　賣米五石八斗九合

但シ米價一石ニ付廿四五匁、今年大相國秀忠公薨去御遺物金銀ノ大數

黄金六萬五千五百枚慶長小判ニシテ、四十九萬千二百五十兩、但シ一枚七兩二分ノ積リ

銀四十萬七千七百枚慶長銀ニテ一萬七千九百六十一貫百目、一枚ニ付四十三匁、此銀小判金ニシテ二萬七千二百十三兩三歩、銀二匁五分、但一兩ニ銀六十六匁ノ積ナリ金合五十二萬六千四百六十三兩三歩ト銀二匁五分、元寛錄ニ出右ノ外諸旗本衆ヘ下サルヽ金銀ハシラズ

同十癸酉年

貳拾目　　買錢一貫文板倉周防殿ヘ年禮

卅四匁五分　　大豆壹石

八百五十七匁　　賣米廿九石七斗五升

但シ今年米價一石ニ付廿八匁七八分ヨリ、三十目、今正月二日諸國地震

同十一甲戌年

貳拾壹匁　買錢壹貫文板倉周防殿ヘ年禮

廿八匁五分五厘　大豆一石

三百九拾目八分二厘　賣米拾壹石七升一合五勺

但シ今年七月、將軍家御上洛、京中ノ人民ヘ銀五千貫目賜フ、家別ニ百三十四匁八分三厘宛ニ當ルト云、其民屋少キ事知ルベシ、又諸國大小名供奉ニテ、上下夥シキ人數、上京ニテ日々ノ粮米ハカリ知ルベカラズ、然ルニ今年米價漸ク一石ニ付三十五匁三分ナリ、尤モ右ニ付テハ公儀幷諸侯國國ヨリ廻米アリシナルベシ、然レドモ米價ノ卑シキコト見ツ可シ、是等モ金銀ノ位貴キ故ナリ、右御上洛ニテ此時大阪ヘモ御下向在ラセラレ、大阪・堺兩所町々地子銀永代御赦免仰付ラル、コレニ依テ町々頭立チ候モノ六七人ヅヽ、麻上下着イタシ、高麗橋筋芝野ヘ相詰メ、將軍家御矢倉ヘ出御ニテ、金ノ麾ヲ窓ヨリ出サル、則チ地子御免ノ上意ノ趣、此時町人ドモ一同ニ有ガタキ趣、高聲ニ御請申上ルコト誠ニ鬨音ヲツクルガ如ク有リシトナン、右高恩ニ六時中忘却コレナキタメ、町人ドモ申合セ鐘ヲ鑄ル、今ノ釣鐘町ノ撞鐘是ナリ

同十二丁亥年

貳拾五匁目　賣錢壹貫文板倉周防殿へ年禮、但九月江戸ヨリ上洛之時
拾匁目　大豆二斗三升
九百卅五匁二分　賣米廿三石四斗九升一合九勺
但今年米價一石ニ付三十七匁ヨリ四十目位
同十三丙子年
貳拾五匁目　賣錢一貫文板倉周防殿へ年禮
四拾目　大豆一石
九匁目　鹽六升
四拾目　油一升
壹貫二百九拾九匁目二分一厘　賣米廿六石四斗七升
但今年米價一石ニ付四拾三匁ヨリ五十目位、五月江戸ニ於テ初テ寛永通寳ノ新錢ヲ鑄ラル、尤モ十ケ年程打續キ鑄サセラル、コレニ依テ是迄年來通用スル處ノ鐚ハ勿論、精錢迄モ市民次第ニ古錢ヲ撰嫌ヒ、錢價高下平等ナラズ、寛永錢モ初メハ一貫文ニ付廿目前後ノ處、右新錢追々鑄ラルニ付、一貫文十六七匁トナリ、古錢精ノ分モ一貫文七匁五分位ナリ、其後新錢鑄止リテ又通用不自由ニ付、自然ト新古取交ヘ通用スルニヨリテ、撰錢ノ事モ止ミシナリ

同十四年丁丑年

貳拾四匁　賣錢壹貫文板倉周防殿へ年禮

七百九拾目　賣米拾五石貳斗

但シ今年十一月ヨリ肥前島原一揆起リ、翌十五年二月悉ク亡ブ、右騷動ニ付米穀少シク高直ニシテ、一石ニ付五十二三匁位

同十五戊寅年

拾九匁五分　賣錢一貫文板倉周防殿へ年禮但今年より新錢にて上ル

七百九拾匁　賣米拾五石二斗

但シ今年ヨリ寛永ノ新錢ヲ用ユ、昨年ヨリ肥前島原騷動ニ付、西國・九州筋諸侯方、米穀ヲ圍ヒ持ツ故、上ミ方筋米穀乏シク、コレニ依テ今年一石ニ付五十目ヨリ六十目ニ至ル、今正月元旦大風、民屋破損

同十六己卯年

拾六匁目　賣錢新錢ニ而一貫文板倉周防殿へ年禮

四拾五匁目　油壹斗

四拾目　大豆壹石

七百七拾八匁四分八厘　　賣米貳拾四石八升
　但シ今年米價一石ニ付三十二匁ヨリ四五匁

同十七庚辰年
拾六匁壹分　　新錢壹貫文板倉周防殿ヘ年禮
七百七匁九分八厘　　賣米十九石二斗八升九合
　但シ今年米價一石ニ付三十目ヨリ五六文目

同十八辛巳年
拾貳匁目　　新錢壹貫文板倉周防殿ヘ年禮
四百五拾壹匁目　　賣米九石三斗
　但シ今年米價一石ニ付四十八匁五分位

同十九壬午年
拾貳匁目　　新錢一貫文板倉周防殿ヘ年禮
拾四匁目　　同壹貫文池田備中殿後室ヨリ
八百四十匁目八厘　　賣米拾五石三斗六升五合
　但シ昨巳年諸國米穀不熟ノ處、今年又麥作不熟ニテ諸國飢饉ス、然レドモ米價五十四五匁ヨリ六

十日前後ナリ、凶年ニシテハ米價下直トミユレドモ、天正年ヨリ寛文・延寶年ノ頃マデハ、古代ノ餘風殘リ、金錢ノ位貴ク、諸物ノ位ハ賤ク、今ヲ以テ推ス時ハ、諸事ニ齟齬スルコトアリ

草廬雜談ニ云、近頃民部卿法印ノ記セル、嚴廟御元服ノ儀式ヲ讀ムニ、賜予銀三十兩ト見エタリ、國初ヨリ正保年迄ハ、其淳朴カクノ如シ、國用豐ニシテ下々マデモ暮シヨキハズナリ、イットナク奢タル風俗トナリテ、今ハ下々ノ音信ニモ、銀ハ枚ヲ以テ稱ス、誠ニ過分ノ至リナリトイヘリ、是等モ後世ヲ以テ推考スル故疑ヒアリ、銀三十兩ハ百二十九匁ニテ、小數ナレドモ、古代ノ餘風殘リテ、金銀ハ甚貴ク、今ノ銀十枚ニモ當ル程ノ事ナリ、天正・元和以來、寛文年マデノ米價考フベシ、其後飢饉元祿年迄屢々アリ、是又考察スベシ

元寛日記ニ云、昨巳年諸國米穀不熟ノ處、今年又麥作不熟ニテ、今二月ヨリ五月ニ至リ、天下大飢饉、餓死滿レ巷、農民商夫乞食トナルモノ幾千萬、依レ之奉行所ヨリ乞食ノ本國ヲ尋ネ、其國主ヘ命アリテ其國ヘ皈シ被レ遣、無宿ノモノハ小屋ヲ所々ニ建ラレ、粥ヲ煮テ旦暮窮民ヲ救ハル、其仁惠推テ知ルベシ

同二十癸未年

拾四匁目　　新錢一貫文 板倉周防殿へ年禮

拾三匁目　　同一貫文 池田備中殿後室ヨリ

壹貫百五拾目三分六厘　　黄米三十四石七斗三升

但シ今年諸國無事ニテ、米價一石ニ付三十目ヨリ四十五匁マデ

正保元甲申年寛永廿一年十二月改元

四百六十八匁五分　　判之金壹枚板倉周防殿ヘ年禮

拾貳匁目　　新錢一貫文

卅三匁目　　大豆壹石

壹貫百拾七匁目　　黄米卅七石

但シ今年米價一石ニ付三十目ヨリ三十一二匁

同二乙酉年

六拾二匁目四分五厘　　金壹兩買也

拾貳匁目　　新錢一貫文板倉周防殿ヘ年禮

但シ今年異域韃靼人福玉ヲ擒ニシ、南京・北京盡ク清ノ爲ニ亡ブ、是ヨリ土民鬂髮ヲスリテ韃靼風トナル、翌戌年明ヨリ本邦ヘ援兵ヲ請テ韃靼ト戰ハントス、其書不敬ノ文有ヲ以テ廷議シ遂ニ請ニシタガハズ、今年米價一石ニ付三十目ニテ、士民太平ノ厚恩ヲ歡喜ス

同三丙戌年

拾貳匁目　　新錢壹貫文（板倉周防殿へ年禮）
六貫文　　火鉢二ッ古錢ニ而買レ之
但シ古錢ハ凡新錢ノ半直ナリ、火鉢一ッ十六匁位ナルベシ、此頃迄古錢通用アリシコト見ツベシ
六百貳拾六匁目　　賣米二拾三石五斗
但シ今年米價一石ニ付廿六匁ヨリ二十八匁
同四丁亥年
拾貳匁五分　　新錢壹貫文（板倉周防殿へ年禮）
六百五十五匁五分　　賣米廿六石五斗
但シ今年米價一石ニ付廿四匁ヨリ二十六文目
慶安元戊子年（正保五年十一月改元）
拾三匁七分五厘　　新錢壹貫文（板倉周防殿へ年禮）
四百七拾三匁五分　　黄金壹枚（藤堂大學殿母儀香奠）
三十目　　古錢四貫文賣拂代
但シ古精錢ナルベシ、一貫ニ付七匁五分ト見ユ

貳拾六匁目　大豆壹石
九百七拾九匁目　賣米卅五石五斗
　但シ今年米價一石ニ付廿六匁ヨリ三十目

同二己丑年
拾四匁目　新錢一貫文板倉周防殿ヘ年禮
卅二匁　同二貫文池田備中殿後室ヨリ
貳百六十壹匁七分五厘　賣米九石代
　但シ今年四月將軍家日光御社參、五月武州大地震アリ、五六月氣候不順ニテ寒冷行ハレ、都テ東國筋米穀不熟、今年米價一石ニ付廿八匁五分ヨリ三十目前後

同三庚寅年
拾六匁目　新錢壹貫文板倉周防殿ヘ年禮
六拾三匁一分　金壹兩
四拾壹匁目　大豆壹石
五匁目　鹽四斗
六百九十三匁目　賣米貳十二石

但今年米價一石ニ付三十八匁ヨリ四十目、古米二十七匁

同四辛卯年

拾六匁目　新錢壹貫文

板倉周防殿ヘ年禮持參不調返遣、是ヨリ年々止ム

壹貫百貳拾五匁目　賣米三十六石五斗

但シ今年米價一石ニ付三十目ヨリ三十六七匁

承應元壬辰年（慶安五年九月改元）

三十二匁目　錢二貫文（池田備中殿後室ヨリ）

貳拾七匁三分　大豆一石

八百四拾壹匁五分　賣米二十五石五斗

但シ今年米價一石ニ付三十三匁前後

承應二癸巳年

拾六匁目　賣錢壹貫文（池田備中殿後室ヨリ）

三十七匁目　大豆壹石

二十四匁目　油壹斗

八百四拾壹匁五分　賣米廿五石五斗
但シ今年六月禁裏炎上、八月ニ至リ諸國洪水アリ、米價前年ト同ジ
同三甲午年
三拾貳匁目　錢二貫文池田備中殿後室ヨリ香典
三拾八匁目　大豆壹石
九百七拾九匁目　賣米廿四石七斗五升
但シ昨巳年諸國洪水ニテ、米穀不熟、今年米價一石ニ付卅六匁ヨリ四十三匁
明曆六乙未年承應四年四月改元
三拾四匁　錢貳貫文池田備中殿後室ヨリ香典
九百卅七匁　賣米貳拾四石
但シ今年米價壹石ニ付三十八匁ヨリ四十目位
同二丙申年
拾八匁目　錢二貫文牧野佐渡殿ヘ續目禮
四十四匁五分　大豆壹石
拾六匁目　酒貳斗

壹貫卅二匁目　賣米廿五石五斗

但シ今年米價一石ニ付四十目ヨリ四十二匁位

同三丁酉年

三十六匁目　錢二貫文池田備中殿後室ヨリ香典

三十七匁目　大豆壹石

三十目　油壹斗

三匁目五分　布壹反

壹貫七十六匁目　賣米廿七石六斗

但シ今年正月十八日・十九日、江戸大火、御城炎上、諸侯方初メ民屋大抵不レ殘燒亡、御治世後始メテノ大火ニテ、燒亡ノ者數ヲシラズ、今ヲ以テ見レバ、江戸ハ勿論上方筋迄モ、一時ニ米穀油等ニ至ルマデ、價高直ニナルベキ處、今年米穀三十九匁ヨリ四十匁位、是等ハ皆金銀ノ貴ト、又今ノ如ク米市場ト云フ事モナク、江戸ノ大變ヲ聞テハ愈愼ミ、質素ヲ守リ人欲モ薄キ故、諸物ハ貴クテモ米價ハ卑シ、後世ハ聊カノ臨時非常ノ變アレバ、忽米價ノ高下ニ拘リ士民ノ難澁トナル、是等ハ次第ニ人氣サカシク、米相庭ノ賣買アリテ、利欲ニ拘ハル故、米價ノ變動アリ、後世ノ情態考フベシ

万治元戊戌年明暦四年七月改元
四拾目　錢貳貫文池田備中殿後室ヨリ香典
四拾二匁　大豆壹石
三十六匁　油壹斗
八百八拾九匁六分　賣米拾七石七斗
但シ今年米價一石ニ付四十八匁ヨリ五十二三匁
同二己亥年
三十六匁　錢二貫文池田備中殿後室ヨリ
五拾壹匁　大豆一石
九百五拾七匁　賣米拾七石五斗
但シ昨戌年正月江戸大火、其上東國筋米穀不熟、今年米價一石ニ付五十四匁ヨリ五十五六匁
同三庚子年
三十三匁四分　錢二貫文池田備中殿後室ヨリ
同三癸卯年以下左ノ通リ脱落ス〔原本ヨリ寫シ補フ〕
四百三拾九匁貳分　賣米六石三斗六升

但シ今年五月諸國氣候不順ニシテ、風雨洪水アリ、依テ米穀不熟ナリ、今年米價六十九匁五分ヨリ、七十目已上

七拾九匁目　　　　大豆壹石

寛文元辛丑年万治四年四月改元

拾六匁五分　　　　錢壹貫文池田備中殿後室ヨリ香典

貳百五拾五匁目　　　買米五石

但シ今正月十五日禁裏炎上有リ、公家衆、民屋類燒、今年ハ諸國豐熟シ、五十年以來無レ之事ト云ヘリ、三州邊、稻長サ八尺アリ、駿州榊原越中守殿領內ヨリ稻ニ枝ノ付タルヲ生ジ、本稻ニ穗百七十粒、二ノ穗百十七、三ノ穗、九十三粒有リ、富士ノ根方三町四方、田地ニモ穗ニ穗ノツキテ都テ今年早稻藁ノ長サ五尺餘アリト云ヘリ、右ノ通リ今年豐熟ニ付、米價下落ニナルベキ所、昨子年諸國不熟ニ付米價五十一二匁ナリ

今十月江戶大火アリ、虎尾星ト云ホシ辰巳ノ方ニ出、又老農ノ云、農熟ノ年ハ必栴檀ニ實ノラズ、又赤キ蜻蛉イデズト云、果シテ今年然ナリ、往古ヨリタメシ有ル事ト云、如何ナル事ニ哉、後年タメシ見ルベシ

同二壬寅年

三拾貳匁目　錢貳貫文池田備中殿後室ヨリ

九拾四匁五分　大豆壹石五斗

三拾八匁目　油壹斗

七百參拾目五分　賣米拾七石壹斗

但シ今三月廿四日三都大地震有レ之、京都町家土藏百ケ所程大破損有レ之、大阪ハ格別ノ事ナシ、然シ攝河ノ内所々堤崩レ有リ、同廿五日夕陽赤キ事丹ノ如シ、日輪陰二ツニ見ユル、又今年所々水害アリ、米價一石ニ付、四十目ヨリ四十四五匁

〔以上脱落〕

五十二匁目　大豆壹石

壹貫百四十目　賣米二十一石

但シ昨巳年奥北筋凶作ニ付、今年米價一石ニ付五十四匁ヨリ五六匁

同七丁未年

拾五文目　錢一貫文

五十六匁　大豆壹石

壹貫拾六匁　賣米拾九石

但シ今年米穀拂底ニ付、一石五十三匁ヨリ四五匁

同八戊申年

貳拾八匁目　錢貳貫文藤堂式部兄弟ヨリ盆水向料

但シ今年京都大佛銅像ヲ壞テ錢ニ鑄ル、所謂文錢是ナリ、仍テ錢ノ價次第ニ下落ス

六百八十四匁七分三厘　賣米拾三石七斗七升

但シ今年諸國五六月ニ至リ旱魃シ民疲勞ス、米價一石ニ付四十九匁ヨリ、五十四匁

同九己酉年

貳拾八匁目　錢二貫文藤堂式部兄弟ヨリ盆水向料

六拾二匁目　大豆壹石

壹貫三百五十四匁六分　賣米二拾二石七斗

但シ米價一石ニ付六十目ヨリ六十四五匁、尤モ明曆三年ヨリ連年諸國米穀不熟ニテ飢民多シ、コレニ依テ今年正月二十日ヨリ百日ノアヒダ、北野・下ノ森、又四條河原ニオイテ、粥ヲ飢タルモノニ施行セラルヽ、サレドモ米價一石六七十目ニスギズ、金銀ノ貴キコト知ルベシ

同十庚戌年

貳拾壹匁目　錢一貫五百文藤堂式部ヨリ

六拾九匁五分　大豆一石
壹貫四拾三匁五分　賣米十八石五斗
但シ今年八月廿三日、大阪大風雨ニテ、海邊高濤陸ヲ浸シ、三大橋ヲハジメ民屋破損シテ溺死ノ者多シ、米價一石五十六匁ヨリ八九匁
同十一辛亥年
貳拾七匁目　錢二貫文藤堂兄弟ヨリ
壹貫四十九匁目　賣米廿二石八斗
但シ今年米價一石ニ付四十四匁ヨリ五十目マデ
寛文十二壬子年
拾三匁目五分　錢壹貫文
壹貫百七拾七匁五分　賣米廿四石五斗
但シ今年米價一石ニ付四十七匁ヨリ四十九匁位
延寶元癸丑年寛文十三年九月改元
貳拾匁貳分五厘　錢壹貫五百文藤堂式部兄弟ヨリ
七拾匁五分　大豆壹石

壹貫六十八匁八分　賣米拾九石三斗

但シ五月九日禁裏・仙洞盡ク炎上シ、民屋五千軒餘類火アリ、今年米價一石ニ付五十五六匁

同二甲寅年

拾二匁目　錢壹貫文藤堂式部兄弟ヨリ

七拾三匁目　大豆壹石

貳拾一匁目　鹽三俵

八百四十二匁五分　賣米十壹石五斗

但シ四月ヨリ六七月ニ至リ雨繁ク寒冷ニシテ、五畿内始メ諸國洪水多シ、コレニ依テ米麥不熟ニテ飢饉シ、餓死野ニ充ツ、今年米價一石ニ付七十四五匁、前代未聞ノ高直ナリ

同三乙卯年

拾二匁五分　錢壹貫文藤堂式部兄弟ヨリ

六十八匁目　大豆壹石

壹貫百七十五匁二分五厘　賣米十八石八斗三升

但シ昨寅年諸國米穀不熟ニテ飢饉シ、下民難澁ニ付、今年三月ヨリ五月迄、先例ノ如ク北野幷四條河原ニ於テ粥ヲ烹、又米錢ヲ以テ飢民ヲ救ハル、近國近在ノ郷民競ヒ聚ルコト雲ノ如シ、其仁

愍推テ知ルベシ、十一月又本院御所（陽成院）回祿シ、公家衆類火アリ、今年米穀一石ニ付六十二匁ヨリ五匁

同四丙辰年

拾貳匁五分　錢壹貫文

八拾四匁目　大豆一石

拾貳匁四分　鹽三俵

五百七十四匁目　賣米十石

但今年六七月雨繁ク所々洪水アリ、米價一石ニ付五十七匁ヨリ六十匁、十二月仙洞・女院兩御所炎上

同五丁巳年

拾二匁五分　錢一貫文（藤堂ヨリ）

六拾七匁目　大豆一石

九百五十一匁九分　賣米二十一石二斗

但シ今年米價一石ニ付三十七匁ヨリ四十七匁

同六戊午年

拾貳匁五分　　錢一貫文（藤堂ヨリ）

九百五拾九匁八分　　賣米廿一石七斗

但シ今年米價一石ニ付四十四匁ヨリ五六匁、近年度々禁裏御所方火炎ノ儀コレアリ、其上諸國風水ノ難アルニ依テ米穀不熟ニ付、海內安穩五穀豐熟ノ御願トシテ年暦久シク中絶セシ岩淸水放生會ヲ再興セラレ、九月十四日始テ祭式ヲ行ハル、翌未年ヨリ例式、八月十四日十五日ニ行ハル

同七己未年

拾貳匁六分　　錢一貫文（藤堂式部殿ヨリ）

五拾八匁八分　　大豆壹石

壹貫四百八匁目　　賣米拾九石六斗

但シ今年米價一石ニ付五十三匁ヨリ五十五六匁

同八庚申年

拾貳匁目　　錢壹貫文（藤堂兄弟ヨリ）

六拾七匁目　　大豆壹石

六百九十匁一分　　賣米十石三升

但シ今年東海道國々風雨・津波・洪水コレアリ、都テ米穀不熟、西國筋六七歩ノ作並、コレニ依テ

關東筋・五畿內マデモ飢民多ク、道路ニ倒ルヽ者數ヲシラズ、今年米價一石ニ付六拾七匁ヨリ七
十目位

天和元辛酉年（延寶九年九月改元）

拾貳匁目　　錢壹貫文（藤堂兄弟ヨリ）

但シ寛文八年ヨリ京都ニテ錢ヲ鑄ラレ潤澤ニ成シト、又其以來年々米穀貴クナルトニテ、金錢ノ
位自然ト卑シ

七拾七匁目　　大豆壹石

九匁六分　　鹽三俵

八百六拾三匁二分九厘　　賣米拾一石三斗五升

但シ今年諸國米穀豐熟シ、萬民喜悅安堵ス、然レドモ昨申年凶作ニシテ、今年米穀乏シク、コレ
ニ依テ米價一石ニ付七十五匁ヨリ七十八九匁、又十一月江戸火災アリテ、諸侯方四十五六ケ所類
火アリテ、士民愈困究ス、コレニ依テ江戸士民ヘ三萬俵ノ救ヒ米ヲ出サル、右不熟ニ付テハ當年
諸人疫死多シ

同二壬戌年

錢

賣米　金壹兩六十目九月

但シ近年諸國米穀不熟ニテ飢民疫死等多シ、コレニ依テ先例ノ如ク、北野幷ニ四條河原ニテ粥米錢ヲ施シ飢民ヲ救ハル、今年又十一月江戶火災アリ

同三癸亥年

錢

大豆

賣米

但シ今年

三貨圖彙物價之部卷之五

草間直方輯錄

當時大阪ニテ諸侯方米穀ヲ引受取扱フ家ヲ藏元ト云ヒ、米商ノ者ノ長ヲ米問屋ト云ヒ、或ハ米仲買ト稱スルモ久シキ事也、承應三年午三月、萬治三年子正月ノ制令ヲ見ルニ、藏元ト云ハ藏役人ノ事ニテ、其後寬文年ニ至リテハ、藏元ヲバ出入ノ町人ニ託シ、藏役人ハ今ノ留主居役ト云フモノニナリタリト見エ、是ヲ以テ思フニ、藏屋敷ト云名目アレバ、其役人ヲ藏元ト云シナルベシ、承應三年、藏屋敷へ仰渡サレ候御書付

一 藏元衆手前たとへば壹萬石米を賣付手形を渡し、三步一程敷銀を取、其米を藏元に預り置候儀者いつ迄有ても損は無レ之に付、約束之日限より外に被ニ相延一候と相聞え候、左樣之藏元は、米を買候もの多候に付て、ゆるかせに被レ仰候故、いにしへ無レ之手形之賣買仕候よし、諸町人共申候藏元に無レ之米をまづ手形を渡し、三步一敷銀をとられ候て、米をさしのぼせられず候方も有レ之樣に下々申由に候、乍レ去左樣に町人の致すやう成儀は、藏元之面々せられまじき事に候間承引無レ之、萬一左樣之方覺有レ之においては、急度其主人に可ニ相斷一事

承應三年午三月二十二日　松平隼人
曾我丹波

右ノ制令ニ藏元衆ト云ヒ、又藏元ノ面々ナドアルニヨルニ、藏元ト云ハ藏役人ノ事ナルベシ、寛文三卯年九月ノ制令ニハ、藏元仕候町人ト見エ、又藏元ノ侍ハ其主人ヘ相コトワルベキナド云文アリ、然レバ其頃ヨリ藏元ハ町人ト成リ、町人ニマカセザル分ハ、藏役人ヲ藏元ト云シト見エタリ、又其頃手形ヲ以テ、（但今ノ出切手ノ始リ歟）米穀ヲ賣買イタス儀、幷ニ米市ニ立候儀堅ク仕間敷旨仰渡サル、依レ之今ノ如ク米市場ナク米商スル者諸侯方ノ藏元ヘ引合ヒテ買得セシ也、然ルニ其頃淀屋與右衛門ト云フ有福ノ者（今ノ淀屋橋南川岸）アリテ、寛永・正保ノ頃ヨリ、西國諸侯方積登セノ米穀ヲ引受賣捌代銀取立、國ヘ送リ江戸屋敷ヘノ仕向ケ等ノ世話ヲ以テ業トス、則右ニ云フ町人ノ藏元也、寛文年ニ至リテハ、此藏元ヲ勤ル者數軒ニナルトイヘ共、此淀屋ヲ第一トス、コレニ依市中米商スル者、多分此淀屋ニ集リ買得セシヨリ、自然ト米價高下ヲ爭ヒ、是ヨリ相庭ノ事起レリ、サレバ理不盡ノ事共有リテ爭論タエズ、公訴ニ及ブ事數度アリ、別シテ寛文二三年ノ頃ハ、諸國水風ノ災アリテ、米價一石四十二三匁ヨリ五十目位、（但シ慶長銀ノ直ナリ、米價高直トイヘドモ、五十目迄ナリ、全ク銀ノ位貴キコト見ルベシ）依レ之其頃米商ノモノ勢ヒ強ク、騷動コレ有ニツキ、公邊ヨリ御沙汰トシテ、藏屋敷コレアル町々年寄五人組等召出サレ、其屋敷ノ賣米捌キ方等取調ノ事ヲ命ゼラレ、町人共迷惑セシナリ

覺

一 町中米賣買之儀、大名家藏米何程買候とも、早速藏より出し可ニ相渡一候、賣候日より日數三十日之外を相延し候はゞ、可レ爲ニ曲事一之旨、先奉行衆被ニ定置一候、然る所比日米高直に付ては、町人共迷惑致候趣訴訟仕候、是者日數延候故にて候樣子相聞え候、此已後は日數十日切に相定可レ致ニ賣買一候、米下直に成候節、如レ前申付候儀も可レ有レ之候間、重而此方より申渡候迄は、十日切に可レ仕候事

一 大名衆藏米に不ニ相構一米賣買之儀有米を見屆け可ニ相極一候、受取渡し之日數、右同前之事

一 只今迄三十日切之約束にて買受、藏に預け置候米之分、三十日之內、日數何程相殘り候共、早速代銀を定め、米受取藏より可レ出之事

一 手形之賣買、幷米市を立候儀、先矩之通堅仕べからず、手代之者令ニ違背一者其咎主人へも相懸候事

一 大名衆藏々、幷米屋有レ之、其町々會所、又者年寄・月行司之所に帳を仕置、其役人を相定め、米賣主・買主之名、米高・同直段・月日等書付置、順々に年寄・五人組等改レ之、日數十日迄に埒明け可レ申事

右之通、侍方・藏元仕町人同屋敷之名代、其外米屋中、此旨相守るべし、若違背之輩有レ之においては、先矩より仕置候通、本人は依ニ其品一或は死罪或は籠舍其五人組年寄米屋に而無レ之といふ共、可レ爲ニ曲事一侍方藏米に付て違背有レ之もの、其米を肝煎致候町人又は屋敷之名代、曲事申附、藏元之侍は其主人へ可ニ相斷一之條、念入此書付之通、無ニ相違一樣に可レ致ニ賣買一もの也

寛文三卯年九月二十八日　　彦坂壹岐

右御書出之通、奉レ得二其意一候、少シモ相背申間敷候、爲二後日一年寄五人組加判仕差上申候、以上

藏元仕候　町人

同　　名代

米屋仲買

同問屋連判

右判形筆本於二總會所一私共慥ニ見屆申候

右ノ通仰渡サル、十日切ニ其時々代銀ヲ以テ、米ヲ掛出シニセシナリ、今諸藏屋敷ノ賣米ヲ十日切トセシモ此時ノ例ナリ、元祿年以後米相場所モ出來、米ヲ三年越ニ預リ、切手賣ニ相成、又米方年行司等ノ事モ仰付ラル、諸事嚴密ニ規則相立、今以テ相續セリ、皆是御治世廣大ノ餘澤故ナリ、昔ノ不辨理ナル事推テ知ルベシ、承應・寛文年米穀ノ事ニ付、時々制令アレドモ茲ニ略ス、右淀屋ト云モ、元祿八九年ノ頃、驕奢ニ長ジ公儀ヲ不レ憚、事有テ改易セラレ、終ニ其家斷絶ス、然レドモ此所ニテ米商ノモノ、十ケ年來寄合互ニ米穀ヲ賣買セシヨリ、淀屋斷絶ノ後モ、其場所ニテ賣買シ喧シク、往來防ト成故、度々制止アレドモ此事不レ止、（但シ正月四日、米價ノ初相庭ハ、今モ此例ヲ以テ此所ニテ立ル）然ル所其以前元祿元辰年十一月、今ノ堂島新地開發有テ、在家軒ヲ連ルトイヘドモ、新地ノ事故寂シキ依テ、土地賑ハヒノ爲ニモヨク、又往來ノ

妨ニモナラザルヲ以テ、同十年ノ頃ヨリ、米商ノ者申シ合セ、此新在家ニテ米穀ヲ賣買ス、是堂島ノ今ノ米市場也、其後追々東西國々諸家藏屋敷出入町家ノ者ニ賣捌ヲ任セ、金銀ヲ取入、公私年分ノ用ヲ大阪ヨリ取賄フ事ニナリ、又是ヨリ入札ヲ以テ、賣米ノ仕法イデク、然ル所正德・享保ノ初年、江戸住居三谷三左衞門・中島藏之助・冬木彥六ト云者、江戸表ニテ願ヒ上ゲ、東西諸侯藏屋敷ノ廻米ヲ切手ニテ、商人共ヘ賣渡シ、正米ハ其屋敷々々ニ預リ置、出米ハ右切手ト引替、ソノ米ヲ賣買スル時ハ自然ト米價モ保チ、商人共モ勝手宜シキ故、仲買ト云フモノヲ五百人ニ相定メ、賣買米一石ニ貳分宛ノ役銀ヲ受トリ、其內ヲ以テ公儀ヘ冥加銀差出シ、殘リハ會所入用ト相定メ、米穀賣捌キ方取締ノ仕法書ヲ以テ、右三人ノ者ヘ支配役仰付ラレ下サレ候樣願ヒ出候處、御糺ノ上願ヒ通被二仰附一、則堂島新在家ニテ、米座御爲替御用會所ト云フヲ建立ス、又右諸藏米切手賣リモ、現金銀ノ賣買ニテ、自然切手バカリニテ、正米國許ヨリ延着有レ之時ハ、商人等モ迷惑ニ付、右延着ノ節ハ賣繼買繼ノ商ヒ無レ之テハ、諸家大數ノ米ノ事故、手狹ニテ融通モ出來ガタキト云ヲ以テ、其節大阪ニ備前屋權兵衞・柴屋長左衞門ト云米商人アリ、手狹ニ無レ之賣買賑ハヒノ爲トシテ、建物米ト云フ名目ヲ立置キ、米商ノ者談ジノ上、限日ヲ相極メ、右延着日限迄ノ內、延べ賣買ト云フ事ヲ相始ム、是今ノ帳合アキナヒト云ノ始ナリ、右延賣買盛ンニナリ、享保六七年ノ頃、數度仲買ノ者口論コレ有リ、新在家騷動シ喧シキニ附、其頃ノ御奉行北條阿波守殿ヨリ嚴敷制度有リテ、此市場ノ儀停止仰付ラレ、强テ賣買イタス者召捕ラレ、

町人共ニ御預ケ被レ成、或ハ闕所等仰付ラル、依レ之相場ノ儀モ相止ミ、商人共ハ其屋敷ト直相對ヲ以テ正米買入レ、御爲替米會所モ相止ミ、右三人ノ者退役仰付ラル、然レドモ賣買ノ儀、兎角ニ相止ミ不レ申、商人共モ迷惑ノ趣申立候ニ附、享保七寅年十二月ニ至リ、右賣買ノ儀千石迄ノ内ハ勝手ニ可レ仕、其以上ハ決テ不二相成一趣ヲ以テ御免仰付ラル、依レ之卯正月ヨリ、商人共申合セ、藏米ノ建テモノ、名目ヲタテ、其米相場ヲ以テ傍ラ延賣買ヲ始ム、享保九辰年三月、大阪大火ニ附暫相場モ相止ミ、五月ヨリ又津輕米ヲ以テ建テモノトシ賣買ス、其後翌巳年ヨリ谷長左衛門（但正德年新金銀引替ノ掛リ役ナリ）紀伊國屋源兵衛・大阪屋利右衛門・野田屋甚兵衛ト云フ者、江戸ニオイテ御免、米會所相願大阪ニテ相場立會候ヘドモ、差支等コレ有、無レ程是モ相止ミ、（但享保十三申年、京都・大津兩所ニテ、小野寺三郎右衛門ト云フモノ願立、米相庭所始メテ出來）打續キ川口茂左衛門・中川清三郎・窪田孫三郎ト云フモノ仕組候ヘドモ、コレモ相續出來ガタク、其後冬木善太郎ト云フモノ願ヒ上ゲ暫相續ス、此時ハ北濱一町目ニテ米會所ヲ建ル、其後享保十五年、田邊屋藤左衛門・尼崎屋藤兵衛・加島屋清兵衛ト云フ者申シ合セ、米仲買總名代トシテ江戸ヘ罷リクダリ、町御奉行大岡越前守殿ヘ訴書差出シ、米相庭立會ノ儀願立候所、御評定ノ上御免仰付ラレ、是ヨリ北濱冬木善太郎會所モ引拂、今ノ堂島ヘ移リ米相場所ト成リテ、今以テ相續ス、（但シ右三人江戸表ヘ下ルニ付、路用等一人トシテ扶助スル者モナク難儀ニヨリ、其頃加州中國ノ兩屋敷ヘ、右ノ譯ヲ以テ助情ヲ相願ヒ候處、兩家ヨリ金百兩ヅツ下サル、依レ之本文願ヒ筋相立候ハヾ、永々共冬賣米ノ節、兩屋敷ノ米ヲ以テ建物ニ致スベクト、此時約定アリシトナン）

尤享保十四五年ノ頃ハ、至テ米價下落シ、却テ士民難澁ニ付、米價引立ノ仕法、堂島米商人又市中金

錢兩替ヲ業トスル者ヲ、東西ノ奉行所ヘ召サレ、詮問ノ事アリ、此時米商五人ノ者ヨリ、米價引立等ノ仕法申タテ、米仲買株ノ儀願上ゲ候處、人數千三百五十二人、三度ニ御免仰付ラレ、則燒印有レ之株札、於二奉行所一被二下置一、今以テ米商ノ者所持ス、猶又米穀賣買ノ儀手廣ニ可レ致赴、享保十五年戌八月、堂島始メ市中ヘモ仰渡サル事左ノ通リ

一　近年米穀相庭之儀に付願の儀有レ之、米商人共無二覺束一故、相場之障りに相成候樣相聞え候に付、向後右之願一切不二取上一候筈に候間、大阪米商ひの儀、古來より之仕法を以て、ながれ相場商內、諸國商人幷大阪商人共勝手次第に可レ仕候、兩替屋五拾軒餘之取計、相對次第敷銀其外相場差引勘定等の儀、前前之通りにいたし、商ひ隨分手廣に仕、少しにても米商之障に成候儀無レ之樣可レ致候、畢竟は米相場宜致候爲之事に候間、其旨を以て心次第商內可レ仕候、尤冬木善太郎米會所之儀は相止め候、但し古來より有り來候儀は構ひ無レ之候、若古來より無レ之儀、新法を申紛らは敷儀有レ之候はゞ詮議のうへ急度曲事可二申付一候、米商內に付ては、公事訴訟古來之通不二取上一候、しかれ共有來之外、不埒の儀在レ之においては制外之事候、總而仲買共自分之意趣を以、猥りに仲買仲間之さわがしき儀無レ之樣可レ仕候、

右之趣可二觸知一もの也

右之通此度從二江戶表一被二仰付一候間、三鄉町中可二相觸一者也

享保十五年戌八月廿三日　　日向

淡路

凡大阪米市場ノ濫觴ノ赴、亡父ノ申シ傳ヘノ儘誌ス、尤米商ノ者ハ別シテ盛衰浮沈極ガタク、百年來相續ノ商人モ市場ニハ希レニテ、悉ク發端ヲ知ルモノ又少シ、今漫リニ誌ストイヘドモ又相違アラン、茲ニハ其大概ヲ米價相場ノ因ニ記ス而已

天和四年ニテ支干一周シ、今年二月改元有テ貞享ト云、今甲子ノ年ヨリハ、舊家ニ大抵記錄有テ、年年豐凶季候ノ變化ハ、人々知ル事故、大略ヲ以テ記ス、然レドモ舊記散失シ、或ハ蠹ノ巣ノタメニ敗ラレ、文面全カラズシテ、事實ノ知レガタキハ茲ニモラシ、又追テ記スベシ

貞享元甲子年

肥後米一石ニ付（三俵ニテ一石一斗也）　代四拾目

金一兩ニ付　代六拾目

錢一貫文ニ付　代十三匁ヨリ十五匁

但シ今年四月、東宮御所幷公家衆類火有

貞享二乙丑年

肥後米

金

錢

但シ今年正月十八日、去ル明暦年ノ大火ヨリ卅三年ニ當ル、コレニ依テ江戸無緣寺ヘ銀百枚・米二百俵下サル、亡民追福ノ爲也、此趣寺社奉行ヨリ被ニ仰渡一

今年二月新院崩御後西院

貞享三丙寅年

肥後米

金

錢

貞享四丁卯年

肥後米

金

錢

元祿元戊辰年貞享五年九月改元

肥後米

金

錢

元祿二己巳年

肥後米

金

錢

元祿三庚午年

肥後米

金

錢

同四辛未年

肥後米　代四十一匁前後ヨリ五十三匁三分

金

錢

今年六月、肥後國阿蘇山燒出、土砂降、九州邊凶作ナレドモ、米價大抵平均ナリ

元祿五壬申年、諸國平熟ス

肥後米

金

錢

同六癸酉年

肥後米　代五十二三匁ヨリ六十目前後

金　代六十目

錢　代十二匁ヨリ十三匁マデ

今年六七月ノ間、美濃・江州・畿內、屢々出水アリテ不熟

元祿七甲戌年

肥後米　代六十五六匁ヨリ六十九匁三分

金　代六十目前後

錢　代十二匁ヨリ十五匁

今年五月ヨリ八九月ニ至リ、奥北筋・關東筋、屢々地震出水等アリテ不熟ナリ、依レ之米價次第ニ貴シ

右ハ慶長銀ニテノ相場ナリ、尤近年打ツヾキ諸國米穀不熟ニテ人民飢渴ニ及ブホドノ事ナレドモ、一

石ニ付テ代七十目前後ナリ、全クハ慶長金銀拂底ニテ貴キ故也

元祿八乙亥年

肥後米　　代（七拾目前後ヨリ八十目グラヰ）

金　　代　六十目四五分

錢　　代　十五匁六分ヨリ十六匁

今年金銀吹替コレアリ、位微ク劣レリ、此後ハ米價ヲハジメ諸物元祿銀ヲ以テ賣買ノ直段ニ相成ル、然レドモ新銀ノ位卑シキヲ以テ、自然ト此頃ヨリ古慶長ノ金銀ヲ貴ミ、市民隱藏スルヤウニナリタリ、今年又春ヨリ寒暖不氣候ニテ諸國熟セズ

元祿九丙子年

肥後米　　代（慶長銀元祿銀）ニテ百五匁

金　　代同　六十目前後

錢　　代同　十五匁ヨリ六匁

近年打續諸國不熟ニテ米穀乏シク、今年四五月ニ至リ、市民飢渴ニ及ブヲ以テ、撫育米ヲ出シテ之ヲ救ハル、又京・伏見ノ下民ヘ、米一萬三千石拜借仰附ラレル、今年東國筋六月ニ至リ寒冷行ハレ、又地震屢々コレ有リ、飛・信兩國大雪ニテ、奥州邊モ大凶作ナリ、今十一月本院崩御、明正院元祿十丁丑年七

八月ノ頃、肥後米一石八十五六匁ヨリ九十目餘、又米商ノ者今年熟不熟知レザルヲ以テ、米穀ヲ買シムル故、彌米價高直ニナリ下民苦シム、コレニ依テ米問屋ノモノ共穿鑿ヲ遂ラレ、其買〆米悉ク取タテラレ、價ヲ引下ゲ市中ノ下民へ御拂ニ成、其價ヲ以テ米問屋ノモノへ返シ遣ハサル、今年ハ諸國七八歩ノ作並ノ風說有ヲ以、コヽニ於テ今年新米四十五六匁、然レ共元來近年諸國不熟ニヨリ米穀乏シク、十二月ニ至リテハ又六十目ヨリ七十目ナリ、コレニ依テ買シメ等、猶又嚴密ニ禁止セラル、日本後紀「延曆十七年、略文 如レ聞諸國交易、先立沽ニ價貴時一後與レ賤、價賤時詐(イツワリ)注ニ貴直一、遂事ニ割截一枉(マゲテ)規ニ利潤一、蠹民害レ政莫レ甚ニ於斯一、」又「二十二年、去年不レ登(ミノラ)、民業絕乏、富贍之輩、唯有ニ餘儲一、糶(ウリゴメチモトムレバ) 要以ニ貴價一、借則責ニ之大利一、此段古今異ナル事ナシ 因レ茲貧民彌貧、富家愈富、拍齊之道、良不レ須(ニ)レ然(ヲ)、宜遣ニ使大和國一、割ニ折富餘之貯一、假ニ貸不足之徒(トモガラ)一、收納之時、先得レ報レ之、若遭ニ凶年一、有ニ未納者一、賜以ニ正稅一、後徵(メサン)ニ屓人一、」コレ等ハ凶年饑歲ニ、富家餘儲アルモノ、米ヲ價安糶トシ、秋收納ノ時其穀數ヲ償フ、若凶年ニテ返ス事ナリ難キハ、官米ヲ以償ヒ、後ニ其モノヨリ徵納ラルトミエタリ、偖酒造ノ事モ、當丑年吟味セラレ、十月ヨリ共造リ石高ニ應ジ、五割ノ運上ヲ定メラル、是ニ依テ酒造モオノヅカラ減石ニナリ、潰シ米多分減ズ、酒代此前一升ニ付八分、今年一匁三分ニナル、上古モ米穀不熟ノ年ハ、酒ヲツクル事ヲ禁止セラル、日本後紀「大同元年九月壬子、封ニ遣レ使左右京、及山崎津・難波津、酒家甕一、以ニ水旱成レ災穀米騰躍一也」ト有、元來元祿五六年ノ頃ヨリ、年々諸國風水ノ災アリテ、五穀不熟シ、江戸ハ勿論畿內諸

國、屢々火等アリテオダヤカナラズ、今年二朱金ヲ吹セラル事ハ金ノ部ニ出ス

元祿十一戊寅年

肥後米

金

錢

今年八九歩ノ作ニテ平穩ナレドモ、近年不熟ニテ米價貴ク、此兩三年百五匁ヨリ百目位ナリ、然ルニ又此十一月江戸大火有リ、近年數度類火ノモノ困究ニ及ビ難澁ス、依テ市民ヘ米二万俵拜借仰附ラル

元祿十二己卯年

肥後米

金

錢

今年諸國平穩也、然レドモ江戸又火災アリ

同十三庚辰年

肥後米

金

錢
今年諸國トモ平穩
元祿十四辛巳年
肥後米　　代八十目餘ヨリ九十三匁
金
錢
今年五畿内度々洪水アリ、六月廿日京都大雷アリテ百十餘ヶ所ヘ落、前代未聞事ナリ、又勢・尾・三州其外奥筋、皆風水ノ難有リテ作モ不熟、依レ之飢民多ク江戸本庄ニ於テ無宿ノ者ヘ綿入・布子幷米錢ヲ施行セラル、其仁恩推テ知ベシ
同十五壬午年
筑前米　　代百目ヨリ百十匁位
金　　代六十匁ヨリ六十四五匁
錢　　代十五六匁ヨリ十七匁
去ル元祿八年金銀吹替リ、位慶長金銀ニ比シテハ下品ニシテ、市民コレヲ卑シミ、慶長ノ金銀ヲ貴ミ、引替ニ出サズシテ隱藏ス、依レ之右慶長金銀世上拂底ニナリ、元祿ノ新金銀ヲ彌卑シミ、吹替後ハ慶長

銀五十目ヲ以テ、元祿金一兩ニ替ヘ、錢一貫文八九匁位ナリ、此頃米價ノ貴キモ、諸國不熟故而已ニモアラズ、金銀ノ位慶長ヨリ劣リシ故ナリ、元祿八九年後ノ物價ハ、皆元祿銀ヲ以ノ直ナリ

今年七八月、九州・四國幷播州・石州又北越・奥州筋洪水アリテ田畑多ク亡損アリ、然レドモ國所ニヨリテハ豐穗アリ

元祿十六癸未年

筑前米

肥後米　代九十二三匁前後

金

錢

今年十一月十八日・廿九日、江戸大火アリ、同月廿三日、東國筋大地震、房總兩國洪水津波アリ、都テ關八州凶作ニテ饑民多シ、近年打續キ諸國不熟シ、其上火災等多ク海内穩カナラズ、コレニ依テ今年十一月禁中ニ於テ三日御祈禱コレアリ、又廿二社奉幣使ヲ立ラレ、天下泰平五穀成就、萬民ノ豐樂ヲ被レ祈

元祿十七甲申年、（今年四月ニ寶永ト改元）此年六月、又關東大雨洪水アリテ、駿・遠・三州田畑水亡多シ、然レドモ西國・九州・北國ハ無難ニテ、凡平均七八分ノ作ナリ、今年二月五穀豐熟ノ祈願トシテ、神社・佛閣ヘ米金

ヲ寄セラル、
但去年冬讃州米一石百目、今年六月中旬ヨリ六十七八匁ニテ、世上ヤヽ穏ナリ、十一月ハ諸國米平均ニテ新穀

肥後米　代四十五六匁ヨリ五十目
元祿金　代四十五六匁ヨリ五十目
錢　代十二匁前後

今年四月ヨリ八九月ニ至リ、諸國人民伊勢參宮夥シ、前代未聞ト云リ

寶永二乙酉年、今年諸國八九歩ノ作

肥後米　代四十一匁前後
元祿金　代五十八匁前後
錢　代十二匁

寶永三丙戌年、今年六月九州筋大風雨コレ有リ、肥後洪水タリトイヘドモ、中國筋又東北ノ國々ハ其沙汰ナシ、昨今ハ五穀豊熟シ、萬民喜悦ス

筑前米　代四十五匁ヨリ五十目位
元祿金　代五十九匁ヨリ六十目餘

錢　　代十二匁四五分

右ハ元ノ字銀ニテノ相場ナリ、尤慶長銀ニテモ同樣ナレドモ、慶長銀ハ次第ニ拂底ニテ、多分元ノ字銀ニテノ價ナリ、當年ハ諸國作方九歩ノ出來、今年又銀增吹コレ有、是ヲ寶ノ字銀ト云、玆ニ因テ諸相場此寶永銀ヲ以テ交易ス、此頃慶長・元祿ノ金一兩代、寶永銀ニテ凡八十目前後、錢一貫文代廿五匁前後ナリ、寶永四丁亥年、今年諸國六七歩ノ作也、十月四日五畿內ヲ始メ、東海道・南海道ノ國々大地震アリ、別シテ五畿內ハ强シ、十一月廿三日富士須走口ヨリ燒イデ震動雷ノ如ク、土砂大雨ノ如ク降リ、近國大ニ痛ム、コレニ依テ米價高直ナリ

肥後米　代寶ノ字銀ニテ　百廿目ヨリ百五十目
　　　　代慶長銀ニテ　七十五匁ヨリ九十三匁
　　　　代寶字ノ銀ニテ　九十三匁ヨリ百十七匁

慶長金　代寶ノ字銀ニテ　八十五六匁

元祿金　代同　八十目餘

錢　代同　廿目ヨリ廿四五匁

今年、諸國紙札止ラル、依テ高直ニナルナリ、十月廿日頃元祿銀ニテハ錢一貫文代十匁九分、俄ニ十二匁五分ヨリ十三匁五分トナル、此節櫻・桃・山吹花滿開シ、竹ノコ盛ンニ出、日々地震、十一月四日大阪津浪シ、近國・京都大イニ地震ス

油壹斗ニ付　代寶ノ字銀ニテ　六十目前後

寶永五戊子年、三月八日京都大火、禁裏ヲ始メ、仙洞・東宮・女院御所炎上、宮方・公家方ノコリナク、町數四百十七町、タチマチ灰燼ト成レリ、又十一月下旬、信州淺間山燒ケ、近國下民大イニ痛ム、當年諸國出火多シ、大阪船場備前・筑前城下等大火有リ、七月五畿內・江州・勢州・尾州大風アリトイヘドモ、今年諸國豐熟ニテ士民安穩ナリ、然レドモ昨亥年米穀不熟ニテ下直ナラズ、當五月大錢初テ通用アル民服セズ、今十二月十七日新院崩御、東山院

肥後米　代寶ノ字銀ニテ　七十目ヨリ八十目

筑前米　代同　六十八九匁ヨリ七十目餘

慶長元祿金　代同　七十目前後

錢　代同　十五六匁ヨリ廿二三匁

寶永六己丑年、元祿八九年ノ頃ヨリ、諸國米穀不熟ニ付、酒造ノ運上ヲ定メラル、是ヨリ又酒價增倍シ、諸人迷惑ニ付、今丑年三月ヨリ運上ヲ免ゼラル、當正月大錢通用止ム

肥後米　代寶ノ字銀ニテ　六十目ヨリ七十目

筑前米　代同　六十七八匁

慶長元祿金　代同　六十二三匁

錢　代同　十五匁七八分

今正月十日將軍綱吉公薨御奉ㇾ稱二常憲院殿一

寳永七庚寅年、但シ今年永中銀・三ツ寳銀ヲ吹ル、此銀位賤キニヨリ金錢始メ諸物價益々貴ク成ル

肥後米　代寳ノ字銀ニテ六十七八匁ヨリ八十五六匁位
代慶長銀ニテ四十一匁餘ヨリ五十七匁七分餘
代元祿銀ニテ五十二匁三分ヨリ六十七匁一分餘

慶長元祿金　代寳ノ字銀ニテ五十九匁三分ヨリ六十七匁一分餘

錢　代同　十五匁二三分

但シ今年四月、乾ノ字金ヲ吹カル、元祿金ト引替ベキ赴ヲ觸ラル、慶長金ハ其儘差置レ、乾字金ト取交大小ノ構ヒナク通用スベキヨシ、然レドモ大小ノタガヒ有ヲ以テ、諸品代物ノトリヤリハ、金一兩ノ相庭ニ、慶長金ハ拾匁增、又兩替屋方ニテ引キ替步銀ノ儀ハ相對タルベキトノ事、右乾字金吹改ニツキテハ、元祿金追々引キ上ゲラレ、且貳朱金停止セラル、猶金ノ部第十七卷銀ノ部第十八卷幷可ㇾ考、寳永八辛卯年四月、改元有テ正德元年ト云フ、今年作方諸國七八步ノ出來、此年又四ツ寳銀ヲ吹カル、此銀又位ヰ賤シ

寳ノ字銀ニテ七十二三匁ヨリ六十八匁五分位

肥後米　代慶長銀ニテ　四十二匁餘
　元祿銀ニテ　五十八匁餘

元祿金　代七十二三匁ヨリ七十日前後

正德二壬辰年、今年九月新銀吹止メ被仰付、銀座ノ者共罪ヲ糺明セラレ仕置被仰付
十月十四日將軍家宣公薨御、（奉稱文昭院殿）依之御遺言ノ趣、老中秋元但馬守殿・大久保加賀守殿・井上河
內守殿・阿部豐後守殿列座ニテ、御他界ノ趣被仰渡、猶又御遺言林七郎殿讀上ゲラル、金銀ノ事ハ
（金ノ部第十卷ニ出ス　銀ノ部第十八卷ニ出ス）文昭院殿ト奉申ハ、甲府ニ御在城被在、大猷院殿ノ御四男綱重公ノ御嫡ニテ、
綱豐公ト奉稱、聰明睿智衆ニ超過シ玉ヒ、新井白石初メ儒者ヲ召置レ、日々經書ヲ講ゼサセ玉ヒ、經
濟ノ義理ヲモ聞召分ケラレ、能ク人ノ諫ヲ入レラレ、人ヲ捨タマハズ、寬仁大量ニマシ〳〵、スナホナ
ル御生質ニテ、世以テ賢明ノ君ト奉稱譽シ、去ル寶永六年御繼統以來、日夜御政務ニ心ヲ盡サレ、追
追御仁政モ行ハレ、萬民難有喜悅セシニ、不圖九月ヨリ御不豫ニテ、十月薨去セラル、有御德行鳩
巢先生ノ書翰ヲ以テ略寫ス

一（前略）又被申候は、常憲院樣御遣ひ銀すきと御遣ひ被成、御隱居所御立可被遊樣も無之に付、
鈔銀と申儀起り候て、是を以御隱居所御立被遊御入用に被成候積り之處、共內薨御候而其跡御繼被
遊候に付、金銀拂底仕候故、老中より被申上候而金銀を惡敷被成替候て多く致し、御遣用有之樣

仕度旨被二申上一候得ば、仰に金銀は元よりよく可レ被レ成惡敷被レ成間敷旨被レ仰出レ候、又被二申上一候は　常憲院様之御時、金銀吹替被二仰出一候而、金銀多く相成候故、先年大地震に而御城中大分破損も御修理に被レ成申候、明日にも地震火災有レ之間敷ものにても無レ之候間、兎角金銀出來申候様に用意不レ仕候而者、手支候而いか様成氣遣ひ成事出來候半も難レ計由、被二申上一候得ば御聞被レ遊、成程左様の所迄心掛け候事尤に思召候、此うへは御自身之思召をも先被レ仰候て、御覽可レ被レ成候、各金銀吹替等

御先代に被二仰付置一候故、地震等之時分、無事に相濟申旨申候、しかれ共金銀吹替等之儀無レ之候て、地災等之大災は有レ之間敷と御前に者思召候、左様之儀不レ仕、何卒　將軍宣下等いかやうにも相濟し御取續可レ被レ遊候思召に候、其上不二思召寄一又地震火災等之大變出來仕候はゞ、其時は天下之爲に御一身御つぶれ可レ被レ成と御覺悟被レ遊候旨御意之由、誰やらん新井殿へ被レ申候忘れ申候、其人此　上意を聞被レ申候而、御身に被レ替候て天下之難儀を御救ひ被レ遊候事、兎角不レ被レ申候とてなき被レ申候、私も其節は感涙にむせび申旨被レ申候、此事を承り候而、私も落涙に及び申候

一　又被レ申候は　御代始右之通御勝手向御不自由之砌、諸旗本困窮に而、子孫養育可レ申様も無レ之旨御聞被レ遊、一度に七百人餘り被二召出一候、古今に一度も是程被二仰出一候事可レ有レ之哉、其砌十七歳已上と哉覽申儀に候、然る所十三歳に被レ成ものを前髪をおろして出申候、是はいかにしても上を輕んず

る樣成事とて老中抔は不機嫌に候所、御聞被遊殊外御機嫌にて御座候旨、是等結構成御樣子と奉存候、兎角珍敷寛仁之君に御座候、私もかやう之御君德之儀を承り候而、何角理屈らしき先を折申樣に申候而、不調法成儀に候所、御物語り承り乍恐奉祝候、權現樣御再來と奉存候此御仁德にては御家御長久と目出度儀に奉存候中略

一 九月廿日頃より正德二年、當主御不豫に被成御座、二十八日より十月朔日及出仕候處、御不座(カ)不被遊候、御療治最初は奥山交竹院、其後又岡道慶・牧原道立・澁江通玄院と段々相替候得共、御快驗無之に付、朔日より又交竹院御藥被召上候、御藥一貼に人參五分づゝ被加候、九日夜急に御差重り被成、夜中御老中俄に登城有之、大久保加賀守殿に者忌中に候得共、御免被成候而被召出候、御肝積左之方より強く差込候而、人參之類少しにても被召上候得ば、殊之外御苦痛被成候故、獨參湯上げ申儀も難成、醫師中も手を束ね居申候、翌十日晝頃殊之外御煩悶被成候處、其後少し御くつろぎ被成、夫より御疲れ出、晝夜御寢なり、折々御粥を四十目餘兩三度も被召上候而、成程御靜に御座候所、十一日・二日頃は、少し賴みも有之、御本復を皆々奉祈候處、終に十四日曉天薨御被成候、近代に無之賢明之君に而、殊に當年より段々御仁政も行れ申體に候所、此仕合に被成、誠に天下之不幸に候、十四日總出仕候而罷出候得者、御老中御出座に而、今曉御他界之段被御渡、其上に御遺言有之之旨にて林七郞高く讀上げ申候、各落涙仕候而拜聽仕候、則別紙に認め進じ候、寔以言簡而義深共

可レ申候、御繼統已來三年之間日夜天下之事に御苦勞被レ成、御跡之事迄ケ様被二仰置一候事、難レ有儀奉レ存候、御葬送之儀も御遺言に而、增上寺へ御越被レ遊候、此儀も被二仰置一候趣、乍レ恐御筋之儀と奉レ感候

御當家は御代々淨土之筈に而、既に權現樣・台德院樣、增上寺御取立置被レ遊候處、大猷院殿樣初而天台宗に御成被レ遊候、夫より御三代上野へ被レ爲レ入、此度又上野へ御越被レ成候而者、最早增上寺之方御由緒絕申にて有レ之間、此度は權現樣・台德院樣之如く、增上寺へ御越可レ被レ成との御遺言に而候、金銀之事も秋元但馬守殿へ委細被二仰置一候、其趣大略承候處、金銀近年拂底に被レ成候に付、澤山に可レ被レ成と思召候而、御先代に吹替被二仰付一候得共、只今に成拂底にて末々難儀仕候樣被レ及二 聞召一候に付、御苦勞に被二思召一、色々と御思慮御座候得共、急に御改被レ成がたく候に付、御見合被レ成候處、此度被レ及二御不幸一候而、民之難儀に被レ成候儀に候間、御跡にて宜敷致二僉議一、兎角金銀共に權現樣・台德院樣御時代之通に被レ成候樣可レ仕旨、則十四日此儀も秋元殿其役人へ被二仰渡一候、九日夜急に御差重り被レ成候所、少し之間有レ之御正氣付候得者、拍子爲レ致候得とて、御枕元に而拍子二番有レ之候、十日晝迄に御息絕不レ申內に、此度伺ひ殘し置候儀共、一々伺候樣被二仰付一、透と御聞被レ成候て、夫々被二仰出一、不レ殘埒明申候、遠慮・閉門等其節御赦免被レ成候、是も被レ仰候は、此者畢竟御免可レ被レ成と被二思召一候、只今御赦免不レ被レ成候はでは一生難儀可レ致候間、皆々赦し候へとの儀に御坐候、右

御遺言も其時分相濟候哉、則九日之日附に而候、是より後事透と春前より被㆓仰置㆒、不㆑殘埒明申候、其後御近習衆何れも久々御馴染被㆑成候ものどもも候間、御暇乞可㆑被㆑成候間、一人づゝ御前へ罷出候樣と上意に付、名を名乘候而御目見に罷出候へば、夫々に御言葉を被㆑掛候、其內老人壹人餘りに忍兼候而、泣申もの有㆑之候得ば、其時御目を被㆑明候而御呵り被㆑遊候、御女中方へも御暇乞可㆑被㆑成哉と申上候へ共、無用に仕候得と御意に而御坐候、扨もはや何事も相濟候間おこし立候へ、早御絕被㆑成度由被㆑仰候は、定而殊外御苦痛被㆑成候迚も不㆑叶儀に候故、少しも早々御絕被㆑成度思召候而之御儀と乍㆑恐甚御痛は敷奉㆑存候、去れども夫より少々づゝ御くつろぎ被㆑成候故、何れも相談之所、此間人參被㆓召上㆒宜敷無㆑之、却而殊之外御難儀被㆑遊候得共、此節に相成人參を上げ不㆑申候て、御隱れ被㆑成候樣に有㆑之候而は、諸人之殘念に存候所も可㆑有㆑之候間、此上は群臣之ために被㆓召上㆒候樣申上、試み可㆑申由に而、獨參湯を奉㆑捧、右之趣申上候へ共、成程尤にも被㆓思召㆒候得共、只今迄人參御相應不㆑被㆑成候に付、不㆑被㆓召上㆒候處、只今御最期になり被㆓召上㆒候はゞ、命不㆑知にても可㆑有㆑之間、召上られ候も同事に被㆓思召㆒候間、被㆓召上㆒間敷由に而不㆑被㆓召上㆒御絕命被㆑成候迄、透と御平日之御樣子に而御座被㆑成候、扨日夜御草臥被㆑成、御寢被㆑成候間、御近習之衆も、後々は何れも勤め申儀も無㆑之、只伺候して罷在候由に候、御絕命迄は何れも付而居不㆑申儀も成間敷候間、御傍に居候而捨置候へとの御命にて候由、成程靜に御臨終之由に御座候、如㆑斯御英明之儀申に付而も、偖々をしき儀

に奉ㇾ存候、東照宮之御神靈も無ㇾ之哉と、餘り之事に恨奉る程に奉ㇾ存候、此上は犬馬之情、只嗣君之御萬福を奉ㇾ祝候而、御成立を奉ㇾ待より外無ㇾ之候、右申伸候事は透と外人共不ㇾ知儀に御坐候、私事は御存之通、承り申候筋より承申候、かやう之儀獨り承り候も、餘り殘念奉ㇾ存、畢竟君之美を揚顯仕候事は、人臣之本意に候故申進候十月十八日書狀

御遺書

不肖之身

東照宮の神統を承しより此かた、天下之政事當に神德に嗣ん事を以心とす、然るに在世短ふして、其志之遂ざる事、今に及んでいふべき所を知らず、古より主幼く國危き代々を見るに、其世々の人權を爭ひ、黨を立て、其心を知らずして、相疑によらざるはなし、胡越之人も舟をおなじうして、水を渡るに其心を一つにして、其ちからを共にする時は、風波之難をも渡るべし、況や今の世の人、當家創業の後、治平百年之間に生れ、相長ずる事誰かは　東照宮之御恩によらざるものゝあるべき、人々共に神恩に報ひ奉り、世のため人のためを及せば、古之主幼く國危き代々之事を以て、深き誡とすべし、若其志なからんにおいては、當家の危難をいふのみにあらず、尤是天下人民の不幸たるべし、凡天下の貴賤大小宜敷相心得べき事に思召もの也

正德二年十月九日　御墨印

（但シ金銀ノ事ニ付テノ御遺書ハ、金ノ部第十卷ニ出ス、銀ノ部第十八卷ニ出シ玆ニ略ス）

一　十月廿日申之刻御出棺にて候所、天氣快晴にて、終日長閑に御座候、供奉之警衛之衆迄、聊無滯増上寺へ被爲入候、路次萬人貴賤愁涙にて、殘多奉存候體に御座候、御出棺前三日より御出棺之日迄、殿中夥敷金銀之花降候而、手にて受取候得共、其儘消申候、器物に受け候得ば少さき珠にかたまり申小珠只金に致現在候、かゝる奇瑞終に不承儀に御座候、佛者信仰之衆は、舍利降り申由申候、或は兩銖とも申候、かく可有儀に候へ共、諸人は不存候、兎角難有御明主と奉存候、九日夜より十日晝迄御病氣危急之內、少しにても御くつろぎ被成候へば、其儘急々御用之儀被仰出候、一事も御自身御身之上之事は無之、只天下人民之事と末々東照宮百年之御法會之儀に御座候、十日晝迄にすきと御正命を被絕候と御待被遊候由、頃日新井氏物語に而候、十三日晝迄、新井氏御前へ被召出候由に御座候、ヶ樣之御臨終、古今人主には終に不承儀に御座候、金銀の花降り申もことわりと奉存候

右ノ外文章數條アレドモ略之、右御德行且御遺書ノ次第、玆ニ載スルハ恐有ト雖、歲霜ヲ經ルニシタガヒ、文昭院殿ノ難有御仁德ヲ知ラザルモノ、タメ、玆ニ不顧恐奉ニ順擧、金銀吹替ノ因ミニ記之、

今八月畿內ヲ始メ諸國風水ノ災アリテ、六七步ノ作

肥後米

代　賣ノ字銀ニテ八十一匁五分ヨリ八十六匁一分九十日

代　慶長銀ニテ　五十一匁位

代　元祿銀ニテ　六十三匁餘

元祿金　　代寶ノ字銀ニテ七十六匁ヨリ八十目前後

錢　　代十七八匁前後ヨリ二十二三匁位

但シ增吹ノ新銀、段々位下品ニ附、諸物高直ニナレリ、白米一石百二十目、小賣ノ分銀一匁ニ白米八合、薪一掛銀七匁、油一斗五十四五匁、十月頃金一兩代七十二三匁、錢一貫文代二十目前後、皆新寶永銀ニテノ相場ナリ

正德三癸巳年

肥後米　　代寶ノ字銀ニテ百五十五匁位
慶長銀ニテ九十六匁餘
元祿銀ニテ百廿一匁餘

慶長元祿金　　代寶ノ字銀ニテ八十二匁前後

錢　　代同　廿一匁餘ヨリ五匁迄

但シ近年諸國米穀不熟ノ上、寶永銀不位ニテ、彌諸物高直ナリ、今年五月頃米一石代百七八十目、小賣白米銀一匁ニ六合、大麥一石百廿目ニテ下民甚痛ム、依レ之諸物買シメ等嚴重ニ禁止セラル、閏五月金一兩代八十五匁ヨリ六匁、薪一掛代八匁、油一斗九十目・百目、酒一斗廿二三匁

閏五月制令

一　女之衣類、自今已後小袖一つに就て、上之御用之物は、其代銀五百目を限り、萬石已上之用之物

は、四百目をかぎり、其餘は三百目を限り、夫より高直之物、一切賣買すべからざる事
附女帶之類、其外何にかぎらず、此例に准じ其價を輕し、賣買すべき事

一　女之衣類、絹紬にかぎらず、其下地は何ほど下直之ものにても縫鹿子等、不相應之もの、あつらへ候者有之候共、一切仕出すべからざる事

一　男女之衣類に限らず、自今已後或はめづらしく新織もの染もの類、一切仕出すべからざる事

右近年以來、別而女之衣類、種々結構におよび、其上長崎表へ渡り來候、織もの糸類を始め、縫鹿子染物等之手間代も相增し、其價以之外高直に到り、尤以不可然事、就て御制禁之所より、或は衣類之下地を指つかはし金糸縫はく鹿子等之代銀計にて、御定之通に合候樣に仕、或は小袖貳つ三つ之價に合せて、其表壹つ之代銀にて、或は珍らしきもやう、新敷染色等、其好にまかせ仕出し候類、すべて是等之事によりて、法度もやぶれ事に候へは、若自今已後、何事によらず御制禁之旨に違犯之ともがら有之においては急度重科に行はるべし、たとひ何方より誂へ來りしといふ共、御制禁之物共受取に及ばず、のがれ難き品在之においては、早速町奉行所へ訴出、其沙汰にまかすべきもの也

巳閏五月

正德四甲午年、夏ニ至リ諸物高直ニナル、諸國作方當年六分半ノ出來ナリ、今年新金銀ヲ吹セラル、是ヲ今古銀ト稱ス、又古金銀割合遣ヒノ法ヲ出サル、（金ノ部第十八卷ニ委出ス、依略ス）十二月三日ヨリ新金銀引替始ル

肥後米　代　新銀、又ハ慶長銀ニテ　百目九分
　　　　　　元祿銀ニテ　百廿六匁一分
　　　　　　寳ノ字銀ニテ　百五十五匁二分
　　　　　　通用銀ニテ　二百一匁八分
　　　　　但シ永中、又ハ三ツ寳・四ツ寳銀ナバ通用銀ト云フ

元祿金　代通用銀ニテ　七十五匁位

錢　代同　二十四匁餘

今年銀座不首尾ニヨリ、市民通用銀ヲアヤブミ、貨物交易穩ナラズ、コレニ依テ彌諸物高直ナリ、今年五六月ノ頃、通用銀ニテ米一石百六七十目、金一兩九十二三匁ヨリ八十五六匁、九月ニ至リ白米一石二百三十目、十一月新玄米百八十目餘錢一貫文、二十四匁三分ヨリ二十五匁、右ノ通リ市民通用銀ヲアヤブミ、交易穩ナラズ騷動有ニヨリ、今年五月ニ御書附ヲ以テ、金銀新古上下ノ差別ナク、通用妨ナキ割合遣ヒノ法ヲ出サレ、諸民ヘ示教セラル、然レドモ金銀多品ニシテ、通用不便利也、今見ルニ便ナル爲、其大概ヲ記ス

慶長幷新金百兩ニ　乾字金ハ　二百兩ヅヽ

元祿金百兩ニ　乾字金ハ　百二兩二步ヅヽ

慶長幷新銀一貫目ニ　永中・三ツ寳・四ツ寳銀ハ　二貫目ヅヽ

元祿銀一貫目ニ　右同斷　一貫六百目ヅヽ

寳字銀一貫目ニ　　右同斷　一貫三百目ヅヽ

慶長幷新銀一貫目ニ　元祿銀ハ　一貫二百五十目ヅヽ

同　一貫目ニ　寳字銀ハ　一貫二百卅八匁四分四厘ニアタル

但シ今年八月、畿内始メ諸國風水ノ災有リ、十月頃米一石二百十匁位、小賣ノ分白米銀一匁ニ五合、醬油一升一匁二分、油一升八匁七分、薪一掛八匁五分、酒一升二匁八分、十二月ニ至リ米一石百五十目、金一兩八十目前後、錢一貫文二十五匁二三分、但通用銀ノ相庭ナリ、尤頻ニ諸物高直ニ付、三都共時々高直ニ致スマジク制令有リ、略レ之

正德五乙未年、今年モ米價貴シ、依レ之近年大阪モ衰微ニ付、市中ヨリ拜借米願處、今年四月上旬、去ル巳年米四千五百廿石拜借被ニ仰付一家別ニ二升八合五勺ヅヽナリ、代銀ハ六月切ニ上納一石ニ付通用銀ニテ百廿八匁五分ヅヽト云フ

肥後米　代　慶長銀ニテ七十五六匁
元祿銀ニテ九十三匁二三分
寳字銀ニテ百十五匁三四分
通用銀ニテ二百二三十目位

但今年正月ヨリ四五月ニ到リ、彌米價貴シ

今年江戸乾金一兩ニ米二斗七八升ヨリ三斗位、依レ之市民買シメ等嚴密ニ禁止セラル、近年打ツヾキ米

穀不熟ニ付、豐作ノ御祈願トシテ、今八月　禁裏・法皇兩御所ヨリ、勢州兩宮ヘ御奉納、和歌百首幷御太刀・御馬被レ爲レ献、猶又當年ハ大神君百年ノ御神忌ニテ、諸國穩ノ聞エアリ、然レドモ近年凶作打ツヾキ米拂底ニテ米價下落ニ不レ及、去ル寶永六年酒造ノ運上免許セラルヽトイヘドモ、酒直段下直ニモ無レ之、當年相應ノ豐作ト雖モ、彌米穀ヲ貴重シ、元祿年ノ例ニ任セ、當冬造酒三歩一ニ仰付ラレ、大阪・伊丹・鴻池・池田等ノ酒造、幷船積等嚴重ニ沙汰セラル

三貨圖彙物價之部卷之六

草間直方輯錄

正德六丙申年、今六月（享保ト云改元六月）下旬、諸國水災アリ、別シテ五畿內大水ニテ窮民多シ、米價一石百三十目位、（但通用銀ニテ）尤昨未年諸國相應ノ豐穗トイヘドモ、近年不熟打續米拂底ニツキ下落ニ及バズ、七月、大阪曾根崎村ヨリ出火コレ有、堂島・新地凡殘ラズ、上下福島迄廿五六町類火ニテ、加州・中國ヲ始メ、諸侯ノ借リ土藏等ヘ火入、凡米八萬四千七百八十七石類燒ス、右火入米諸家ヨリ拂ニナル、下米一石廿七八匁ヨリ三十目、中分八十目位、上米百目ヨリ百廿目位、コレニ依テ畿內ノ窮民競ヒ求ムル事夥シク、暫困窮ヲ免ル

享保二丁酉年、今年諸國平穩ニテ、七八分ノ作也、然ドモ昨申年畿內水損多ク、米穀拂底ニテ價下落セズ、正月、南都興福寺諸堂燒失、同月、江戶大火有リ

肥後米一石ニ付
寶字銀ニテ　百十匁餘
通用銀ニテ　百卅目ヨリ五十八匁八分
慶長銀ニテ　七十目前後

元祿銀ニテ　九十目前後

通用銀ニテ　六十五匁位

通用銀ニテ　二十四匁前後

元ノ字金、乾金一兩ニ付

錢一貫文ニ付

此時通用銀ト云ハ、永中銀・三ツ寶・四ツ寶銀、此三品ニテ賣買ノ直段ナリ、尤慶長銀・元祿銀、倶ニ五品ナリ、各甲乙ヲ以テ融通スベキ御定ナレドモ、新古賣買ニ損益ヲ量リ、私ニ共品ヲ分チ、自ラ交易穩ナラズ、尤正德六年迄ハ、諸相場皆通用銀ノ相庭ナリ、正德四年、慶長ノ法ノ如ク、吹改コレ有トイヘドモ、金銀ノ吹方數ナク、右金銀悉ク改ル迄ハ、年月ヲ經ル事故、暫ノ間前文ノ通、新古割合通用ノ法ヲ出サル、（金ノ部、第十一卷、銀ノ部第十八卷ニ委ク出シ、コヽニ略ス）是ヨリ諸相庭通用銀ノ外、新古金銀トモ皆々割合通用シ、去ル正德四午年十一月ヨリ物價ヲ定メラレ、享保三戌年閏十一月、再應新古割合通用ノ法ヲ改メラレ、元祿以來五品ノ銀ヲ以テ割合、市民交易シ速々古金銀引替コレ有リ、今年十一月ヨリ、諸物ハ新金銀相場ニ相成、尤昨酉年諸國平穩ニテ豐熟シ、八九歩ノ作ニテ冬ニ至、米價一石通用銀ニテ七八十目、然ドモ諸物高直ニテ士民迷惑ス、コレニ依テ五月下旬、商民ドモヘ左之通觸ラル

一　前々米高直に隨ひ、諸色直段も高直之由相聞え候、此節者追々米直段も下直に成候得共、諸色直段幷諸職人手間代やとひ賃等、曾下直に無之由、惣而御定座職之外諸商ひ銘々心次第に賣買可仕處、御

停止を相背き銘々申合せ、仲間をたて直段を極め、人々心次第之直段下直に賣買は成がたく様に仕候由粗相聞不屆之至、彌以人々心次第に賣買仕、諸直段賃銀等下直に相成候樣可ㇾ致候、若諸商人・諸職人・日雇之者迄、頭取いたし其類ひ申合仲間をたて、直段等相極め候族有ㇾ之においては召捕、急度曲事可ㇾ申付ㇾ候事

五月廿三日

一 町人共男女衣類之儀前々より相觸在ㇾ之處、近年美麗之由に而結構に相成り、下着迄心付候樣に相聞甚不屆に候、町人共幷召仕男女共衣類之儀者、先年より相觸候通、絹紬迄にて決而美麗なる儀致間敷候、相背においては急度曲事可ㇾ申付ㇾ候

五月廿三日

新古割合金銀通用、見ルニ便ナルタメ、其大概左ニ記ス、委シクハ金ノ部第十一、銀ノ部第十八ニ記ス、幷可ㇾ考

慶長幷新金百兩ニ　元祿幷乾金二百兩ヅヽ

元祿金百兩ニ　乾金百二兩二歩ヅヽ

慶長幷新銀十貫目ニ　元祿銀十二貫五百目

同　寶永銀十六貫目

同　　　　永中銀二十貫目
同　　　　三ツ寶銀二十五貫目
同　　　　四ツ寶銀四十貫目
享保三戊戌年、諸國平穩ニテ豐穗、十一月ノ頃
肥後米　　　　代新銀ニテ三十三匁
慶長金新金　　　　代同　四十五匁前後
錢　　　　代同　八匁五六分位
右肥後米卅三匁ハ新銀慶長銀ニ同ジニテノ相場ナリ、譬バ是ヲ右割合遣ヒノ銀ニテ求メントスル時ハ、左ノ通リ
慶長銀ニテハ、米一石　　　　代三十三匁
元祿銀ニテハ同　　　　代四十一匁二分五厘
寶永銀ニテハ同　　　　代五十二匁八分
永中銀ニテハ同　　　　代六十六匁
三ツ寶銀ニテハ同　　　　代八十二匁五分
四ツ寶銀ニテハ同　　　　代百三十三匁

享保四己亥年、此秋諸國少々不作ニ付高直ナリ、然レドモ去戌年豊熟故別ノコトナシ、當五月、九州筋肥後・豊前・豊後國々、田畑水亡有リ

肥後米	代新銀ニテ四十二匁二分
慶長金新金	代同四十二匁前後
錢	代同九匁五六分

右肥後米代四十二匁二分、是ヲ割合遣ヒニテ求ムル時ハ、左ノ通リ

慶長銀ニテハ	米一石	代四十二匁二分
元祿銀ニテハ	同	代五十一匁五分
寶永銀ニテハ	同	代六十五匁九分
永中銀ニテハ	同	代八十二匁四分
三ツ寶銀ニテハ	同	代百三匁
四ツ寶銀ニテハ	同	代百六十四匁八分

昨戌年、新古金銀割合通用ノ制令コレ有トイヘドモ、下民借財ノ出入訴訟多ク、公裁繁多ニシテ止事ヲ得ラレズ、金銀出入ノ分トリ上ゲコレ無キ趣御觸アリ

一　惣而借金銀其外買懸リ等之儀者、人々相對之上之事ニ候得者、自今已後右之出入ハ、奉行所ニ而

取扱無レ之筈ニ候、乍レ然欲心を以工み候出入者不屆之譯糺明之上、御仕置可ニ申付一候事
右之趣ニ候得者、只今迄奉行所にて取上ゲ、日切等申付、段々濟寄候金銀出入も、向後奉行所ニ而ハ不ニ申付一候間、無レ滯急度返濟可レ致候

是ハ江戶町觸ナリ、武家方ヘハ左ノ通リ

一　近年金銀出入多く相成、評定所之寄合之節も、此儀を專ら取扱、公事訴訟之事者末ニ相成、評定所之本望を失ひ候、借金銀・買掛り等ハ、人々相對之上之事ニ候へば。自今已後奉行所にて濟口之取扱者致間敷候、併欲心を以事を工み候もの有レ之ば、不屆糺明之上御仕置可ニ申付一候

附り不屆在レ之分者身體限り可ニ申付一候事

一　只今迄金銀出入日切等申付候も、奉行所に而不ニ申付一候間、無レ滯返濟可レ致候

享保四亥年十一月十三日

右ノ通仰渡サル、コレニ依テ又市民金銀貸借ノ道、或ハ買懸リ等ノ逼至ト差支ヘ、士民迷惑ニ及ビ暫ク騷動ス、コレハ心得タガヒニテ、金銀出入一切取扱ヒコレ無ト存知込ミ候ニ付、猶又翌子年左ノ通敎喩セラル

一　借金銀幷買懸り等之濟口之儀、自今奉行所ニ而不ニ申付一筈ニ候事を工み而、或ハ返濟を爲レ滯、買掛り金銀をはらはざるも有レ之においては可ニ申出一、不屆之品を糺明可レ有レ之旨、去冬相觸候處、心得違

金銀出入之儀者、一同へ不ニ申付一筈之様に心得候と相聞え候、奉行所に而不ニ取扱一品者前々切金に而日延べん〳〵と申付たる儀、向後は不ニ申付一筈に候、可レ濟筈をわざと滞す歟、又借金等不ニ相濟一上にて、質物をも約束之切過ぐる、彼是申延し何れともに不ニ埒明一筋、總而是等之類有レ之候はゞ、早々御役所へ訴可レ仕候、急度可ニ申付一候、以上

右ノ通再觸コレ有トイヘドモ、騒動不レ止、其後諸問屋共ヨリ願出候ハ

一　御當地諸問屋共申上候、去冬御觸後滞金濟方俄ニ不埒ニ相成迷惑仕候ニ付、何卒前々之通御取捌之儀奉ニ願上一候處、御内寄合ニ被ニ召出一、御觸之上ハ先矩之通御取扱難レ被レ成趣被ニ仰渡一、迷惑至極ニ奉レ存候、何分相對と被ニ仰付一候而者、金子相濟不レ申候、捨物同様に相成、問屋共身上必至と難レ立難儀仕候に付、又候書付を以御願申上候

一　先矩之通御取扱難レ被レ成旨被ニ仰付一候に付、此度別而御願申上候は、濟方不埒成者有レ之節、借方即座に封印仕、早速御訴之上御威光を以、身上限り貸方へ請取候様被ニ仰付一被レ下、其上御當地は不ニ申及一、關東在々奥筋迄、御觸被ニ成下一候之様奉ニ願上一候、御慈悲を以被ニ仰付一被レ下候へば、身上宜敷暮し罷在、相對之儀を含欲心を以相濟不レ申族も、家財不レ残引渡候儀難儀に奉レ存、内證にて身上相應に埒明、横着成者も自然とすなほに罷成、世上一統渡世仕候に付、難レ有奉レ存候事

一　滞金濟方不埒に付難儀仕候儀者、諸國問屋共不レ限、所々荷主共諸職人百姓等に至る迄、御當地へ荷

物差迄り、我々共引受御屋敷様始め仲買在々所々迄も賣渡し、互に渡世仕來候處、相對之御觸故在々迄も商賣手狹に相成候に付、國々ゟ之荷物も次第に減少仕、世上一統渡世難レ仕迷惑難儀仕候、總而國中共に渡世之仕様、大家小家に不レ限、不時之入用は不レ及レ申、年中之入用金得と貯置渡世仕候者は、一人として無二御座一候、世上一統貸借り通用を以相續仕候、別而問屋共之儀者、諸國之荷物取捌き、順順懸賣仕相續致來候處、滯金濟方不埒にて迷惑至極奉レ存候、御慈悲を以願之通被二仰付一被レ下候得ば、御威光之御蔭にて御前様へ御訴不二申上一候ても、おのづから內證にて身上相應に相濟候儀に御座候、然者諸商人は不レ及レ申、萬民御救と存候間、幾重にも奉二願上一候、右之通被レ爲二聞召分一濟之方御糺明之上、急度被二仰付一被レ下候はゞ、世上一統之御救と、難レ有可レ奉レ存候

享保五子年十月　御當地諸問屋共

右ノ後同年十二月諸問屋ヨリ商賣向差支難儀ノ趣、箇條書ヲ以訴フ（事長キ故略レ之）此願御評定ノ後、又以前ノ通御裁許コレアリ、其後享保八卯年、此儀ニ付御觸コレ有（略レ之）

享保五庚子年六七月ノ頃、又米價高直ニ相成ル、是ハ去ル戌亥兩年下直故引方多ク、其上當六月豐前・豐後・筑後、都テ水災コレ有米穀乏シ、コレニ依テ俄ニ相違引立

肥後米　代（新銀ニテ）六十八匁二分
冬ニ至リ五十三匁八分

慶長金新金　代（同）四十一二匁ヨリ
四十八匁五分

錢　　代同　十匁位

享保六辛丑年五六月、又々高直ニ相成ル、是ハ昨子年、諸國ノ作方六七歩ノウヘ、今閏七月攝・河始メ諸國水災有レ之、萬治三年五月以後ノ洪水ニテ、諸國田畑水亡夥シ、依テ米價彌貴シ

肥後米　　代新銀ニテ　七十目ヨリ八十目位

慶長金新金　　代同　四十八九匁ヨリ五十六匁グラキ

錢　　代同　十一匁二分位

前ニ云割合遣ノ儀ハコレヲ略ス、尤享保三戌年閏十月、割合ノ法ヲ出サレ、來ル寅年迄五年ヲ限リ、其後ハ停廢セラルトノ事、右割合銀ヲ以テ物價交易スル故、市民紛ハシク迷惑ニ及ベリ、譬バ茶器茶碗ノ類ニテモ、賣主ハ慶長銀新銀ニテ一貫目トイヘバ、元祿銀ニテ一貫目ニ買ト云、但慶長銀、新銀八百目ニ當 賣主不承知成ル時ハ、永中銀一貫九百目ニ仕ヨト云、是ハ慶長銀新銀ニテ九百五十目ニ當ル 此類ニシテ其不便利ナル事推テ知ベシ、右割合通用不便利ニシテ、商人市民甚紛ラハシク、銘々覺エ安キ様ニ割合ヲ工夫シテ書記シ持シナリ、是等ノコト今士民共ニ知ル人稀ニシテ、文金銀一列通用ノ善政ナル慈恩ヲシラズ、歎ズベキ事ナリ、今年二都トモニ米高直ニ付、困民ヘ御藏米ヲ直段引下ゲ拂方仰付ラレ、或ハ現米ヲ以救ハル

享保七壬寅年、諸國豐穗ニテ平穩也、然レドモ尾・勢始メ東海筋ハ風水アリテ不熟ナリ、近年御費用多、

莫大ノ御物入在ラセラルヽ趣ヲ以テ、當秋ヨリ諸侯方ヘ知行高ニ應ジ、百分一ノ上ゲ米仰付ラル事左之通

一　御旗本に被二召置一候、御家人御代々段々相增、御藏入等も先矩より多く候得共、御切米御扶持方共外表立候御用筋、渡方に引合候ては、畢竟年々不足之事に候、しかれども只今は所々御城米を廻され、或は御城金を以急を辨ぜられ、彼是漸々御取續之事に候得共、今年に到りては御切米等も難二相濟一、御仕置筋之御用も御手支之事に候、それに付御代々御沙汰も無レ之事に候得共、萬石以上之面々より米差上候樣可レ被二仰付一と思召候、左候はねば御家人之內數百人許御扶持之召放候より外無レ之候、御耻辱をも不レ顧被二仰出一候、高萬石に付米百石之積り可レ被二指上一候、且又此間和泉守へ被二仰付一、隨分遂二詮議一納り高之品、或は新田等取立候儀申付候樣との御事に候へども、近年之內に者難二相調一可レ有レ之候條、其內年々上げ米被二仰付一候に而可レ有レ之候、依レ之在江戶半年宛被レ成二御免一候間、緩々致二休息一候樣にと被二仰出一候中略

一　上げ米之儀大阪御藏へ成とも、當地御藏成とも面々勝手次第上げ米高半分づゝ、春秋兩度に可レ被二相納一事

但し米に而難レ納面々者、金子に而も不レ苦候、其節之張紙直段を以可レ被二相納一事、當年之上げ米は半通り之積り、當秋中可レ被二相納一候

右ノ通被ニ仰出ニ候、但諸侯方參勤御暇ノ事ハ略レ之今五六月迄米價高直ニ付、京民ヘ代銀延賣拂米一萬石仰附ラレ銀上納、十一月可レ仕由、當六月五畿內米一石七十二匁位、國々六十二三匁ナリ、然ル處今年豐熟ニテ、十二月ノ頃ハ一石四十四五匁、今月ニ到リ金銀割合通用相止ミ、新金銀一ヤウ通用ニナル、猶銀ノ部十八卷並セ可レ考

享保八癸卯年、西國平穩ニテ豐作、關八州・奧州筋、八月風水ノ災アリ

肥後米　代新銀　四十一二匁位

享保九甲辰年十二月

廣島米　代新銀　四十三匁

備前米　代同　四十四匁二分

中國米　代同　三十九匁五分

但シ今年六月御儉約仰出サレ、書付ヲ以諸家ヘ仰渡サル、今三月大阪大火、米相庭暫ク中絕ス

享保十乙巳年十二月

廣島米　代新銀　五十目三分

備前米　代同　五十五匁二分

中國米　代同　四十六匁

享保十一丙午年六七月、諸國旱ナリ、十二月

廣島米　代新銀　五十一匁五分

備前米　代同　五十二匁八分

中國米　代同　四十七匁一分

享保十二丁未年十二月

廣島米　代新銀　三十六匁八分

備前米　代同　三十七匁四分

中國米　代同　三十二匁八分

享保十三戊申年、今四月日光御社參、八月攝・河幷伊勢路・江戸關東筋、風水ノ災コレ有トイヘドモ、西國筋都テ平穩ニテ豐熟也、コレニ依テ米價賤ク大抵去ル未年ニ同ジ、尤昨未年江戸ヨリ御下知トシテ於二大阪一御爲替御用米會所ヲ御免被二仰付一

御書附

一　今度大阪御藏米爲替御用、中川淸三郎・川口茂右衛門・久保田孫兵衞と申者共へ、被二仰付一候事

一　諸大名衆大阪に而拂米入札之節、落札之買人より、米壹石に付銀貳分宛口錢出させ、壹分者右三人之者共方へ請取、壹分者當地米仲買之者共へ令二割符一筈に候之間、落札之買人共、其段相心得無レ滯可二

差出ㇾ候事

一　大名衆拂米之內、先納米抔と名付紛敷不ㇾ仕、口錢一切ぬけ不ㇾ申候樣可ㇾ仕事

一　於ニ江戸一爲ニ御替一米、當閏正月より、三人之者御藏へ相□候間、口錢も閏正月より商賣有ㇾ之分、三人之者へ可ニ相渡一候事

一　閏正月より口錢貳分之內、壹分は仲買手前に殘し、壹分は三人之者へ相渡し可ㇾ申候、會所出來る三月より貳分宛三人之者へ相渡し、內壹分は每月米會所より仲買共へ割符致し渡し方候筈に候之事

一　仲買之人數三人之もの共、相改札相渡し候筈に候、惣而仲買米屋共、右三人之者へ相對いたし、相庭相立候之事

一　米會所堂島永來町鹽屋庄次郎屋敷に而、三月五日より商賣仕旨に候間、此所へ仲買共外之米商賣之もの共、相集り可ㇾ致ニ商賣一候、右場所之外に而、相庭相立候儀望仕間敷候事

享保十三申年二月

右ノ通被ニ仰渡一、今ノ堂島相場ト云ハ、其頃迄聢ト御免ノ場所ニ無ㇾ之、未草昧ニシテ不定ナリ、急度場所御免ト云ハ玆ニ始ル、然レドモ米商ノ者歸服セズ、種々浮說有ㇾ之、依ㇾ之又米價モ自然ト不ニ引立一、口錢等滯リ屢口論不ㇾ絕、相庭モ不景氣ニテ相續ナラズ、依ㇾ之今申年四月右會所相止メラレ、米賣買ノ儀以前會所無ㇾ之時ノ通ニ可ニ相心得一旨被ニ仰渡一（御觸略ス）

享保十四己酉年十二月

廣島米　代新銀　二十七八匁

備前米　代同　二十八九匁

中國米　代同　二十三四匁

錢　代同　十二匁位

享保十五庚戌年十二月

廣島米　代新銀　二十九匁八分

備前米　代同　二十八匁六分

中國米　代同　二十二匁二分

近年打續米價下落ニテ、東西諸侯始メ御旗元困窮難澁ニ付、米價引立ノ爲メ、當正月江戸商人ノ米一萬三千石御買上ゲコレ有、玆ニ於テ一時ニ相庭五六匁上ル、又近年米價下直ニ付、諸奉公人給金其外諸直段引キ下候ヤウ町觸アリ、今六月京都西陣大火、又近年綿上作ニテ、繰綿銀百目ニ付、掛目十貫目ヨリ十四五貫目、前代未聞ノ直段ナリ、仍テ農民困窮ニイタル、白米小賣ノ分錢百文ニ三升五合ヨリ四升、又去ル寅年諸家ヘ仰出サレ候上ゲ米ノ儀、當四月十五日、來亥年、御免ノ趣仰渡サル、則其文左ニ記ス

百歩一上ゲ米ノ事

一　御勝手向不調ニ付、近年上ゲ米被二仰付一、御用被レ辨御機嫌ニ思召候、右上ゲ米之儀、今年御用捨被レ遊度思召候得共、未御勝手向難二相調一之旨役人共申ニ付、來年より上ゲ米御用捨被レ遊候、依レ之來年より參勤交代之儀前々之通たるべく、來年ゟ參勤之面々ハ、當秋參勤之時節可レ被二相窺一候、其節可二申置一候

右之趣來年代り之面々も、來年より前々之通たるべく候

享保十五年四月

右上ゲ米ノ事古代モ例アリ、日本後紀ニ云フ、「弘仁十一年十一月、詔曰、弘仁八九年間水旱不レ登、府庫稍耗、因二公卿詳議一、暫割二五位已上封祿四分之一一均二公用一、如今五穀頗熟、支用可レ均、宜下封等數復中之舊例上」ト云々、豐凶ニヨルトイヘドモ、其趣ハオナジ、昨今別テ米價下直ニテ、士民迄却テ迷惑ニ及ブ程ノ事故、今年ヨリ諸奉公人、給金等モ引下候樣被二仰渡一、諸侯方近來米價下直ニヨリ取入銀モ薄故、又金銀ノ作廻差支難澁セラル、依レ之先年ヨリ金銀札遣ヒ停止有レ之、國々モ今年ヨリ金錢融通ノタメ札遣ヒ免許セラル

一　金銀錢札遣ひ申候所、先年札遣ひ相止メ候得共、向後ハ前ニ札遣ヒ仕來リ候、所々勝手次第可レ仕候

但札遣ひ致候はゞ、御勘定奉行へ可ニ相達一候

今年去未年被ニ仰渡一候主意通ノ趣ニテ、江戸町人冬木善太郎・杉田新兵衛・伊勢屋萬右衛門・柾木平四郎・冬木彦六ト云者ヘ米會所被ニ仰付一、此度ハ北濱一町目天王寺屋善兵衛家守同平助屋舗ニ米會所相建、當六月朔日ヨリ賣買始ル、此場所ヘ仲買其外米商ノ者集リ、此場所ノ外ニテ相場相立候儀堅停止セラル、然レドモ人氣服セズ、口錢等滯リ、依レ之無レ程右爲レ替御用米相庭モ相止ミ、今ノ堂島相庭所ヘ引移ル

享保十六辛亥年正月

廣島米	代新銀　二十九匁八分
備前米	代同　二十八匁四分
中國米	代同　二十二匁九分

右ノ通年々米價下落ニ付、士民迷惑ノ間、米價引立ノ御趣意トシテ、三月二十八日江戸表ニテ、商人共ノ米殘ラズ御買上ゲコレ有、其商人ノ土藏ニ入レ置、公儀ヨリ封印ヲ付ラレ、又老練米商ノモノ十八人召出サレ、米價引立ノコト談問セラル、其頃廣島米一石三十一匁前後、中國米二十五匁前後、コレニ依テ東西ノ諸侯ハ勿論、小祿ノ士ニ至ルマデ、銀廻リ不融通ニテ迷惑ニ及バレ、市民ハ米價賤シキニヨリ家業ニ怠リ、或ハ武家方ヘノ用達銀等モ滯リ、自ラ世上一統ノ難儀タルニヨリ、米價引立ノ

タメ、今亥年江戸・大阪市中ノ富民ヘ、分限ニ應ジ買米仰付ラル、但シ此一件別記小册アリ、依テ之ヲ略ス、今年東西諸侯知行二十萬石以上ノ面々ヘ買米仰付ラル、然ル處四月江戸大火コレアリ、其後何ノ御沙汰ナクシテ止ム

當十二月

廣島米　　代新銀　四十二匁五分

備前米　　代同　四十目五分

中國米　　代同　四十一匁

尤市民ヘ買米仰付ラル、事ハ、當御代始メテ也、古代ニモ此事アリ、日本後紀ニ云、「弘仁十年二月戊辰日、公卿奏曰、頻年不レ稔、百姓飢饉、倉廩空盡無ニ物賑廩一、窮民臨レ飢必忘ニ廉耻一、臣等伏望遣ニ使畿內一、實ニ錄富豪貯一、借ニ貳困窮之徒一、秋收之時、依レ數俾レ報、然則富者無ニ失財之憂一、貧者有ニ念命之歡一、許レ之」ト云々、豐凶雖レ異、買米御用金ノ意ニ同ジ、右買米仰出サル、ニ因テ、前文ノ通當十二月ニ至リ、米價騰踊ス

享保十七壬子年正月頃ハ

廣島米　　代新銀　三十九匁七分ヨリ四十目

備前米　　代同　卅八匁五分ヨリ卅九匁

中國米　　代同　卅六匁三分ヨリ三十七匁

然ル處今年七月初ヨリ、西國・中國・九州筋四國田畑蟲付キ不熟凶作ニヨリ、當九月以後ハ一時ニ米價貴クナリ、米一石代新銀百卅目ヨリ百五十目位、其後諸國ヨリ追々入津米コレ有、依テ米價下落シ、十二月頃ハ

廣島米　　代新銀　七十六匁ヨリ八九十目

備前米　　代同　八十一匁五分ヨリ百目

中國米　　代同　七十三匁ヨリ八九十目

大豆　　代同　六十七八匁

小豆　　代同　五十目位

當年西國筋都テ大凶作ナレドモ、東北國々豐穗ニテ、天ノ命助ヲ蒙リ、凶作ノ國々モ士民安堵ス、右ノ通西國筋ハ田畠不熟ニテ米穀數ナク、又士民トモニ飢渇ニ及ビ、道路ニ倒ルヽモノ其數ヲシラズ、西國・四國・九州大小ノ諸侯、米穀拂底ニテ士民ノ撫育モ出來難ク、公務ヲ缺テ迷惑ニ及ブ、コレニ依テ公儀ヨリ拜借金ヲ仰付ラレ、猶又大阪始メ公領ノ市民餓死スル者ハ、現米ヲ以テコレヲ救ハル、亦市中ノ富民ヨリ米錢雜物迄ヲ出シ飢民ヲ救フ、但シ別記小冊有、依略之然レドモ去亥年市中ノ買持米コレ有ニ付、大抵八九月ノ頃迄ハ窮民モ可ナリノ取續キセシトコロ、追々米穀拂底ニテ、十月後ニ至リテハ飢死ス

ルモノ多シ、茲ニ因テ公儀ヨリモ東國・北國ノ領主地頭ヘ下知セラレ、數萬ノ米穀ヲ大阪又ハ西國筋ヘ積出サル、尤東北ノ國々昨今年ハ作方豐熟ニテ、當九月十月ノ頃ヨリ十二月迄ノ登リ高左ノ通、コレニ依テ米價漸ク下落ス

北國登リ米凡二百三十萬石

東國登リ米凡八十七萬八千石

右登リ高大數トイヘドモ、西國・四國・九州筋ヘ積下シ、此年冬大阪堂島有米勘定高十八萬千七百石トイヘリ（但シ舊記ニ、此年大阪有米高二十九萬二百俵トアリ、此米三ッ俵ニシテ八萬石餘ノ有リ米ナリ、又八萬九千七百石トモ云フ）享保子年、西國ノ飢饉トテ、後世人口ニ殘ル程ノ凶作ナリ、祖父母存生ノ中ニテ、困窮ノ趣毎度咄サレタリ、コレニ依テ米穀ヲ大切ニ貴重シ、一粒トイヘドモ麁末ニセズ、毎暮餅ヲ過分ニ搗セ、春ヨリ夏ヘカケテ貯ヘオキ、或ハ葛根・蕨ノ粉ニ至ルマデ、平世是ヲ無益ニセズ、食料トナルベキモノハスベテ備ヘモフケシナリ、是等其時ノ難澁ヲ忘レザル故生涯覺悟セリ、此後ハ農民モ工夫ヲ懲ラシ、鯨ノ脂等ヲ澆ギ、蝗蝨ヲ去ルノ法ヲ覺エ、其餘耕作ノコトハ年ヲ追テ功者ニ成、其國々飢渴ノ扶ケトシテ、享保年後ハ西國筋多ク、唐芋ト（薩摩芋又ハ琉球芋トモ云）ヲ作リ、コレト粟・稗トヲ以テ農民ノ食料トシ、又米ノ扶トス、府下ノ士民迄モ是ニ准ジテ、國々自然ト米麥ヲ喰ヒ延バス事大ナリ、翌年ヨリ打續キ諸國豐熟ノキコエアリテ、米穀海內ニ充滿シ、廿年ハ彌米價下落シ、俸祿ノ士又迷惑セラルルニ於テ、米價引立ノ爲都會ノ士民ヘ、買持米ヲ仰付ラレ、士

民トモニ又迷惑ノ筋ニナリシカバ、又豐熟ヲ疎ンズルヤウニナル、興廢推テ知ベシ、祖父ノ云享保ノ飢饉ト云フハ、全ク前年打續キ豐熟故、米穀ヲ土芥ノ如ク賤シメシヨリ、九州•中國始メ西國諸侯難澁ニ及ト云リ、如何トナレバ享保十年ノ頃ヨリ五六年ニ至リ、年々諸國豐作ニテ米價下落シ、一石四十目ヨリ廿八九匁ナリ、コレニ依テ諸侯方金銀通用不手繰ニナリ、公私ノ辨用ナリガタク、無レ據民ヲ聚斂シ、國内底ヲ叩テ年々米穀ヲ拂出セシニヨリ、纔一ケ年ノ飢饉ニテモ備貯コレナキ故、士民ノ撫育モ成ガタク、逼至ト難澁セラレシナリ、然レバ凶作ノミニモアラズ、國々金銀不手繰ノ上ノ不熟故至テ難澁ニ有シト云リ、扨享保子年以後前文ニ云ヘル如ク、飢饉ニ懲リ頻ニ諸國開田勸農ノ術行ハレ、唐芋等ヲ初メ少シモ食料ノ扶ケトナルベキモノヲ植テ、米麥ヲ喰延セリ、然ルニ享保十八•九•廿年ニハ打續キ、諸國豐熟セシウヘ喰延セシ米麥ト、又勸農米ト年々出ルニヨリ米價下落シ士民迷惑ス、依テ米價引立ノ御趣意トシテ、市民ヘ買米仰付ラレ、或ハ米ノ定直段等ヲ仰出サル、コノ時ハ士民モ前年ノ飢饉不レ遠、恐怖ノ氣味コレ有リシ故迷惑ト云ヘドモ、騷動ニ及ブ程ノコトハナカリシ也、又仰付ラレ方モ穩ニ有リシト也、近頃ハ騷々シク人氣穩ナラズ、喧シキヤウニナリシハ寶暦年ノ御用金以後ノ事ナリ、猶其條下考合スベシ、但今子年八月六日法皇崩御　靈元院

三貨圖彙物價之部卷之七

草間直方輯錄

享保十八癸丑年正月ヨリ米拂底ニテ、價頻リニ高クナリ、加賀米百十四匁六分、淡路米百四匁五分、備前・備後米百七匁三分、依レ之市民飢餲ニ及ビ困窮セリ、依テ公邊始メ富家ノモノヨリモ、追々施行米有レ之、其中ニモ今年ノ田作ヲ危踏ミ、貪欲ナルモノモ有リテ是等ヘ又敎喩セラル

一 米高直に付於ニ町中ニ袖乞に出候體之者へ御救米被レ下、町々年寄取計、右體之者吟味之上御救米相渡候樣に申付候之所、借屋人之內當時相應に致ニ渡世ニ居候者共所持之家財等を隱し置、極貧之體に拵事をいたし、或は態と袖乞に罷出居、町々年寄家主抔に惡名を付、又は働等も致し侶々にも渡世なるべきものも病氣に僞り、家主へ米錢を貪り、事を申拵候族も有レ之旨相聞え不屆至極之儀に候、向後是等の者有レ之候はゞ、吟味之上急度咎め申付べく候、此旨町中へ可ニ觸知ニ候

丑二月十四日

然ル所今年諸國豐穗ニテ加賀米七月末六十二三匁ニナリテ、萬民安堵ス、今年十二月

廣島米　　代新銀 四十五六匁

備前米　代同　四十四五匁
中國米　代同　三十七八匁
慶長金新金　代同　五十九匁ヨリ六十一匁二分
錢　代同　十二匁位

享保十九年甲寅年、同諸國豐熟ニテ十二月

筑前米　代新銀　卅五六匁ヨリ四十四五匁位
廣島米　代同　三十一二匁四十目位又廿二三匁トモ云
備前米　代同　卅六匁ヨリ四十五六匁位

享保廿乙卯年六月、畿内始メ國所ニヨリ、風水ノ災有テ平均七歩ノ作ナレドモ、前年豐熟ニテ米穀多ク、格別直段引タタズ、然レドモ六月廿二日風雨洪水ニテ、河州枚方堤切レ、榎並八箇村々水亡高十二萬石餘、此騷動ニヨリ七月ノ頃、米一石六十目ヨリ七十目餘、十二月ニ至テハ

廣島米　代新銀　四十一匁五分ヨリ三十一二匁
備前米　代同　四十三匁五分ヨリ三十五六匁
中國米　代同　三十七匁五分ヨリ三十目

近年又豐熟打續キ米價下落ス、茲ニ因テ東西ノ諸侯幷小祿ノ士ニ至ル迄迷惑ニ及バル、依テ江戸・大阪

表ニ於テ米價定直段ノ制令ヲ出サル

覺

一　米直段次第に下直に相成、武家幷百姓難儀之事に而、町人諸職人等に至る迄、商ひ薄くかせぎ事も無レ之、世間一統之困窮におよび候間、當冬より江戸大阪米屋共、諸國拂米金壹兩に付米壹石四斗以上に買受可レ申候、大阪は米壹石に付四拾貳匁以上に買受可レ申候、若米壹石に付四拾貳匁以下に買受申においては、當十月十五日ゟ米壹石に付銀拾匁宛之運上、米買受候米屋共ゟ差出し可レ申事

但惡米は運上不二差出一、正米直段に準じ相應に買受可レ申候、萬一正米を惡米之由申紛し下直に買受候者、是又賣主ゟ急度可二申出一候、吟味之上可二相咎一事

一　當十月十五日より買受高賣渡し米高、壹ヶ月切に月番町奉行所へ書付差出し、運上は賣渡し候月より一ヶ月過に而可二相納一事

一　米壹石に付銀四拾貳匁以上に買受候もの運上に不レ及候、尤賣直段は買直段に應じ、勝手次第たるべき事

但賣直段より買直段下直に買受候者は、遂二吟味一可二相咎一事

一　右運上申付候儀此節ばかりと心得、十分に買入ざる儀共可レ有候哉、米直段宜からざる内は何ヶ年も運上可二申付一候間、直段丈夫に買上げ可レ申事

一　運上差出し候儀に付ては、萬一買入不㆑申米屋有㆑之歟、又は邪曲を以紛敷儀有㆑之においては、米賣主共ゟ早々町奉行所へ可㆓申出㆒候、吟味之上急度可㆓申付㆒候、若不㆓申出㆒候もの有㆑之、後日に相知候ものは是又曲事たるべき事

一　江戸・大阪米直段宜敷相成候而、近國より例年に替り俄に米高多く積廻申間敷事

一　米切手賣之儀も右同前に相心得、例年に替り米高多く一度に切手差出し申間敷事

一　右之通に而江戸・大阪米直段宜候はゞ、右に準じ諸國とも米直段に賣買可㆑仕事

右之通急度相心得、米賣買可㆑仕旨可㆑被㆓申付㆒候

卯十月

賣方へ申渡覺

一　當月十五日より御大名衆、大阪大藏屋敷に而入札を以御米御拂被㆑成候米高直段等、何町何屋誰方へ賣渡し候儀、藏元町人或御藏屋敷無㆑之分は、米支配人御用聞ゟ御米御拂之度每、別紙案文之通一日限に書付相認置、左之日限北組總會所へ可㆑被㆓差出㆒候

一　當月十五日ゟ諸國商人百姓町人登せ米、大阪諸問屋幷船宿ゟ、不㆑限㆓多少㆒賣拂候米高・米直段・何町何屋誰方へ賣渡し候儀、一日限に別紙案文之通書付相認置、本人印形に而左之日限北組總會所へ可㆓差出㆒候

但惡米賣渡し申儀も、右同前に可ニ相心得一候、右書付持參日限之事下略

右ノ通被ニ仰渡一候所、米屋トモ申立候ハ上下ノ米直段ハ相分リ有レ之候得共、國々ノ内米ニモ上・中・下三段有レ之、其中下々米ハ差除キテ三段トタテ候テ、此中米ハ上米ニモ買受ガタク、下米ニテモ無レ之、然レバ中米ヲ買受候テ、上米ノ直段ニハ買受ガタク、是非上米ヨリ直段劣リ候儀勿論ニ御座候、然ルヲ上米ニ引キアテ、直段安ク買受候トテ、運上差出シ候テハ甚迷惑仕候故、中米ノ儀ハ上下ノ米ノ直段ノ内ヨリ、其米ニ應ジ賣買致度、左候得バ中米買受候儀ハ、上米ヨリ直段劣リ候テモ此運上差出シガタキ赴、歎訴有レ之所尤ニ被ニ思召一、願通被ニ仰付一

申渡し之覺

大阪にては上米壹石に付銀四拾貳匁以上、下米は壹石に付三拾九匁以上、中米は上米下米直段之間に賣買可レ致候

卯十一月十五日

右ノ通被ニ仰渡一候所、米定直段ニ買受、自然春ニ至リ又下落シ損失可レ有レ之哉、又定直段之是非後々ハ可ニ相止一、然レバ今損德不定ノ米ニ思ヒ入ヲ以テ買込ニハ不レ及ト、米屋ハ勿論市民迄モ危踏、入用米ノミ買入候事故、米ノ引ケ方無レ之、米不捌ニテ彌直段引キ立ツベキ時勢無レ之、依レ之又江戸ヨリ御下知トシテ制令出ダサル

覺

一　米賣買之儀來春に至り米直段下り可レ申哉、又は元直段之定め、後々は相止み可レ申哉抔とあやぶみ、例之通米買込不レ申趣相聞え不屆千萬に候、たとへ米捌け方不レ宜候ても、日々入用程は無レ滯相捌け候、然ば定直段相止み可レ申事、曾以無レ之に決定候事

一　先頃元直段極候節、最初壹石四斗に極置、米屋共セリ立買込候はゞ、當暮來春に至りては壹石貳三斗位に可ニ相成一哉と、何幾評議之上右之通に候所、米屋共例之通に買込不レ致候、如レ此候ては次第に入船之米も差支可レ申候、迚も今迄之趣にてははか〲敷買立可レ申樣子に不ニ相見一候間、十二月六日より上米壹石三斗五升以上、下米壹石四斗五升已上之直段に相定め、夫より段々來春中には壹石貳斗以上に可ニ相極一候、尤直段上り候節之前日可ニ相觸一候條其旨存べし、若此已後米屋共精出し、格別俵數多く買込自ら直段上り候はゞ、其節之直段を元直段に用ひ、勝手次第直段致し賣買候樣可ニ申付一候

一　例年夏中。江戶•大阪•北國•奥州筋之米入津候、今年豐年にて來春中近國之米過半不ニ相捌一内、右遠國之米入津候ては差支可レ申と令ニ評議一候、左樣無レ之樣追て可ニ申聞一候事

右之通に候間來年中には石壹兩にも可レ及條、其趣相心得ふみ込賣買可レ致候事

享保廿年卯十二月

申渡之覺

別紙御書付之通に付、大阪にては上米壹石に付銀四拾三匁五分已上、下米壹石に付銀四拾目以上、中米は上米・下米直段之間にて賣買可ㇾ致候事

卯十二月六日

淡　路

日　向

覺

一　米直段御定ゟ下直に致ニ賣買ㇾ事有ㇾ之間敷候所、近國近在へ人を遣し買込候類有ㇾ之候

一　酒屋共右同様之事

一　仲仕米と名付賣米又は預け米に致し置、御定直段ゟ下直に賣買仕候者有ㇾ之趣相聞ㇾ候間、遂ニ吟味ㇾ急度可ニ申付ㇾ候、尤人を廻し可ニ相改ㇾ候間、此旨三郷町中可ニ相知ㇾ事

一　米問屋共地問屋共引受候米、御定直段ゟ下直に賣出候類も有ㇾ之趣風聞有ㇾ之不屆之事に候、右體之儀堅く仕間敷候、相背者有ㇾ之候はゞ、急度曲事可ニ申付ㇾ候

一　廻船宿之者廻船運賃米と名付、米俵數引受候段相聞ㇾ候、運賃米之外米引受候儀堅仕間敷候、萬一紛敷米引受候者有ㇾ之候はゞ、吟味之上急度可ニ申付ㇾ候

卯十二月

享保廿一丙辰年正月四日

廣島米　代新銀　四十五匁六分
備前米　代同　四十八匁三分
中國米　代同　四十目八分
金　代同　五十七匁六分
錢　代同　十二匁一分

然ル所米價定直段ノ制令アリ、依テ當正月九日ヨリ諸國ニ米相場コレナク、唯上•中•下米ノ位ヲ以テ直段ヲ定メラルヽニ付、諸藏米上•中•下ノ位ヲ此度相極メラルヽ、則左ニ記ス

上米ノ分
五畿內　播磨米　備前米　備後米　淡路米　中國米　豐前米　已上

中米ノ分
肥後米　筑前米　筑後米　讃岐米　廣島米　已上

下米ノ分
加賀米　出雲米　北國米　土佐米　豐後米　肥前米　薩摩米　已上

大抵右ノ位ヲ定ム、然レドモ年々水旱ノ難有リテ、出來•不出來コレ有トイヘドモ、其國米ノ位高下右ノ如シ、此度米ノ甲乙ヲ以テ猶又直段ヲ定メラルヽハ

上米四十八匁　　中米四十五匁

下米四十二三匁　　下々米卅八匁五分

右ノ通定直段ノ賣買ニテ別段諸國米相場ト云コトナク、濱方帳合ノ賣買ハ諸藏ノ內建テ米ヲ定メ、是ヲ以テ賣買帳合ノ高下ヲナス、二月廿五日出雲米ヲ以テ帳合始ル、是ハ下米ニテ內實六斗八升トシ、帳合三十一匁六七分、三月ヨリ加賀ノ下米ヲ中米ト定メ、內實九斗ニシテ帳合四十二匁、如レ斯上・中・下ノ米ヲ以テ帳合ノ賣買ノミ、此事ハ其業ニアラザル故、委シクハ知ラズ、今年五月中旬正米

加賀米　但シ實九斗　　代新銀　二十四五匁

中國米　　代同　二十一匁

右米價下落ニ付、又士民ノ煩トナル、玆ニ因テ同年大阪市民ヘ買米仰付ラル、先格ヲ以テ大阪三鄕町町幷一己ノ買持米等モコレ有リ、尤近來打續キ米價下落ニ付、士民困窮多キ故、米價引立ノ仕法等種種ト御勘辨コレアリ、江戶・大阪トモ市中ヘ買米仰付ラレ、彼是ト御世話コレ有トイヘドモ、兎角米價引立ベキ御仕法モコレナク、此上モ强テ市民ヘ用金等仰付ラレ候テハ、猶又難澁ニ及ビ、市民ノ煩トナリテハ、又三都ノ騷動トナリ、下民衰微ノ甚ニモ相成ベキヤ、「令苛則不レ聽、禁多則不レ行」ト種々勘考セラレ、去ル寅年ヨリ大阪市民舊家ノ者ヲ奉行所ヘ召サレ、米價引立ノ事ヲ談問セラレ、ソノ子細銘々封書ヲ以テ言上スベキ旨令セラル、孟子ニ云、「左右皆曰レ賢未可也、諸大夫皆曰レ賢未可也、國

人皆曰レ賢、然後察レ之、見レ賢焉、然後用レ之

大鏡に曰、むかしさかしき御門の御政の節は、國の中に年老たる翁をむなやはとめしたづね、いにしへのおきての有りさまをたづね問はしめ玉ひてこそは奏することを聞しめして、世の中政はおこなはしめ給ひけれ

トアルニ同意ナラン、是ニ因テ銘々封書ヲ以テ言上ス、（但シ、此時召サルル者兩替屋米問屋凡八九人也、猶金之部十二卷ニ出）國家ノ經濟ハ賢大夫トイヘドモ、微細ニ下情ヲアキラメ知事ハカタシ、依レ之田野ノ事ハ老農ニ問フニシクハナシ、市商ノ事ハ老賈ノ者ニ依ラザレバ其情態ヲ得ズ、然レドモ其人ヲ知ラザレバ必欺カルル事有リ、表ニ忠節ヲカザリ、內心ニ私欲アル者ハ身ノ爲ニ事ヲ謀リ、或ハ身ヲ立テ名ヲ顯サントスル類アリテ、上ヲ欺ク事アリ、是等ニ諮問アル時ハ、下情ヲアヤマリ其害又大イナリ、依テ老農老商トイヘドモ、舊家貞實ノ富民ニアラザレバ問フ事ナカレ、事ハ以レ密成、語ハ以レ泄敗、必人ヲ知ラズンバ有ベカラズ、右諸問封書數通ヲ以テ言上ニ及ブ、然ル處今年五月改元有テ元文ト云、今ノ文金銀出來テ、（但シ金部第十二卷銀ノ部第十九卷ニクハシク出ス、依テ略レ之）十月二十二日ヨリ、諸物文字金銀ヲ以テ交易ノ相場ヲ定ム、米定直段ハ五月ニ止メラル

慶長金新金　代文銀　八十六七匁

文金　代同　五十二匁九分

錢　代同　十八匁

米　代同　五十目前後

元文二丁巳年正月

中國米　代同　四十二匁八分

筑前米　代同　四十五匁三分

廣島米　代同　四十五匁五分

金　代同　五十三匁五分

錢　代同　十七匁七分

銀百目ニ付　繰綿三貫六七百目

但シ今年ヨリ皆文銀ニテ相庭ナレバ、何銀トイハズ、今四月十一日仙洞崩御中御門院

元文三戊午年正月

中國米　代四十七匁七分

筑前米　代五十二匁五分

廣島米　代四十九匁八分

但シ今年ハ東西國々不熟ニテ、六七月ノ頃ヨリ米價高直、當十二月

中國米　代七十六匁三分

筑前米　代八十七匁八分
廣島米　代八十七匁八分
元文四己未年十二月
中國米　代五十八匁五分
筑前米　代六十七匁九分
廣島米　代六十六匁
元文五庚申年、五畿内其外東西ノ國々洪水コレ有リ、作方不熟ノ由ニテ、五六月ヨリ米價高直ニナリ、
今年十二月
中國米　代七十目七分
筑前米　代八十二匁一分
廣島米　代七十八匁一分
元文六辛酉年、今年三月寛保ト改元有、十二月
中國米　代五十七匁四分
肥後米　代七十一匁五分
筑前米　代六十六匁七分

寛保二壬戌年、今年七月下旬ヨリ八月ニ至リ、東國地震・大雨・洪水・西國筋無難、十二月

肥後米　代六十五匁
筑前米　代六十一匁四分
中國米　代五十一匁八分
金　代六十二匁二分餘
錢　代十五匁八分

寛保三癸亥年、昨戌年東國不熟ニテ、今年有米少シ、十二月

肥後米　代七十三匁五分
筑前米　代六十九匁二分
中國米　代五十九匁

寛保甲子年、今年二月延享ト改元、十月ノ頃

肥後米　代七十五匁五分
筑前米　六十九匁六分
廣島米　代六十六匁五分
中國米　代五十八匁六分

今年九月、江戶・大阪市中ヘ御買米仰付ラル、是近年武家方難澁ノ趣ニ付、御救トシテ米價引立ノ御仕方ト聞ユ、（但此時ノ一件別記小册ニ記ス、依テ略）當年ハ格別米價下落ニテモコレナク、全ク武家方御救ヒノ爲メナルベシ、然レドモ臨時ノ事ニテ下民服セズ格別ニ引立ズ、則十二月仕舞相庭

肥後米　代五十九匁四分
筑前米　代五十七匁八分
廣島米　代五十四匁五分

延享二乙丑年、今年正月相場少シ高下アレドモ、凡前年ノ通リ也、四月、市中買米賣拂ノ儀御免仰出サレ候處、作方不熟ニテ米價引立、十二月

肥後米　代七十七匁五分
筑前米　代七十二匁七分
廣島米　代六十九匁七分
金　代六十二匁前後
錢　代十三匁ヨリ四匁餘

延享三丙寅年、今夏諸國旱損アリテ、十二月

肥後米　代七十三匁一分

筑前米	代六十七匁五分
廣島米	代六十四匁一分

延享四丁卯年、今八月攝・河幷關八州洪水コレ有リ、其上前年諸國不作ニテ米穀拂底ニ付、九月下旬ヨリ一時ニ相庭上リ、十二月

肥後米	代七十一匁五分
筑前米	代六十八匁二分
廣島米	代六十四匁三分

延享五戊辰年、今年七月寛延ト改元

肥後米	代六十七八匁
筑前米	代六十四五匁
廣島米	代五十九匁六十目前後
金	代六十目前後
錢	代十三匁七八分

寛延二己巳年十二月

中國米	代五十四匁二三分

筑前米　代六十二三匁
廣島米　代六十目前後

寛延三庚午年
中國米　代五十一匁七分
筑前米　代六十目三分
廣島米　代五十七匁七分

十一月加州ヨリ古金ノ賣拂コレ有、俄ニ金相庭引下ル
金　代五十八匁六七分
錢　代十三匁四五分

今年四月二十三日仙洞崩御（櫻町院）

寛延四辛未年、今年十一月寶曆ト改元
筑前米　代五十五匁二分
廣島米　代五十二匁八分

今年六月廿日大御所吉宗公薨（奉レ稱ニ有德院一）

寶曆二壬申年十二月

筑前米　代四十二匁二分
廣島米　代四十三匁一分
寶暦三癸酉年十一二月
筑前米　代三十八匁ヨリ四十一匁四分
廣島米　代三十五六匁ヨリ三十九匁四分
金　代五十九匁一二分
錢　代十三匁一分三厘
寶暦四甲戌年十二月
筑前米　代五十三匁五分
廣島米　代五十二匁二分
肥後米　代五十七匁五分
寶暦五乙亥年、五月・六月ノ頃、九州中國幷北國・加賀・越前・出雲・但馬等霖雨洪水ニテ凶作多ク、出羽・奥州邊ハ半作、八月、西國大風コレアリ、コレニ依テ九月ニ至リ追々米價高直ニ成、十二月
筑前米　代八十四匁一分
肥後米　代九十三匁五分

廣島米　代八十一匁三分
金　代六十一匁四分
錢　代十四匁五分
寶暦六丙子年正月、凡相庭前年ト同ジ、西國・九州幷東國ノ國々ハ大抵七八歩ノ作ノ處、五畿內・攝・河ハ勿論、美濃・近江邊、八月頃迄旱ニテ萬民雨ヲ祈ル、九月ニ至リ大風雨コレ有リ、一時ニ田畑水亡シ農民甚痛ム、十二月
筑前米　代六十八匁六分
肥後米　代七十五匁二分
廣島米　代五十六匁一分
寶暦七丁丑年、諸國八九歩ノ作、十二月
筑前米　代五十八匁
肥後米　代六十四匁七分
寶暦八戊寅年十二月
筑前米　代六十六匁
肥後米　代六十八匁五分

寳暦九己卯年十二月

肥後米	代五十五匁八分
筑前米	代五十一匁八分
廣島米	代四十九匁二分

寳暦十庚辰年十二月

肥後米	代五十二匁
筑前米	代五十匁三分
廣島米	代四十三匁五分

寳暦十一辛巳年正月

肥後米	代五十三匁四分
筑前米	代五十一匁
廣島米	代四十六匁一分

同年五月

加賀米	代四十七匁
肥後米	代五十目五分

筑前米　代四十七匁八分

右ノ通近年米穀下直ニ附士民迷惑ニ及ブ、コレニ依テ米價引キ上ゲノ御趣意トシテ、三枝帶刀殿・小野左大夫殿登阪アリテ、極月大阪市民へ御用金仰付ラル、（但シ別記小冊アリ、依テ略ス、）此御用金ノ儀始メテノ事ユヱ、市民ノ分限內審夫々問合等コレ有トイヘドモ、元來商家ハ表ヲ莊リ外向ノ人氣ヲトリ、商業手廣キ樣子ヲ構フルコトナレバ、其內證ハ知ルベカラズ、依テ其分限不相應ノ御用仰付ラレ、殊ニ月迫ニ及ビテノ事ニテ市民迷惑ス、諸侯方ノ辨用諸國ノ貨物金銀ノ取引迄モ一時ニ斷絕シ、俄ニ儉約吝嗇ニ陷入下民ハ勿論一統ノ難儀ト成、其騷動大方ナラズ、コレニ依テ諸貨物不捌ケニテ、却テ米價ノ引立ニハナラズ、十二月下旬ノ相庭筑前米四十五匁二分五十目前後、廣島米三十九匁四十目前後ニテ愈下落ス、是不融通ヨリ起リテ、金銀ノ位貴クナリ、米ノ位彌賤シ、又諸家方ノ仕送リヲ始メ、諸國貨物ノ取捌キモ一切ニ相止、市町ハ買米ニテ迷惑ニ及ブ、又御用務リ難ク斷リニ及ビ、咎ヲ蒙ムル者等アリテ萬事必至ト差支前代未聞ノ騷動ナリ、今年六月十二日大御所家重公薨御（奉二稱淳信院一）

肥後米　代五十四匁五分

筑前米　代五十五匁

廣島米　代四十五匁

中國米　代四十二匁五分

備前米　　代四十七匁五分

右ノ如ク相替ラズ米價下落シ、市中御用買米ノ功ナク、府内一統陰氣ニテ、諸貨物交易等相止ミ、下民衰微シ難澁大方ナラズ、全ク御用金ニテ金銀ノ不融通ヨリ起ル、然ル處當正月下旬ヨリ御用相止ムト風說コレアリ、俄ニ相庭引立、正月十九日ヨリ廿九日ニ到リ、筑前米六十六匁ヨリ帳合米七十八匁ニ至ル、二月下旬御用相止ミ、其以後六十目前後、夏中九州・西國邊旱損ニテ不熟、コレニ依テ十月以後追追ト高直ニ成リ、十二月

肥後米　代七十一匁七分　筑前米　代六十目八分

廣島米　代五十八匁六分　金　代六十一匁九分

錢　代十五匁五分九厘

米穀ノ豐凶ハ天地自然ニテ、人力ノ及ブ處ニアラズ、天ニ私ナク地ニ依怙ナシ、是旱雨トイヘドモ、天地氣化ノ變ニテ、又萬物盛衰陰陽ノ消長皆定理有リ、然レドモ相場ハ衆人陽化ノ私ヨリ起リ、自然ト高下有ル事ニテ、陰氣ニテハ引立難シ、人氣服セザルニ無理ニ高下アラセントシテハトヽノハズ、萬物定理有リテ人天地ノ理ニ反スレバ、天地亦人ニ反ス、豐熟打續ク時ハ、士民共ニ悅ブベキ事ナルヲ、米價ノ下落ニ及ブヲ以テ人欲發シ、何トナク豐熟ヲ疎ンズル樣ニナリテ、天又其罪ヲ憎ンデ、遠カラズ凶ヲ以テシメス、其時士民又豐ヲ祈ルトイヘドモ、天地之ヲウケズ、凶年續キテ人民ヲ害ス、唯天

然ヲ守リテ人欲ヲ押ヘ、常ニ盛衰ノ道理ヲ考ヘ、能々コレヲ覺悟スベシ、商賈ノ道ハ能貨殖スルヲ以テ勤トス、然レバ理屈ヲ放レテ道理ニシタガフコトヲ工夫スベシ、此道理ト理屈ト同意ノ樣ナレドモ、儉約ト吝嗇トコトナルガ如シ、理屈ノ理ハ筋目ナレドモ、屈ハカヾムニテ思慮ノ外ヘ轉ジ、脇道ヘ枉ル心アリ、人々才智ノ分量ニシタガヒ、我勝手ノ方ヘ引付ケ、自然ト枉リテ無理ヲ行フ故、人服從セズ、却テ物ゴト窮屈ニテ損アリ、道理ニ從フ時ハ却テモノゴト潤大ニテ益アリ、易ノ損益ニ「凡益之道與レ時偕行、傳ニ天地之益无窮者理而已、聖人利二益天下一之道、應レ時順レ理、與二天地一合、與レ時偕行」又孟子ニ「天時不レ如二地利一、地利不レ如二人和一」ト云リ、天ノ時地ノ利、相應ジテ米穀生熟スルモ、人ノチカラヲカラズシテハナリガタシ、天ノ時地ノ利トイヘドモ、人和ノ賣買ナクテハ用ヲナサズ、相庭ノ高下モ天ナリ、時ナリ、是ヲ動サントスルハ人ノ智ニアリ、智ニ道理アリ理屈有テ、我智ニ倒サルヽ事有リ、能勘辨スベシ、道理ハ今日ヲ正シク、夫々筋目ヲ考、稼殖シ、高利ヲ貪ラズ道ニ從ヒ金銀ヲ儲ケ富貴ニナルハ、則天ヨリ授ケ玉フ福ニシテ長久也、イハユル徳ヲ以テ人ニ勝者ハ昌、力ヲ以テ人ニ勝者ハ亡ト云ニ同ジ、理窮バ不時ノ儲ケアリテ、富貴身ニ餘ルモ、又金銀悖リ出デ終ニ衰微ス、道理ト理屈トヲ能考フベシ、道者須臾モ離ルベカラズ、離ルベキハ道ニアラズ

今年七月廿一日皇帝崩御桃園院

三貨圖彙物價之部卷之八

草間直方輯錄

寶暦十三癸未年十月

肥後米　代五十七八匁ヨリ六十三匁三四分

筑前米　代五十五匁餘ヨリ六十目餘

金　代六十二匁ヨリ六十三匁位

錢　代十五匁二三分ヨリ六匁位

今九月三日、五畿内•西國筋大風雨アリ、併シ五穀實入後ニテ、格別米價高下ナシ

寶暦十四甲申年、今六月明和ト改元、十二月

肥後米　代五十六匁五分

筑前米　代五十九匁八分

今年正月朝鮮人來朝

明和二乙酉年十二月

肥後米　代六十四匁九分
筑前米　代六十三匁七分
今年四月大神君百五十年御神忌
明和三丙戌年、當年氣候宜シカラズ、六七月ノ頃國々風水ノ患アリ、然レドモ昨酉年豐熟ニテ、米價引立ズ
肥後米　代六十一匁八分
筑前米　代六十目五分
金　代六十二匁七分ヨリ三匁六七分
錢　代十五匁四分ヨリ八分
明和四丁亥年、今年尾州・美濃・三州邊、七月頃洪水コレ有、十二月
筑前米　代六十九匁
肥後米　代七十一匁ヨリ三匁
明和五戊子年、五月ノ頃五畿內・江州・丹州邊洪水、七月、諸國風雨コレ有、十二月
筑前米　代七十三匁八分
肥後米　代七十六匁二分

今十一月、江戸ニオイテ眞鍮四文銭初メテ鑄ラル、是ヨリ次第ニ銭價下落ス

明和六己丑年、今年東國筋八月大風雨コレ有、十二月

筑前米　代六十八匁七分

肥後米　代七十一匁五分

明和七庚寅年、六月ヨリ九月ニ到リ、諸國大旱、七月廿八日夜、北方ニ赤キ雲出丹ノ如シ、今年國々旱損多シ、然レドモ米價引立ズ、當年ノ旱ハ老農モ前後覺エズト云ヘリ、コレヲ以テ思ヘバ旱ハ格別農作ノ害ナラズ、唯怖ルベキハ風雨洪水ノ難ナリ

肥後米　代六十九匁

筑前米　代六十五匁九分

金　代六十六匁七分ヨリ七八匁

錢　代十三匁四分ヨリ八分

今年仙洞御所御普請コレアリ、東西ノ諸侯方五人程ヘ御手傳仰付ラル、コレニ依テ金高直ナリ、但一昨子年十月、新穀相庭筑前米六十三匁一分、肥後米六十四匁ノトコロ、大阪有米無レ數ノ趣ヲ以テ、種種ノ風說ヲ申唱ヘ、十二月ニ到リ、筑前米七十四五匁、肥後米六十六七匁、翌丑年十月、筑前米七十一二匁ノ處、同月廿日頃六十三四匁、十一月上旬、又七十二三匁ニテ、高下平等ナラズ、諸國ノ商人共

亦私ノ差略ヲ以テ、種々ト高下ヲナシ、公儀御年貢銀納等ノ相場モ、國々高下不定ニ付、明和七寅年、右體不筋ノ相庭等相立候儀不埒ニ思召サレ、大阪ハ勿論諸國地頭ノ面々ヘ仰渡サレ候趣ハ、諸國御年貢米・大豆ノ石代銀納ニ相用ヒ候相庭ノ儀ハ、毎年十月十七日ヨリ同晦日マデ、國々市場町場等ノ相場書ニ、御代官領主役人ヨリ奥印致シ差出、御勘定所ニテ御吟味ノ上相庭相極高下ハ自然ト相立候事ニ候處、國々ノ内ニハ私ノ差略ヲ以テ相庭書出シ候場所モコレアル趣相聞エ候、不埒至極ニ付以來相庭ノ立方疑ハシキ趣相聞エ候ハヾ吟味ノ上可レ行二重科一旨嚴シク令セラル、コレニ依テ明和七年後ハ、諸國相庭モ平等ノ趣ニナリタリ、大阪諸藏入津新米入札ノ節モ、其藏々立入ノ問屋共初札ノ視ト唱、當時ノ見込ヨリ過分ノ高直ニ入札スルモアリ、是等ハ正當ノ直段ナラズ、然レドモ商賈ノ者ヨリ何藏ノ初札ハ、何程ト諸國ヘ流布スル事故、遠國ナドハ意内ノ直段ト大キニ齟齬スル事ドモ有テ、疑惑スル事少カラズ、依テ其年十月十七日、濱方衆人ノ目當ヲ以テ、諸藏新穀ノ相庭ヲ立ルヲ以テ正當トス、相庭ノ高下ハ十目所レ視、十手ノ指サス天然ニテ公道ノ意ニヨラズ、全ク商賈精神ノ私ヨリ起リ、其道ニアラズンバ高下ハ考ヘ難シ、虵ノ道ハ蛇知ルノ俗諺宜ナル哉、夫々産業アリテ滔々タル天下ノ生民皆其道ニヨリ家産ヲ起シ、恒ニ心ナキ時ハ必我道ヲ忘レ、不實商内ノ私出ヅルモノナリ、尤恐愼スベシ

明和八辛卯年、今年四月ヨリ六月中旬ニ至ル迄雨コレナク、植付ケノ患アリ、右旱ノ間五畿内・西國邊ノ者伊勢參宮スル事夥シ、七月ニ至リ止ム、當年八九歩ノ作

肥後米　　代六十二匁五分

筑前米　　代六十三匁六分

金　　代六十八匁五分

錢　　代十三匁

明和九壬辰年、今十一月安永ト改元、二月廿九日、江戸行人坂ヨリ出火、諸侯方并市中過半燒失、明曆年後ノ大火ト云リ、コレニ依テ當三月ヨリ米價高直ニモナリヌベキ所、昨卯年諸國豐熟ニテサモアラズ、士民安穩ナリシナリ、此時江戸金一兩ニ付、凡錢五貫五百文ナリシヲ、四貫文ニナリ、白米ノ小賣百文ニ八九合、草履鞋一足五六十文ト云リ、士民ノ難澁推テ知ルベシ、今年ハ諸國トモ豐熟ナリ、然レドモ今六月屢々寒冷行ハレ、九州筋水災アリ、八月二日關東筋大風アリ、今年南鐐銀ヲ以テ二朱判初テ吹セラル（事ハ金ノ部第十二卷ニ委シク出ス、依コヽニ畧ス）

肥後米　　五月ハ　　代五十七匁ヨリ六十目

　　十一月ハ　　五十五六匁ヨリ七八匁

筑前米　　五月ハ　　代五十六七匁ヨリ六十目

　　十一月ハ　　五十四五匁ヨリ九匁

中國米　　五月ハ　　代四十九匁ヨリ五十目

十一月ハ　四十六七匁

廣島米　五月ハ　代五十三五匁

十一月ハ　五十目

金　三月頃　代七十匁ヨリ七十二三匁

十一月頃　六十六匁ヨリ八九匁

錢　今年中大抵平均　代十三匁前後

安永二癸巳年

肥後米　五月ハ　代五十二三匁ヨリ七八匁

十一月ハ　五十目ヨリ五十二三匁

筑前米　五月ハ　代四十八九匁ヨリ五十四五匁

十一月ハ　五十目ヨリ五十一二匁

安永三甲午年、今六月五畿內・江州・播州等大風コレ有リ

肥後米　五月ハ　代四十八九匁ヨリ五十五六匁

十一月ハ　五十一匁ヨリ五六匁

筑前米　五月ハ　代四十八匁ヨリ五十二三匁

十一月ハ　五十一匁ヨリ三四匁

安永四乙未年

肥後米　五月ハ　代五十四五匁ヨリ六十目
　十一月ハ　五十目ヨリ五六匁

筑前米　五月ハ　代五十三匁ヨリ七八匁
　十一月ハ　四十九匁ヨリ五十三四匁

安永五丙申年

肥後米　五月ハ　代五十六七匁ヨリ六十目餘
　十一月ハ　五十三匁ヨリ六十四五匁

筑前米　五月ハ　代五十二匁ヨリ五六匁
　十一月ハ　五十一匁ヨリ六十目

今年四月、將軍家日光御社參、今三月・四月ノ間、諸國痲疹流行ストイヘドモ、至テ平穩成年也

安永六丁酉年、今八月肥前長崎幷九州路大風コレアリ

肥後米　五月ハ　代六十四五匁ヨリ七匁
　十一月ハ　五十五匁ヨリ七八匁

筑前米　五月ハ　代五十九匁ヨリ六十二三匁
十一月ハ　五十二匁ヨリ四五匁
安永七戊戌年、今六月肥後國大洪水、七月山城國出水コレアリ
肥後米　五月ハ　代五十一匁ヨリ七八匁
十一月ハ　五十五匁ヨリ六十一匁
筑前米　五月ハ　代五十目ヨリ五十五六匁
十一月ハ　五十一匁ヨリ七八匁
安永八己亥年、今八月奧州筋幷東海道大水コレアリ、九月下旬、薩州櫻島燃出大地震コレアリ、今十一月皇帝崩御後桃園院
肥後米　五月ハ　代四十四匁ヨリ五十四匁
十一月ハ　四十五匁ヨリ五十目
筑前米　五月ハ　代卅八匁ヨリ四十八匁
十一月ハ　四十一匁ヨリ五六匁
安永九庚子年
肥後米　五月ハ　代四十三匁ヨリ五六匁

筑前米　十一月ハ　四十五匁ヨリ八九匁

五月ハ　代卅八匁ヨリ四十八匁

十一月ハ　四十一匁ヨリ五六匁

安永十辛丑年、今二月天明ト改元

肥後米　五月ハ　代五十目ヨリ五十六七匁

十一月ハ　五十四匁ヨリ五六匁

筑前米　五月ハ　代四十八匁ヨリ五十四五匁

十一月ハ　五十二匁ヨリ三四匁

金　代五十七匁ヨリ七匁八分

但シ去ル辰年、江戸大火ニテ俄ニ高直ニナリ、七十二三匁ナリ、然ル所其後追々二朱銀ヲ吹出サレ相庭下落ス、高下ノ事ハ金ノ部第十二卷ニ出ス

錢　代

但シ明和二三年ノ頃迄、十五匁二三分ノ處、其後同五年ニ、四文錢ヲ鑄ラレ、又城州伏見ニテ銑錢ヲ鑄ラル、是ヨリ次第ニ相場下落シ、一貫文九匁七八分トナル

右安永元辰年ヨリ、天明元丑年迄、十ケ年ノ間國所ニヨリ風水ノ難有トイヘドモ、海内平均ノ豐熟ニテ

米價下直ナリ、去ル辰年江戶大火ニテ、諸侯ヨリ下民ニ到ル迄過半燒失シ、諸侯方ハ勿論下民トモ費用多ク、難澁ナルコト推テ知ルベシ、然ルニ其年ヨリ打續キ十ケ年ノ間米價下落ニテ、江戶ノ下民ハ火後ノ事ニテ悅ブベキ事ナレドモ、木材諸色ニオイテハ至テ高直ニテ、士民ハ勿論諸侯方モ甚迷惑ニ及ビ、其上米價下落ニテハ、諸侯方必至ト難澁セラルベキニ付、江戶ヲ除キ上ミ方公領ノ者ヘハ、米價引立ノ爲メ、御買米又ハ御用金等ニテモ仰付ラルベキノ處、此年間其儀ナクシテ、諸侯方借財ノ用モサシツカヘズ、穩ニ有リシハ如何ト後來不審スル者有、答テ曰、右兩御用ノ事、江戶ハ火後ノ事故仰付ラルベキ樣ナシ、京都・大阪ハ諸侯方非常ノ借財コレ有ルベキニヨリ、其道ヲ塞ギテハ却テ諸家方猶々迷惑セラルヽ故ニ、右兩御用ノ事ハ仰付ラレザルカ、年々至テ米價下落ナレドモ、萬事穩ニアリシ也、是ヲ以テ見レバ、前ニ云金銀ハ萬物融通サスルガ用ナル故、米價下落ニテモ金銀ノ融通サヘ宜キ時ハ聊モ差支ヘズ、諸侯方此十ケ年非常臨時ニ費用ノ拂金モ夥シク出、又明和六年ヨリ田沼侯執政ノ列ニテ威光强ク、自カラ物事花美ニ移リ、諸侯ハ勿論下民トイヘドモ、不益ノ金銀又悖テ出、コレニ依テ米價ノ外ハ諸物高直トイヘドモ、右ノ通金銀ノ出方多ク融通宜キ故、却テ江戶ノ火後ハ上方迄モ賑ヒシナリ、然レバ米價如何程下直ニテモ、諸物又高直ニテモ、金銀ノ用ダニ偏ヨラザレバ、上下トモニ安平也、玆ヲ以テ可レ知ト、或老人ノ云ハレキ、コレニ依テ安永改元ノ後十ヶ年ノ間ノ米價ハ、委シク記ス

天明二壬寅年、正月ヨリ五月迄

肥後米　代六十目前後

筑前米　代五十七八匁

當五月ヨリ土用中ニ至ル迄雨天續キ、江戸ハ七八月ニ入、地震屢々コレ有リ、五畿内ハ大風雨ニテ、東西國々不熟ナリ、米穀六分ノ作ニテ拂底ニ付、當五月頃ヨリ、追々高直ニ相ナリ、極月ニ到リ

肥後米　代七十五匁一分

筑前米　代七十三匁一分

金　代五十九匁前後ヨリ六十目餘

錢　代九匁五分前後

天明三癸卯年、正月ヨリ追々高直ニ相成

肥後米　正月ハ　代七十九匁八分ヨリ八十二三匁

五月ハ　七十六匁六分

八月ハ　九十二三匁

十二月ハ　九十八匁

筑前米　正月ハ　代七十七匁九分ヨリ八十目四五分

五月ハ　七十六匁八分
八月ハ　九十目餘
十二月ハ　九十二三匁

昨寅年諸國不作ニテ米價高直ニ成、コレニ依テ春以來市民困窮ニ及ビ候ニ附、米穀始メ綿・油等ニ至ル迄、過分ニ買置申間敷旨、度々制令コレアリ、且市中ノ者ヨリモ、米錢ヲ貧民ヘ施行ス、然レドモ米價益々貴ク、殊ニ當年ハ諸國共氣候不順ニシテ、五月頃冬ノ如ク寒冷行ハレ、麥不作ニテ別テ關東筋ハ、六月中旬迄、雨繁ク洪水等コレアリ、七月朔日ヨリ五日ニ到ル迄、信州淺間山燒出、近國ノ田畑夥シク損毛シ、其八九月ニ到リ寒冷强ク、關東・北國筋ハ勿論、諸國トモ五穀不熟ニテ、米價高直ニ成、江戸表ハ金一兩ニ米四斗六七升、新米五斗前後、冬ニ至リ愈米拂底ニテ、極月精麥一石ニ付銀ニテハ九十目餘、コレニ依テ市民米穀買シメ置候儀、嚴シク制令アリ、大阪米商人ノ中ニ、二十人計リ御咎ヲ蒙ル者コレアリ、京都ハ六七月ノ頃、玄米一升代二百五十文、大豆一升代百五十文、麥・蕎麥ノ類、一升百五十文、九月頃、白米一石百一匁、十月、新女院（敦禮門院）崩御、コレニ依テ御葬式濟迄鳴物停止仰付ラルベキ處、當年ハ米穀高直ニテ、下民難澁ニ及ブベキ赴ヲ以テ、普請幷渡世ノ鳴物等ハ御免コレ有リ、仁恩ノ政下民恐歡ス、今年瑕金・輕目金ヲ後藤庄三郎方ヘ差出シ、無代ニテ精金ト引替ベキ旨令セラル、尤近年瑕金・輕目金多ク相成リ、世上一統融通相滯ル故ヲ以テナリ、但シ後藤方ニテ精金ト瑕金無代ニ

テ引替候ニ付、兩替屋ノ者共へ役銀ト唱ヘ、兩替・交易・賣リ買ヒ、金一兩ニ六厘宛ノ入用ヲ掛ケ、日々賣買高ノ役銀掛リモノヲ、金座へ差出シ申ベキトノ事

一　文字金之儀、吹替以後四十年餘吹方無レ之、追年瑕金・輕目金多く相成候に付、世上差支にも及候而者難ニ捨置一事に付て、已來兩替屋共より、金座へ差出し次第無代に而直し相渡し、兩替屋共錢屋共より、金座方へ役銀爲ニ差出一候に付、是迄兩替屋之歩合請取居候上、又增步受取候之儀指免し、右兩替や錢屋共銘々商ひ高之内より金座へ役銀差出、早々增步取遣り始候樣、右兩替屋錢屋共へ申渡置候之間、兩替致候節は增步差出し可レ申候（下略、金部第十二巻ニ出ス）

右新規ノコトニテ、金錢商賣ノモノハ勿論、諸侯方江戸仕送リ金、市中日々ノ賣買ニ六厘ヅヽ、相場ノ外ニ增步掛リ、一統迷惑混雜大カタナラズ、依レ之市中內證賣買等多ク、自然ト相庭所、賣買サビシク喧シ、此役銀モ廣大ノコトニテ、一統ノ迷惑トナルニヨリ、天明七未年相停メラル、尤同年七月、奧州白川公、執政職仰蒙ラレシニヨリ、右役銀共外後藤米切手加印、鐵座・眞鍮座・春米屋・駄賣株・薪炭屋株・繰綿延賣買株・上ミ積米問屋株・金錢小貸會所ヲ始メ、スベテ近年冥加銀・運上銀等差出シ御免コレアリ、諸人迷惑トナル、諸物株ノタグヒ皆悉クサシヤメラル、其仁慈善政萬民恐歡ス

天明四甲辰年、正月中旬

筑前米　代百五匁七分

肥後米　代百十五匁七分

同六月中旬

筑前米　代百一匁

肥後米　代百十一匁三分

金　代凡前ニ同ジ

錢　右同斷

當年ハ東西國々七八歩ノ作ニテ、十月新穀ニ相成リ、肥後米七十一匁前後、筑前米七十目前後、コノタビ諸家藏米切手改ノ儀、呉服所後藤縫殿之助ヘ仰付ラレ、米切手ニ加印イタサセ、印料トシテ十石ニ付銀一匁ヅヽ、買主ヨリサシ出シ申ベシトノコトニテ、京都・大阪・大津ノ米商買ノモノヘ仰渡サル、然ル處諸家方ノ米切手ニ町人加印ノ儀ハ、一統不承知ニテ、江戸表ヘ御願ニ相ナリ、據ナク切手加印ノ儀ハ相止ミ、日々拂米高ヲ其藏元ヨリ公邊ヘ書札ヲ以テ相トヾケ、コレニ後藤ヨリ加印イタス、又濱方ヨリモ買受高ヲ其時々相屆ケ候、コレニ依テ右印料銀一匁ノ外ニ、一分三厘ヅヽ濱方入用トシテ、是ヲ又買主ヨリ出銀イタシ候コト、諸家藏米數萬石ノ米切手ニ、十石一匁ヅヽニテハ莫大ノ印料銀ナリ、コノ印料ヲ見込テ、米買主ヨリ二三匁モ下直ニ入札イタシ候故、詰リハ諸家方ノ迷惑ト成ル、加印ノ儀天明七未年正月相停メラル、今年米穀拂底ニヨリ、高直ニテ市民難澁セリ、コレニ依テ當五月御

藏玄米一石ヲ七十目ニ定メラレ市民ヘ賣渡サル、全ク窮民ヲ救ハル仁恩推テ知ルベシ、當四月下旬、白米一石百三十目餘也

天明五乙巳年、今十二月世上金銀融通宜シキタメ、江戸・大阪ハ勿論諸國御領・私領・寺社領ニテ身上宜キ者ドモヘ御用金被二仰付一、依レ之世上一統ノ迷惑ニヨリ、種々愁訴有レ之、府内一列陰氣ニテ寂シク、諸國貨物捌ケガタク、諸家仕送リ銀爲替金銀等、必至ト差ツカヘ、市中例ノ餅搗等迄モ相止ミ騷動ス、尤被二仰付一金高上納ニ不レ及、直ニ其モノヘ御借附ナサレ、公銀ノ御名目ヲ以テ、諸家方ヘ貸附申ベシトノ事、コレニ依テ今年米價卑シク、諸商買甚以テサビシ、十二月

肥後米　代六十一匁前後

筑前米　代五十五匁前後

天明六丙午年、今五月諸國御領・私領・寺社領百姓町人ヘ、左ノ通仰渡サル

一　近年金銀融通不レ宜、諸家差支在レ之趣相聞え候間、此度金銀融通之ため、左之通出金被二仰渡一候

諸國寺社山伏

宮門跡方・尼御所者相除き、其餘之分本山幷重立候社家にて取調べ、其末々之趣に隨ひ、上之分一ヶ所金拾五兩と相定め、其以下者相應之出金高、社家に而相究め、末寺觸下支配等へ可二申渡一候

諸國御領私領百姓

持高百石に付銀貳拾五匁宛

但於二大阪表一此度御用金差出し候者は、相除可レ申

諸國御領私領町人共

間口一間に付、地主より銀三匁宛

但大阪表此度御用金差出候者は、相除候積り

右は當年より來る戌年迄五ヶ年之間、年々前書之通出金銀被二仰出一候、尤從二公儀一も御金被二差出一一同於二大阪表一會所利息七朱之積を以諸家へ御貸付に致し、返濟引當之儀は、大阪表通用之米切手、幷領分之内相應之村高證文に書入、萬一相滯候節者、米切手は彼地定法之通取計、切手米相渡させ、村高は最寄御代官へ預り、其物成を以返濟の積り、勿論右出金銀之分御用相濟次第、出金銀之者共へ御戻被レ下、利息者七朱の內、會所諸入用之分引き上げ、其餘之利足右元金銀御戻し被レ下候節、是又出金銀致候もの共へ可レ被レ下候間、心得違無レ之樣、前文之通出金銀可レ致候、尤右出金銀納方之儀は、諸國寺社山伏者、銘々之出金高本寺本山に而取極め申渡候、日數廿日之內、百姓・町人前書之通申渡候趣相達し次第、是又日數廿日之內出金銀致し、來未年よりは年々正月之積りに相心得、出金銀之分、御領者其所之奉行・御代官幷御預り所、私領者領主・地頭へ差出し、夫より江戸最寄者、駿河町爲替御用達三井組・上田組二ヶ所之內へ、早々相納め、大阪最寄者彼地に而三井組は高麗橋三丁目、上田組は上

中之島町、右二ヶ所之内へ可二相納一候

右之趣、江戸より被二仰下一候條、此旨三郷町中へ可二觸知一もの也

午七月　　　　　　　　土佐

　　　　　　　　　　　備後

但シ先達融通銀仰付ラレ候町人、（但十二軒）其外此度御用金仰付ラレ候町人、居宅・掛屋敷、又無役ノヤシキ・道場・山伏・寺社屋シキ・諸藏屋シキ、其外地子・冥加等差出シ候分、又御預ケ地ノ内間口ニ掛リ候分、町年寄會所屋シキ傾城町ノ分、是等ハ追テ御沙汰コレ有赴ナリ

右ノ通仰渡サレ、江戸・大阪ニテ金銀融通會所取建ラレ、公儀御名目ヲ以テ諸家ヘ貸付仰付ラル、右市中夫々ヘ被二仰渡一候處、當春以來ヨリ雨繁ク、六月土用中寒冷行ハレ、至テ不氣候ニテ、地震等屢々多ク、五畿內・西國筋・九州邊洪水アリ、七月十一日ヨリ關東筋古今未曾有ノ大洪水ニテ、江戸新大橋・永代橋流落、兩國橋ハ無レ恙、利根川筋所々堤キレ、武・總兩國初メ都テ八州ノ田畑悉ク水亡シ、農民大イニ痛ム、御代官ヨリ御用船ヲ以テ窮民ヲ救ヒ、米飯ヲ施行セラル、今年右ノ通諸國凶作ノ上、前文大造ノ御用金等ニテ至テ諸國騷動ス、依レ之當九月十二日、諸國百姓ノ石高銀町人ノ御用金・市中ノ小間口銀、都テ出金銀一統御差止メ仰出サル、御觸等略レ之、其騷動大カタナラズ、推テ可レ知、（但右御用金内、天明三癸卯年被二仰付一融通御用ノ分ハ御糺シノ上其儘ニ差置カル、其餘市中一己ノ御用金等ハ悉ク被二差止一）今九月八日將軍家薨御（奉レ稱二浚明院殿一）今六月前文之通諸國都テ凶作ニ

テ、追々米價高直ニ成、九月ニ至リ江戸ハ金一兩ニ米五斗三四升、大阪ハ筑前米八十九匁餘、肥後米九十二三匁、十二月江戸ハ金一兩ニ米三斗五六升ナリ、依テ當冬五畿内酒造例年ノ半減造ニ仰付ラル

一　諸國酒造米之儀、元祿十丑年、定數迄は新酒寒造勝手次第にいたし、休酒屋之儀も酒造り申度分者、其所之奉行且御領者御代官・私領は地頭へ相屆け、酒造之儀可ㇾ爲ニ勝手次第ㇾ旨、寶暦四戌年相觸候處、近年米穀下直之年柄に無ㇾ之、當年之儀も米直段高直に而、末々之もの共難儀におよび候趣相聞え候間、米穀下直に相成、追而及ニ沙汰ㇾ候迄者、諸國共是迄造來る酒造米高之内、半石は酒造相止め、半石分酒造致、且休來り候酒造株之分、酒造候儀可ㇾ爲ニ無用ㇾ候、若隱造り致候においては、其者は勿論其所之役人迄、吟味之上急度可ニ申付ㇾ間、心得違無ㇾ之樣、御領は其所之奉行・御代官・御預り所・私領は領主・地頭に而、是迄之酒造逸々遂ニ吟味ㇾ半石通之積り可ニ申付ㇾ候

午九月

右ノ通御下知コレ有トイヘドモ、追々高直ニテ下民難澁ニ付、制令

當秋關東筋水損之場所多く、其外國々同樣に而作並不熟之風聞にて、米相庭高直に而、右に准じ猶又諸色共高直に相聞え、平日相應に暮候もの共は、兼而之覺悟も可ㇾ有ㇾ之候得共、身輕之者共別而日用之品々高直にては、難儀に及び可ㇾ申儀に而、少々たりとも下直に候へば、夫程相ゆるみ渡世之便にも可ニ相成ㇾ事に候旨、搗米屋共・小賣米屋共勿論、其外之諸品とも其筋々之商人共、聊も利欲に不ㇾ拘勘

辨いたし、可ㇾ成だけ下直に賣出し可ㇾ申候、若非分之仕方を以、賣徳貪り候儀相聞え候はゞ、吟味之
上急度可ㇾ令ㇾ沙汰ㇾ候

午壬十月　　　　　　　　　　　　　　　　　土　佐

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　備　後

當十二月廿四日

肥後米　　　　　　　　　代百一匁五分

筑前米　　　　　　　　　代九十五匁五分

金　　　　　　　　　　　代五十一匁前後

但シ今九月ニ到リ、二朱判通用差止メラレ、銀道具同ヤウ潰シニナル赴浮說有テ、二朱銀所持ノ者俄ニ賣拂、正銀ヲ取入ルニ附、自然ト正銀拂底シ市中騷動ス、尤去ル明和九辰年、二朱判通用仰出サレシ頃ヨリ、正金百兩ノ內ヘ二朱判廿五兩ヅヽ差交取渡シ致シ來リ候處、小判金ト二朱判銀、撰嫌ナク一樣ニ取交通用致ベク令セラレケレドモ、市民歸服コレナキニ依テ、今十二月改メテ又以前ノ通リ、百兩ニ二朱判廿五兩差交トリヤリ可ㇾ仕旨被ㇾ仰出ㇾ

錢　　　　　　　　　　　代九匁前後

天明七丁未年、正月中旬、肥後米百十五匁、筑前米百六匁、昨午年諸國トモ米穀不熟ニテ、舊冬以來

春ニ到リ、段々高直ニ相ナリ、江戸表ハ至テ米拂底ニ附、於ニ大阪一米一萬石御買上仰出サル
今般於ニ當表一米高凡壹萬石餘御買上げに相成り、江戸表へ相廻し候に付、右買入候儀米仲買共へ申渡
候、米高過分之儀にても無レ之候得ば、諸向差支候筋は勿論、直段に響き候儀等無レ之事に候へ共、米
商人共銘々利欲を構へ、右御買米に事寄せ、彼是見越等之浮說申觸、此上米直引上げ候樣相成候ては、
市中一體之難儀に而、別而身輕之者共は及ニ困窮一可レ申候條、都て米商ひに掛り候もの、幷搗米屋等に
至るまで、愈相愼聊も不實之儀無レ之樣、正路に賣買可レ致候、心得違無レ之ため、譯而右之趣申渡候上は
萬一身分之德用を考へ、浮說等申觸し候者又は〆賣抔いたし候者ども有レ之、不埒之仕方有レ之候はゞ、
遂ニ吟味一急度可ニ相咎一候、以上

未正月　　　　　　　　　　　　　　　土佐

　　　　　　　　　　　　　　　　　　備後

當五月

肥後米　　　　　　代百七十四匁ヨリ六七匁

筑前米　　　　　　代百六十二匁ヨリ百七十三四匁

同六月

肥後米　　　　　　代百八十一匁ヨリ六七匁

筑前米	代百六十七匁ヨリ百七十三四匁
加賀米	代百五十目
中國米	代百四十三匁
廣島米	代百六十六匁
豐前米	代百七十五匁
筑後米	代百六十九匁
肥前米	代百五十六匁
米子米	代百四十三匁
出雲米	代百廿目
金	代五十七匁二分五厘
錢	代八匁九分二三厘

右ノ外諸藏米凡百五十日以上ニテ米穀數無ク、相庭モ言合セノミナリ、コレニ因テ市中飢民多ク困窮ニ及ビ、大阪表ハ五月十二日ヨリ搗米屋ヘ押附買ノ狼藉者コレ有リ追々相集リ、米屋ハ勿論富家ノ者ノ居宅ヘ押ヨセ、家建家財等迄打壞チ、其騷動大方ナラズ、江戸表モ米穀拂底ニ付、五月廿六日、大阪ニ於テ御買米仰附ラレ、追々運送コレ有ベキノ處、大阪五月ノ有米、肥後二百俵、筑前二千俵、此

外西國米一切コレナク、北國米當時賣拂ノ時節故、是ヲ市中ノ飯糧トスルノミニテ、今年ノ取續モ覺束ナシ、コレニ因テ據ナク御買米等相止メラル、江戸表モ大阪ト同樣ニテ、五月十八日ヨリ廿四日ニ至ル迄、搗米屋ハ勿論、貧富ヲ論ゼズ家々ヲ壞チ、晝夜ノ騷動前代未聞ノコトドモナリ、依テ五月廿三日ノ頃、四日市ニ於テ御藏米大豆等ヲ以テ、町々ノ飢民ヲ救ハル、此節ハ金一兩ニ付米一斗五升ヨリ一斗二升位、大阪ニテ内證賣ノ米一石ニ付二百三十目ニテ、暫相庭退轉ニ及ブ、如何程高直ニ成リテモ、米賣ル者更ニコレナク、當年行々飯糧モ覺束ナシ、コレニ依テ公儀ヲ始メ、富民ヨリ米金ヲ出シテ、市中ノ飢民ヲ救フ、精麥一石百五十目、空豆一石百目前後、大豆一石百五十目、小麥一石百十二匁餘、野菜ノ物迄モ掛目一貫目ニ付錢三百文、其困窮推テ知ルベシ

此節米直段格別高直に而、末々之者及二困窮一候趣相聞え、米商人共并外賣人共に而も高下を見越、此上にも高直に可レ成抔と一分之利潤を考へ、米買置買〆は勿論、他所又は舟などに米圍之儀等致間敷候、若德用に拘り不埒之筋相聞え候はゞ、急度可レ令二沙汰一候

一　米小賣屋共儀、米買に參り候もの有レ之節、正直之直段を以賣買可レ致處、米高直を申立、格別利分を貪り候者有レ之候はゞ、是又吟味之上急度可レ及二沙汰一候

右之通申渡候間、銘々覺悟在レ之儀に候得共、此上輕き者は勿論、身上宜しきものに而も外聞に拘らず粥等に而もたべ、諸事費無レ之、儉約を專ら相用ひ可レ申候

未五月

當表之在米拂底に付、追々米直段引き上げ、末々身輕きもの共困窮之趣相聞え候處、此上賣人共勝手次第他國へ賣出し候而は、彌有米相減じ、尙更直段引き上げ候のみならず、新穀時節迄市中之取續も如何可レ有レ之哉、依レ之米商人共一分之德用を存候筋は勿論、たとへ親類又は懇意之出入より賴來り候共、他國へは決して遣す間敷候、其旨相心得實に無レ據子細有レ之、他國へ差遣度分は、奉行所へ相斷可レ申候、取續之ため右之通申渡候上は、萬一取扱手段を以他國へ差遣し候もの有レ之においては、急度可レ爲二沙汰一候間、心得違無レ之樣可レ致候

未五月　　土佐

備後

右外米穀高直ニ付テ、數度教諭ノ制令有レ之、近年諸國トモ凶作ニテ、米穀拂底ニテ、諸國ノ酒造米モ株高ノ半造ニ仰イダサレ候ヘドモ、今年ハ是迄造リ來リシ高ノ三歩一造リニ仰附ラレ、酒直段一升ニ付二匁八九分ヨリ三匁五分ナリ、然ル處此年諸國八九歩ノ作ニテ、士民安堵ス、當十月新米

肥後米　代七十二三匁ヨリ七匁位

筑前米　代六十九匁前後ヨリ七十三匁

金　代五十七匁前後ヨリ五匁前後

錢　　代八匁七八分ヨリ十匁

同十二月

肥後米　　代八十目前後

筑前米　　代七十七匁前後

天明八戊申年正月晦日、京都大火、禁裏・仙洞御所炎上、其外宮門跡公家方始メ、洛中神社佛閣京中八九分モ灰燼ト成ル、遷都以來ノ大火ニテ、人ノ知ル所故、コレヲ略ス、依テ大阪市中ヘ左ノ通仰渡サル、

先月晦日、京都大火之趣に候、右に付於二當表一米穀始め材木板類、其外都而諸色直段猥りに高直に不二相成一樣、銘々可二相愼一候、若徳用迷ひ、非分之賣方致候者有レ之趣相聞え候はゞ、急度可二相咎一候、以上

申二月

此度京都大火に付、米穀始め材木板類其外都而諸色直段、猥に高直に不二相成一樣、銘々可二相愼一旨觸書差出し候に付、其旨可二相守一儀に候へ共、自然心得違之者等有レ之、諸物價高直に而は、京地之者共可レ致二難儀一事に而、既に致二施行一候ものさへ追々有レ之趣相聞え候上は、此段厚く相辨へ、相互に助け合候心得を以、諸色等可レ成丈け下直に賣出し可レ申儀に付、銘々彌相愼、諸色少しも不二圍置一、隨分下直に賣出候樣可レ致候、尤當表の賣買直段は、格別に引上げ候趣無レ之候而も、京地仕入或は出商

賣と致候もの丶內には、萬一高直に賣渡候ものも可レ有レ之哉に付、若當表之者共京地へ罷越し、高直に賣渡候者有レ之ば、町所名前等相糺、彼地町奉行より申越候筈に候間、銘々別而相愼み不レ貪樣可レ致候、自然此上不埒之もの有レ之ば、急度可レ及二沙汰一候

申二月　　石見

　　　　　土佐

右教諭ノ制令數度有レ之略レ之、當正月・二月ノ頃、肥後米七十八匁二分、筑前米七十五匁三分、六月ニ至リ、米拂底ノ趣、其上麥不熟ニテ、六七月頃ハ、肥後米・筑前米トモ、八十目已上ナリ、然ル所當年凡諸國八九歩ノ作ニテ士民安堵ス、然レドモ酒造方ハ猶三歩一造ニ仰付ラル丶ニ付、米ノ引方少ク、十月新肥後米六十六匁、筑前新米六十三匁ニテ、翌酉年迄少々ヅ丶ノ高下ハアレドモ、大抵六十目以上也

三貨圖彙物價之部卷之九

草間直方輯錄

天明九己酉年、今年二月寛政ト改元、當五月

加賀米　代五十七八匁

肥後米　代六十四五匁

同十一月ハ

肥後米　代五十四五匁ヨリ八九匁

筑前米　代五十一二匁ヨリ五六匁

金　代五十五匁四五分

錢　代九匁五六分

但シ此已後年々諸國作方豐凶ノ儀ハ、大抵其節ノ相庭ヲ以テ考フベシ、譬バ當酉年加賀米・筑前米等五十目ノ前後ナレバ、諸國豐熟ト知ベシ、或ハ六十目已上七十目迄ハ中年ト見ベシ、又ハ七十目已上八九十目ノ時ハ必凶作ナルベシ、十一月ニ至リ五月ヨリノ高下ヲ以テ、其年ノ豐凶ヲ考フベシ、

依テ巨細ニ之ヲ記サズ、今年禁裏・仙洞・女院御所御造營有レ之、洛中老若ノ無ニ差別一地築被ニ仰付一、其價ヲ人民ヘ被レ下

寛政二庚戌年五月ハ

加賀米　代四十四匁前後

肥後米　代五十一匁前後

同十一月ハ

肥後米　代五十三匁ヨリ六匁

筑前米　代五十日前後ヨリ二匁

金　代五十五匁四五分ヨリ六匁四五分

錢　代九匁五六分前後

今年十一月禁裏・仙洞・女院御所新殿ヘ還幸

寛政三辛亥年、五月

加賀米　代四十七匁前後ヨリ五十一二匁

肥後米　代五十四匁前後ヨリ六七匁

同十一月ハ

肥後米　　代七十五匁ヨリ七八匁
筑前米　　代七十目前後ヨリ一二匁
金　　代五十五匁前後ヨリ九匁
錢　　代九匁四分前後ヨリ九分

今年七月迄ハ氣候宜シキ處、八月六日關東筋風雨洪水コレアリ、打續キ氣候不順ニテ、五畿內•西國邊モ同樣ニ、風雨出水等コレアリ、諸國稻作不熟ニ付、追々米價高直ニ相成リ、市民迷惑ニ及ブ、コレニ依テ江戸表ニテモ市民買シメ等致ス間敷、又粥麥等ヲ食シ、隨分米穀ヲ喰延シ、難澁致サヾル樣一統申合ベシトノ御教諭コレアリ、大阪モ同樣仰渡サル有難キコトナリ、然レドモ諸國不熟ニ付、八月末ヨリ追々米價高直ニ相成リ、肥後米七十七八匁ナリ、但シ酒造ノ儀ハ、寬政元年頃ヨリ、諸國豐作ニ付半造御免コレアル處、當年ハ不熟ニ付、先年ノ通リ三歩一造リノ儀、猶亦嚴重ニ仰渡サレ、且昨戊年拾月ニ、大阪ニ於テ市民非常ノ備トシテ、市中ノ者ドモ分限相應ニ現米圍ヒノ儀始テ仰渡サル、是等ハ年々益•不益ノ儀コレアリ、市民迷惑ニ及ビ候筋ニモコレアリ候ヘドモ善政ナラン、已後ハ年々新穀ト買替仰付ラレ、全ク市中永久ノ備米ト成ル、今ノ市中圍ヒ米ハ、此時始ル

寬政四壬子年、昨亥年東西不作ノ處、今年四月、肥前島原地震津波コレアリ、近國大ニ水亡多ク、苗植附ナラズ、都テ中國•九州筋不熟ニテ、米價引キ立ツ、五月ハ

加賀米　代七十七匁前後ヨリ六十二三匁

肥後米　代九十二三匁ヨリ八十二三匁

同十一月ハ

肥後米　代九十六七匁ヨリ七十八九匁

筑前米　代九十目前後ヨリ六十目前後

金　代五十七八匁ヨリ六十目前後

錢　代九匁四分ヨリ六七分

寛政五癸丑年、今年諸國豐熟ニテ、七八月ニ至リテハ米價下落ス、五月ハ

加賀米　代七十七八匁ヨリ六十二三匁

肥後米　代八十七八匁ヨリ七十二三匁

同十一月ハ

肥後米　代五十八九匁ヨリ六十七八匁

筑前米　代五十六七匁ヨリ六十四五匁

金　代六十目前後ヨリ六十二匁五分

錢　代九匁三四分ヨリ六七分

寛政六甲寅年、今五月中旬ヨリ凡九月ニ至ル迄、諸國トモ旱ス、五月ハ

加賀米　代五十六七匁ヨリ五十一匁前後

肥後米　代六十四五匁前後

同十一月ハ

肥後米　代六十六七匁ヨリ五十六七匁前後

筑前米　代六十三四匁ヨリ五十四五匁前後

金　代五十九匁前後ヨリ六十目餘

錢　代九匁四五分ヨリ七八分

寛政七乙卯年、昨寅年旱ニテ、米穀秋ニ至リ拂底ノ趣ヲ以テ、七八月ノ頃ヨリ、米價貴シ

五月ハ

加賀米　代五十二三匁ヨリ六十四五匁前後

肥後米　代六十目前後ヨリ六十八九匁

同十一月ハ

肥後米　代七十四五匁ヨリ八九匁前後

筑前米　代七十二三匁ヨリ六七匁前後

金　代六十目餘ヨリ一匁
錢　代九匁四五分ヨリ八九分
今年三月五日、總州金原ニ於テ御鹿狩有
寛政八丙辰年、今六月九州筋洪水有レ之、五月ハ
加賀米　代六十四五匁ヨリ七十目前後
肥後米　代七十二三匁ヨリ七八匁前後
同十一月ハ
肥後米　代七十三四匁前後
筑前米　代七十一二匁前後
金　代六十目前後ヨリ一匁
錢　代九匁四分ヨリ六七分
寛政九丁巳年、今年諸國旱ス、五月ハ
加賀米　代六十四五匁ヨリ五十八九匁前後
肥後米　代七十目前後
同十一月ハ

肥後米　代六十二三匁前後
筑前米　代六十目ヨリ二三匁前後
金　代五十七八匁ヨリ六十一匁前後
錢　代九匁四分前後ヨリ九分前後
但シ右金錢ノ相庭ハ、去ル子年ヨリ當巳年迄、六ヶ年間ノ相場ナリ
寛政十戊午年、今四月關東筋・信州・濃州路洪水コレ有リ、五六月頃米價貴シ、然レドモ當年ハ諸國豊熟ニテ、九月ニ至リ追々下落ス、今年七月京都大佛雷火ニテ燒亡アリ、當五月ハ
加賀米　代六十二三匁ヨリ五十八九匁前後
肥後米　代七十二三匁ヨリ六十八九匁前後
同十一月ハ
肥後米　代五十八九匁前後ヨリ六十目
筑前米　代五十七八匁ヨリ五六匁前後
金　代六十一匁ヨリ二匁四五分
錢　代九匁二分ヨリ六分
寛政十一己未年、五月ハ

加賀米　代五十七八匁ヨリ五十目前後
肥後米　代六十七八匁ヨリ六十二三匁
同十一月ハ
肥後米　代六十二三匁ヨリ七十四匁餘
筑前米　代五十七八匁ヨリ七十二匁餘
金　代六十二三匁
錢　代九匁四五分
寛政十二庚申年、昨未年北國筋不作ニ付、米價貴クナル、今年南鐐貳朱判吹止メラル、當五月
加賀米　代六十七八匁ヨリ五十七八匁
肥後米　代八十目ヨリ七十四五匁
同十一月ハ
肥後米　代七十二三匁ヨリ七十七八匁
筑前米　代七十目前後ヨリ七十二三匁
金　代六十二三匁
錢　代九匁三五分

寛政十三辛酉年、今二月享和ト改元、五月ハ

加賀米　代五十八九匁ヨリ六十目餘
肥後米　代六十八九匁ヨリ七十目餘

同十一月ハ

肥後米　代六十八九匁
筑前米　代六十五六匁
金　代六十三匁
錢　代九匁二分ヨリ五六分

享和二壬戌年、今六月廿七日山城・近江・美濃、別テ攝・河大洪水、前代未聞ノ事ドモナリ、其節近郷ノ老若男女大阪ヘ逃ゲ來ルコト夥シク、依テ御役所ヨリ命ゼラレ、右ノ數人共ヲ芝居小屋、又ハ京橋南詰ニ假小家ヲ建テ入レコレヲ救ハル、此時市中ヨリモ心有人ハ米錢ヲ施行セラレシナリ、上方筋スベテ凶作ニ付、米價一旦ハ貴シトイヘドモ、諸國八九歩位ノ作ニテ、又々下落ス、當五月ハ

加賀米　代五十四五匁ヨリ二三匁
肥後米　代六十二三匁

同十一月ハ

肥後米　代六十二三匁ヨリ四五匁
筑前米　代五十九匁ヨリ六十目
金　代六十二匁ヨリ三匁七八分
錢　代九匁二分ヨリ四五分
享和三癸亥年、今年諸國トモ豐穗ナリ、四月ヨリ痲疹流行ス、當五月ハ
肥後米　代六十三四匁
同十一月ハ
加賀米　代五十一二匁
肥後米　代五十八九匁ヨリ五六匁
筑前米　代五十三四匁ヨリ一二匁
金　代六十三匁四分ヨリ七八分
錢　代九匁三四分
享和四甲子年、今二月文化ト改元、當五月ハ
加賀米　代四十五六匁ヨリ七八匁
肥後米　代五十目餘ヨリ一二匁

同十一月ハ
肥後米　代五十四匁ヨリ六十目
筑前米　代五十二匁ヨリ七八匁
金　代六十四匁前後
錢　代九匁二分餘
文化二乙丑年五月
加賀米　代五十目八分位ヨリ五十三匁
肥後米　代五十八九匁前後
同十一月ハ
肥後米　代五十五六匁餘
筑前米　代五十四五匁前後
金　代六十四匁ヨリ五匁二三分
錢　代八匁八分ヨリ九匁二分
文化三丙寅年五月
加賀米　代五十六七匁ヨリ八匁餘

肥後米　代六十三匁ヨリ五十八九匁
同十一月
肥後米　代五十七匁餘ヨリ六十目餘
筑前米　代五十六七匁ヨリ六十一匁餘
金　代六十四五匁ヨリ六匁
但シ當三月江戸大火ニ付、金高直ニ相成リ、六十七匁前後迄引キ立チ、コノ後打續キ凡高直ニテ、六十四五匁ヲ常トス
錢　代九匁二三分ヨリ八匁七八分
右ノ通近年諸國豐作ニテ米價下落ス、尤第七卷ニ云フ如ク、天明七年後ハ、諸國トモ海濱山澤ヲ開キ、追々新田ト成スコト夥シク、コレニ依テ五十年前、明和・安永頃ノ豐熟ニ比シテハ、海內米穀ノ出來方廣大ナラン、今七步ノ作ハ五十年前ノ九步・十分ニ當レリ、然レバ當時大抵ノ作ニテモ、三五年モツヾク時ハ、米穀諸方ニ充テ、價下落シ士民迄モカヘツテ迷惑ニ及ブベシトハ、寬政ノ頃ヨリ予考ヘシナリ、既ニ近年ノ如ク年々豐熟打ツヾキ、米價下落シ諸侯方ハ勿論、俸祿ノ士迷惑セラル、サレバ諸侯方俸祿ノ士ニ至ル迄、五十年前ノ仕法ニテハ、勝手向相違スル事多カラン、右ニ云如ク近年新地米ヲ初メ出方多ク、米價下落ニ付、諸侯方金銀ノ取入數ナク、コレニ依テ借財融通辨用等、皆不勝手ニヨリ據ナ

ク國內底ヲ拂テ米穀ヲ賣出ダスアル故、彌津々浦々米穀ノ出方多ク米價下落シ、國ハ衰ヘ民瘦疲シテ上下難澁茲ニ逼ル、依テ米價ノ下落モ害アリ、遠カラズシテ凶年不熟アル時ハ、米價ノ下落ヨリモ、猶難澁ナラン事ヲ恐ル、既ニ享保十二年ヨリ十六年ニ至リ、年々豐熟ナリシカバ、廣島米二十九匁八九分、中國二十六匁ニテ、金銀融通出來ガタク、諸侯方殊ニ迷惑セラレシ也、依テ是非ナク國內ヲセメハタリ賣盡セシニヨリ、翌年西國飢饉シ、米穀拂底ノ時、諸侯士民ヲ救フ術盡キ、餓死スルモノ多ク、其トキ必支ト困窮セリ、近年米穀ノ出方多キモ、强テ新地米ノ然ラシムルニモアラズ、金銀ノ不融通ヨリ、諸家ノ家中ヲ始メ、百姓・商人迄モ、米穀ヲ不レ貯賣出サントスル故、津々浦々納米迄モ米多ク、諸侯方ノ拂米ト打合セテハ、夥シキ石數ニテ、國々ノ商人マデモ、米穀ヲ圍ハザル道理モアルベシ、サレバ後年凶作アランニハ、必何レノ國ニテモ逼至ト難澁セラルベシ、士民トモ兼テ其覺悟有タキモノナリ、右豐熟ニ付諸國御領私領トモ其高ニ應ジ、圍糭等年々仰付ラル、此分除キ候テモ全體ニ米穀多シ、コレニ因テ武家方始メ食祿コレ有向々ハ、年分ノ食料ヲ引去リ、殘米ヲ賣拂ヒ公私ノ辨用ヲ始メ、年中ノ用度取賄ヒコレアル處、米價下直ニ付金銀融通ナリガタク、近年武家方困窮ニテ、市民ヨリノ仕送リ、臨時ノ用達金銀返濟等滯リ、市民モ迷惑ニ及ブ、是全ク米價ノ下直ヨリ起ルトコロナリ、依テ大阪市民ヘ分限相應ニ御買米仰付ラレ、其餘攝・河兩國公領ノ百姓モ、其持高分限相應ニ、御代官所ヨリ買米仰付ラル但買米ノ事委シク別記小册アリ、依テ略レ之

文化四丁卯年五月

加賀米　代五十五六匁ヨリ六十目餘

肥後米　代六十二三匁ヨリ五六匁

同十一月ハ

肥後米　代七十二三匁ヨリ六十八九匁

筑前米　代七十二三匁ヨリ六十七八匁

金　代六十六匁七八分ヨリ六十五匁前後

錢　代九匁餘ヨリ二分位

今年六月下旬、山城・近江美濃路・攝・河洪水コレ有リ、去ル享和二亥年五月ノ洪水ヨリ、一二歩モ滿水ニテ、右ノ國々田畠損亡多シ、然レドモ又當年モ諸國大抵ノ豐作ニテ、格別高直ナラネドモ、前年ノ洪水ヨリ漸ク五六年ノ事ニテ、攝・河ノ窮民多ク難澁セリ、茲ニ因テ公儀幷市民ヨリ、米穀雜物等ヲ出サレ飢民ヲ救ハル、然レドモ大阪市中御買米中ニ付、施行ハ前年ヨリ少ク、飢民至テ難澁セリ、右洪水ニテ追々米價引上ル趣ヲ以テ、十月ニ至リ市中買持米ノ内三歩一通リ賣拂仰附ラルヽニヨリ、米價モ格別高直ニハナラズ、市民相悅、右殘米翌辰年四月殘ラズ市中買持米御免コレアリ

文化五戊辰年、昨卯年五畿內幷美濃・近江洪水ニテ、米穀不作ノ上、今年奧州筋出水アリテ、六七月ノ

コロヨリ米價高直ニナル、當五月ハ

加賀米　代六十五六匁ヨリ五十五匁

肥後米　代七十二匁前後ヨリ五十五六匁

同十一月ハ

肥後米　代八十目前後ヨリ二三匁

筑前米　代七十七匁前後ヨリ一二匁

金　代六十六匁七分前後ヨリ六匁二分

錢　代九匁三分餘ヨリ一分五厘位

文化六己巳年五月

加賀米　代六十九匁餘ヨリ五十二匁餘

肥後米　代七十目餘ヨリ六十七八匁

同十一月

肥後米　代六十目餘ヨリ五十六七匁

筑前米　代六十七八匁五十五匁ヨリ八匁

金　代六十五匁九分六匁前後ヨリ三匁九分

錢　代九匁一分餘ヨリ三分位

文化七庚午年五月

加賀米　代五十目前後ヨリ五六匁又四十七八匁

肥後米　代六十目前後ヨリ五十五六匁

同十一月

肥後米　代五十四匁前後ヨリ七八匁

筑前米　代五十二三匁ヨリ六十目前後

金　代六十三匁餘ヨリ五匁七八分

錢　代九匁三分前後二分位

此一兩年諸國豐熟ニ付米價下落ス、コレニ依テ去ル寅年仰渡サレ候例ヲ以テ、又此度大阪市中ノ者へ買米仰附ラル、尤公儀ニモ御買米コレアリ、其餘江戸新規十組仲間ノ者共ヨリモ、數萬石ノ買入コレ有ニ依テ、直段引上ベキ所、元來諸國豐熟打續キ米穀潤澤ニテ、其上市中連年ノ買米ニ付人氣宜シカラズ、却テ米價引立ズ、格別買米ノ功モコレナシ別記小册アリ、依テ略レ之

文化八辛未年五月

加賀米　代五十三匁前後ヨリ五匁

肥後米　代八十五匁

同十一月

肥後米　代五十三匁ヨリ九匁

筑前米　代五十八九匁

金　代六十四匁餘

錢　代九匁三四分

今年モ諸國豐熟ニテ、米穀多ク直段引立ズ、コレニ依テ市中買持米、新穀ト買替仰附ラレ、今年モ一統買持居候、然レドモ買替ニ付古米多ク、古來至テ下落シ、又買替ノ損銀多ク迷惑ニ及ベリ、肥後米ノミ八十五匁ト云、高直ノユヱハ江戸表ニ於テ去年年十一月米價引立ノタメ、御買米コレアルベキ趣、又大阪ノ市中ヘモ數萬石ノ買持米仰附ラルベキ風聞コレアルニ付、廻船十組仲間（但シ十組ノ業ハ別紙ニ記ス）ノ者共ヨリ此旨ヲ聞、右仲間ノ者國恩ノタメ、大阪ニオイテ買米致度由願出候處奇特ニ思召サレ、則其儀御免ナサレシナリ、然ルニ大阪表市中買持米仰附ラレザル以前、十組ノ者ヨリ御用米ト云フコトハ、內々ニテ大阪表ヘ追々注文ヲ以テ、多分肥後米ヲ買入ル、是當年ノタテ米ナリ、其已前大阪表ノ米問屋御用米ト云フコトハ申越サザル故、唯十組ノ買米トノミ心得、種々ト取捌ヲ以テ買入候處、其後ニ至リ十組ノ買注文ハ御用米ナル事ヲ知ルトイヘドモ、仕方コレナク、尤追々肥後米買入レノ事ハ、唯買人

ノミニテ賣ルモノナシ、其內ニハ據ナク問屋ヨリ買付ケ候趣ヲ以テ代銀取組、他米ヲ以テ兩替ノ者へ入レ替等ニ差入置、追々肥後米買入ルベキ手段ノ處、元來肥後米ハ登リ高十萬石ノ處、右ノ通問屋共ヨリ買立候故、藏米モ賣切現米コレナキニヨリ、右追々カヒ入候手段モ盡キ、是非ナク肥後米三萬石バカリ、問屋共空米賣ニ相ナル、十組ノ者共空米ハ推量イタシ居、右買持ヲ現米ニテ江戸表へ積取リ候時ハ、右三萬石ノ空米眼前不足故、御用ノコトナレバ、右不足ノ分ハ其買入候問屋ヨリ、是非買戻シコレナクテハ叶ハザルコトナリ、サレバ一石代銀二百目三百目ニテモ買戻シ遣ス時ハ、國恩ノ忠誠モ現然ノ事ニテ、又仲間ノ利德モ、莫大ナラントノ考ニヤ、既ニ今未年ニ及ビ、右肥後米江戸積下シノ事ヨリ、空米賣ノ事露顯ニ及ビ公訴ニ相成リ、問屋七軒ノ者入牢仰附ラレ、大阪米問屋ノ者騷動ニ及ブ、此裁許中ハ肥後米ノミ八十五匁ニテ、正米賣買ナク名目相庭ナリ、現米ハ皆十組ヨリ買持米ニ相成リコレ有ニ付、據ナク相庭ノミ右ノ通八十五匁ナリ但別記有、略レ之

當冬新古米買替ニテ、一石ニ付凡二十目位ノ損銀ニテ、市中買持米ノ者共ヲ始メ、江戸十組ノ者迷惑推テ知ルベシ、損德ハ天理ニシテ、如何トモ成シガタシ

文化九壬申年五月

加賀米　代四十九匁餘ヨリ五十二三匁

肥後米　代五十二三匁六十目餘

同十一月

肥後米　代五十五匁ヨリ五十八九匁

筑前米　代五十目ヨリ四五匁

金　代六十四匁七分位ヨリ一分前後

錢　代九匁三分餘ヨリ二分位

去ル午年米價引立テズ、公儀ヲ始メ江戸并大阪ノ市民迄モ、買米仰附ラレ候得共、今年モ又諸國豐作ニテ、愈米價引タヽズ、コレニ依テ東西諸侯方ヨリ、江戸・大阪ヘ例歳廻米高ノ内二歩減石仰附ラレ、共向向國々ニ籾米ニテ圍置候樣仰渡サレ、則諸家方江戸・大阪ヘノ買米總テ二歩通減石相ナル、是又總體ニテハ過分ノ減ジ登リニ相ナル故、米價引立ベキ處左モアラズシテ、當年モ打續キ直段下落ニ附、種々穿鑿ヲ遂ラレ、市中買持米都テ其屋敷藏々ノ米切手ヲ以テノ買米ニ相成居候テ、現米ニテコレナキ故、自然買米ノ分切手許ニテ、正米ノ處市中買持米石數ト相違ノ儀モコレアルベキ哉ト、恐ナガラ至極御尤ノ御考ニヨリ、當冬十二月ニ至リ、市中買持米ノ分殘ラズ其者共ヘ正米圍ニ仕ルベキ由仰渡サル、然レドモ輕キ市民故、右現米圍置候土藏手當コレナク、難澁セシメ候者ドモハ、銘々請石高ノ代銀、一石ニ付五十四匁二分替ノ積リニテ、現銀ヲ以テ、納候トモ勝手タルベシ、然ル上ハ此銀子ヲ以テ、公儀ヨリ連々御買成サレ、其石高御收ナサレ、其屋敷ノ土藏ニ入置、御封印御附ナサルベキトノ事、又現

米圍ヒニ致度者土藏コレナキトキハ、所持買持ノ切手高ノ現米、其屋敷ノ藏々ニ差置ナリトモ勝手次第、左候ハヾ公儀ヨリ、石數御改ナサレ、悉ク御封印御附成サルベキトノ事ナリ、茲ニ因テ市民買持米ノ者共、近來古米新米等買替ノ度ゴト、年々ニ損銀多キヲ以テ迷惑ニ及ビ候事故、此度ノ仰渡サレ恐服イタシ、多分皆々一石代五十四匁二分ノ直立ヲ以テ、正銀ニテ上納イタシ度旨相願ヒ、則聞屆ケコレアリ候得共、月迫ニ及ビ俄ニ銀上納ノ儀ニ又差詰リ、所持ノ買持切手ヲ賣拂ヒ候ニ付、又俄ニ現米ノ相庭下落ニ及ビ、其上右ノ通正銀上納故、數萬ノ米代莫大ノ事ニテ、市中又銀融通差支、コレニ依テ又米價ニ響キ、猶々下落ニ及ブ、且諸侯方屋敷内ノ土藏ヘ御封印附候儀諸侯方モ迷惑ニ及バレ、此儀御免ノ願ヒコレアリ、據ナク屋敷内ノ封印ハ相止ミ、町方借藏ヲ以テ詰替等コレアル分ハ、其場所ニテ石數御改コレ有リ御封印ヲ附ラレ、右等ノ事ニテ種々ト諸侯方始メ市民迷惑混雜大方ナラザル事推テ知ベシ（但シ別記小册ニ悉ク記ス、依テコレヲ略ス）前文ノ通當年月迫ニ及ビ、混雜致シ候ニ付、米代銀上納ノ儀ハ買持米ノ者共ヨリ請證文差入、來酉年二三月ノ頃迄、連々ニ上納仰附ラル、當極月二十三日相庭、左ニ記ス

肥後米	代六十一匁三分
筑前米	代五十四匁三分
中國米	代四十三匁二分
一廣島米	代五十一匁

金　　　　　　　　代六十四匁四五分

錢　　　　　　　　代九匁三分二三厘

當年十二月濱方越年米凡三百二十四萬四千四百俵ナリ

三貨圖彙物價之部卷之十

草間直方輯錄

文化十癸酉年正月

肥後米　代六十三匁

筑前米　代五十六匁

金　代六十四匁三四分

錢　代九匁一二分

同五月

肥後米　代六十五六匁ヨリ六十目前後

加賀米　代四十九匁ヨリ五十目前後

金　代六十四匁九分ヨリ三匁五分五厘

錢　代九匁三分ヨリ一分前後

近年米價下落ニ付、去ル午年ヨリ今酉年五月迄、種々厚キ御仁惠ニテ、市中ヨリノ上納銀割合ヲ以テ、連

違ニ御取立被レ成、此銀子ヲ以テ御買米有レ之、其度々御役人中立合ニテ石數御改被レ成、其藏々へ御封印ヲ付ラル、然レドモ格別直段不ニ引立一、元來コノ四五年打續、米穀豐熟ニテ價下落ニ及ビ、自然此上當酉年モ諸國十分ノ作ニ有レ之候テハ、彌市民ノ迷惑ニ可レ及、因レ茲東西諸侯方へ被ニ仰出一候ハ、例歳江戶・大阪へ廻米ノ內、四分通リ其國々ニテ糴圍被ニ仰付一、二分通リハ又於ニ其國一勝手ニ相拂、殘米四分通ヲ以テ例ノ通江戶・大阪へ廻米可レ致、然レドモ廻米四分通リニテハ、諸家公私ノ辨用銀差引不ニ相成一、然ル時ハ又市民ヨリノ仕送銀始メ、出銀ノ者共迷惑ニ相成、此後ノ出銀ニ差支へ候時ハ、自然ト公私ノ用度不レ調、勝手向モ又差支候儀ニ付、依レ之當年諸家方其國四分ノ圍糴ヲ引當テ、其高ニ應ジ拜借金可レ被ニ仰付一趣被ニ仰渡一、右諸家へノ拜借金ハ、江戶・大阪ノ市民へ御用金被ニ仰付一、是ヲ以テ御貸渡シニ相成リ、來戌年十二月又ハ來々亥年ノ春迄ニ、右圍糴ヲ御拂ハセ被レ成、其代銀ヲ以テ拜借ノ返上被ニ仰付一、是ヲ以テ其御用金被ニ仰付置一、市民へ御返濟可レ被レ成トノ御主法尤無利息ナリ、右御用金ノ儀ニ付、今年六月御勘定奉行肥田豐後守殿御出阪被レ成、去午年御買米被ニ仰付一候者、其外分限相應ノ者、市中夫々被ニ召出一、米價引立ノ御主法トシテ御用金被ニ仰付一候、尤去ル午年買持米被ニ仰出一、今以テ賣拂ノ儀御免無レ之、銘々銀融通モ不手繰ニテ、其上近年新古買替等ニモ甚損銀多ク難澁迷惑ナルニ、猶又此度御用金被ニ仰付一テハ、二重ノ御用ニ相成リ、彌以金銀融通差支難澁ノ趣歎訴コレ有トイヘドモ御承引ナク、種々御利解ヲ以テ嚴敷仰付ラル、依レ之市民一統迷惑致シ、去ル午年被ニ仰付置一買持米、賣

拂被ニ仰付一ニ於テハ調達モ可レ仕哉、マタ買米代銀其儘此度ノ御用金高ニ取結ビ被ニ仰付一被レ下度ナド歎訴コレ有ニ付、御用金被ニ仰付一高ノ内ヘ、是迄買持居候米代銀取結、都合何千兩ノ御用金高ニ被ニ仰付一、右買持米ハ追テ賣拂可レ被ニ仰付一トノコトニテ、大抵八九月ニ至リ御用金辻極リ、市中甚以テ喧キ事推テ可レ知（別記小册ニアリ、依テ略レ之）前文ニ云諸侯方ノ廻米、減石四分通登セ米ノ儀、猶又嚴シク仰出サレ、大阪川口ニ於テ諸家入津米御改被レ成、右四分通リノ外ハ御差止ナサレ、又諸國家中米或ハ百姓作徳米ニ至ル迄、大阪納屋拂ニ成リ候米穀モ、去ル午・未・申三ケ年ノ登リ高、平均一ケ年分ヨリ外ハ、大阪入津不ニ相成一赴、是又嚴密ニ被ニ仰渡一、其外兵庫表例入津米モ大阪同樣ニテ、都テ近國近在ノ米穀ト雖モ相届ケ、御免無レ之分ハ一切入津御差止被レ成、因レ玆大阪入津米例年ヨリハ凡半減以下ニ相成事故、米價引立べキ儀勿論ノ處、當十月諸國新穀登リニ相成テモ、漸ク建モノ肥後米而已格段相庭引上、其餘藏米ハ右入津米半減ニ競べテハ直段引立ズ、此儀ハ全ク市民ヘ御用金被ニ仰付一ニヨリ、市町金銀融通不繰合ニテ自由難ニ出來一、依レ之諸藏米捌ケガタク自然ト米價引下グル儀勿論ノ事、依テ又金銀融通ノ滯ラザル樣ノ御主法無レ之テハ、此度ノ御主意モ齟齬スルニ依リ、種々ト勘考セラレ、右御用金上納ノ儀一時ニ不ニ取立一、其當人ヨリ預リノ請證文差出サセ、御用次第割合ヲ以テ、連々ニ上納被ニ仰付一、依レ之融通モ屢相緩ミ、マタ諸家方ヨリノ拜借モ冬中火急ニ被ニ願出一儀モ無レ之、然レバ其中間ソノ遊銀ヲ以テ、米穀入替等慥ナル貸付方モ可レ有レ之、然ル時ハ彌金銀融通ノ道モ開ケテ、市民ノ迷惑モ薄キニ付テハ、自

然ト價モ引立可ㇾ申、猶又融通宜キ爲、米方入替兩替ノ者へ、公銀ヲ無利息ニテ拜借被ニ仰付一、引當米切手ヲ以テ、濱方米商人ノ者へ丈夫ニ入替致シ可ㇾ遣トノ事、其外諸家米穀、當年ハ前文ノ通大阪入津米四分ノ減石登リニ付、堂島濱方仲仕日雇ノ者、又ハ沖取運送ノ上ハ荷・茶舟ノ者共迄、迷惑難澁ニ及ベリ、依ㇾ之是等ノ仲間ヘモ、御憐愍ヲ以テ銀三百貫目ヅヽ、無利足ニテ拜借仰付ラレ、右返納迄引當トシテ、諸藏米ノ內出切手ヲ納置、來戌年五月返納スベキ由命ゼラル

但シ諸家減石登セニテ、下民仲仕日雇ヒノ者、働薄キ上ヘニ、公邊御買米ニテ諸藏出米詰替封印等付ラルニヨリ、濱方年行司立合仲仕日雇ヒノ者マデ臨時ノ公役多ク、又河口表ハ諸國ノ入津米改役所ヲ立ラレ嚴重ニ改メラルヽニツキテハ、上ハ荷茶舟等ノ頭取ノモノ幷仲仕頭取等、右改メノ御用役ニ罷出、是又公役繁用ニテ及ニ迷惑一、且ツ上ハ荷茶舟等ハ、例年短日ト雖モ沖ヨリ川內へ往來三四度イタシ、共度々賃米モ多ク取來リ渡世セシ所、此度新規ニ改役所出來、嚴密ニ入津俵數改メラルルニヨリ、甚ヒマイリ沖取運送往來モ漸ク一兩度程ノコトニテ、ソノウヘ諸家減石登リニテ、種々トウハ荷舟幷仲仕等迷惑難澁ノ赴ニツキ、御銀拜借仰付ラルトナリ

右等ノ厚キ慈憐ヲ以テ、是ヨリ追々米價引立ツ、但シ九月十月頃相庭建替

十月十七日

肥後米　代七十目
筑前米　代七十目五分
同十八日
肥後米　代六十六匁一分
筑前米　代五十八匁七分
同廿二三日頃
肥後米　代六十四匁六分
筑前米　代五十九匁二三分
十月十七日
金　代六十五匁二三厘
錢　代九匁一分七八厘
同廿二三日頃
金　代六十四匁八九分餘
錢　代九匁一分四五厘
然ル所前文ノ通兩替方切手入替等種々ト御世話有レ之、依十月廿八九日ノ頃

肥後米　代七十四五匁餘
筑前米　代六十三匁餘ヨリ七十目

其後追々引キ上ゲ、閏十一月九日ニ至リテハ、肥後米七十八匁五分、然レドモ肥後米ノミ其通ニテ、外諸藏ノ分ハ直段不ニ引立一、既ニ筑前米ハ同日六十六匁八分、肥後米七十七八匁ニテ、石ニ付十一匁餘ノ直開キナリ、如レ此筑前米ヲ始メ、餘藏ノ分皆同様直段不ニ引立一依レ之公儀ヨリ肥後米ヲ除キ、餘藏ノ分連々ニ御買米被ニ仰付一、夫ヨリ餘米モ追々相違引立、十二月廿四日納相庭

肥後米　代七十三匁五分
筑前米　代六十五匁
中國米　代六十目
廣島米　代六十目
金　代六十四匁三分四五厘
錢　代九匁三分一二厘

當酉年濱方越年米、凡二百六萬八千五十俵、但シ昨申年有米トハ、百十七萬六千俵餘ノ減石ニナル

右市中御用金ノ儀モ、當年內十一月下旬ヨリ、連々市中兩替屋ノ預リ手形ヲ以テ上納被ニ仰付一、諸家方ノ拜借金モ、右手形ヲ以夫々割合拜借被ニ仰付一、濱方建テ米モ肥後ナレドモ、漸ク四萬石餘ノ登リ米ニ

テ都テ諸家ノ登リ米モ同樣減石ニ成リ、其ウヘ當夏以來奥州仙臺・南部・津輕幷出羽・加賀・能登・越中・越前・越後等氣候不順ニテ至テ凶作也、米價一際高直ニ可㆓引立㆒道理ナレドモ、市中買米御用金等ニテ金銀不融通ニヨリ、自然ト相庭不㆓引立㆒、肥後米ノミ高直ナリ、是ハ此建モノ米漸ク四萬石ニテ、商人三四人ノ者買シメ動カサヌヤウニ括リ置時ハ、濱方帳合米ニ差構ヒ、商内モ難㆓出來㆒商人共モ此減石ニ眼ヲツケ、既ニ十月廿九日・卅日ノコロハ、肥後帳合米八十目正米七十五匁八分等ニテ、日々濱方帳合モ高下有㆑之喧シ、諸家方モ減石登セニテ、大阪モ有米無㆑數、相庭高直ニナルベキハ理ノ當然ナレドモ、御用金ト云フ大造ナルコトコレ有故、人氣不㆓引立㆒、市中日用ノ飯米ノミノ取捌キニテ、正米引ケ方無㆑數、又當年五畿內・西國・九州・四國邊大抵常例ノ米穀出來方ニテ、ソノウヘ大阪入津米ハ、商人賣迄モ去ル午・未・申三ケ年平均高ヨリ、餘米入津御差留メニテ、又諸國ノ二分ノ國拂モコレ又大造ナル事故、奥北邊ノ外國々ハ有米多ク、依㆑之大阪表ノミ米穀不自由ニテ、無㆑據相庭自然ト高直ニ成リ、他國米ノ相庭ト不㆓引合㆒、ソレ故大阪ノ米問屋ヘ、他國ヨリノ買注文無㆑之、帳合米ノ賣買ノミ故、建テモノ米バカリ相庭引キ上ゲ、餘藏米ノ直段引キ立ニモ不㆑成、又諸家方モ四歩ノ減石登セニテ、少々直段ハ宜シクテモ金銀ノ取入薄ク、無㆑據公金拜借有テモ、又來冬返納ノ手段六ケ敷、彼是ト諸侯モ心配、市中濱方モ迷惑ノトコロ、御上ニモ格別アツキ御仁惠ノ御主法ニテ、種々ト手數ヲ被㆑盡、恐レ入コトドモナリ、好事モ不㆑若㆑無、同クハ市中ノ買米モ差免サレ、諸家ノ拂米モ常例ナレバ、安キコトモ合點ニテ、

又ソレ程ハ市中出入方ノ借財ヲ以テ融通アラバ、却テ心配ノ勞モ薄ク、又奥北ノ凶作モ聞エ或ハ直段ノ安キニヨリ、市中小民迄モ小米ナリトモ買フ氣出來、存外直段モ可ニ引立ニ、御用金ト云大役ニ括ラレ諸家金銀借財融通ノ道塞リ、下民商賈ノ取遣リ迄モ手狹ニ成リ、金銀融通差支、偶然トシテ如何トモスルコトナシ、右等ノコト誌スハ、誠ニ恐レ有コトナレドモ、或老人茶話ノ儘記レ之、是哉非哉知ラズ

文化十一年甲戌年五月

肥後米	代七十三匁三分
筑前米	代六十五匁八分
中國米	代五十三匁
廣島米	代六十目五分
金	代六十四匁四分五八厘
錢	代九匁二分ヨリ一分四五厘

同五月頃迄

肥後米	代七十一二匁前後
筑前米	代六十七八匁前後

中國米　代五十五六匁前後
廣島米　代六十四匁前後
金　代六十四匁七八九分
錢　代九匁二分ヨリ一分四五厘
昨冬諸家四歩ノ登米ニテ、無ㇾ據先高直也、奥北ノ國々凶作ニテ、加州例歳ノ登リ米モ、纔ニ二萬石也、但シ例ノ登リ高、九萬石ヨリ十二三萬石ナリ、内一萬石程ハ江戸廻シナリ其餘津輕•庄内•新發田ヲ始メ、總テ東北ノ國々登リ米至テ無ㇾ數、其上大阪入津ノ有米モ、諸家四歩登セニ付、總體ニテハ無ㇾ數、依ㇾ之米價高直ニハナレドモ、都テ不景氣ニテ、例夏米建テ物加賀米モ二萬石ナル故、常例ニモナリガタク、無ㇾ據筑前米ヲ建テモノトス、五月相庭建替
筑前米　代六十九匁三分
肥後米　代七十一匁
中國米　代五十五匁七分
廣島米　代六十四匁三分
凡六七月迄、大抵相庭右ノ前後直段也、且當二三月ノ頃ヨリ、筑後有馬侯藏米出切手ノコトニテ騷動シ、但シ此一件小册ニ誌ス、依テ略ㇾ之近來勝手向借財多ク迷惑ニ付仕法立ラレ、借財返濟ノ信ヲ失ヒ、彌以テ市民ヨリノ借財、金銀ノ融通難ニ出來、依ㇾ之無ㇾ據藏米ノ出切手ヲ以テ借財シ辨用有ㇾ之處、元來ハ空米ニテ買人

出米ニ向ヒ、現米不足ヨリ事露顯ニ及ビ、既ニ公訴ニ及ビ騷動ス、尤出米切手高四十餘萬石ト聞ユ、前代未聞ノコトナリ、舊年米價引キ上ノ御主意ニモ、市中兩替ノ者ヘ拜借銀マデ被ニ仰付一、諸家ヘ出切手モ丈夫ニ入替可レ致ト令セラレシコト有ルニヨリ、多分此筑後米切手兩替始メ、市民ノ者ヨリ金銀ノ入替ニ相成リ、又ハ公邊御用ノ買米ニモ、切手上納ニ相成リテ、何レ切手米高四十萬石ト云大數ニテ、公邊裁許付ガタク、至テ右一件六ツケシク、諸藏米ノ切手ニ構ヒ、是ヨリ何トナク米價不ニ引立一、（此一件事長キ故、別記小冊ニ記ス、依テ略レ之）當八月ニ至リ、當年モ諸國トモ大抵ノ作ニテ、平均七八歩位ナリ、其上昨年來大阪有米相庭高直ニテ、諸國ヨリ買注文無レ之、諸國ハ又其國ノ二歩正米拂有レ之、旁々ニテ大阪ノ有米多ク、筑後米切手ノ騷動ニ付、諸藏米出方無レ之、（但シ此等別記ニ有リ）依レ之來ル亥年モ、米充滿ノ聞エアリテ、又市民迷惑ニ及ブベキ御主意故ニ哉、當九月ニ至リ諸家ヘ被ニ仰出一候ハ、當年モ諸國トモ相應ノ作方ノ赴、依レ之大阪表登セ米ノ儀ハ、去ル申年申渡候通、廻米高ノ內二歩減石登セ仰付ラレ、二歩通リハ國々ニテ糴圍可レ致ト被ニ仰出一、其外諸國家中米百姓作徳米納屋拂ノ分モ、去酉年ノ通被ニ仰渡一、川口ノ米穀入津改役所モ其儘ニ差置レ、嚴重ノコトドモナリ、十月十七日例新穀相庭建テ替、建テモノ肥後米ナリ

肥後米

代初札七十七匁一分

二札六十五匁

今月下旬六十一二匁前後

但シ館入問屋ノ者、建テ米御祝儀ト唱ヘ、初日入札スルコトニテ、正當ノ直段ニアラズ、是等ハ明和七年カタク禁ゼラレシコトナリ

筑前米　代六十七匁四分

中國米　代五十四匁三分

廣島米　代六十一匁五分

金　代六十四匁八分四五厘

錢　代九匁二三厘

右相庭ノ處、下旬ニ至リテハ前文ノ筑後空米切手ノコトニ付、市中兩替方切手入レ替ノ儀、銀融通出來ガタク、依レ之日々相庭下落ニ及ブ、十月二十七八日頃、肥後米六十二匁、筑前米五十七匁五分、廣島米五十四匁三分位ノトコロ、又其頃ヨリ肥前藏出米滯リ、筑後同樣ノコトニテ、右空米凡二十萬石餘ト聞ユ、依レ之彌諸家ノ出來切手ヲアヤブミ、米穀不捌ケニテ米價不ニ引立一、然ル所當年諸家大阪登セ米八分ノ內ヘ、昨酉年國々圍糀ノ古米差加ヘ入津有レ之赴風說ス、然レバ大阪ハ古米多ク、來年ニ至リ新穀不足シテ、其上當年西國・中國・九州筋大抵平均七八步ノ作ノ赴、コレニ依テ來亥年ハ米穀拂底ニテ、必高直ニ可レ成ト見込風聞有レ之ニ付、連々ニ米價引上ゲ、十一月中旬後、肥後米六十六匁七八

然ル所六月廿八九日、大雨ニテ城州木津川出水强ク、堤キレ所多ク、淀川筋滿水ニテ、川下モ野田新家堤切レ、其邊水損多ク、河州邊ハ無難トイヘドモ山水湛ヘ田畠水下ニ成リ、其餘、尾・三・勢・近・濃・紀州邊迄大洪水ニテ田畠始メ人畜水亡多ク、阿波・土佐邊同樣水損多ク、肥後安蘇山春ノ頃ヨリ燃エ出、安蘇郡一圓田畑灰砂ニ埋レ不毛ス、依レ之七月上旬一時ニ米價引立、加賀米六十一二匁、肥後米七十二匁餘ナリ、然ルニ七月ヨリ八月ニ至リ、天氣快晴打續キ、追々作毛見直シ、其上中國・九州邊、奥北國國風水ノ難ナク、豐穗ノ唱ヘ有レ之、依テ又米價下落シ、九月中旬肥後米六十三四匁、筑前米五十九匁前後ニテ、十月ニ至リテハ、又各々四五匁宛下落ス、當冬建テ物米筑前也、十月十七日建テ替相庭

筑前米　代六十六匁八分

肥後米　代六十六匁五分

中國米　代五十三匁

廣島米　代五十四匁七分

但シ右ノ米價ハ各藏米初札ノ直段ナリ、翌十八日相庭

筑前米　代五十八匁

肥後米　代六十一匁

中國米　代四十九匁

廣島米　　代五十三匁三分

前文ノ通リ當年モ諸國豐熟ノ唱ヘ有レ之ニヨリ、諸家大阪廻米ノ分モ、去ル酉年被ニ仰渡一ノ通、前例登セ石數ノ内二分減ジ國圍被ニ仰付一、殘リ八歩通リヲ以テ、大廻米被ニ仰渡一、又市中ノ者引受居候、諸侯家中米幷百姓作德米納屋賣ノ分モ、是又去ル酉年被ニ仰渡一ノ例ヲ以テ引受、其餘ノ廻米ハ決テ入津不ニ相成一赴仰渡サレ、コレニ依テ木津川・安治川口ノ米穀改役所モ、舊年ノ儘ニ差置レ、嚴重ノ事ドモ也、尤諸家二步圍ノ籾米モ、夏中フケ痛等出來迷惑ノ赴ニ付、當冬新籾ト詰替ヘ、古籾スリ立拂度ヨシ願立ラレ候處、此儀ハ當年新穀見積ノウヘ詰替ヘ、古籾摺立候儀ハ勝手次第、然レドモ大阪ヘ廻米ノ儀ハ、前文ノ通リ八分登セニ仰渡サル、上ハ、右摺立ノ籾古米ノ分モ、右八分ノ内ヘ都合ニ致シ登セ可レ申、決テ八分ノ外ニハ相ナラザル趣嚴重ニ仰出サル、依レ之古籾摺立米積合セ入津有レ之ニ付、古米ノ分又相庭下落ニ及ブ、當九月晦日、大阪有米勘定八十一萬四百俵餘、昨戌年九月ハ、五十萬二千六百俵ニテ、凡三十萬餘、今年ハ増米ノ上ニ、追々諸國豐熟ノ聞エ有レ之、米價次第ニ下落シ、十月廿一日後ヨリ十二月ニ至リ、筑前米五十七匁、肥後米五十八九匁位ニテ、當極月廿四日、納相庭迄格別ノ高下ナシ

筑前米　　代六十目

肥後米　　代六十一匁五分

中國米　　代五十目五分

廣島米　代五十五匁五分

金　代

錢　代

當冬例ノ通リ、諸藏正米切手ヲ以テ、市中ヨリ銀入替ノ儀モ、右四藏ノ切手ヲ以テ多分有レ之、其餘諸藏ノ切手ハ不信用ノ趾風評有リ、是等ハ全ク昨戌年筑後藏正米切手不筋ノ儀有レ之、公裁ノ上右切手ノ分屋敷ト直相對ニナリ、正米切手引當テ出銀ノ分、皆々年賦濟ニ相成リ、銀主ドモ迷惑ニ及ブ、是等ハ自然此以後諸藏ノ内現米不正切手ヲ以テ銀入替ニ取リ、空米ナル時公訴ニ及テモ、筑後米ノ例ヲ以テ直相對ニナリ、年賦スミニナリテハ出切手ノ威光モ無レ之、銀主迷惑ニ及ブヲ見込、自然ト四藏ノ外ノ出切手ハ信用セズト見エタリ、コレニ依テ四藏ノ外ノ藏米出切手不信用ニ付テハ、其藏ノ賣米直段ニモ響キ、自ラ米價下落シ、銀ノ取入モ薄ク迷惑セラルル、前々ノ登セ米ナレバ、又國圍ノ餘米ヲ積登シ、賣捌代銀ヲ以テ下落ノ不足ヲ融通スル手段モアルベキナレドモ、八歩ノ登セ米ニテ増賣モ出來ガタク、殊ニ迷惑セラルル、然レバトテ諸家増シ賣ノ免シアラバ、猶々米價下落ニ及ブベキ歟、然レドモ至テ下落ニ及ブ時ハ、必市民又買置ノ心出來、下落ニ及ブ程ノコトモ有ベカラザルカ、其餘米銀ノ融通ハイカヤウトモ成ルベキ仕法アラン、（但シ米價下落ニテ賣ルニ忍ビザル時ハ、暫ク現米ヲ質ニ入レ借財シ、直段ノ上ルヲ俟ツテ賣ルコト、諸藏ノ内イカ程モ舊例ニ有ルコトナリ）現米ヲ國々ニ圍ヒ持テ、金銀ノ融通ニ苦シムハ迷惑ノ方ナラン、然レバ諸侯方ニ八歩登セノ功ハ薄キ方ナ

ルベシ、然レドモ眼前大阪有米減ズル事故、一時ハ其功モ顯然ナレドモ、自然凶作アランニハ、國々圍ヒ米御免有テ、出ルト云フ推量アル故、格別米價ノ引立トナラズシテ、金銀ノ融通ニ却テ差支ルト云理リモアラン歟、又市店小賣米ノ商人等ハサカシキモノニテ、八歩登セノ功コレアル時ノ高キ直段ヲ以テ買入レシ赴ニテ、諸米ニ直段押シナラシ、白米ノ小賣スルユヱ、當時一升ニテ錢八十四五文ナリ、然レバ一升代銀八分四五厘ニテ、一石八十四五匁ノ直段ニテ、二割ノ徳用ヲ引テモ、玄米六十七八匁ニ當リ、其餘繩俵糠等ノ餘徳アリテ、二割ハ五割ニモ當リ高直ノ方ニテ、下民モ迷惑ハ人ノ知ル所ナリ、是等モ米價下落ニテ八歩登セ米ヲ難澁ニ思フ方ナルベシ、所詮士農ニ益アレバ工商ニ不益ナリ、工商ニ益アレバ士農ニ不益ニテ、米價ノ高下平等ニハ推シ及ボシ難シ、上古ハ今ノ如ク金銀判無レ之又潤澤ナラズ、尤砂金・黄金・白金等アレドモ、皆官家ノ取扱ヒニテ、下民常ニ交易ノ用ニスベキモノニハ非ズ、是至テ貴キモノ故ナリ、依レ之下民ハ錢ノ通用ヲ專トス、故ニ錢ノ位貴ク又米穀モ人命ヲ養フ大切ノモノ故是モ貴ク、此貴キト貴キヲ以テ米錢交易シ、其餘ハ多分又粟（玄米ナリ）ヲ以テ諸物交易ス、米ハ澤山ナルモノニテ、萬ノモノニ易ユル時嵩ダカキモノ故、密ニ取扱フコトナラズ、又貴キモノ故人モ呑ム心アリテ、儉約ノ示シナケレドモ、自然ト驕奢ニ至ラズ、又市民モ米穀ヲ大セツニ思フ故、夫々分限ニ應ジ家々ニ圍ヒ、今ノ如ク金銀ヲ貯フモノ少ク、又盗ヲナスモノモ銀錢トチガヒ米穀ハ倍（カサ）ダカキモノ故、盗ムニ不辨利ナルヲ以テ、オノヅカラ其罪人モナク、人欲ノコヽロモ薄ク世ノ中平穏ナリ、然ルニ保

元・平治ノ亂ヨリ、天正・慶長年迄凡五百年ノアヒダ、世穩ナラズシテ次第ニ米錢融通不辨利ナリ、其上鑄錢ノコトナク、既ニ足利ノ世異國ヘ諌諂シ、錢ヲ乞求シ程ノコトニシテ、金錢ハ至テ不自由ニテ甚貴シ、然ルニ二百年以來泰平盛隆ノ御世ニアヒテ、三幣トモ充滿シ、器財諸物年々高上ニナリ、善美ヲ盡シ、昔ノ事ハ知ラズ、タヾ士民トモ分限ヲ忘レ、驕奢盛ニナレリ、是等ハ皆三幣ノ潤澤ナリシ故ノコトニテ、餘リモノゴト自由ナルニマカセ、又金銀悖テ出、却テ國困窮ニ至ル故、士大夫トイヘドモ利ヲ爭フヤウニナレリ、然レドモ今上古ノゴトク、粟ヲ以テ萬物交易スルヤウノ經濟ハ、迚モ後世ノ人氣ニ不レ合シテ不レ行、今土地ノ盛衰ヲ考フルニ、多分金銀ノナス所ニシテ、コノ融通ヲ押ヘテハ、米價ノタメニモ土地ノ爲ニモ宜シカラズ、元來金銀ハ米穀始メ萬物融通サスルノ用ニコシラヘ設ケシモノ故、其用ヲ押ヘテハ土地ノ衰微トナル道理ナリ、金銀ハ飢ルニナメテ腹フクレズ、寒キニ積ミテ煖カナラズト卑シムベカラズ、是等ハ上古ヨリ二百年前、萬物不自由ナル時ノ教誡ニテ、カヽル難レ有承平ノ世ニ安居シテハ、ナムベキ金銀アラバ、米穀ハ勿論食料トナルベキ、山海ノ美味イカ程モ手ニ入ルベシ、積ムベキ金銀アラバ、綿布イカ程モアリテ、飢寒イカヤウニモ凌グベシ、是等ハ亂世ト違ヒ、治世廣大ノ恩澤ヲ以テノ故ナリ、然レドモ安キニ居テ危キヲ忘レズ、天災地妖何時不レ知、士民共分限ニ應ジ、豫メ米金備ヘ設ケ置ベシ

一　去ル酉年大阪市民ヘ被二仰付一シ御用金モ、諸侯方ヘ拜借ノ分、今年モ其儘ニ差置レ、市民銀主共

へハ一ケ年三朱ノ積リヲ以テ御下ゲ金有レ之、一統御仁恵有ガタク頂戴致ス、尤諸家拝借ノ分、御利足上納セラル、コトナク、ミナ公儀一ツ手ヨリ御賄ヒ有レ之、年三朱トイヘドモ廣大ノ銀高ニテ乍レ恐御不益ノ儀、難レ有モ恐レ入事ドモナリ、當年ハ東照宮二百年ノ御神忌ニテ、則日光山ニオイテ御祭式在レ之、勅使飛鳥井殿宮門跡始メ、近衛殿其外殿上人樂人迄、皆々東都へ參向有リテ、江戸ハ勿論京・大阪迄モ賑ヒ、諸國平穩ニテ五穀豐熟シ、目出度年也

當亥年大阪濱方越年有米

　百六十二萬五千五百五十俵

　昨戌年ヨリ

　四十萬四千七百五十俵增米

天正・慶長年ヨリ、文化十二乙亥年迄、凡二百三四十年來米金相庭ノ高低舊記ヲ以テ大率記ストイヘドモ、年々時々寸陰ノ間ニ高下有テ、委シク記スコト不レ能、玆ニハ大抵一ケ年平均ノ積リヲ以テ記ズコトモ有テ、月々ノ高下ニ不レ拘、依テ其年其月ニヨリテ、米金至テ高直ナル月モ有、又下直ノ月モアリテ、舊記一ケ月ノ高下ヲ以テ推ス時ハ、此物價ノ部ト高低齟齬スルコトモアリ、又年々ノ事實是又其凡ノ情態ヲ記シテ、相違ノ事ドモ多分アラン寛察スベシ、玆ニハ唯二百年來米金高下ノ大概ヲ記スノミ、文化十三丙子年ヨリノ物價別卷ニ記シ、此圖彙物價ノ部ハ、今亥年迄ニテ玆ニ筆ヲ止ム

三貨圖彙附錄卷之一　權量之部

草間直方輯錄

往古國史ニ載ル所ノ沙金、黃金何兩ト有ル、此一兩ノ量目ハ今ノ秤目十文目ノ事ナラン歟、尤時代ニヨリテ變レリヤ不レ知、凡本邦孝德天皇ノ御宇ヨリ以來ハ唐制ナルベシ、高倉院安元元年南宋淳熙二年ニアタル平重盛、宋ノ育王山ヘ黃金三千兩渡スト云モ、金小判ノ兩ニアラズ斤兩ノ兩ナリ、此時代今ノ如ク小判ト云ハナシ、斤兩ハ唐ノ制ヲ用ヒシナルベシ、權衡ノコト黃帝ヨリ起リ、成周ニ至リ、秦・漢相踵デ以來唐ニ至ルマデ各々分量異ナリ、本邦權衡ノ事何レノ世ヨリ起ルト云コトヲ不レ知

神武天皇ノ御宇ハ、凡周惠王・襄王ノ世ニ當ルト云、夫ヨリ惠公ニ至リテ、周八百七十三年ニシテ亡ブ、此時凡本邦孝靈天皇ノ御宇ニ當ル、是マデハ周ノ世ノ古衡ヲ用ヒシヤ、又別ニ制アリヤ不レ知、此時未ダ異國通路ノ事モナケレバ何レ不レ詳、秦ノ世ニ成リテ、始皇ノ時東海ニ不死ノ藥ヲ求トアリ、是我朝ノコトナリヤ不レ知、異國ノ書ニ本邦ト通ズル始ハ、後漢光武ノ中元二年ニ見エタリ、人皇十一代垂仁天皇ノ御宇ナリ、其後安帝ノ元初元年ニモアリ、是十二代景行天皇ノ御宇ナリ、右兩帝ノ頃ヨリ三韓トモニ屢相通ズルコトアリト見ユ、漢ノ世ハ高祖ヨリシテ獻帝ニ至リ、凡四百九年ニ亡ブ、本邦

成務天皇ノ御宇ナリ、其以來神功皇后ヨリ推古天皇ノ御宇マデハ、漢以來三國ニワカレ、晋ヨリ隋ニ至ルマデハ、替々起リテ世ヲ保テリ、コレニ依テ權衡ノ法モ悉ク異ナリ、本邦何レノ衡ヲ用ヒシヤ不㆑可㆑知、漢ノ世ハ永クツヾキシ世ナレバ、凡漢ノ制ヲ用ヒラレシナルベシ、推古天皇ノ御宇ハ凡隋ノ煬帝ヨリ唐ノ高祖ノ世ニ當レリ、夫ヨリ孝徳天皇ノ御宇ヨリシテ、遣唐使ノ事起リ、是ヨリ本邦唐ノ時世ニ移リ、都テ唐制ヲ用ユル事多シト云ヘリ、權量ノ事モ此頃ヨリ起ル歟、唐ノ高祖武徳八年九月ニ、「敕㆓大府官㆒檢㆓校諸國權量㆒」ト通鑑ニアリ、此時ヨリ唐モ制ヲ改始メ歟、本邦ノ事ハ何レノ世ヨリト云事ヲ不㆑知

扶桑略記、舒明天皇、十二年庚子冬十月、始定㆓斗斤兩㆒ト云々

度量衡考云、宋依㆓開元通寶㆒造㆑錢定㆑秤、元明亦效㆓此製㆒以爲㆓造錢之則㆒所㆑謂積㆓十錢㆒重一兩、同㆓於今秤㆒明、今秤一錢之目、昉㆓於開元錢㆒其輕重無㆑差可㆑知」トアリ、是十錢積テ重一兩トハ、開元ノ定也、仍テ今秤ノ目一文目ハ、開元錢一文ノ量目ナリ、十文目ヲ一兩トスル事、唐ノ制ニシテ、則開元錢ヲ法トス、今後藤家ニテ造ル分銅十匁ハ、銘ニ一兩トアリ、百目ハ十兩、五百目ハ五十兩トアリ、皆唐ノ制ニヨル歟、右分銅ノ制、何ノ世ヨリ起ルト云コトヲ不㆑知

續日本紀、大寶元年六月、頒㆓付新印様㆒（ワカチサヅケシム）（タメシナ）

令義解ニ、凡用度量權官司（謂㆓大藏省及諸國司之類㆒）皆給㆑様、其様皆以㆑銅爲㆑之」トアリ、今分銅ノ形ノ物ナルヤ、

右様シ分銅秤ハ世ニ存セズ、仍テ其形ヲ不レ知、今造ル所ノ分銅秤ハ、慶長年中神祖ノ命有テ、今ノ座方ノ祖ニ造ル事ヲ免許セラル、分銅ノ形如レ今表ニ兩銘アリテ、鶴龜ノ模様毛彫アリ、裏ニ後藤家極印有ト云、按ニ慶長時代ノ秤ニ、寶盡シ或ハ秋ノ野ニ蝶ナドノ模樣有レ之秤アリ、コレ等ハ諸侯ノ好處歟、右ノ分銅モ此類ナラン歟、併シ慶長以前ノコトハ不レ知、元和以來寛永ノ頃ノ分銅ハ如レ今ナレドモ美銅ニシテ彫銘モ正シク、黄唐銅ト云ガ如シ、今用ユルトハ制至テ精シ、是度量權ノ三ツノモノハ、官ヨリ出デ世ニ重ンズル所、且ハ自然異國ヘ渡リテモ、我邦ノ耻ナカラントノ故ヲ以テ造リタルナルベシ、此分銅大阪ニテハ十人兩替ノ者、寛文年以來所持シ、仲間ノ新分銅、是ニ合セテ輕重ヲ量リ、於二會所一月々立會改レ之、是ヲ様（タメシ）見セ新分銅ト云、元文年中後藤家ヨリ諸國分銅改ノ時、是ヲ取上ゲ潰シトス、仍テ今其古物世ニ存セズ、秤ハ猶古物世ニ殘リテ、今モ座方ノ改ヲ請テ用ルコトヲ免ズ、右古分銅モ座方ニテ輕重ヲ様シ補ヒテ、世ニ用ヒ來ラバ難ナカラン歟、可レ惜々々、又慶長年ニ井伊・藤堂ノ祖ヘ、神君ヨリ金ノ法馬ヲ給ヒ、又豐臣ノ世黄金ニテ千枚分銅ヲ造ル、近世又御用ノ分銅被レ鑄レ之ト云、皆今ノ分銅ノ形チニテ、後藤家造ルナルベシ、是等ハ其形チノミニシテ別ノコトナリ、今海內用ユル所ノ分銅、是又後藤家ヨリ造リ出ス、併シ元和年前後、一統ナラザル時代ハ、右分銅モ民間ニ數ナク、依テ士民私ニ分銅ヲ造リ、極印ナクシテ是ヲ用ヒシナリ、漸ク治世ニ及ビ、寛文五年始テ公ノ制令アリテ是ヲ改メラル、其時右極印ノ分銅ハ其儘目方相改メ、於レ無二相違一ハ、後藤家ヨリ極印

ヲ打印料ヲトリ、其儘㆓通用セシトナリ、今ノ世ナラバ無極印ノ分銅ハ、後藤役所ヘ可㆓取上㆒ヲ左モナクテ極印ヲ打通用セシハ、誠㆓古代ハ殊勝ナルコトナリ

覺

一　金銀之分銅之儀、從ㇾ是以前後藤四郎兵衛仕來之處、近年猥りに相成、似せ分銅いたし遣者其聞え有ㇾ之候、向後かたく可ㇾ爲㆓停止㆒也

一　分銅一流數十七、（但し此目四百六十六匁五分）　此代銀二十五匁

一　五百目之分銅壹　此代銀十五匁

一　三百目之分銅壹　此代銀拾匁

右新規に拵出す之代銀也

一　極印無ㇾ之分銅一流分改之極印打候代銀八匁

一　極印無ㇾ之五百目之分銅改之極印打候代銀五匁

一　極印無ㇾ之三百目之分銅改之極印打候代銀三匁

右之通に候間、極印無ㇾ之分銅、所持之輩は京都・江戸・大阪手寄次第、四郎兵衛所へ遣ㇾ之極印打たせ、此定之通打賃出し可ㇾ申、若此上極印無ㇾ之、似せ分銅其儘密につかふにおいては、來年正月より以後者改ㇾ之、急度可ㇾ行㆓罪科㆒者也

寛文五年巳三月日

其後七十六年ヲ歴テ、但シ此年數ノ間、上下皆古分銅ヲ用ユ

元文五申年、諸國又新分銅ニ改メ、古分銅ノ分不レ殘停止ニ相成リ、座方ヨリ取上ゲ潰シ銅ト成ル、可レ惜々々但シ古分銅掛目壹メ目ニ付、代銀十四匁宛ニテ、後藤ヘ買上ル新分銅直段

一　貳百目下タ一ト通リニテ　代五十一匁

一　三百目分銅一ツ　代二十八匁

一　五百目分銅一ツ　代三十八匁

右定直段也、又大阪本兩替仲間ヘ買取リ候直段ハ左ノ通、尤兩替ノ外ヘハ賣出シ不レ申事

一　二百目下タ一通ニテ　代三十三匁
又増銀外ニ四匁

一　三百目分銅一ツ　代十二匁二分
又増銀外ニ二匁

一　五百目分銅一ツ　代十八匁三分
又増銀外ニ三匁

右ノ通追々改メ有レ之ドモ御觸始メ略レ之、右分銅後藤ノ系圖等、未レ考レ之

秤座守隨ノ家ハ、三河後風土記ニ云、秤師守隨兵三郎ト云者、初ハ武田家ニ縁有、甲州ニ仕シケル、家康公ノ關東入國ノ時ニ隨ヒ、甲州ヲ立去リ武州ヘ來リ、多門傳八ニ縁有テ頼ミ、井伊直政ニ付テ、御秤師タラン事ヲ願、神君彼者甲州ヨリ付來ル事ヲ感ゼラレ、則御免ナリ、後朱印ヲ給フ

自今以後、分國以二守隨秤一黄金可二賣買一者也

天正八年十二月　　御朱印

京秤座神ノ家ハ、本國ハ勢州ニテ、京室町家ニ仕官シ、秤座免許セラレ、夫ヨリ代々京住也、慶長年ニ　大權現二條ノ城ヘ登御ノ砌、先祖豐後掾被二召出一、御目見ノ上不二相替一京秤座免許ヲ蒙リ御用被二仰付一、其後元和元卯年三月駿府ヘ被二召出一、秤ノ儀御赦免ニテ、善四郎一人ニ被二仰付一、（但シ三河後風土記ト齟齬スレドモ、神家書ヲ以テ記ス）向後別人ノ秤用ヒ間敷旨、御代官衆ヘ被二御渡一、其節諸秤可二相渡一旨蒙レ仰、依テ悉ク諸秤御代官ヘ相渡候

嚴有院樣御代、明曆元未年、江戸表ヘ被二召出一、甲州金秤被二仰付一候古例モ有レ之ニ付、守隨彦太郎ヨリ相願、東國通用秤ノ儀相願候ニ付免許セラレ、此後東國西國守隨・神兩家ヨリ、秤ノ儀ハ支配仕候樣被二仰付一、此以後ヨリ兩家ニテ秤座相勤ル

但シ東三十三ヶ國　　守隨彦太郎

西三十三ヶ國　　神　善四郎

其後寛文八戊年秤ノ御證文、右兩人ヘ被二下置一、其節屋舗地拜領ス、右御證文ハ御代々被二下置一候
御本丸又西ノ御丸ヘハ、毎年拜禮ニ罷出
御目見ノ節御香具秤ト云ヲ献ズルヲ例トス、此秤
一　上目十五匁掛ムタメ有リ但シ星一ツ一分ヅヽ
一　前目五十匁掛ヅヽ掛廿匁但シ星一ツ二分ヅヽ
前ノ上目四十四匁十兩掛ムタメ有リ但シ星一ツ、二分七厘五毛ヅヽ
一　向目百六十目掛ヅヽ掛五十目但星一ツ一匁ヅヽ
但シ皿オモリトモ銀
右ノ節御時服拜領ス、元祿十七申年ヨリ、隔年拜禮、又　禁裏御所ヘモ年頭・八朔ニ御禮相勤御香具秤ヲ献ズ、此時御所ヨリ青銅二貫文ヲ例トシテ被二下置一、此香具秤ト云ハ
一　上目五十目、掛ムタメ有リ但星一ツ二分ヅヽ
上ノ前目四十四匁、十兩掛ムタメ有リ但シ星一ツ二分七厘五毛ヅヽ
一　前目百六十目ヅヽ、掛五十目但星一ツ一匁ヅヽ
一　向目百五十目ヅヽ、掛百目但星一ツ十匁ヅヽ
漢書律曆志曰、權者銖・兩・斤・鈞・石也、所三以稱レ物平レ施知二輕重一也、本起二於黄鐘重一、一龠容二千二百

黍、重十二銖、兩ㇾ之爲ㇾ兩、二十四銖爲ㇾ兩、十六兩爲ㇾ斤、三十斤爲ㇾ鈞、四鈞爲ㇾ石、」算學啓蒙ニ云、「黍衡之名形大如ㇾ栗、十黍爲㆓一累㆒、十累爲㆓一銖㆒、六銖爲㆓一分㆒」ト云、此義ニヨレバ則百黍ヲ銖トス、六百黍ヲ一分トス、二千四百黍ヲ兩トス、則二十四銖ナリ、本朝權衡ハ、何レノ世ヨリ起ルト云コトヲ不ㇾ知、「續日本紀文武天皇、大寶二年三月乙亥、始頒㆓度量于天下諸國㆒、同和銅六年四月戊申、頒㆓下新格并權衡度量於天下諸國㆒」云々、令義解曰、「權衡廿四銖爲ㇾ兩、三兩爲㆓大兩㆒、十六兩爲ㇾ斤」ト云、是漢ノ制ト同ジ、唐志ニ、「武德四年、鑄㆓開元通寶㆒、徑八分、重二銖四參、積㆓十錢㆒重一兩」ト云、以ㇾ是考フレバ十錢則十匁也、一錢ハ一匁也、此一匁ヲ二銖四參トミル時ハ、十錢則二十四銖ナリ、然レバ十匁ヲ兩トシ、是ヲ廿四銖ト見ル時ハ、一銖ハ本邦ノ四分一厘六毛六弗六々ニ當ル、右令義解ニ云、廿四銖ハ唐ノ世ノ制モ同ジ、小兩ノ一兩ハ十匁、大兩ノ一兩ハ卅目、一斤ハ小兩ノ十六兩、則百六十目也、金銀銅錢穀物ノ類ハ、皆大ヲ用ヒ、其外皆小ヲ用ユルト云、又拾芥抄ニ、六銖ヲ爲㆓一分㆒、四分爲㆓一兩㆒、十六兩ヲ爲㆓小一斤㆒、三十八兩爲㆓大一斤㆒、是右ニ云、今ノ秤ヲ以テ四分一厘六毛六弗六々ヲ一銖トシテ、六銖合スレバ二匁五分トナル、是一分ナリ、此一分ノ二匁五分ヲ四ツ合スルヲ一兩トス、則十匁也、十六兩ハ百六十目、是一斤也、然レバ往古ヨリ唐制ヲ用ユル事明ケシ、又京村井中漸先生云、徂徠先生ノ度量考ニモ、唐・宋ニ至テハ其說失考多シト云リ、周・漢ノ古秤ヲ求ルニ、唐ノ代積㆓十錢㆒重一兩ト云、十錢ヲ置、四因三飯スレバ、十三匁三分三厘三毛三三ト成ル、是ヲ實數トシ、四半ヲ法トシ、實ヲ除ケバ

周・漢ノ一兩二匁九分六厘二毛九六二餘ト成ル、然レバ古ノ一兩ハ今ノ三匁ニ近シト云リ、通雅ニ沈存中程大昌ガ云、古ノ一斤ハ爲ニ今五兩ニ（當時五十匁也）而少シ、一兩ハ爲ニ今三錢ニ（當時ノ三匁也）而少シ、又陳言ガ三因方論云、六銖錢四箇ハ、（即廿四朱ニシテ一兩ノ數ナリ）是開元錢三箇ノ重サトナリ、（但開元錢一箇ノ重サ今ノ一匁ナリ）是等ノ說ヲ以テ、隋志ノ文ヲ參考スレバ、前ノ通リ三匁ニ近シ、周・漢ノ一兩モ是ニ同ジ、杜氏通典ニ隋制前代ノ三兩ハ、當今一兩ト云ル、禹・文・周ノ時ヲ云フ、此時玉秤ト云ヘル者、今ノ三錢三分三厘三毛不盡ヲ此秤ノ一兩トス、是ヲ小秤ト云フ、此三兩ハ隋唐ノ一兩ニシテ、今ノ十錢目ニ當ル、是ヲ大秤ト云フ、傳ヘテ隋・宋ニ入テ廣秤ト云フ、本邦ノ法馬（フンドウ）ハ、十錢目ヲ一兩トス、是隋唐ノ大秤ノ制ヲ稟テ、今ニ至ル迄變ゼズ、元來秤ノコトハ、後周ノ武帝、保定元年辛巳五月ニ庫ヲ修シ、地ヲ掘テ古玉斗ヲ得タリ、此時スデニ古度ヲ失亡セシカバ、是ヲ姫周ノ正器ト思ヒ、其玉斗ニ據テ尺ヲ造ル、是ヲ玉尺ト云フ、其玉尺ニ二寸ヲ加テ大尺ト云ヨリ、玉尺ヲ小尺ト云、又升ヲ造リテ玉量ト云フ、其玉量ヲ三双倍ニシテ大量ト云ヨリ、玉量ヲ小量ト云フ、又秤ヲ作ル、是ヲ玉秤ト云フ、其玉秤ヲ三双倍ニシテ大秤ト云ヨリ、玉秤ヲ小秤ト云フ、如レ此大小倶ニ用ユルコトハ、後周ヨリ始リテ、隋・唐ノ二代是ヲ行フト也

本邦ノ昔モ其制ヲ稟テ、度・量・衡各々大小二種ヲ用ヒシニヤ、延喜式ニ見エタリ、後世ニハ大ノミ行ハレテ小ハ聞事ナシ、度・衡ノ二ツハ唐ノ遺風ヲ存セリ、量ニ至テハ大ニ古法ニ隨フ、漢秤ハ銖・兩・斤・鈞・石トテ、五ツノオモリ有、其形ハ漢志ヲ按ズルニ、環ノ如ク圓ニシテ中ニ穴アリ、今ノ天秤（テンビン）ニ

法馬(フンドウ)ヲ用ユル如ク、五權ヲタガヒニ取カヘテ、輕重ヲ知ルト也、又今ノ等子(ハカリ)ノ幹上ニ星ヲモリテ、錘一ツヲ持ツテ前後ヘ往來スルコトハ、既ニ唐ノ時ニ行フト見エタリ、唐ノ包何ガ詩ニ「願以ニ金秤錘一、因レ君贈ニ別離一、鈞懸ニ新月一吐、衡直衆星隨」ト云リ、又陳佐ガ衡ノ賦有リ、皆今ノ等子ト同ジ、又分・厘・毛・絲・忽ハモト尺度ノ名ナリ、後世ハ秤ノ名トナレリ、石ハモト秤目ノ名ナリ、後世ハ量目ノ名トナレリ、明ノ董穀ガ說ニ、今ノ米十斗ノ重四鈞ヲ石トスル故ニ、石ト云フトナリ、然レドモ既ニ五經算術ニ見エタレバ、唐ヨリ已前ノ事也ト云々、續日本紀ニ、養老五年正月ノ制令ニ「以ニ銀一兩一、當ニ一百錢一行ニ用之一、同六年二月、以ニ二百錢一當ニ銀一兩一」トアリ、此代始テ銀一兩ト云名目出タリ、是又一兩ノ量目十文目ナラン、尤銀錢一以テ銅錢二十五ニ當ツル、此二十五ヲ四ツ合スレバ百文、此銅錢百文ヲ銀一兩ニ當テ行ニ用之一、銀一兩ト云ハ銀錢四文ニアタル、銀錢四文ノ量目十匁トミレバ、一文ノ量目二匁五分、此二匁五分ハ則拾芥抄ニ云フ一分也、又其後ニ百錢ヲ以テ銀一兩ニ當ツルト云ハ、其頃銀ハ至テ貴キ故、銀錢ノ吹方無レ數ヲ以テ、又銅錢ヲ信ニセラル成ルベシ、往古ノ一兩ト云ハ十匁ナリ、若江從四位長公朝臣ノ云、後三條院政所記（私ニ云、延久三年、始テ記錄所ヲ置ル）ニ、砂金十兩（開元百文）トミエタリ、則十兩量目百目ナリ、然レドモ其頃國所ニヨリ高下アリテ、關東ハ十兩八十文、關西ハ十兩九十文ト見エタル由云ヘリ、右政所記末レ見、本邦今諸物一兩ト立ル所ノ量目各異ナリ、古金ノ一兩ト云ハ四匁七分六厘、今四匁八分ト云、是ハ大判ノ部ニ記ス、其餘乾金ハ二匁五分、今ノ文金ハ三匁五分、銀一兩ハ四匁三分、

其他藥物多クハ四匁ヲ以テ一兩トス、前ニモ記ス如ク、往古ハ量目十匁ヲ一兩トセシニ、後世金銀次第ニ不自由ニ成リ、鎌倉將軍ノ末ヨリ足利ノ世ト成リ、兩目ノ定メモ自然ト減省成リシニヤ、京目・田舍目ト云コト有、昆陽漫錄ニ云、由木佐衞門ノ書ニテ見レバ、古ヘハ秤ニ京目・田舍目アルコト明カ也、又其文左ノ如シ

天正六年戊寅三月十七日

北條陸奥守平氏照內

由木左衞門景盛

拜遣高野山龍光院之內

宗恩坊

二親爲ニ成佛一、高野山月牌奉ニ納之一

黃金二兩京目

國宗刀長サ二尺三寸

扨天正ノ頃大判有リト見ユレドモ、小判ハ無キニヤ、此金一兩ハ十匁ナルベキニヤトアリ、又金銀圖錄ニ云、水戶藥王院天正年間ノ古文書ノ內、（此書、年號ヲ失スト雖ドモ、信長ヘ兩度音信トアレバ、天正年間ノ書ナリ）僧正口宣ノ爲ニ御禮ト禁裏樣ヘ黃金三兩田舍目　同文書ニ　禁裏樣ヘ金一枚京目　親王樣ヘ同五兩京目　ト有テ、京目・田舍目ノ數量何

程ヅツト云事慥ニ記セシモノナシ、大内家壁書ニ云、金銀量目御定法之事

コカ子・シコカ子ノ量目ノ事ハ、京都ノ大法トシテ、何レモ一兩四文半錢ニテ、二兩九匁タル處、コガ子ヲバ、一兩五文メニウリカフ事、ソノイワレナシ、殊ニ御分國中如レ此ト云々、代ハ高クモ安クモ其身々々ノハカラヒタルベシ、兩目ノ事ハ、京都ノ法ヲマモルベシ、若此旨ヲ背ク族アラバ、經二上裁一罪科有ベシ、自然又此御法ヲ破ル輩ヲ聞出事アラバ、慥ニ遂二糺明一、其科不レ遁者重科ニオコナハルベシ、仍而下知如レ件

文明十六年五月　　參河守重行

右兩目京都ノ大法ト有レバ、室町將軍家ノ流例ニテ、一兩量目四匁五分ト見ユレドモ、其代銀錢ノ事ハシレズ、永仁御即位用途記ニテミレバ、金一兩ノ代凡錢三貫文、銀一兩代錢一貫文ニ當レリ、然レドモ前ニ云如ク、金銀次第ニ不自由ニ有シ故、兩目ノ定メモ減省有シヤ、然レバ錢ノ部ニ記ス、用途記ノ算當モ違ヘル成ベシ、是ハ量目十匁ヲ以スレバ也、右京目・田舍目ノ事今委ク知ル人ナシ、京都若江從四位長公朝臣家藏ニ、觀應年間ノ古文書アリ、其中ニ

京ヘ進上ノ砂金ハ目一兩四匁五分

田舍ヘ下シ賜フ砂金ハ、目一兩四匁七分

トアリ、長公朝臣云、往古王政ノ時ハ、諸物ニ運力ヲ賜フ事アリテ、田舍ヨリ獻ズルモ、又賜フニモ

皆二分宛ノ運力ヲ加ヘラルヽ事、家藏ノ舊記ニアリト云リ、今常是ニテ上納銀ヲ包ムニ、銀百目ニ三匁ノ餘分ヲ加ヘ、入目ト云如ク、是等モ運力ノ餘風ナラン、室町殿時代、京都金銀兩目ノ大法ハ、一兩四匁五分ニテ、田舍遠國ヨリノ進献ハ、必二分宛ノ運力ヲ加フ、然レドモ在京シテノウヘハ、又京都大法ノ京目ヲ以テ納メシトモ見ユ、位階口宣等ノ禮ナドニテ、上京ノ時ハ進献必田舍目ヲ以テ納ム、尤運力ヲ加ユルハ、皆切遣ヒノ黄金也、判金一枚ハ其儘ニテ納メ、一枚ヲ切遣ヒ金ニテ納ムル時ハ、必京目・田舍目ヲ用ユ、鹿苑院殿御元服記始メ、其頃ノ舊記ニ、砂金何兩（兩分本法銀折敷）コノ兩分本法トアルハ皆京目也、右量目ハ京都ノ大法ニテ、諸國ミナ此法制ヲ用ヒシナリ、然レドモ甲斐ノ國ハ金山有テ、又一國通例ノ量目アリテ京目ノ四匁五分ヲ以テ一兩トセルモアリ、又四匁ヲ以テスルモアリ、金銀圖錄ニ文祿五年、淺野長繼ノ古文書ニ、京目・爲中目ノ事アリテ、此算當今不レ解、前ニ記ス京目・田舍目ニ不レ合、甲斐一國通用ノ量目ナルヤ、其委キハ不レ知、尙正說ヲ得ルニシタガヒテ追加スベシ、柳營秘鑑ニ云、慶長ノ頃、駿府ニテ金ヲ吹タリシニ、世上通用十二兩御定メノ由ミエタリ、是ハ小判一兩（掛目四匁七分六厘）仕立タル處、十二双替ニシテ、代五十七匁六分ナラン歟、遺老物語ニ、後藤四郎兵衞云、大判ニ十兩ト書申候事ハ、小判十兩ニテハ無ニ御座一候、黄金十兩ニテ御座候、黄金十兩ト申儀ハ、昔ハ銀一枚ヲ黄金一兩ト仕、銀十枚ヲ黄金十兩ト申候、（但シ此事大判ノ部ニ記ス）右銀一枚ト云ハ量目四十三匁ナリ、銀十枚ハ四百三十目ナリ、然レバ黄金一枚十兩ト云ハ、銀ニテ四百三十目ナリ、大判一枚量目四十四匁（但譯ハ大判ノ部ニ記ス）

是ヲ黄金十兩トミル時ハ、一兩ハ量目四匁四分、右京都ノ大法トアル四匁五分ニテハ、一分ノ違ヒアリ、何レ古キ事ニテ不レ詳、又コガ子・シロガ子トアレバ、コガ子ハ少々違有レドモ、大ヤウ右ノ通リナルベキ歟、シロガ子ノ兩目是モ四匁五分ナリシカ不レ詳、又按ズルニ室町殿時代、文明年ノコロハ、未金銀ニ形ヲ鑄通用スルコトナシ、尤前ニ記ス如ク、諸國ニテ私ニ鑄國內通用セル金銀判雖レ有ニ數品、其頃又無紋ノ金銀ヲ打ノベテ、入用程ヅヽ切、秤ニ掛テ諸品ト交易ス、（竹流棹金鋌切ノ類）右大內家ノ定法ニ、京都ノ大法トスルコトハ、米穀絹布始メ諸色ニ到ル迄、錢ヲ以テ交易スルコトハ勿論シレタルコトニテ、其外金銀ニテノ交易ハ、タトヘバ米一石此代金ナレバ一兩、銀ナレバ十兩ト云如ク、互ニ應對シ、右ノ延べ金銀ヲ一兩量目四匁五分ニ切、秤ニカケ是ヲ取渡ス、金銀位ノ高下ハ有レドモ、量目ハ大法ノ如ク、金ニテモ銀ニテモ、四匁五分ヲ一兩トス、今米一石金ナレバ一兩、銀ナレバ六十目トスルニ同ジ、然レドモ今ノゴトク金相場ト云事モナク、金一兩ニハ米何程、銀一兩ニハ米何升トシ、其餘品類金銀ニテ交易ノ物ハ、皆兩目ヲ以テ應對ス、今イハヾ物ノ料金一兩ト云ヘバ、銀八兩ニセヨト云ヒ、ソレハナラズト云ヘバ、銀九兩ニセヨト云フ如ク、皆兩目ヲ以テセシナラン、右量目ハ京都ノ大法アルニ、商家ノ者共其頃錢不自由ナル故。一兩量目四匁五分ニ定リタル法ヲ、私ニ一兩五匁ニモシテ、金銀交易スル故、右ノ制令アリシナラン、代ハ高クモ安クモトアレバ、錢ノ事ナルベシ、タトヘバ金一兩（量目四匁五分）ノ代錢五貫八百五十文、（但シ切金一匁、代錢一貫三百文ノ積リ）然ルヲ一兩量目五匁ニシテ、代錢五貫八百五

十文ニシテ交易スル類ナラン、イヅレ不レ詳、又花降ハ鎌倉時代ノ南鋌ト云モノニテ、其頃通行セシモノト云、又室町ノ末ヨリ慶長ノ頃迄、行ハレシ銀ト云ヒ、又加賀ノ銀判ヲ南鋌トモ云、何レ古代ノ物ニシテ説區々ナリ、（此事金ノ部ニ出ス、依テ略レ之）此銀大ノ方十兩トアリテ、量目四十三匁、小ノ方一兩四匁三分アリ、此四匁三分ヲ一兩トスルコト、何レノ世ヨリ起リシニヤ不レ知、續日本紀ニ云、銀一兩ノ量目ハ、今ノ十匁ナラン

文祿四乙未年正月、秀吉　神君ノ御館ニ來臨、　神君ヨリ長光ノ太刀、其外良馬又被レ進二白銀三千枚一（則銀三萬兩也ト有）

慶長八年二月、　神君御上洛御參內、白銀千枚進獻（銀一萬兩也トアリ）

同十九年十二月、御參內禁裏ヘ白銀千兩進獻、（銀四貫三百日也トアリ）

右武德編年集成・駿河政事錄・東武日錄等ニ處々ミエタリ、皆四匁三分ヲ以テ一兩トシ、四十三匁ヲ一枚トスル事久シキコトトミエタリ

草廬雜談ニ云、近頃民部卿法印ノ記セル嚴廟御元服ノ儀式ヲ讀ニ、賜予銀三十兩ヲ以テ稱ス、國初ヨリ正保年迄ハ、其淳朴カクノ如シ、國用豐カニシテ、下々モクラシ安キハズナリ、イツトナク奢リタル風俗トナリテ、今ハ下々ノ音信ニモ銀八枚ヲ以テ稱ス、誠ニ過分ノ至ナリ、我古ヘハ唐ノ制ニヨラレテ、十匁ヲ一兩トストミエタリ、四匁三分ヲ一兩トスルハ、何レノ時ヨリ成ヤ不レ詳、今ノ分銅ノ一

兩ハ十匁ナレバ、國初ノ頃ヨリ四匁三分ヲ一兩トスルニヤト云リ、然レドモ花降小ノ方一兩トアリテ、量目四匁三分、其餘天正・慶長年ノ舊記ニ、四十三匁ヲ以テ一枚トシ、四匁三分ヲ一兩トスル事、國初ヨリ已前ノ量目ナル事明ケシ

三器通考・權量考略ニ云、「按黄金爲㆑物至醇、故至密、至密故至重、宜㆑無㆑以㆓古今異㆒、但煆煉未㆑至、則未㆑能㆑極㆓其重㆒矣、古之造㆓金幣㆒者、方寸而重一斤、盖以㆓其精者㆒爲㆓準則㆒也、今世鑄㆓寸金㆒驗㆑其者各徵不㆑等、大率曲尺寸重不㆑過㆓大秤十五兩㆒、依㆑術求㆑之、古者一兩止㆓今四錢半弱㆒、算法、古尺方寸、積四百七十二匁弱、以㆓十五兩㆒乘㆑之、以㆓二十六兩㆒約㆑之乃得㆑之 今俗以㆓四錢三分㆒爲㆓小兩㆒、意者有㆑所㆓由來㆒矣」下略云リ、所詮不學ニシテ難㆑解、他ノ考ヲ待ツ、

槐記ニモ銀一兩一枚ノ量目ノ事、種々御考索ナサレシナレドモ、知レザル趣ミエタリ

〔原本此間一枚ノ餘白アリ〕

金一兩ノ量目、斤兩ノ兩ニ非ズ、時代ニヨリテ悉ク不同アリ、如何ナル故ト云事ヲ不㆑知、或說ニ云、武藏判・慶長・元祿・正德金、各四匁七分六厘ヲ以テ爲㆑兩 是ハ大判ノ部ニ記ス 乾金ハ二匁五分ヲ以テ爲㆑兩、是ハ古金四匁七分六厘ヲ凡五匁トシ、量目二匁五分トス、文金三匁五分ハ六十七、燒請メノ量目ヨリ凡三匁五分トスル歟ト云々 私ニ云不㆑詳 局官ノ秘スル事ニテ不㆑可㆑知、或書ニ云、金量目ノ事慶長年後藤光次ヘ大神君御上意ニ、金ノ位小判ノ量目等ハ、算法有リテ又無シ、曾テ人ノ知ル事ニアラズ、其方家ノ口傳ニ可㆑致候、書留ルコトニアラズ、此段決テ能々子孫ニ申傳可㆑置旨被㆓仰付㆒ト云々、都テ金銀ノ兩

名如何ナル事ヨリ積リ出セシモノニヤ、後ノ考ヲ待ツ、古衡ノ品、銖・兩・斤・鈞・石、是ヲ五權ト云、度量衡考・制度通等ニ委シク出、猶教學ノ師ニ聞ベシ

本邦銀何匁ト云事、古代ハ皆々錢ヲ以テ通用ス、則一錢ノ重サ一匁ナル故、一文ノ目ト云ヲ以秤目トス、何レノ時ヨリ初ルト云事ヲ不レ知、書言字考ニ、一匁ハ則一錢也、十分ノ重サ如二錢一文一、故ニ支那ノ俗借二錢象制一匁字自呼爲二錢音一、近藤重遠云、唐ヨリ已前ニ一兩ノ小割ヲ銖ト云テ、錢ト云事ナシ、開元錢十文ヲ一兩ノ重サニ定ラレテヨリ、金銀ノ兩目ニ銅錢一文ノ重ニ當ルヲ一錢トス、然レバ量目ニ一錢ト云ハ、開元ヨリ起ル事ニテ、唐ヨリ前ハ是ナシ、然レバ唐太宗ノ時、魏徵相タル時ニ、斗米三四錢ト云ハ、只銅錢三四文ノ事ナリ、金銀ノ事ニアラズ、其後宋ノ時ヨリ金銀ヲ幾錢ト云トミエタリ、文目ト云ハ漢土ニハナシ、　本邦唐制ヲ受テ、金銀ノ量目銅錢一文ノ重サニ當ルヲ一錢ト云、是ヨリ轉ジテ一文ノ重サナル故、和俗一文目ト云習ハス也、一貫目モ亦同意ニテ、銅錢一貫文ノ目ト云ノ義ナリ、匁ノ字ハ字書ニモ見エズ、和俗文目ノ目ヲ、今ノ片假名ニテ、略シテ匁ト云ナルベシ、是否ヲ不レ知ト云々、按ズルニ、京寺院ノ古文書ニ、金銀ノ量目ニ匁目トアルハ、今ノ匁ト云事ナラント思ヒシニ、文龜年又永祿年ノ古本節用集ヲミルニ、世ノ部財寶ノ條ニ、錢又匁（同二上字一古字也）トアリ、然レバ古書ノ匁目ト有ルハ、今ノ何錢目ト云コトニテ、今ノ如ク匁トハ不レ云ト見エタリ、今匁ト書事ハ、慶長六年新銀行ハレシ頃ヨリ書來レルナラン、京大德寺古文書ニモ、天正ノ頃ハ匁目ト有テ、慶長八・九年ノ頃

ヨリ、今ノ如ク匁トアリテ、目ノ字ヲ省ケリ、元和・寛永年ノ頃ハ匁ト記セリ、多門院日記原本モ、右ノ通ナルベキナレドモ、追々寫シ誤リ、金銀ノ量目ハ、皆匁目ヲ省略シ、匁ト書ケリ、箇樣ノ事些細ナル事ニテ、吟味ニ無益ナレドモ、此類多ク古代ノ書體ヲ見誤ルコト不レ少

續昆陽漫錄ニ、續文獻通考ニ云ク、「書契既出、字體悉具、蝌蚪古文、大篆小篆、各有レ所レ用、如下禹刻ニ岣嶁碑一則用ニ蝌蚪一、宣王刻ニ石鼓文一則用中籒字上、如ニ今之傳レ世文字一也、至ニ於用ニ之庶民媒妁・婚姻之約、市井交易之劵一則從ニ簡易一、止用ニ小篆一、何以知ニ其然一也、唐人錢譜載ニ太昊氏・金鄣盧氏幣一、其文存與ニ今小篆一不レ異、昔在レ京得ニ大公九府圜錢一、近在レ滇得ニ黃帝刀布一、其文悉小篆、乃知下小篆與ニ大篆一同出上、決不レ始ニ於秦一也、如ニ今人楷書一、各有ニ數體一、有ニ古字楷書一、有ニ今字楷書一、又有ニ一種省訛俗書一、同一時也、文人奇士多用ニ古字一、官府文移通ニ用今字一、市井下流則用ニ省訛俗書一、如ニ錢作レ匁、聖作レ圣、書作ヒ昼是也、例レ之推ニ千萬世以上隆古之極一、未ニ必悉用ニ蝌蚪一、推ニ千萬世以下、世變之極一、未ニ必悉用ニ俗書一也、」コレニテミレバ、匁省訛ノ俗字ナリト云リ、私ニ云、京都寺院古文書匁目トアルハ、古代ヨリ慶長ノ初年ノ頃迄ハミナ何錢目々々ト云ヒテ、如レ今匁トハイハズ、匁目ヲ省略シ、如レ今匁ト云ハ、慶長六・七年ヨリ後ノコトナリ

三貨圖彙 附錄卷之二 權量之部

草間直方輯錄

度量權衡準ハ五則ニシテ、黃帝ノ時ヨリ始リ本邦舒明天皇十二年、始テ斗・升・斤・兩ヲ定ラル趣、扶桑略記ニ見ユ、續紀ニ元明天皇和銅六年、權衡度量ヲ天下諸國ニ頒下セラル趣見ユ、尤五則ハ天下ニ重ンズル所ナリ、異國ニモ代々其分量異ニシテ、本邦モ然リ、古代ノ一兩ト今ノ一兩ノ量目タガヒ、或ハ升ニ宣旨升・武佐升・古升・京升等ノ類アリテ、昔トハ分量モ異ナリ、此事ニオイテ委シク記セルモノ、度量衡考・制度通・度制略考始メ村井氏・新井氏等ノ考書アリテ容易ナラズ、愚ノ可レ及ニアラズ、依テ成形圖說ノ儘茲ニ出シ、其精密ナルコトヲ知ラシム

麻須 書紀○和名鈔、引二切韻一、升十合器也、知二多少一謂二之量一、凡俗米を料に一より十まで、一つ一つの名を數へ呼べり　小量(コマス) 即合なり、口二寸三分、深サ一寸二分二厘餘○小量に三あり、一合量ハ漢の龠ニ當リ、龠ハ半合の名にて、即一勺本邦の量法五抄三撮なり　小半量(コナカラマス) 即二合五勺量なり、或ハ之を合一つといふ口三寸八厘七毛、深サ一寸七分一毛なり、或ハ口三寸五厘、深サ一寸八分とする者ハ非也　半量(ナカラマス) 即五合量なり、一升の半ゆゑに云、口四寸、深サ二寸六厘なり、或ハ深サ二寸八厘とする ハ非也　升 即、十合なり、口四寸九分、深サ二寸七分　五升量 口八寸三分四厘、深サ四寸六分六厘、按ニ令の時ニ、束稻舂得米五升と見えし其五升米を一料にせしもの遺あとなるべし　七升量 口九寸四分七厘 深サ五寸六厘　十量 即十升なり、方一尺五寸、深サ五寸八分八厘　減大升 政事要略　大升 三代格○今按ニ、古の大升ハ、三升を受るといふ、蓋減大升の三升を受るなるべし、減大升ハ、二升五合を受く、其三升ハ、七升五合なり　斗桶 桶もて作る一斗を容る　量 書紀同ニ律度量衡一律歷志ニ量者龠・合・升・斗・斛也、○唐高祖武德九年、檢二校諸國量一とあり、量ハ本黃鐘管の實積より起れり、其管の中ニ、秬黍千二百粒を受、之を龠と云　大斗　大量 以上、漢書貨殖傳、漆千斗、註大斗者異下於量二米粟一之斗上也、今俗猶有ニ

大量一　大升 説文、斗大升也　料甬 月令集説甬斛也　斛斗 文献通考、文思院、造二一石斛斗一、用二火印一、下二諸轉運司一、依レ式製造　佉梨 翻譯名義集、天竺斛量の名なり

蕃名

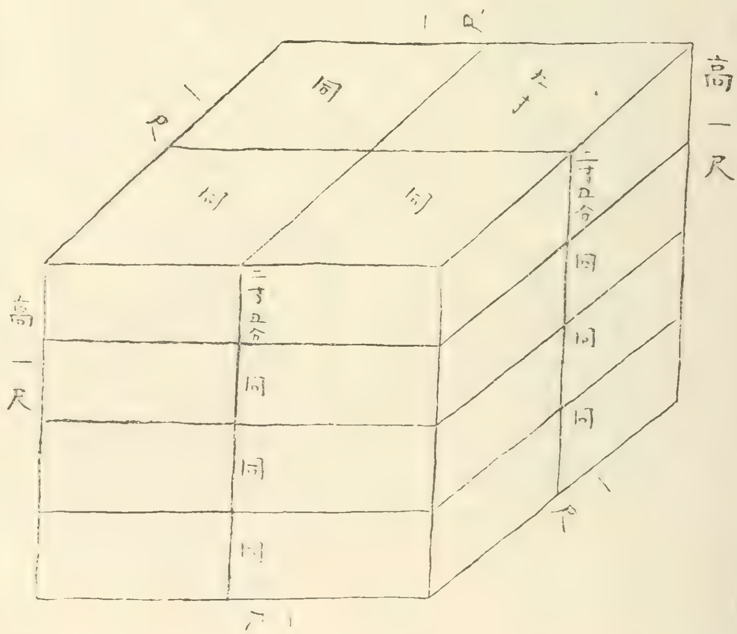
凡量斗の起率は、秬粟より積出たる者と云、其次第圭抄より始る、或は謂撮は四圭にて、二十四粟、三指撮レ之の名也、嘗て試に三指もて米粒を撮に、殆んど三十顆に及べり

量斗積　斛 俗作レ石、十斗にて二百四十萬粟と云　此云佐加、亦云一石 斛の音なり、唐・宋以來は、二斛を石といふて、此方の如く通用するにあらず　斗 俗作レ㪷十升にて二十四萬粟といふ　此云波古、亦云曾波加利 即十量なり　升 十合にて二萬四千粟と云ふ　此云麻須 即一升なり　合 十勺にて二千四百粟と云ふ　此云小量、勺 舊作レ龠、俗作レ勺、十抄にて二百四十粟と云　此云多登須 蓋手一津也、亦云一掬手門一とも、○或曰、八丈島ハ穀物を量るに、何合何勺とハせず、一升以下ハ何張(ハリ)何程と云、一張ハ兩掌ニ一盛の事にて、京升二合五勺也、此十四盛を以て一升とす、一升ハ京升三升五合也、又一升づゝ十四を以て一俵とす、一俵ハ京升四斗二升也と云々、今も合より以下ハ名ありて其器なし、八丈ハ古の方丈など見えて、古朴の事のこれるにぞ　抄 十撮なり、漢音サウなり、故ニ俗ニサイと呼びて才の字に作る、又轉じてサツと呼ぶ、故ニ撮の字と誤る多し　撮 十圭なり、三指撮レ之の名とす　此云保通、亦云一撮　圭 十粟なり　粟 圭粟の名ありて、今其數ハ去りて用ず

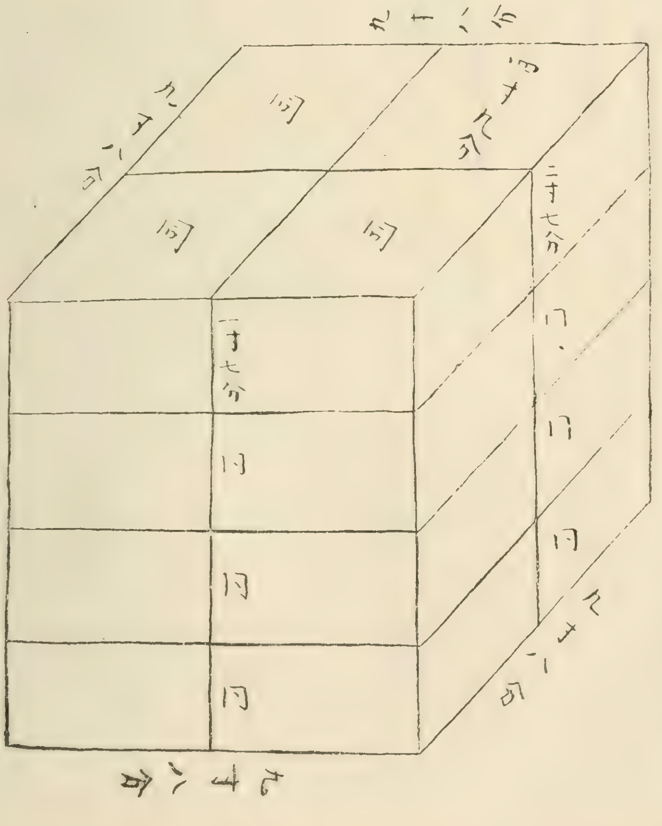
麻須とは倍なり、勺・抄を倍て、升より斗、斗より斛といふを以てなり、吾邦量を制の法は、一人一日の食粮、凡糙米五合、是穀にして一升なるより、十合を一升とするの粮積に出るなり、又軍陣の粮積は、一日一人に米六合・水一升・鹽は十人に一合、或は二合充といへり、斗を波加利と云ことは、いにしへ米を料は必秤にてかけたるに、一秤は即一斗なるより出しにや、斛佐加と訓こと、坂の讀とおなじく、等級を歷て陞ること、升・斗を倍て積がごとし、實隆の歌ニ一坂はこえのこしなん位山、老てはすゝむ道もくるしき、此坂ハ倍階をいへり朝野羣載に、米百坂・四十坂とあるも、併せかんがふべし、萬葉に百積の船といふは、即百斛以上を積載船にて、今に

も船の大を度て、某百斛積といふは、古語の遺れるなり、書紀に千斛と訓、古事記には尺讀て麻佐加といひし、又十度とも見えて曾波の反佐なり、佐加は曾波加利の略ともいへり、十を曾と訓は五十・八十等のごとし、按に漢志に、「升者登レ合之量也、成也、進也」と註せしも、次第に數を登するを以てなり、麻須とも佐加ともいふは、おのづから之に合へるを見るべし、舒明紀、「十二年十月始定二斗・升・斤・兩一」文武紀、「慶雲二年、始造二度量一、賜二諸國一、」元明紀「和銅六年、頒二下權・衡・度・量於天下諸國一」桓武紀、「延暦十七年十月勅、度・量・權衡先有レ製、中略升・尺等類就二大藏省一、依レ法平校、求レ絕二奸源一、若違二此製一寘二嚴科一、」令曰、量十合爲レ升、三升爲二大升一、十升爲レ斗、十斗爲レ斛」、雜式曰「凡度・量・權衡者官・私悉用レ大、」此大量・小量の製ありしや、蓋慶雲より和銅に至るまでは、所レ謂古量なる者にて、今の八合量乎、蓋古量の一升は、今量にて九合六勺四抄計に當れり、今紀州ニ八升量あり、此量にて今量の米一斗を秤るに、一斗二升なるべきを一斗一升六合三勺ありといふ扶桑略記、「後三條天皇、延久四年九月廿九日、詔斗・升法可レ據二用長保例一」この御代に穀倉院の宣旨升を造り玉ふこと、東齋隨筆に見えたり、大日本史曰、後三條天皇、欲レ審二量制一、命新作レ器、使二藏人頭藤原資仲督一レ之、帝自抽レ簾截レ竹爲二之準一、及レ成資仲等率二藏人出納小舍人一、量二殿沙一試レ之、而販二穀倉院米一量レ之、後世遵用、謂二之宣旨升一、又造二方櫃一容二一斛一、以レ石爲二錘衡一、其輕重器傳在二穀倉院一」按東齋隨筆曰、斛八十斗也、又石を直に斛の音に讀ことハ、延久のころ穀倉院の斛を造らるに始まる歟、○伊藤氏曰、大學衍義補、始皇平二六國一之初、書云一二衡・石・丈・尺一、所レ書之石非二鈞・石之石一也、後世以レ斛爲レ石、其始レ此歟按に中古の量、方五寸、深サ二寸半といふ者、所レ謂宣旨升乎今或ハ江戸升と云後西院天皇寛文九年、京升寸法一同に定る、俗亦今量ともいふ、方四寸九分、深サ二寸七分也、中古の量と京升と料合するに、京升は米六勺程おほし、官より下賜ふ米粮などに京升とあるは、即寛文中制らる

る公量の事也、古升は口五寸、深さ二寸
五分、是一分四方の物、數六萬二千五百
なり、是を古升の法とす、六二五也 今升の六
四八二七を、古升の六二五を以て除ば、
其餘二千三百二十七なり、米に積れば三
合五勺强なり、之に依ば古升の一升は今
升の九合六勺四抄なるべし
十六の一ッ分五寸四方、高さ二寸五分、
是古量一升の製也
今京升法、其積は陸拾肆萬捌千貳百漆拾 六十四坪八合二勺七抄 六寸四分八分二厘七毛
萬々、實積算法、古制に高さ八分增て、
一尺八分とす、同徑り二分減て、九寸八分
四方とす、其寸積千三十七坪二分三厘二
毛　此石數、一斗六升　分坪百三萬七千
二百三十二坪、十六割一ッ分六萬四千八百二十七坪、是今量一升の積也、古製一升の方、五寸を一分減



じ、今四寸九分四方とす、深二寸五分を二分増し、今二寸七分とす、升の法六四八二七、但口内斜に鐵梁あり、此内梁の積減少すべし、今京升の梁、上濶三分、下濶七厘、高サ二分、長さ七寸弱なり、右梁を一分方の物數に積ば二百五十九也、一升の積六萬四千八百二十七より梁積を減ずれば、其餘六萬四千五百六十八となる、此今升所ﾚ容の實積なり



民部省廚升十合なり、山科升・東大寺十合升、其名おなじからざれども、受る所は八合の十合升にして、雜令所ﾚ謂、十合を升とするの一升量なり、但古升の一升二合は、今升の九合六

勺餘にて、加茂祖所謂九六升なり、此に四勺を足て今の一升量とす

民部省廚升火印







宣旨升火印

深さ一寸五分、徑二寸八分五厘







神戸氏藏、民部省廚升受所山科升に同じ〇又古量に宣字印烙の者あり、疑は即宣旨升なるべし、又古量に深一寸五分、徑二寸八分五厘の者あり、其火印に太孝齋の三字あり

底

立二寸壱分

横二寸壱分ニ半

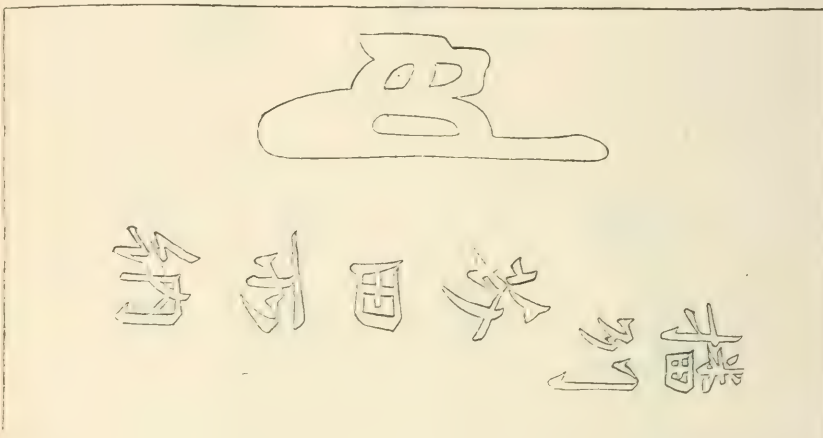
厚さ弐寸四分ニ半　但内の墨也

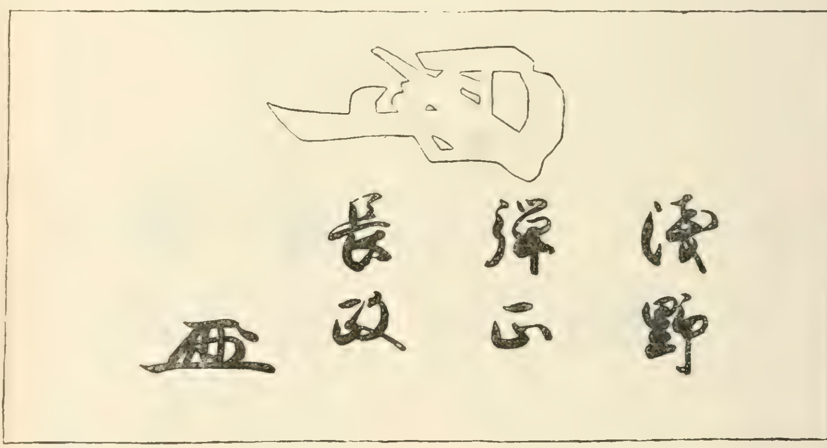
右寫ニ申候

下相渡済證之也

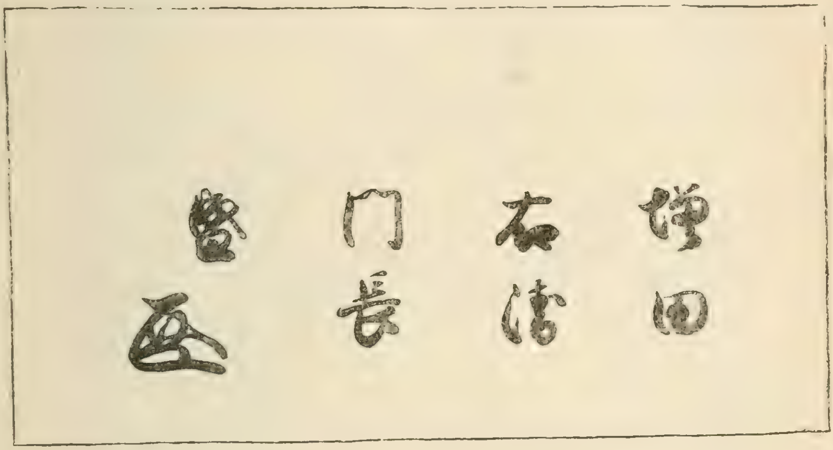
天正十八年正月　日

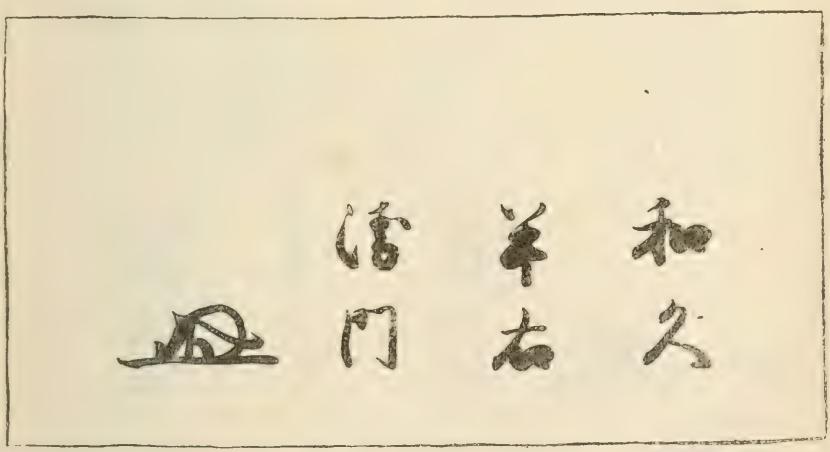
横

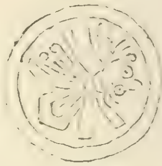




同







升中火印

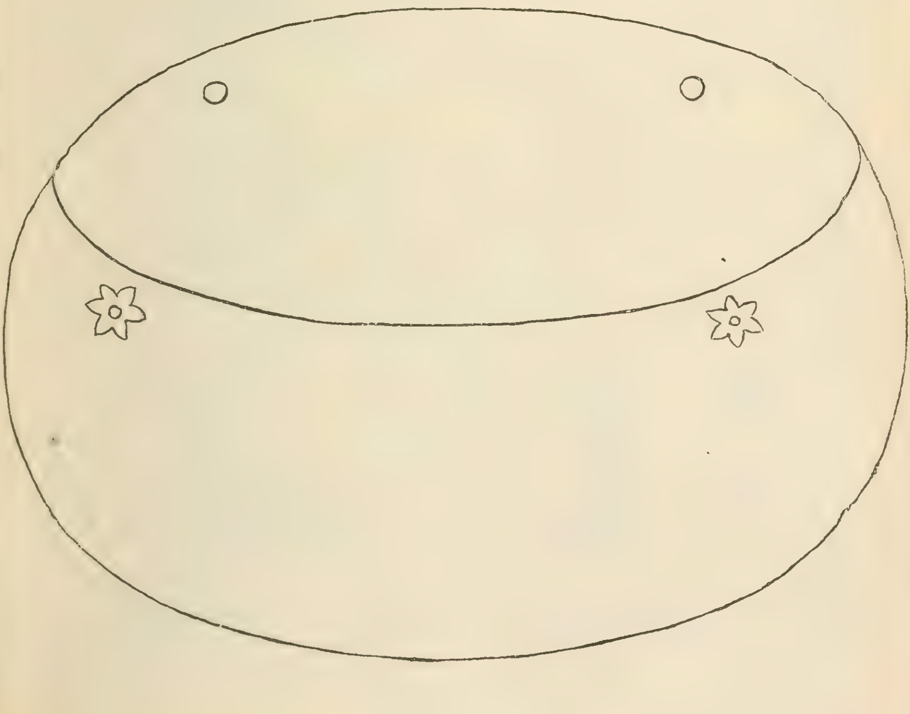
播磨國姫路芥田氏藏升

或曰、相模鎌倉・鶴岡安藤升あり、廣さ五寸七分、深さ二寸二分、銘に天正十八年安藤判とあり、即此升にして、今鎌倉中社寺年貢所納にもちゆるなり、又曰、伊豆・相模等に、灰原升といふあり、京升より大なり、當時安藤豐前守、灰原升の奉行を務むると云は、此升の事なるべし

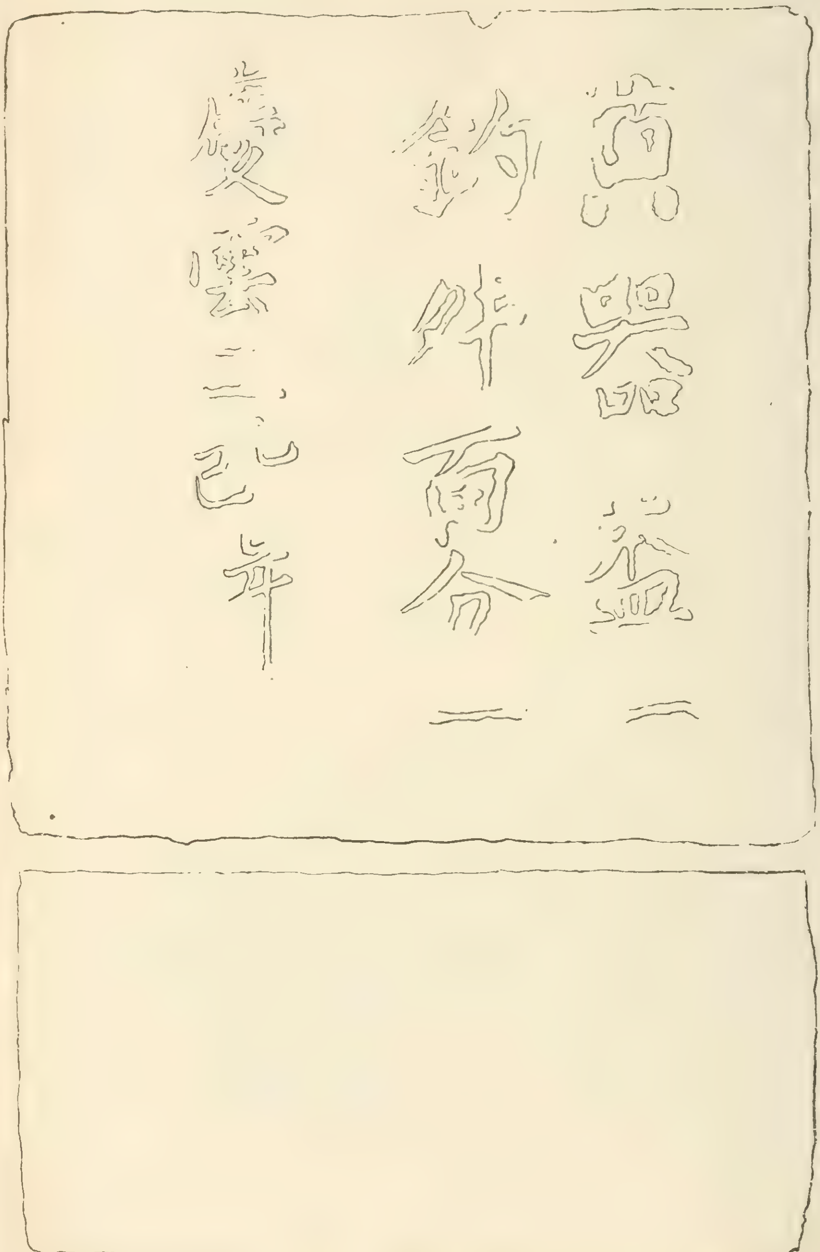
大寳量　和銅量以上續紀　宣旨升　太孝升以上既見　反錢升天文十五年所レ造、今升にて八合五勺　錢升天文十六年二月、田券見　花園升元龜元年七月、田券見　本供量今升にて六升六合六勺　瓱原升今升にて九升六合八勺八才　川上升今升にて一升六勺　十合量今升にて八合六勺　寺量今升にて六合　長箸量同上○本供量以下、南都東大寺にて所レ用　稲荷御出講量東寺稲荷神會に所レ用、今升にて一升一合六勺　十量即合格に謂る大升也、西州・北國等、皆大升を用う、古今名所小差あり、江源武鑑に佐々木義實、此ものを造ること見えたり、○大和法隆寺にて、太子量と呼ぶものあり、九寸五分に三寸七分、今升にて五升一合五勺强を入也

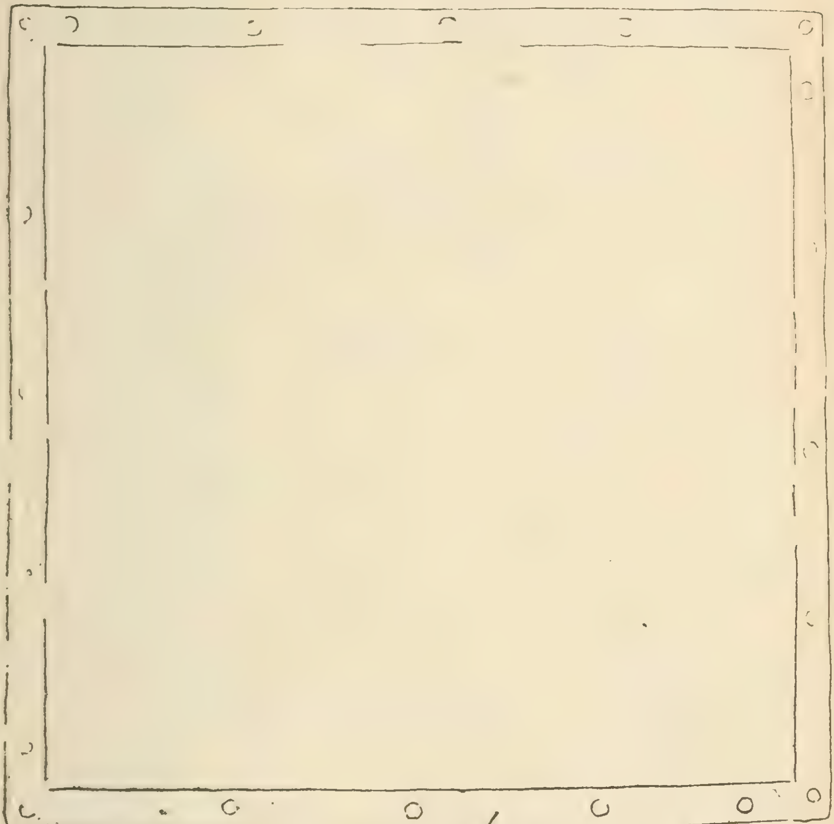
又同法隆寺に鈞量とて、重三貫三百目餘の銅斗あり、是南史蕭思話傳に、「思話、常所レ用銅斗」といふの類なる歟、然ども其製量斗とは見えず

銅斗口圓徑二尺二寸五分、腰周七尺八寸三分、深さ一尺四分重大廿六斤、受一石四斗



和州五百井村大方新太郎所藏





竹

方四寸八分三厘、深二寸三分七厘

宇治五十槻所藏

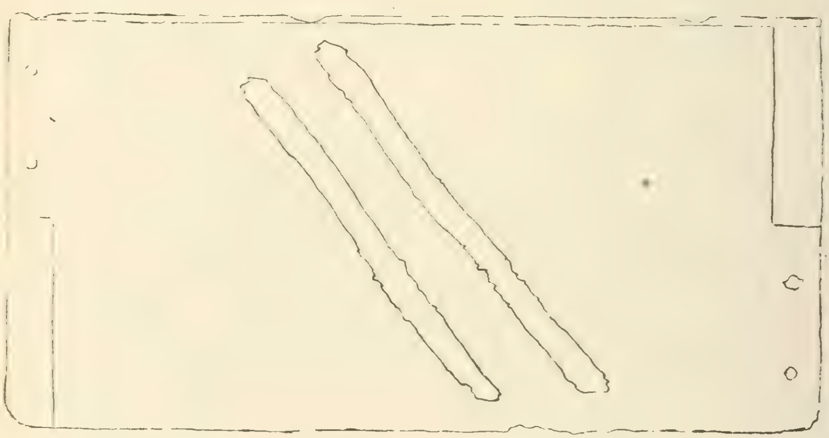


宇治五十槻所藏

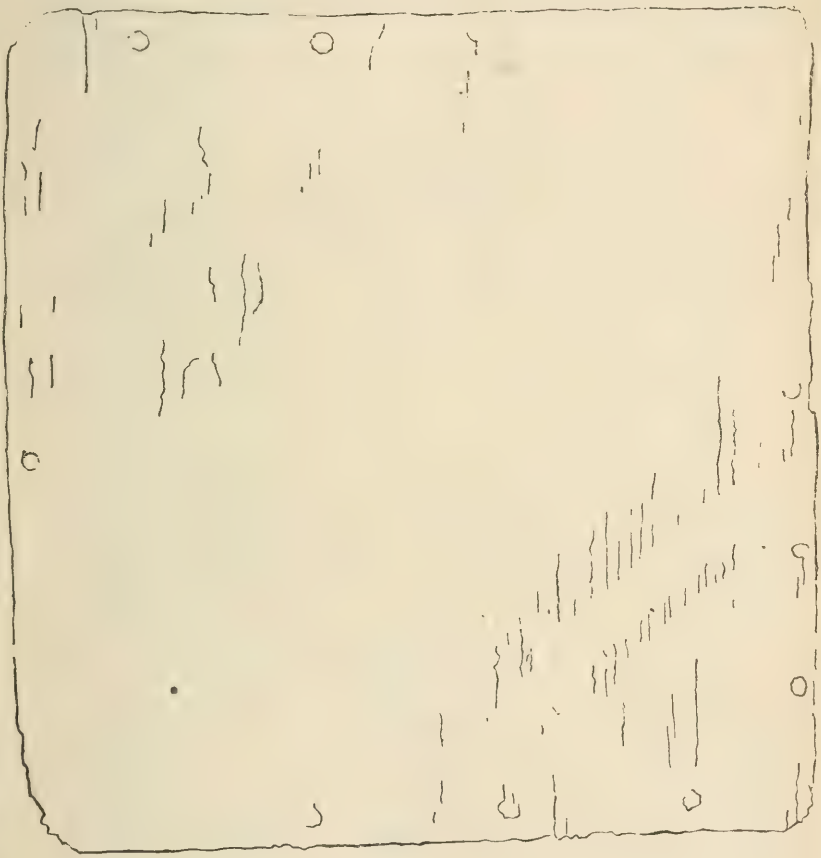


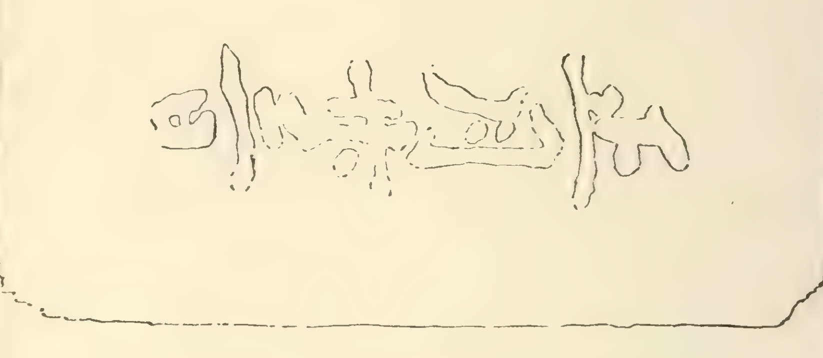


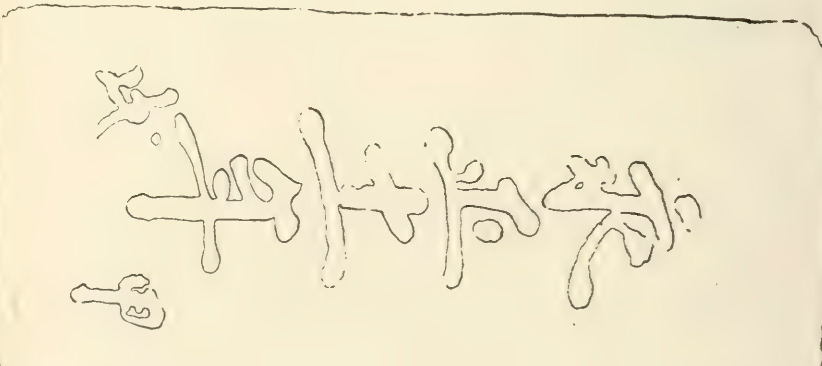




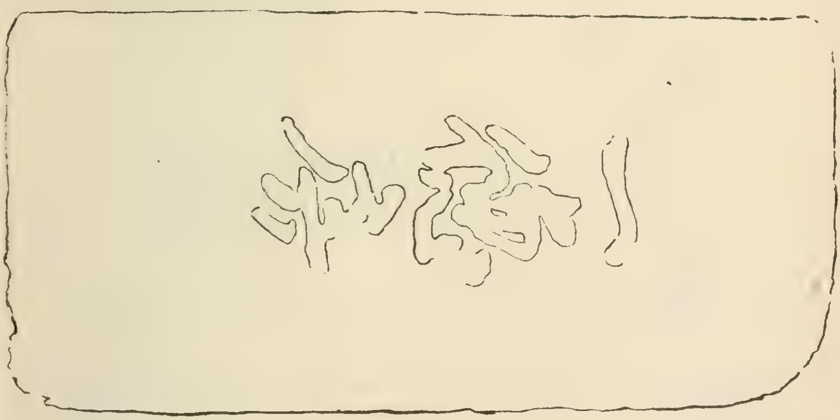
碨原升



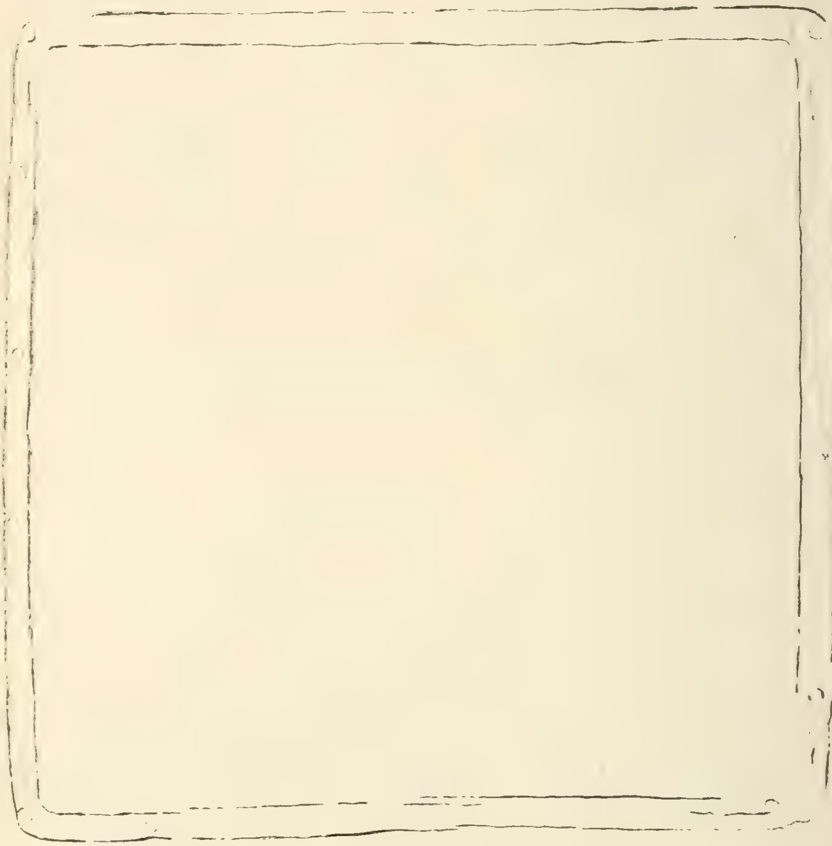


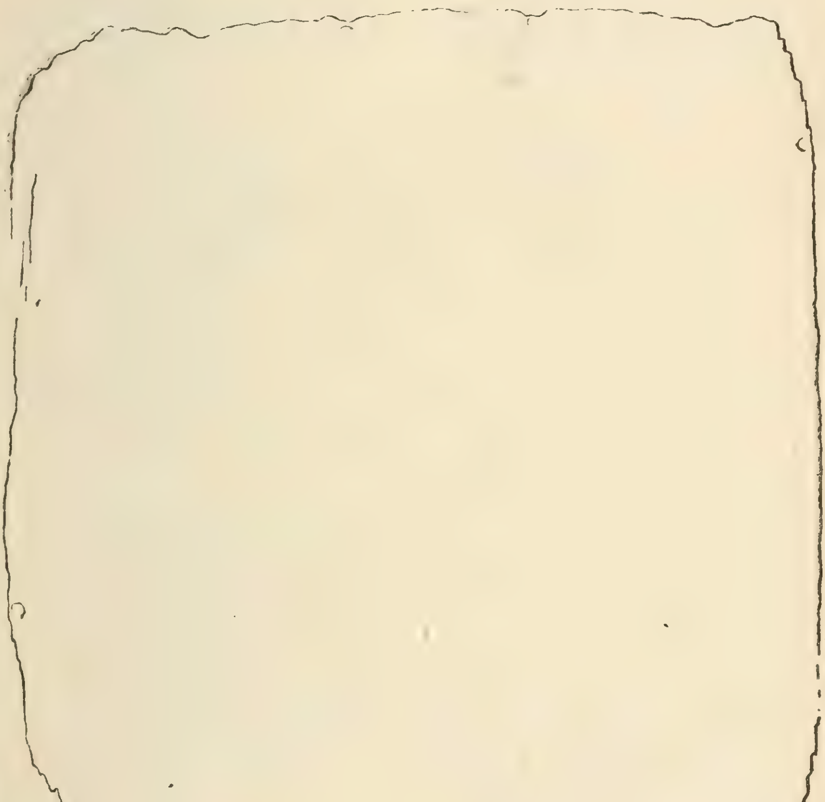


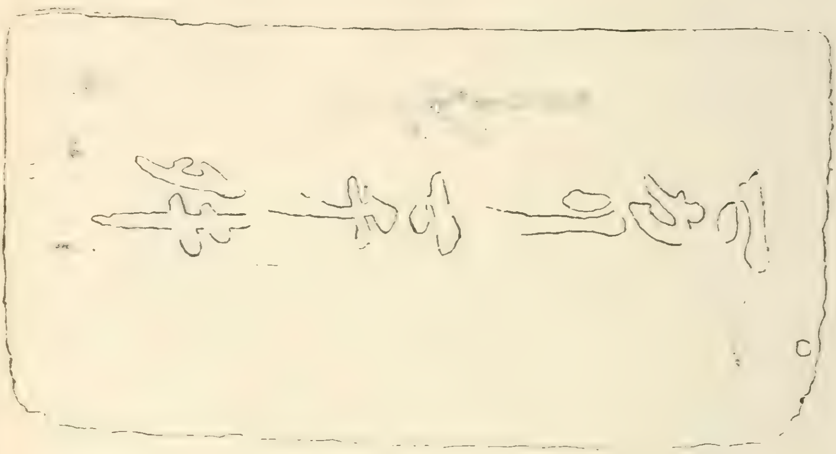


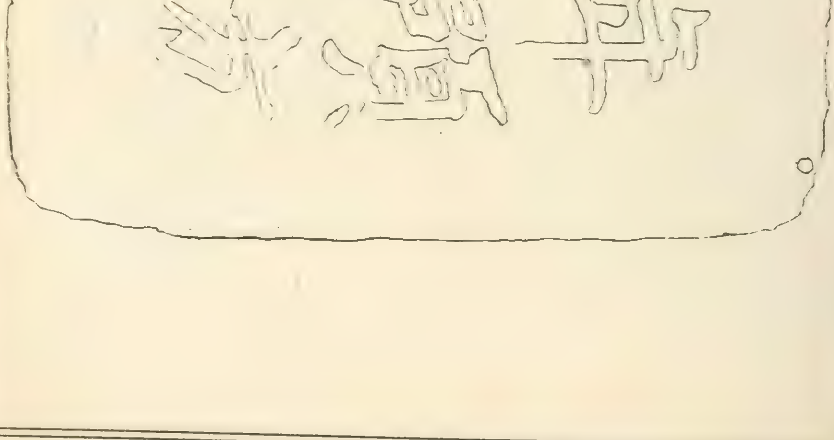


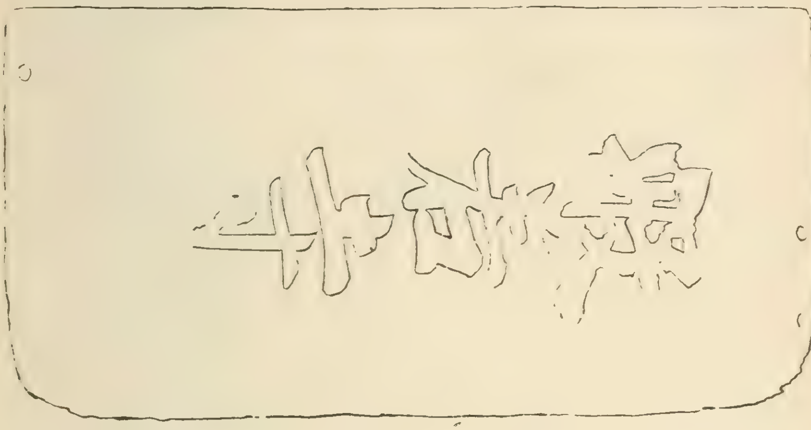
般若寺マカリマチ升

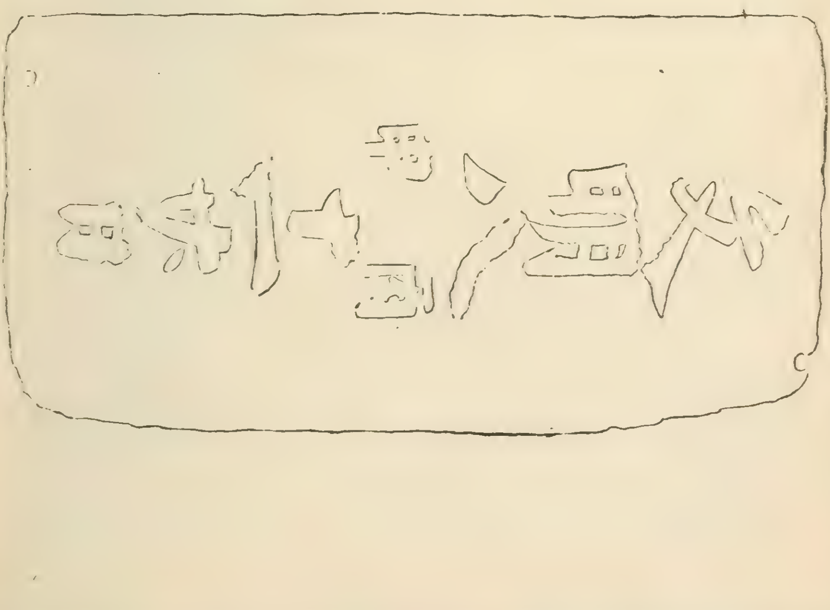






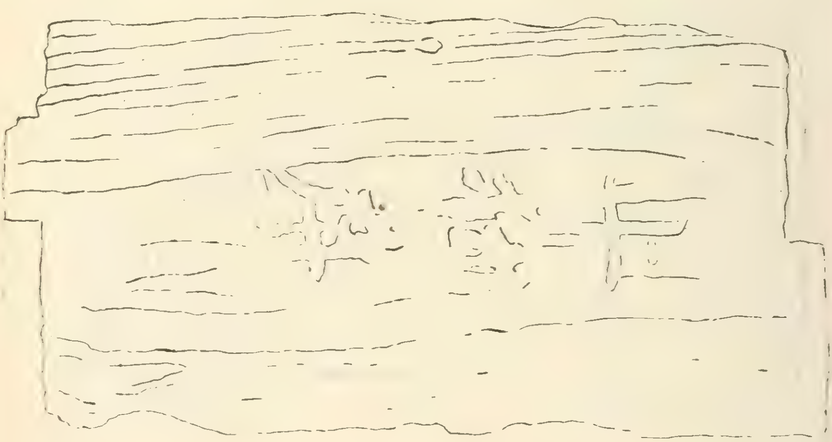


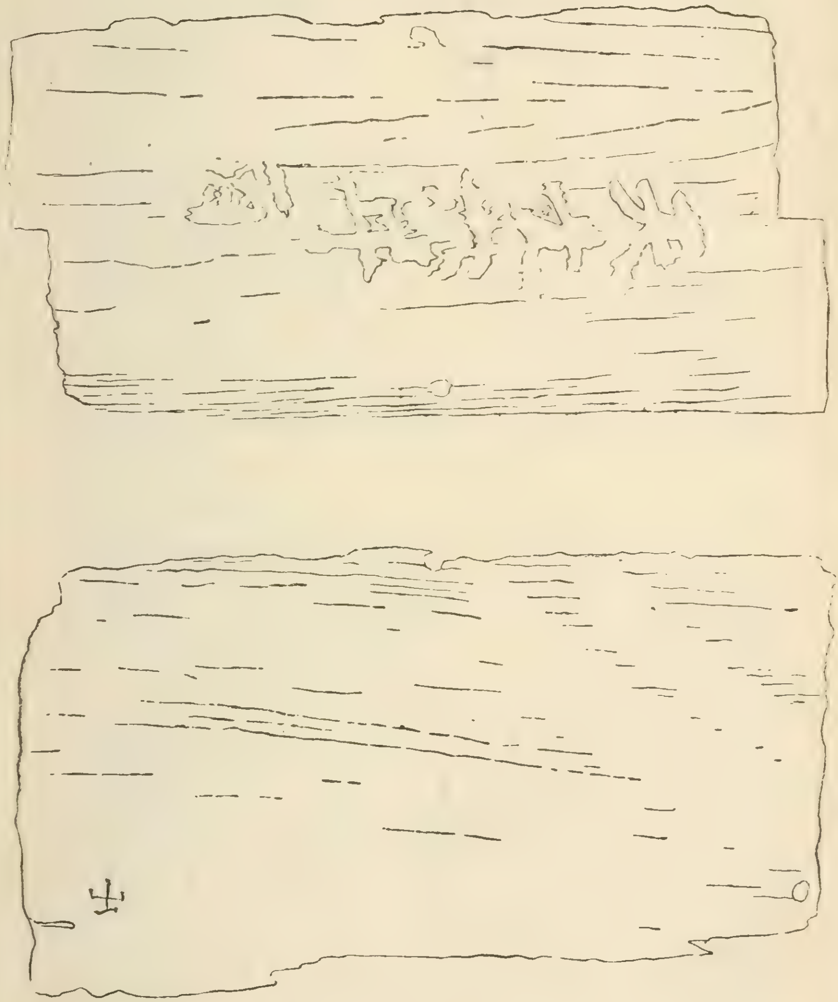


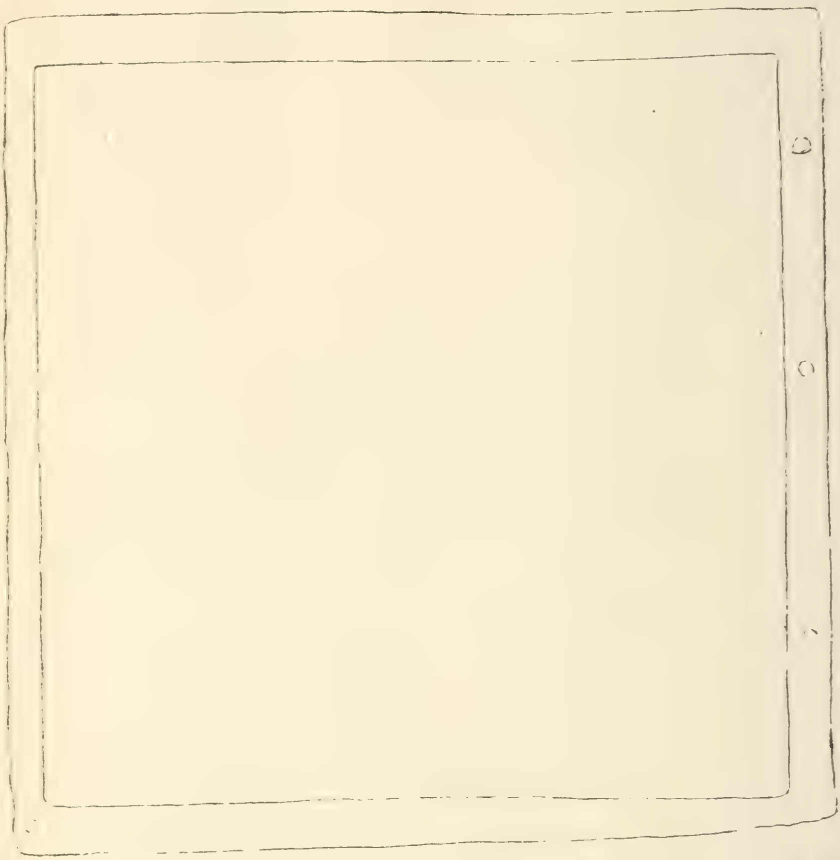


南都青龍寺納升



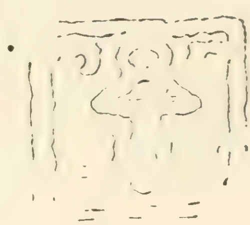




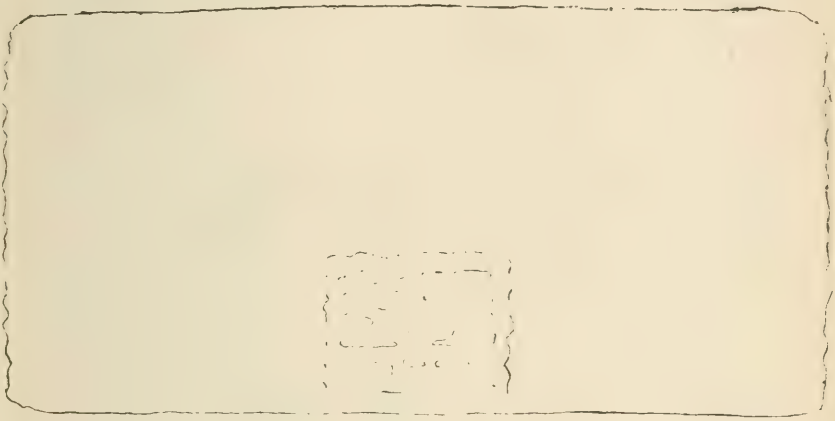


京ノ字升歟

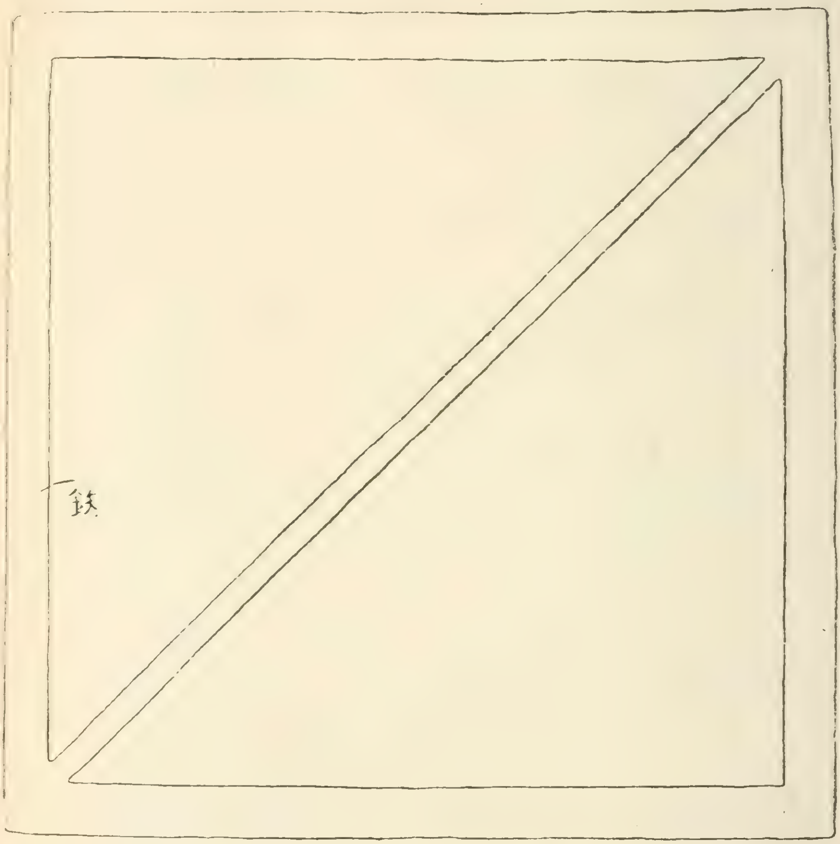
方五寸七厘、深一寸五分七厘



五十槻所藏京古升

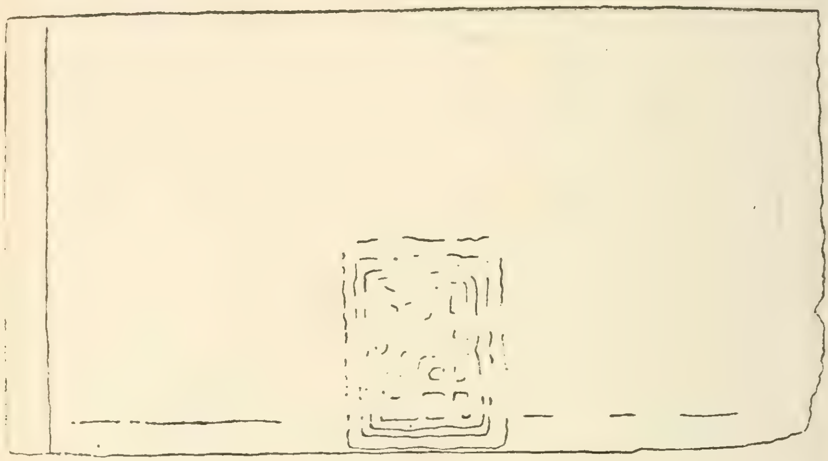




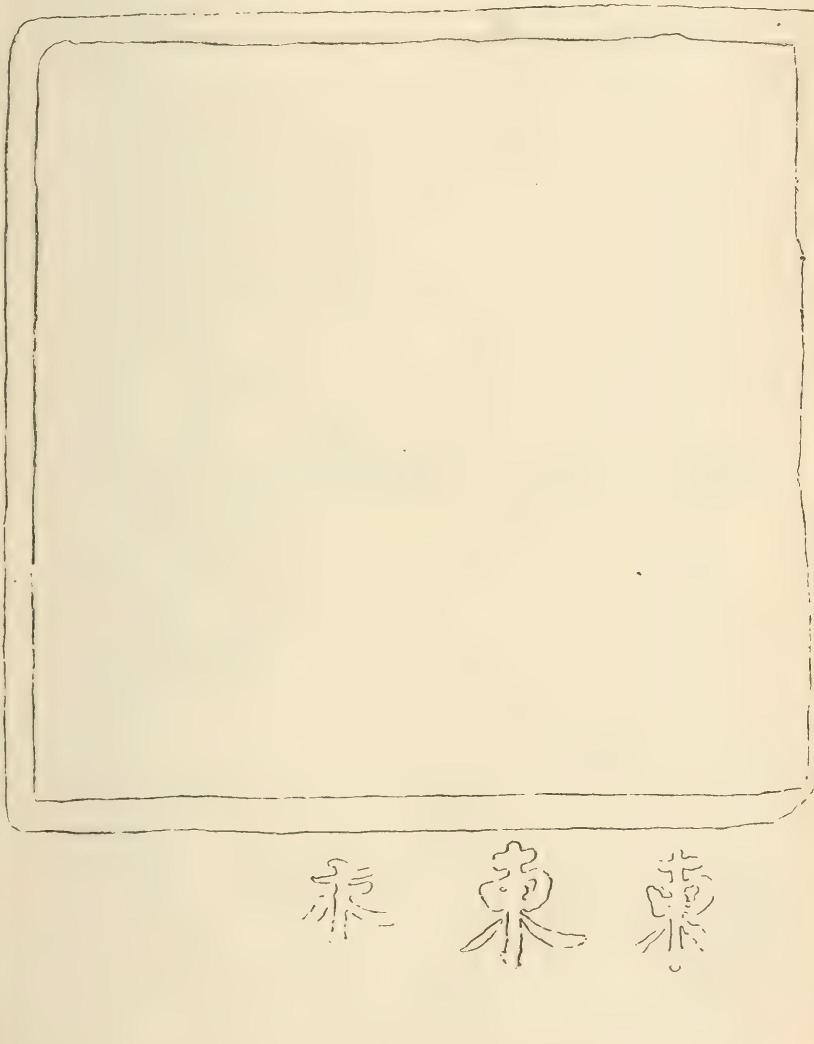


方四寸九分二厘四寸九分深二寸七分一厘

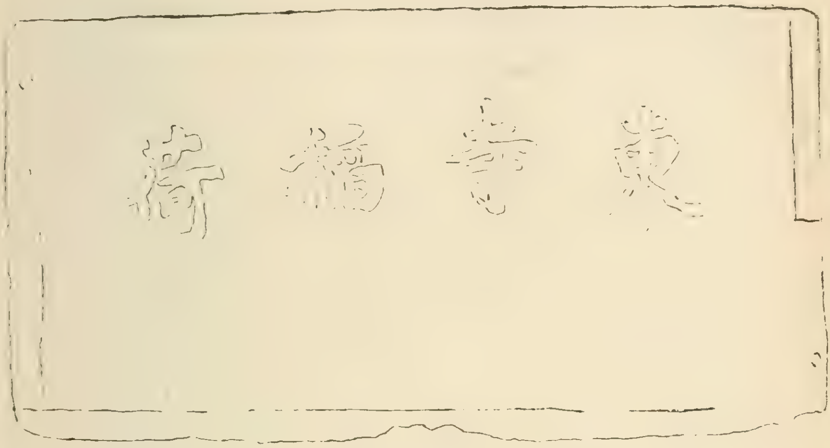


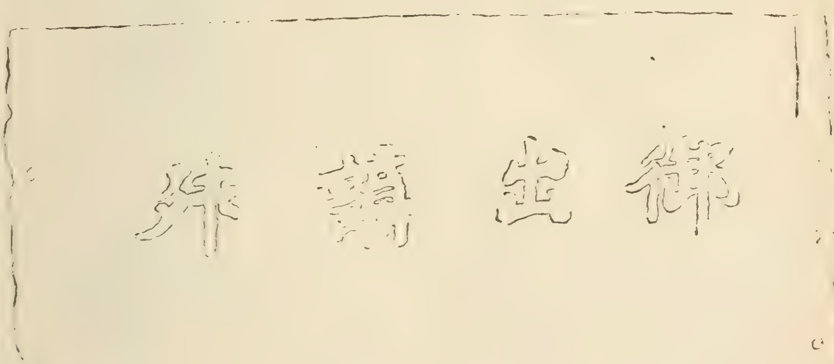


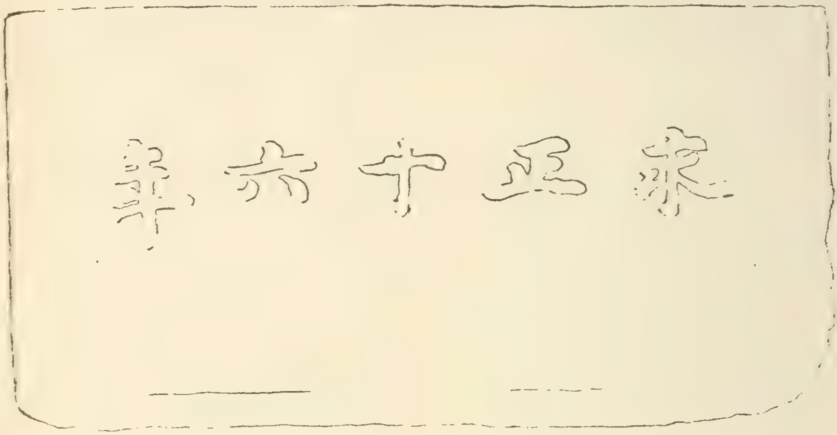
東寺稲荷御出講升

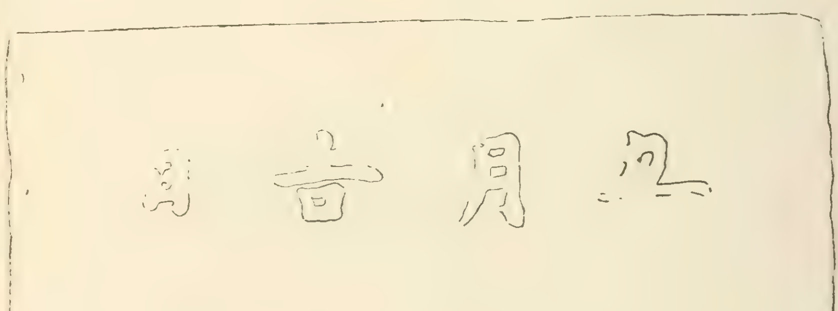




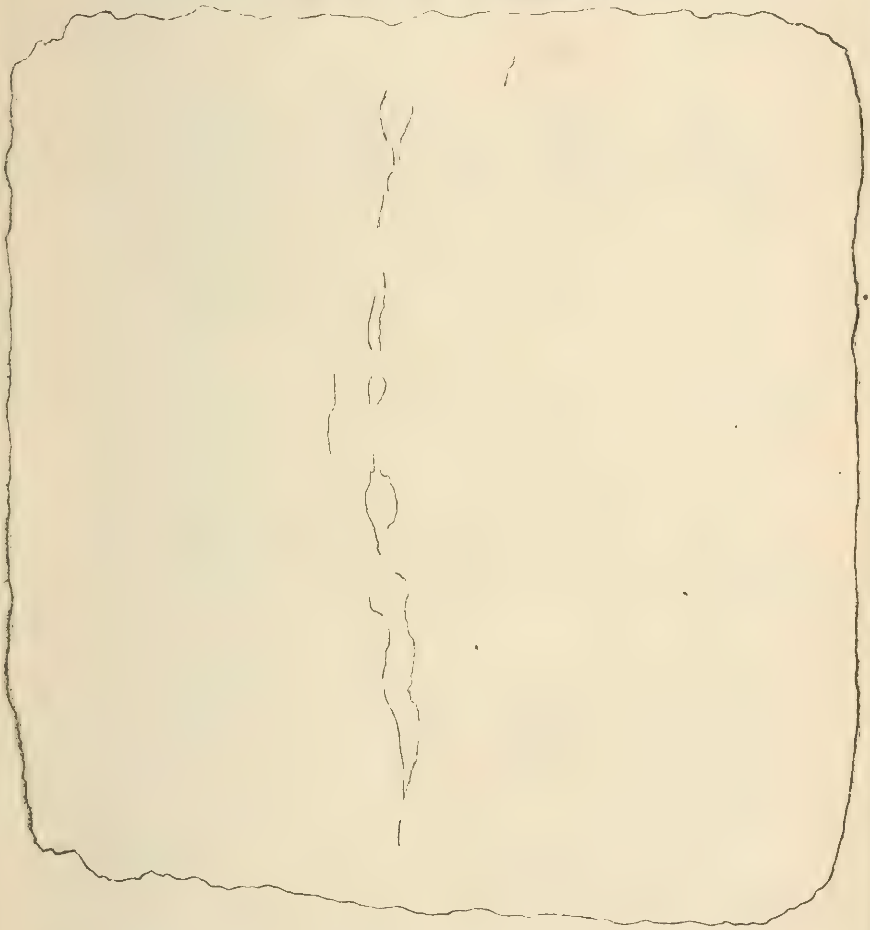




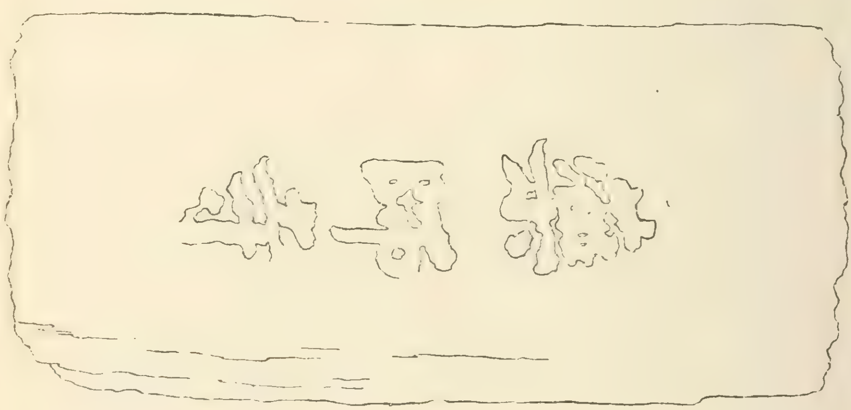


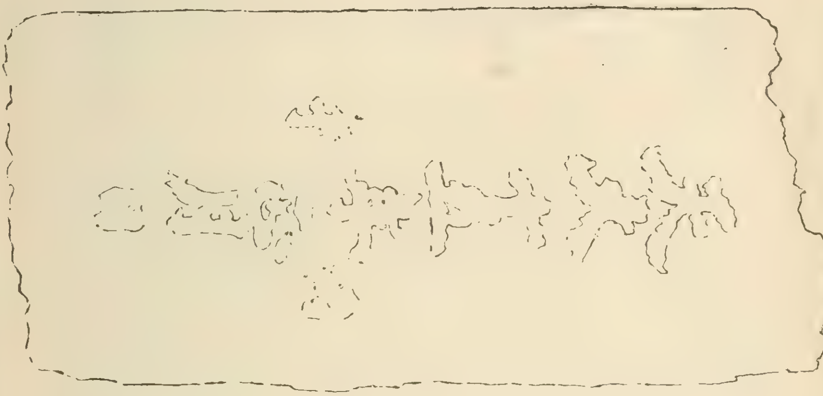


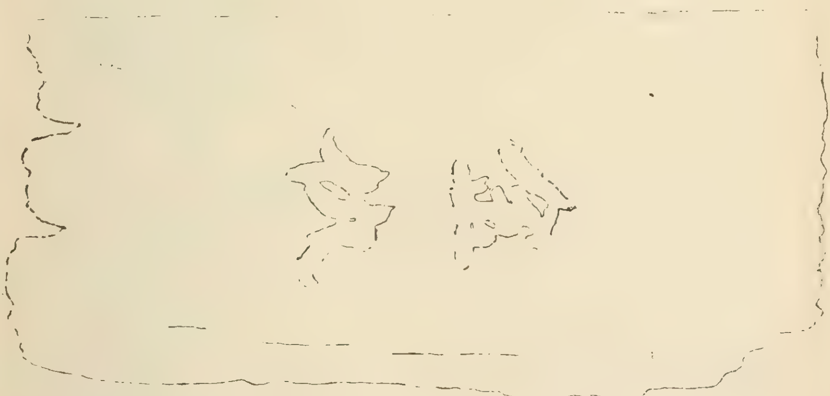
藥師寺金堂升



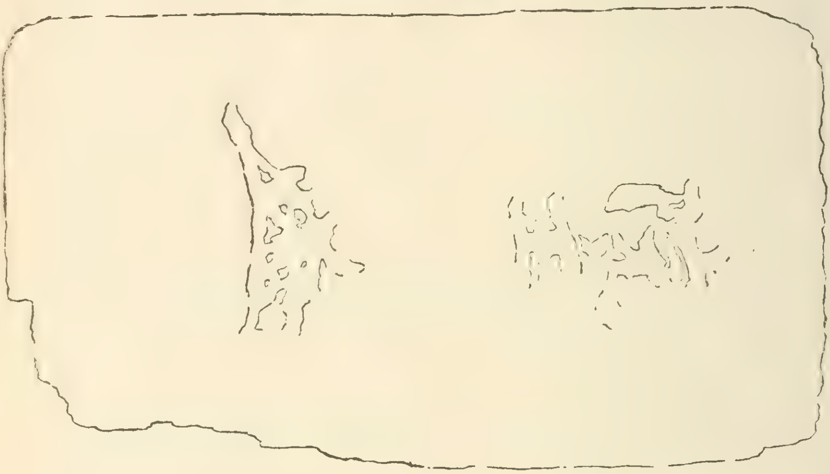


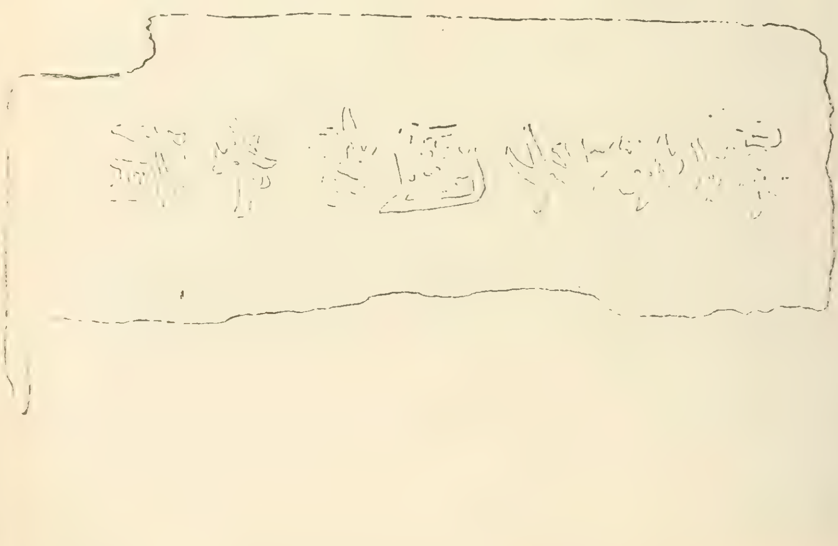


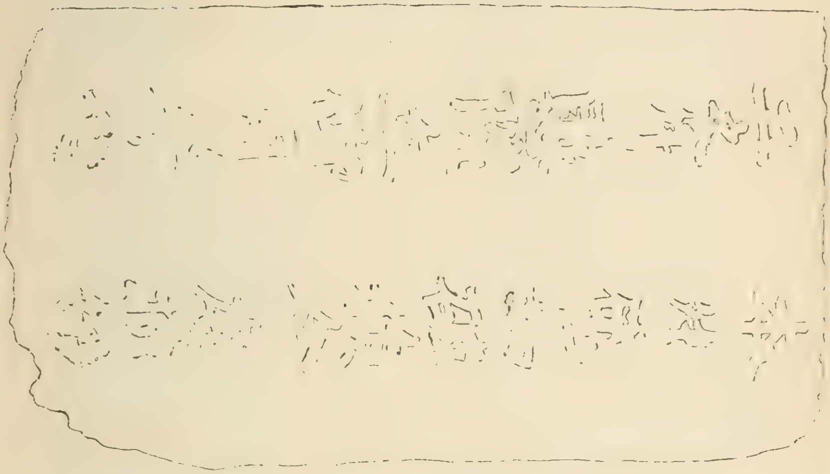


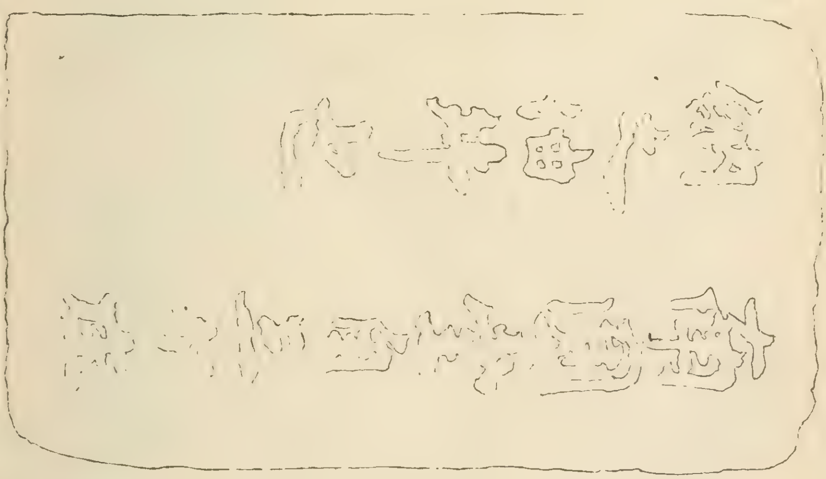


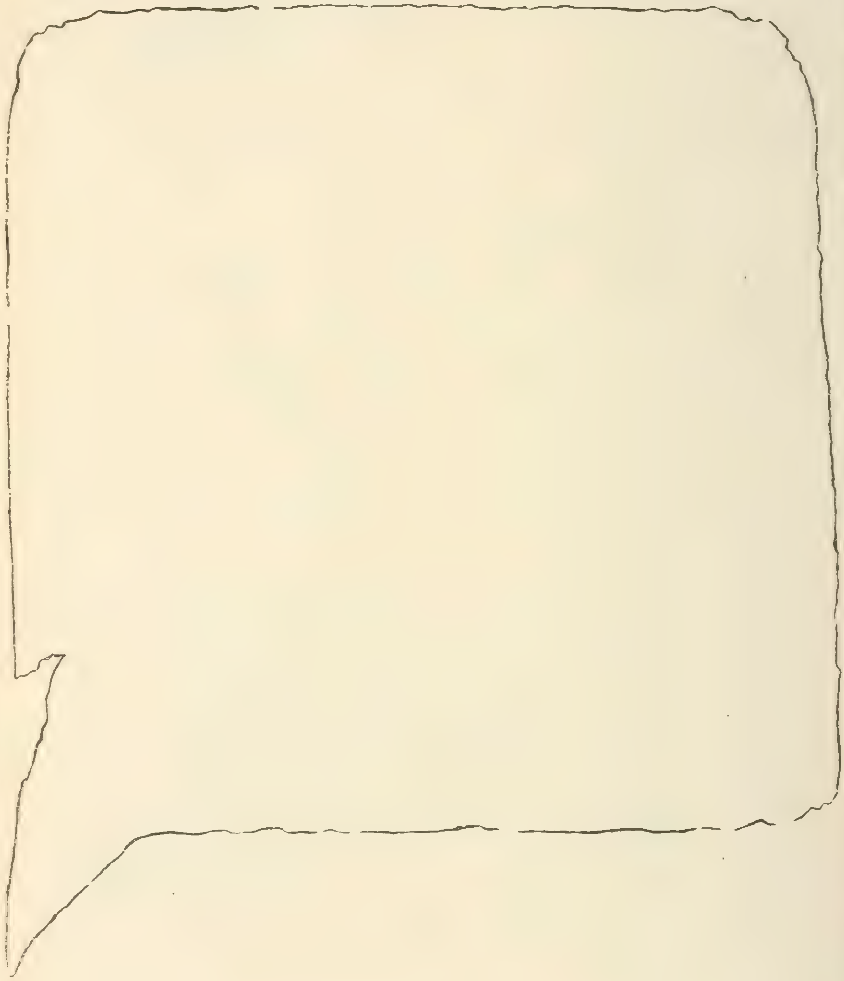
古梅園所藏

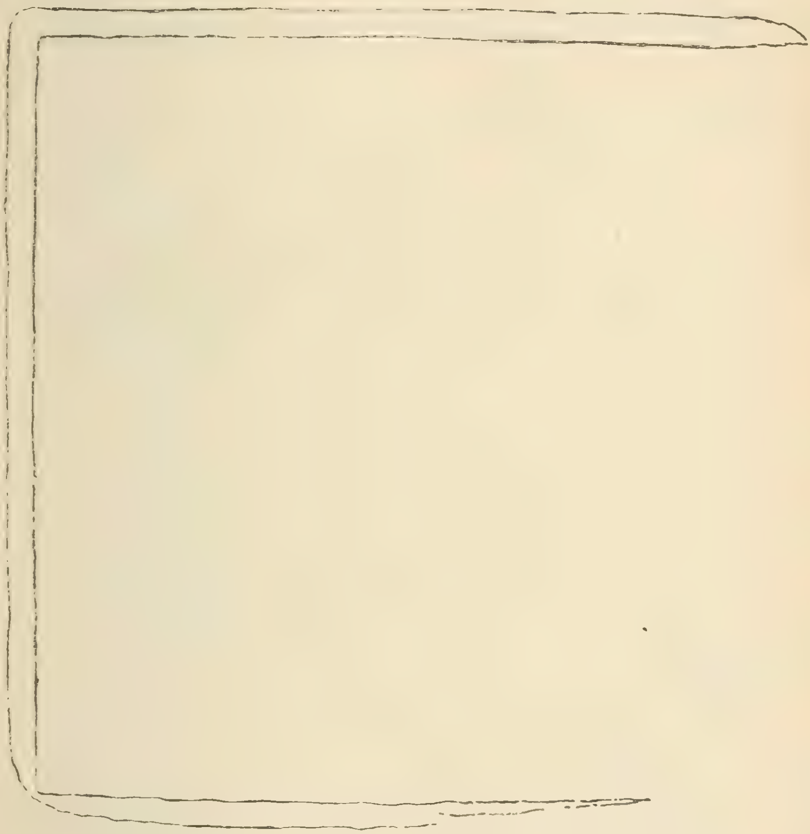










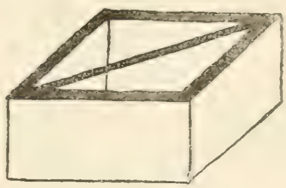


江戸增上寺御靈屋領代官の方に一斗量あり、緣に鍍あり、中に梁あり、下の四方手掛の切かけあり、是をば京量と稱す、又一斗一升入の大量あり、又九升入もあり、俵は四斗二升入にして、收納の時一斗一升入にて三ッ量九升入にて、一ッ量なり

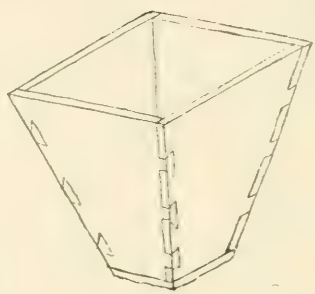
國量（一國々々の量といふことなり） 手量（俗に自酒を酌を手盛といふ、自肴を引を手挾などいへり） 武佐判（亦云近江量） 遺升（律原發揮） 家量（左傳、以二家量一貸、而以二公量一收レ之） 私升（朱子行狀、本人令韓人許諸用二使私升一） 私斗（經國雄畧）

蒂名

升



清升

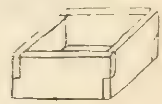


口徑り五寸一分、高サ三寸二分、底徑二寸六分

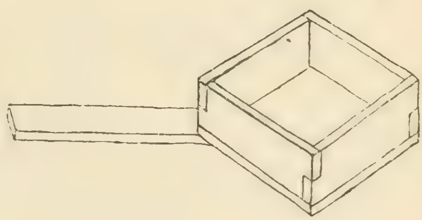




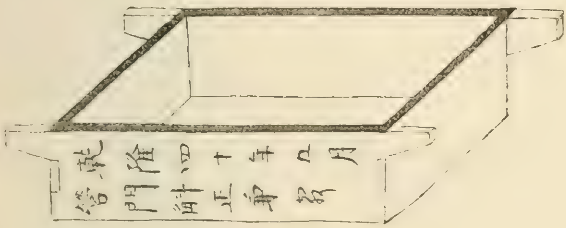
合



科戸

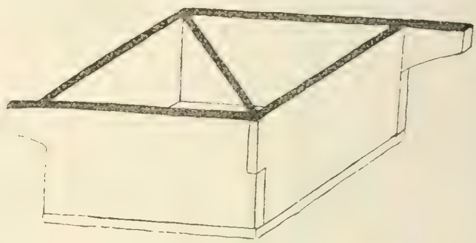


朝鮮舛

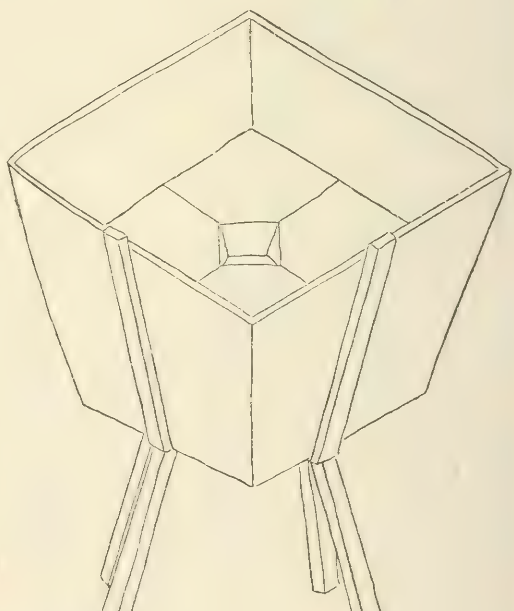


長サ二尺五寸廣サ深サ各一尺三寸、松材造

斗



漏斗



武佐判量は、近江武佐より出す、八合入なり、ゆゑに八合量とも唱ふ武佐は近江の地名なり、兼良公の關の藤川記に、近江の武佐といふ所にやどる、武士のゆかけはたゞぞなびくなる、うへこそ無佐の名ハ殘りける天文十三年、佐々木義實百姓の租を納るに、二合を減じて收が爲に、近江武佐の倉にて造る所、是百姓を存恤の志にして、末代の惠政と稱せり、孟嘗君傳、「田常收ニ賦稅于民ー以ニ大斗ー出、以ニ小斗ー收、齊民歌レ之」とあり、義實亂世費用不レ給の中にして、如レ此の惠廉あるは、其餘の政蹟もおもふべし、然を俗に、或は之を石田量とも唱へて、石田三成八萬石の地を十萬石に料

らんとて、八合入を用ひしなどいふは愚なる說なり、量斗は人々の眼前にて取あつかふものなるを、かゝる拙きこととして何しに民の信從すべきやは、又一說に、柴田勝家の製る所なり、後世小量と印烙なきものを、謾にむさばんと唱ふは、元無判といふことの訛なりと見えたり、武佐判量寸法 方四寸六分半、深サ二寸三分八厘半強 甲州判量甲斐國にて用ひ來れり、武田氏領地の時より始るといふ、旅籠量京升にて七合五勺入なり、同半量、京升にて三合七勺五抄入なり、同小半量、京升にて一合八勺七抄五撮入なり、此外一國にて行る國量所々に多しといへども擧しるさず

酒量　一名柄付量、○參代星の形是に似たり、故に酒量星の名あり、此器酒・醋・油等を料る、今の斗量に雨杤あるも、稍相似たるなり、俗に量一ツを一杯といふは、蓋し酒量より出たる言にて、今一杯量といふは一升五合入なり

水量製　一合口二寸一分、深サ一寸四分七厘　二合半口三寸一分六厘、深サ一寸六分二厘三毛　五合口三寸九分六厘、深サ二寸六厘七毛　一升口四寸九分、深サ二寸七分　南圓堂油量口五寸二分、深三寸、今升にて一升二合五勺一才

科斗史記張儀傳、○即酒量なり、伊藤氏曰、科は蓋し斗の長柄あるものをいふ　大斗詩大雅疏、大斗長三尺、謂₂其柄₁也、蓋從₂大器₁、挹₂之於檀₁、用₂此勺₁耳○東都事略、宋大祖祝曰酒者天之美祿、何惜不ᴸ令ᴸ飮ᴸ之、謂₂王審琦₁曰、天必賜₂卿酒量₁

酒量ハ酒の飮量をいへり　登加伎和名鈔　量懸亦云量搔　梁、亦弦の字を用、俗云、渡金量の角掛て亘したる鐵梁なり、芝田錄に、沒梁斗と見えたり

槩和名鈔、引₂禮記注₁、槩平₂斗斛₁者也○說文杚平也、漢書以₂井水₁準₂其槩₁也　斗格類書纂要

蕃名

槩寸法　一斗量の槩ハ二寸六分、七升ハ二寸三分、五升ハ二寸二分、一升ハ一寸二分 或謂槩元定式なし、量より外へ、兩方手の掛りたり、長く作る、此に云寸法ハ、槩の木口の徑をいふ、凡斗量は槠枚にて作る、一升より下ハ、兩端を執て押に及ず、故に杉、竹等にて作るなるべし 凡俗間己には槩を輕くあて、佗には壯くあ

て、平ならざるを量掛取といふ、盜を以て充り○明律曰、「凡各倉收二受稅糧一、聽下令二納戶一親自行レ槩、平斛交收、作レ數支銷、依レ令准中除折耗上、若倉官斗級不レ令下納戶行上レ槩、踢斛淋尖多收二斛面一者杖六十、若以二附餘糧數一計レ贓、重者坐レ贓論レ罪、止二杖一百一」（物部氏解曰、「納戶ハ多の百姓の中より、一人を差て納所の倉場に行しめ、其者自身に槩をあてゝ料するなり、○踢斛ハ量を足にて踢て多く入やうにする、斯方のおとしゆすり込の類なり、○淋尖ハ量の上より、米をこぼし掛て、合盛高料にすることなり、斯方にてある米起シ料ともいふ、皆倉役の不法を糺明す也）

按に、西土は其量法一向に定規なし、大率を擧るに 周一升此方八勺九抄餘なり、四升を一豆とす、（博雅に「升四曰レ豆」是なり） 四豆を一區とす（一斗六升、此方今の一升四合三勺餘） 五區を一釜とす、（或作レ鬴、六斗四升一說八斗、此方今五升七合四勺餘） 二釜を庾とす、（一斛六斗、此方今一斗四升三合五勺餘） 五庾を鐘とす、（八斛○左傳に、十釜を鐘とす、六斗四升） 二鐘を秉とす、（十六斛、此方今一石四斗三升五合二勺、○小尒雅には二掬を豆とす、二釜有半を庾とす、二籔有半を缶とす、四斛なり、二缶を鐘とす八斛なり）

漢書に、牛一匹に三十六斛を駕すると云は、本邦の一石六斗に抵と云、唐宋以來は、五斗爲レ斛二斛爲レ石、故に西土の一斛は本邦の五斗餘なり、度量衡考等を按に、漢一升は此方今の九勺三秒一撮二圭九粟（漢一合ハ此方今の九抄三撮一圭二粟なり、漢一勺ハ此方今の九撮三圭一粟になり） 魏・晉一升は此方今の一合零三秒 宋・齊一升は此方今の一合零八秒、梁・陳一升は此方今の一合一勺八抄四四三、 隋一升は此方今の一合三勺九秒四八 唐一升は此方今の四合一勺八抄四々三（唐詩に謂「李白一斗詩百篇」一斗ハ此方の四升一合耳） 宋一升は此方今の三合二勺零、 元一升は此方今の四合六勺三秒、 明一升は此方今の五合七勺一秒四、 又明新製の五斗量を以てすれば、 其一石は此方今の四斗九升九合零七秒、 清一升は此方今の五合八勺四抄七撮にあたれり、 故に彼の米一斛は、 我の五斗八升四

合七勺なり、朱氏談綺曰、唐山の升不同なり、餘姚の升は日本の四合を一升とす、是を鄕升といふ、官升は六升を一升とす、然ども處々不レ同、河南の升ハ日本の八合五勺を一升とす、大方通用ハ日本の五合五勺ほどを一升とす、黄鐘の律より出たる升ハ、古今かはらず、日本の升にて五合六七勺なり按に、今清國部升は戸部より頒出す、其式樣江南一斗入の升をば、年貢上納に用う、即　本邦の六升ほどを容、民間に用るは各省にて一二合の差あり、又米一斛は五斗にて、二斛を一石とす、重サ百三十斤、俵作は通例五斗俵なり、一石代銀凡三十五六匁、一升は此方の五合強と云云、凡西地の量は口濶く底狹し、又箱の如くして四方の外を鐵にて鍍たるもあり、沖繩人曰、福建等市店の私量は竹筒なり、西川氏曰、西地升尺交易の諸色、何も斤量を以て賣買す、故に長崎へ來る者、和蘭の如きも、竹筒の器を以て粮米の多少をはかる、彼一升と號する者　本邦の五合弱なり、其餘外夷諸國皆量あり、中井氏逸史曰、朝鮮量一斗當二我三升五合一、以二十五斗一爲二一石一、當二我五斗五合一、量の韓語をシウライといふ

手度　舊事紀有二手量一、大小及音聲巨細、○瓊矛拾遺曰、長量拇指與二中指一之間寸法也、○谷重遠曰、手度言以レ手度レ之也、伸二兩手一爲二一尋一

長度　弁色立成、尺竹量也、○谷重遠曰、凡造二宮殿一皆用二長度一以二身長一計度之名也

鐵尺　延喜内記式○俗に曲尺を謂て金尺と唱はくろかねのくろを省て、かねとのみいへり

物指　度食貨志、度者分・寸・丈・尺引也、所三以度二長短一也　指尺文公家禮

蕃名　ハント、メート

度の數は忽より起る、引・丈・尺・寸・分・釐・毫・絲・忽あり、其餘は名有て見るべからず、忽・絲十絲毫十忽厘十毛

分十厘 寸十分 尺十寸 丈十尺 本邦の舊尺、荷田氏度制畧考曰、古の時尺に大小あり、令の大尺といふは、小尺より二寸を加ふ、故に今の曲尺にて一尺二寸に當る、式の大尺といふは、令の小尺なり、故に式の大尺は、即今の曲尺にして一尺なり、是名唐の大尺とおなじ 式の小尺は、共一尺今の曲尺八寸三分三厘三毫强にあたる是亦唐の玉尺とおなじ

按に、「和銅六年二月、始制ニ度・量等類ニ同四月頒ニ下天下諸國ニ」此時より以前に用し尺を改め、度地尺に用し高麗尺の大尺を停て、是までの小尺をば大尺となし、此を以て度レ地以下の常用尺とし、この一尺を六に割て、その五ッ分を合せし八寸三分三厘三毛餘の尺を小尺とし、此を以て只晷景を測り、湯藥を合するにのみ用ることの、延喜雜式に載たるが如也、而るに世俗いにしへ尺に大小の二とほりあるをしらず、雜令に、「田五尺爲レ歩」とも、格に、「田六尺爲レ歩」あるをば誹て、紛々の説を發して明證なし、令の五尺ハ今の曲尺一尺二寸を一尺として云、格の六尺ハ今の曲尺一寸を以て云ことを見つけざりしが故なり、而に荷田氏始て明辨せり 律原發揮等に、舊尺とて、今大和法隆寺に在もの、圖を出し、魯般が尺にて、聖德太子之を傳へしといふ、然ども之を天下通用せしものとは見えず

類聚國史、「養老四年五月、頒ニ尺樣于諸國ニ」と云ことぞ尺式のさだかに究りしにて、今所用の曲尺は即式の大尺にして、令の小尺なり

今尺樣 曲尺即式の鐵尺にて、舊式ハ一尺二寸 同裏曲尺一尺四寸一分四厘二毛 吳服尺曲尺一尺二寸、是舊尺と同じ 鯨尺曲尺一尺二寸五分 文尺曲尺八寸、是寛永通寶錢の徑八分なるを十文合て

尺にせし也、尺を佼と讀ハ、八寸の寸の國訓によれり　夏尺横黍尺八厘三毛　商尺曲尺九寸八分四厘　周尺曲尺六寸五分六厘一毛　漢尺曲尺九寸一分一厘三毛　唐尺商尺一尺二寸　宋尺曲尺一尺一分二厘六毛

明曲尺商唐尺也　同銅尺即量地尺、曲尺一尺、一説に曲尺一尺七厘八毛、然ども量地のところには、前説を用ひたり　天竺尺曲尺四寸一分

三貨圖彙附錄卷之三 寶鈔爲替德政古文書之部

草間直方輯錄

諸國札遣ノ事、是ヲ銀札ト云、草廬雜談ニ云、「宋包恢知ニ平江一、督ニ買田一、以ニ肉刑一從レ事、復以ニ楮錢一作ニ銀開一發不レ用」ト、銀開ハ銀札ナリ、經濟纂要前集ニ、銀開ハ元ニ始ルトノセシニ、是ニテミレバ宋ニ始ルナリ、然レドモ天下ニ銀札通用シタルハ元始メナリ、シカレバ宋ノ頃ヨリ起リテ金・元・明ノ時專ラ盛ン也ト云ヘリ、是ヲ交鈔ト云、其名世々ニシテ交子・會子・開會・寶鈔等ノ替リアリ、何レモ札遣ノ事ナリ、朝鮮ニハ是ヲ楮貨ト云、元ノ世祖ノ時ニ、元寶鈔・至元寶鈔・有、通寶ノ寶ヲ取リテ、錢札ヲ寶札ト云、銀札ヲ銀鈔ト云、本邦寶鈔ノ事、太平記、後醍醐天皇元弘二年、大内裏造營ノ所ニ云、自レ昔今ニ至テ我朝ニハ未レ用作ニ紙錢一諸國ノ地頭・御家人ノ所領ニ被レ懸ニ課役一ト云リ、此時乾坤通寶ノ銅錢ヲ鑄サセ、詔ニ銅楮幷用行ト云、是本邦寶鈔ヲ用ラル始歟、其已來足利ノ世ヨリ、當代延寶・天和ノ頃迄ハ、其例ヲ不レ聞、元祿五六年頃ヨリ、諸侯ノ國ニテ用度乏ニ仍テ始テ起ル、尤何レノ諸侯ヨリ始ルト云事ヲ不レ知、舊書ニ元祿十二卯年、紀和歌山ニ始テ銀札起ルトアリ、此等ヲ始ナリトセンカ、其後寶永四年民ノ害ナル事被ニ聞召一停止セラル、三王外記ニ云、「元祿以來、諸侯奢侈、國用不レ足、造レ鈔代レ銀、其

士民皆不便、王立出レ令禁レ之」ト云、寶永四年十月下旬、銀札相止トテ、一時ニ錢貴ク相成、此節一貫文ニ付、十四五匁ノ所、廿二匁五分ヨリ、廿三匁五分迄上ルト云、尤寶永三年・同四年、專ラ新銀ヲ吹セラル、古慶長・元祿ノ銀ト引キ替可レ申旨被ニ仰出一候得共、此銀位惡シク民不レ服、度々御觸モ有レ之ドモ、諸國ヨリ引替ニ不レ登、仍レ之寶永ノ新銀不捌ニテ、通用滯候ニ付、諸國札遣停止セラレバ、自ラ國々正銀ヲ以テ、取引無レ之テハ不レ濟事故、右ノ新銀諸國流布有レ之ベキトノ考ニテ、札遣停止被ニ仰付一シニヤ不レ知、其後享保十五年ヨリ、諸國ニ御免ナル、何ナル故ト云事ヲ不レ知、按ズルニ、此時代國國人數多ク相成、其上金銀吹替等ノ沙汰有ニヨリ、市民金銀ヲ貯フ、慶長ノ金銀ハ良品故、吹替アラバ增步アルベキトノ考ニテ、市民隱藏ス、仍レ之金銀不融通ニテ、錢ヲ以テノ交易多ク、又鑄錢沙汰無レ之、仍テ錢ノ價貴ク、諸國困窮故、御免アリシコトニヤ不レ知、又享保四亥年、京都始メ山城國中、銀札通用ノ儀評定有レ之、仍テ差支ノ有無ヲ、京地本兩替師ドモヘ、奉行所ヨリ詰問セラル、返答

一　山城一國、銀札通用被ニ仰付一候而、差支之筋も有レ之間敷哉、存寄之趣可ニ申上一樣被ニ仰付一御書付之趣奉ニ承知一候、御大切之御儀に御座候故、銘々共愚意に難レ及奉レ存候得共、乍レ恐存寄左に奉ニ申上一候

一　京都兩替屋共者、正金銀取遣り掛改等仕渡世仕來候所に、銀札通用に罷成候はゞ、商買も相離れ可レ申樣に奉レ存、乍レ恐迷惑に奉レ存候

一　慶長銀之位に御吹直し被レ爲ニ成下一、世上萬民難レ有奉レ存罷在候處、此度被ニ仰付一候共、通用差支申

儀者御座有間敷哉と奉ㇾ存候得共、先年諸國札遣之始終、旁相考、いやしき心に者、乍ㇾ恐如何にも奉ㇾ存候、他國に而諸商物賣買仕候樣に罷成候はゞ、正金銀者おのづから他國へ引け、御當地一所之困窮にも罷成可ㇾ申哉と奉ㇾ存候

一　從二國々一京都へ持登り候諸色商物、京都に而賣拂、其代銀札請取、其銀札を札場之正銀に引替候、隙入旁々迷惑に奉ㇾ存候、國々より登り候諸色商物、おのづから無ㇾ數能成、京都諸色高直に罷成、迷惑可ㇾ仕と奉ㇾ存候

一　江戸・大阪御藏、惣而御上納之分、銀札納に不ㇾ被ㇾ爲ㇾ仰候者而者、下々安堵仕申間敷哉と奉ㇾ存候

一　御當所之儀は、諸國を引請商賣仕候者、又は御大名樣方御用達之者多く御座候處に、一國限り之札遣候而は、急成節之用向ニ難ㇾ辨可ㇾ有二御座一と奉ㇾ存候

右之通存寄乍ㇾ恐奉二申上一候、御當地町人共外之商賣に付、左樣之宜き筋、又は差支之筋、可ㇾ有二御座一哉と打寄色々工夫仕候得共、世上之儀愚意に難ㇾ及奉ㇾ存候、以上

享保四亥年十二月

右等ノ外差支ノ事數多可ㇾ有ㇾ之、三都ハ自然ノ天府ニテ、他國城下ノ經濟ヲ以テハ手狹ニテ差支ノ事ドモ多カラン

太宰ガ曰、國家ニ用度乏シクナレバ、興利ノ臣種々ノ惡說言上スルハ定マレルコトナリ、其中ニ鈔ヲ

造ルコトハハナハダシキ惡政ナリ、フセガズンバアルベカラズト、云々

爲替ノ事、唐憲宗ノ時ニ、錢少キヲモツテ、商賣人京師ニ至テ諸國ノ進奏院ニ錢ヲ渡シ、其手形ヲ以テ其國々ヘ往テ錢ヲ受取、是ヲ飛錢ト云、文獻通考ニ曰、「憲宗以ニ錢少一、復禁レ用ニ銅器一、時商估至ニ京師一、委ニ錢諸路進奏院及諸軍諸使一、富家以ニ輕裝一趨ニ四方一合券、乃仍レ之號ニ飛錢一云々、」進奏院トハ諸國ノ守護ノ京ヤシキ也、是今ノ爲替ノ祖也ト云々、是ヨリシテ交鈔ノコト起レリ、本朝爲替ノ事、何レノ時ヨリ始ルト云事ヲ不レ知、或人云、延寶・天和ノ頃ヨリ始ルト云、往昔ハ上ミ方卅六人ノ御代官ノ上納金、取立次第江戸ヘ附送ル、仍レ之道中人馬ノ御用繁ク難儀也、然ル所ニ出目ノ何某ト云者、此人馬ノ勞ヲ省キ、公儀ノ御爲ニモヨク、又請負タル者モ利德ヲ得ル仕方ヲ工夫シテ、六十目爲替ト云事ヲ勘出シ、則此ヲ公儀ヘ願フ、此六十目切爲替ト云ハ、マヅ御代官上ミ方ヨリ六十日目ニ江戸ヘ納ル也、公儀ニテハ六十日ノ遲滯雖レ有、道中人馬ノ勞ヲ厭フコト莫大也、請負六十日ノ間ニ、遊金ヲ廻シ其間ノ利德ヲ受ルコト夥シ、如レ此工夫シテ願シニ、公儀ニテモ彼是評定ニ日數掛リシ中、願主不幸ニシテ病死ス、續テ跡ヲ相勉ベキニ悴モナク、此願ヒ空シカラントス、越後屋八郎右衛門・三井三郎左衛門手代ニテ居タリシガ、此願主ニ少シ由緒アリケレバ、願ノ跡付トナリシニ、元ヨリ濟カヽリシ願ナレバ、則八郎右衛門ニ被ニ仰付一、是ヨリ八郎右衛門三井方ヲハナレ、駿河町ニ店ヲ構ヘ、御代官ヨリ京都ニテ金子ヲ受取、六十日ノ間諸向望ノ者ヘ、公儀名目ヲ以テ相對次第貸付、日廻ノ利ヲ以テ德用

トス、則京都ヨリハ呉服幷諸代呂物ヲ江戸ヘ積下シ、其代金ヲ彼地ヨリ差登シ可レ申處ヲ、其儘江戸表ニテ右御代官ヨリ上納ノ代リトシテ六十日目ニ納ル、是ヨリシテ追々爲替加入ノ者出來、自ラ御爲替仲間ト唱ヘ、只今迄相續ス、右爲替初リシハ、或説ニ元祿ノ始ト云、其委シキハ不レ知、凡是濫觴也、當時御爲替組ト稱スルハ

荒木　伊右衛門　　竹川彦太郎
島田八郎右衛門　　古川彌兵衛
三井次郎右衛門　　同　元之助
同　三之助　　上田三良左衛門
同　傳之助　　同　金十郎
奥田仁兵衛　　小野善助

右十二人ノ者御用承ル、併シ時々盛衰アリテ、碇ト定リガタシ

太平策ニ云、借貸ノ道ニ更始ト云事アリ、改始ムルト讀テ、古キヲ弃々シテ今日ヲ始トシ、是ヨリ後ヲ正シク捌事也、　本朝世俗ノ德政ト云ハ是ナリト云リ、右德政ト云事何レノ世ヨリ起ルト云事ヲシラズ、續日本紀ニ云、「寶龜九年三月、勅曰、頃者皇太子沈レ病不レ安、中略救レ病之方、實由ニ德政一、延レ命之術、莫レ如ニ慈命一、宜可レ大ニ赦天下一」

又延暦十八年六月戊寅、詔曰、惟王經レ國、德政爲レ先、惟帝養レ民、嘉穀爲レ本、朕以二寡薄一忝承二洪基一懼甚レ履レ氷、懍乎御レ朽、昧旦丕顯、日昃聽レ朝、思レ弘二政治一、冀レ宜二風化一、時雍未レ洽、陰陽失レ和、去年不レ登、稼穡被レ害、眷二言其弊一、有レ憫二于懷一、宜下敷二寬恩一、答中彼咎祥上、其被レ損尤甚之處、美作・備前・備後、南海道諸國、肥前・豐後等十一國、去年田租、特全免レ之

又延暦二十四年十二月庚子日地震、壬寅日中納言近衞大將藤原內麻呂侍レ殿、上有レ勅、令下參議右衞門督藤原緒嗣、與二參議左中辨菅野眞道一、相四論天下德政上、于レ時緒嗣議云、方今天下所レ苦、軍事與二造作一也、停二此兩事一、百姓安レ之、眞道確執異議不二肯聽一、帝善二緒嗣議一、即從二停廢一、有識聞レ之、莫レ不二感歎一

宇治拾遺に、かゝる程に、世中しづかならざりければ、十一月卅日、新院の殿上にて、東國謀反之方評議ありけり、中の御門左大臣隆季・大納言忠信・春宮大夫左大辨長方參られたりけり、頭辨經房朝臣、綸言の旨を仰せけるに、左大辨發言して申けるは、ひとへに可レ被レ行二德政一、漢高被レ掠二六國一、承平年中に、有二將門謀反一、和漢雖レ存、先於二今度一は、四ヶ月の中に拾餘國皆反、當時の政若不レ叶二天意一歟、以レ之思レ之、法皇は四代帝王父祖也、無レ故不レ知二食天下一、如レ元可レ聞二令政務一歟、又入道關白被二俗歸一、朝之思者可レ爲二攘災之基一哉と申たりけるを、諸卿聞て、みな色をうしなはれけり、他人はたゞ德政を行はるべきおもむきをぞ申されける

百練抄に、久安元年四月二十五日、依二里變一、召三徳政意見於二公卿八人一、內大臣賴長辭而不レ進

又仁治元年二月七日、於二攝政直廬一有二群議一、變災之間可レ被レ行二徳政一事

又寛元三年二月十日、今夜於二鬼間一被レ議二定徳政事一

又東鑑ニモ、間々徳政ノ事出タリ

文治三年十月、去八月十九日、同廿七日等御消息、今月十五日到來、條々ノ事奏問候畢中略所々地頭等事任レ令二成敗一給之上、各可レ被二仰下一也、中略人怒神祟モ積リヌレバ、世間如レ此不二落居一、若被レ散二所怨一者神明モ擁二護之一、諸人モ猶豫セズ、徳政トモ成テ世上モ弘屬二靜謐一下略

又文治四年三月、院宣、中略就レ中近曾天變地妖連々有二奏聞一、是則人愁重疊之故歟、妖不レ勝レ徳、不レ可レ如二徳政一、謂二徳政一者、以二前人愁可一レ爲レ先也、存二此旨一殊令レ致二沙汰一給者、四海靜謐、萬民歸レ仁歟、者院宣如レ此、仍執達如レ件

又寛喜二年六月、美濃國飛脚參申云、去九日辰尅、當國蒔田庄白雪降云々、武州甚令二怖畏一給、可レ被レ行二徳政一由有二沙汰一云々

又文暦二年五月、仍二天變地妖事一、可レ被レ行二御祈禱徳政等一之由、內々有二沙汰一

兵範記、仁安三年十二月廿九日、去朔日伊勢太神宮正殿、并東西寳殿以下燒亡、依レ之可レ被レ行二徳政一事、左大臣定申云、被二徳政一、可レ注二余妖一之旨、諸道勘申定、是妖不レ勝レ徳、天能與レ善、其申二神宮一

事、殊可レ被ニ尋沙汰一矣

右大臣按察使藤原朝臣・皇后大夫藤原朝臣・中納言藤原朝臣・修理大夫藤原朝臣不定中、殊被レ行ニ德政一、可レ被レ銷ニ餘殃一矣

康富記、康正元年十一月廿九日、今日奉行政所諏訪信濃守方ヨリ、猫間畠幷舊跡敷地、永代沽却之契弃破之御奉書整送レ之、仍ニ德政御法一也、五分一收納也

右德政ト云ハ、地頭ノ濫妨ヲ糺シ、庄々ノ年貢未進等ヲユルメ、困窮スル民ヲ難儀セザルヤウトノコトニテ、イハユル仁政ノコトニテ、今ノ如ク貸借ヲ弃損スルコトニテハナシ、是ハ足利ノ中世ヨリ起ルナラン、既ニ文明年此コトアリ、昆陽漫錄ニ云、先ニ室町殿日記ニ載タル、料足ノ手形ヲ見テ、姦民ノ爲コトハ防ギ難キコトト思ヒシニ、大館常興幷大和晴通ノ記ト題スル書ニ云ク、天下一同ノ德政行ハルトモ、可ニ返辨一ノ由堅ク雖ニ申合一、御法ノ德政ノ貶ハ、借書文言ニヨリオシナベテ德政行フコトナリ、其段覺悟アル錢主ハ皆預リ狀ニスルコトナリト、是ニテ益々姦民ノ恐ルベキヲ知ル、我國德政ノ始メハ考フベカラズ、西土ハ五代ノ石晋ヨリ始マル、小松內大臣敎訓狀ニ、德政ノコトアリ、其文左ノ通

德政相論之事

近年ノ德政ハ、先例ニ變リテ兵具ヲコシラヘ、貝ヲ吹鐘ヲツキ、勢ヲソツシテ倉ヲ責ルコト、只山賊

海賊トヒトシ、君ノ御訪ニ、　王御一代ニ一度ヅヽ御年忌ニ、六十六ケ國ノ徳政ヲヤラセ給ヒシ、當時ハ内裏ノ宣旨ニテ、三年ノ内ノ借物ヲコトゴトク成スベカラズ取ベカラズト云御綸旨ニテ、徳政ヲヤリ給ヒケル、者今時ノ徳政ハウスクシテ往古ノ徳厚ク候、只盗人ニモ似タリ、堅御成敗ヲ可レ被レ加」コレニテミレバ我國ノ正史ニ載ザレドモ、徳政ノ始ハ久シキコトミエタリ、私ニ云、小松内大臣教訓狀熟讀スルニ、教訓ノ體ニアラズ、小松内大臣ヨリ後ノ事ヲモ載タレバ、小松内大臣ノ作ニアラズ、後人ノ名ヲ借タルコト明ナリ、然レドモ古雅ニシテ近世ノ書ニアラズ、其書ニ、京・鎌倉ノ海道ト云ヒ、且ツ平氏ヘ諂ヘバ、北條氏ノ時ノ書トミユレドモ、刑書ヲ説モノ貞永式目ト合ザレバ、貞永式目サダマラザル前ノ書ニシテ、寡婦ニ甚諂タルコトアレバ、賴經將軍ノ代ニ、二位禪尼政子ノ政ヲ聽レシ時ノ書ナランカ、扨天正迄徳政行ハレシトミエテ、遠州井伊谷龍潭寺ニアル、　神祖ノ御證書トスベシ、御書左ノ如シ

一　祠堂物、借與ノ年、米錢三和利二文子ニ相定上者、縱天下一同ノ徳政、國次之徳政、私之徳政、雖ニ入來一令レ除レ之事

天正七卯　　御諱花押

大樹寺勢蓮社譽上人

神祖天下ヲ統理シ玉ハザル時、カタノ如キ政アレドモ、神祖海内ヲ治玉フニ至テ、弊政蕩盡シ、天下

一統シテ、古今ニ勝レタル昇平ヲナシ玉フ、御德廣大ナルコトシルベシト、云々
草廬雜談ニ云、先々著ス所ノ國家食貨略ニ、トク政ヲ德政トカキシニ、其後ニ室町殿日記ヲ考レバ、
德世トカケリ、扨德世モ實惠ニナラザルベシ、室町殿日記ニノセタル手形ヲミレバ、姦民ノ利ヲハカ
ルハフセギガタキコトナリ、其手形左ノ如シ

一　御借用料足百貫文者

六郎殿御內方御借用被レ成候、來秋十七ヶ所之內、三文子利を加、急度御返辨可レ有レ之候、縱被レ行ニ德
政一候共、此借錢に於ては、無ニ相違一御返辨可レ有レ之候、仍狀如レ件

天文十二年十二月八日　　猶村市右衛門長高　判

小杉日向守長近　判

堺大小路天滿屋

宗　淸

同　博田屋

又右衛門　參

右ノ政ヲ世トモ書シナリ、多分古書ハ政也、扨二文子・三文子ト云ハ、二割・三割ト云ニ同ジ、室町殿日記ニ多ク出タリ、建武式目ニモ、質物利平ノ中ニ、五文子・六文子等、利ノ事出タリ、コレハ錢百文ノ利足五文・六文ト云フコトニテ、十貫文ナレバ、此利五百文五歩ノ利ナルベシ、十貫文ノ一割ナレバ、一貫文五割ナレバ、五貫文ト云ハン、是ニテハ紛ハシキユヱ、百文ノツモリヲモツテ、此利五文ノ子、或ハ五文字ト云フナルベシ、子ハ子母ノ子ニテ、月々年々子ヲ生ルノ據トスルナルベシ

今利足ト云、足ノ字ハ息ノ字ニテ、ハラムト訓ス、利銀ハ元銀ヨリ息(ウミ)タルモノナレバ、利息ト云、書言故事ニモ、「王莽貨與レ民收レ息」トイフ、小補韻會ニモ、「今人出レ錢生レ子、亦曰レ息」トアリ、又利足ヲ支分ト云、字書ニ、支ハ出也分也トアリ、元銀ヨリ分レ出タルモノナレバ、支分トモ云フ、本邦國史ニモ、利足ノ足ハ息トアリ、又大内家壁書ニモ

德政訴訟事

筑前國人之中、文明元年以來、到二長門國一令二渡海一之仁、前々米錢借物事、悉不レ可二返辨一由仰出サレ畢下略

文明十年十月六日

建武式目追加ニ云

政所方德政時制札案文

定ニ德政一事

一　ケンフ(絹布)ノタグヒ　エサン(繪衫)ノモノ、諸藉ノタグヒ　カツキ(樂器)ノ具足　カグ(家具)　ザウグ(雜具)等眞月ノ外十二ケ月タルベキ事

一　ホンカウハコ(盆香合)　茶ワン(碗)　花ヒン(瓶)　カウロ(香爐)　カナ物已下廿ケ月タルベキ事附タリ服ノ類ヒ、四ケ月ノ事

一　米コク(穀)幷ザコク(雜穀)等、七ケ月タルベキ事

右條々任ニ先例一サダメオカルヽ處ナリ、所詮十分一ヲサタセシメ、以ノ女白晝トルベシ、若コノ約月ヲハセスギハ流質タルベキ者、德政ノサタニ不レ可レ及、萬一寄事於ニ左右一カウ〳〵(嗷)ノ儀ニ及バヾ置(オキテ)人トイヒ取(トリテ)人トイヒ、倶ニモツテ可レ被レ處ニ罪科一、此外ノ借錢以下ノ事、相互令ニ注進一、御下知ヲ以テ可レ有ニ其沙汰一由所レ被ニ仰下一也、仍下知如レ件

永正十七年二月十二日　丹後守平朝臣

上野介藤原朝臣

一　又永享三年十月、又嘉吉元年ニモ、德政條々出レドモ長文故略レ之

又室町殿日記ニ云、常德院(義尚公)法住院(義澄公)ノ例ニマカセ、德政ヲ行ヒ玉ハントテ即評定所ニテ案文ヲ書セラル、新規ニモアラズ、大方先法ノ如シ

德政ノ事

一　借錢借米ノ事　　城門
一　於武具之類者　　廿四ヶ月
一　絹布之類者　　十三ヶ月
一　佛具繪讃之物、家器之類者　　十二ヶ月
一　家質縱沽券ニ仕リ、證文正敷書有レ之、於レ加ニ利辨一者、可レ爲ニ借錢同前一事

右五ヶ條、本銀之十分一ヲ以テ、白晝ニトリ可レ申候、若違犯之族於レ有レ之者、曲事タルベキノ由、被ニ仰出一候、仍下知如レ件

天文九年三月日

光俊
脇屋惣左衛門貞長
猶木市右衛門長高

按ニ、右五ヶ條德政ノコト、舊キコト故文面不レ解、按ニ、武具ノ類廿四ヶ月其餘ノ品々十三ヶ月或ハ十二ヶ月ト云フハ、右ノ類ヲ質ニイレオキ、廿四ヶ月・十三ヶ月、夫々ノ限月ニイタリ、元銀十貫目ナラバ、十分一ノ一貫目ヲ以テ、白晝ニ請出スベキトノコトカ、又借錢・借米・家質等ノコトハ、借シ主ヨリ本銀ノ十分一ハウケトレト云フコトニヤ、又白晝ニ取可レ申ト云フハ、右德政免許セラルレバ、晝夜ノワカチナク、本銀ノ十分一ヲ以テ、質ヲ請ニキタルユヱ、夜分ハ取渡シスベカラズ、白晝ニバカリ取渡スベシト云フコトニヤ、イヅレ解セズ、右德政免許セラルト、ハヤ質屋方ヘ本銀ノ十分一モ持

參ナク、盜賊ノ押込同樣ニオシカケ、其資財ヲ奪ヒトリ、又騷動ニオヨビシトミエタリ、仍レ之又下知セラル

掟

一　今度被ニ免許一德政之處ニ、在々所々ニ隱住セシムル牢々輩、質屋方へ押込ヲ仕リ、資財ヲウバヒトルノ由其聞へ候、向後トモ其近邊ノ輩、乘テ致ニ手合一即時ニ出合、隨分打留可レ申候、生捕ニオイテハ大切ノ儀ニ候之條、侍ニオイテハ何ニテモ望ヲ叶へ、平人ニイタリテハ、當座ノ褒美トシテ、料足二百文可レ被レ遣候、仍下知如レ件

月　日

右ノ高札、洛中ヲ初在々所々不レ殘建ケル也

義輝公ノ御時、御領所十七ケ所ヨリモ、德政ヲ御赦免被レ成候樣ニト、再三訴訟申上ゲレバ、公方諸老ヲメサレ、萬松院殿義晴公ノ御代ノウツシヲ以テ、可レ被レ行ニ德政一之由仰出サレケルヲウケ玉ハツテ、先年ノ文言ノ通リ出シテ、板札ニウツサル

德政ノ事　十七ケ所

一　借錢・借米之事

一　於ニ武具類一者　廿四ケ月

一　絹布之類者　十三ヶ月

一　佛具繪讃之物・家器之類者　十二ヶ月

一　家質之事、縦沽券預狀有レ之トイフトモ、於レ加ニ利辨一者、可レ爲ニ借錢同前一事

右五ヶ條、以ニ本銀之十分一一、白晝ニ可ニ取申一之由被ニ仰出一候、仍而下知如レ件

永祿三年三月日　三角右衞門尉　在判

萬松院殿ハ、義晴公時代、右永祿ハ義晴公時代、尤其頃ハ亂世故、天下一統ノ徳政ニハアラズ、只公方御領所在々十七ヶ所ノミトミエタリ、親長卿記ニモ、文明二年十月二日、加茂堺内徳政トアリテ、是等前ニ記ス、　神君御印證ニ、所謂國次ノ徳政、私ノ徳政トイフニオナジ、ソノコロハ別テ諸國トモ騷亂ニテ、金銀如レ今アルベキヤウ無レ之、鑄錢モ無レ之、諸民資財不自由ニテ、米錢ノカシカリモ、イタツテ高歩ノ利ナルベシ

室町殿日記、御借米ノ所ニ云

御臺所入用之爲ニ、御借被レ成候、來秋十七ヶ所之御公物を以て、四割を加へ如ニ先規一可レ有ニ返辨一もの也

永祿五年十月三日

御借錢之方、足料二百五十貫文は、御家中御給分之爲に、御借用被レ成候、來秋十七ヶ所之内を以、三

割之足物を加へ、急度返辨可ㇾ申也

永祿五年十一月七日

右ノ如ク甚高歩トミユ、尤一ヶ月ノ利ナルベシ、又建武式目ニ

一　質物利平事

絹布類・繪讃物・書籍屬・樂器・具足・家具、幷雜具以下可ㇾ爲ニ五文子一、盆香合・茶碗物・花瓶・香爐・金具等、幷米穀類等、可ㇾ爲ニ六文字一

長祿三年十一月二日

之種 飯尾肥前守 于ㇾ時左衞門大夫

一　洛中・洛外諸士、倉利平事、近年任ニ雅意一致ニ其沙汰一云々、太不ㇾ可ㇾ然、所詮於ニ高利一者、爲ニ衆中定置一、嚴密可ㇾ被ニ相觸一之、若有ニ異議一、在所者隨ニ注進一可ㇾ被ㇾ處ニ罪科一之由被ニ仰出一候也、仍執達如ㇾ件

長祿三年十一月二日

之淸 飯尾加賀守

忠行 二階堂山城守 于ㇾ時政所

今ニテモ借錢ニ高歩ノ利ヲハカリテハ、遂ニ其家滅スベシ、仍テ昔ヨリ高利ヲ貪ルコトヲ禁ズ

續日本紀ニ曰、寶龜十己未年、九月甲午、勅曰、頃年百姓競求ニ利潤一、或擧ニ少錢一、貪ㇾ得ニ多利一、或期ニ重

契ハ強責ニ資財ハ未レ經ニ幾月ハ忽然一倍、窮民酬償、彌致レ滅レ門、自今以後、宜下據ニ令條ハ不上レ得ニ以過ニ一倍之利ハ若不レ悛レ心償及與者、不レ論ニ蔭贖ハ科ニ違勅罪ハ即奪ニ其贓ハ以賜ニ告人ハ非レ對ニ物主ハ賣質亦同

玉海に云、「建暦二年宣旨曰、可レ停ニ止出擧利過ニ一倍一事、抑出擧息利、本條區分事、建久以ニ一倍之利分ハ爲ニ永年之定數一以降、雖レ似レ有ニ施行之實ハ猶非レ无ニ違犯之聞ハ固守ニ彼符ハ會勿ニ違越一

室町殿日記に

近年洛中・洛外以ての外痛申候に付、三ヶ條之定を上げさせられ候事

一　利倍之爲に米錢を借族、利足四割・五割と申事、餘り高利に候間、質物入れ候而者二割、質なしは三割に借し可レ申事

一　利足下げては不レ入物と申て、向後借米相止め候者於レ有レ之は、此方へ可ニ申來一候（餘略）

天文十六年十一月十一日　　猪村市右衛門長高

脇屋惣左衛門貞親

當御世ニ到リテモ、借財利足ノ事高歩ニ致ス間敷旨、數度制旨ヲ加ヘラル、元祿十五年九月、其後享保十四年モ被ニ仰出一

一　元祿年中、金銀吹替以來、米穀高直之處、近年下直ニ相成、然る處借金銀幷質物利金、前々之通に而諸人致ニ難儀一候由相聞候、依レ之元祿十五年以來、借金銀向後利金五歩已下可レ爲候、前々之借金銀

手形を書替候借用も是又利金同前之事

一　只今迄元利不ニ相濟一分者、今度利金減少之不レ及ニ沙汰一候事

右之趣双方相違無レ之様、急度可ニ相守一候、此上返濟滯候はゞ、借元より奉行所へ可ニ相屆一候、若又右之定より不レ下ゲにおいては、借り主より可ニ訴出一事

一　新規之借金銀は、尤相對次第たるべく、猥りに高利にすべからず候事

享保十五戌年十月二十八日

當時全ク御治世ノ善政ヲ以テ、格別ノ高利ヲ貪ル者モ無レ之、四五十年前迄ハ、諸侯方民間迄モ、借財ノ利凡一割二三歩迄モ出シ、返濟滯事マレナリシニ、近世ハ七八朱ヨリ、甚シキハ四五朱ニ至ル、ソレスラ返濟滯リ、貸ス者多ク家ヲ倒ス、仍レ之三十年以來、公家・權家名目銀貸附ノコト頻ニ多シ、是等昔ト違ヒ、人氣奸曲ニシテ、貸ス始ヨリ損セザル工夫ヨリ起ルト雖ドモ、元來借ル者信義ヲ失ヒ、返濟滯ルヨリノコトニシテ、自然ト金銀不融通ニナリ、借リシ者モ亦返サレヌヤウニナルナリ、貸借ハ融通道ニシテ、返ス信義アレバ、又貸ス信義モ出來ルモノナリ、返ス信義ヲ失フ故、又貸スモノナク、果ハヨカラヌト乍レ知、名目銀ヲ借ルヤウニ成ルナリ、此名目銀モマタ名目ヲツケテ返サヌヤウニナリテ、彌融通ノ道塞リ、家ヲ倒スニイタル、庶有編ニ云、夫金銀錢ノ三幣ハ、其體堅剛ニシテ不レ朽、美ニシテ貴シ、是ヲ以テ華夷トモニコレヲ人ノ信ニ比表シテ、彼ト是トヲ交易スル中間ノ運用、此幣ノ

信形ノ器ヲ以、所望ノ求メニ適ト云ノ象ニ造リタルモノニテ、約シテ云時ハ、信ノ象器ナリトアリ、故ニ互ニ信約ノ違ハザルヲ基元トス、肥後大夫某ノ云、借財ハ借財セヌタメノスル借財ナリト云ヘリ、タトヘバ銀十貫目ヲ貯ル家ニテ、十貫目ノ證券ヲ出シ、借リ用ユルトキハ既ニ二十貫目ノ用ヲナシ利倍ス、仍又返濟モ成ル也、十貫目ノ貯ヘナキ人借財ノミシテ、夫ヲ以テ用ヲナサントシテハ、倍ノ便用ナラズ、又返濟モ出來カネ信ヲ失フニ至ル、諸國ノ銀札モ其通リニテ、札役所ニ千貫目ナラバ、急度其銀ヲ備ヘ置、然シテ千貫目ノ紙札ヲ行フ時ハ、強テ惡政トモ云ヒガタケレドモ、其正銀千貫目ヲ遣ハン爲ニ出ス紙札トナル故、多ク惡政トナリ、國ノ困窮トナル、仍テ借財ハ借財ノ用ヲナス基本ヲ考、其便用スル所ノ益ヲ以借財返濟セバ、信ヲ失フニモ至ラズ、國ニ益有ル事モ可ニ出來一、公私・臨時・非常ノ用ト雖モ、始ヨリ返濟ノ本ヲ考ヘ、年々米濟ノ備ヲ立、儉約ヲ守リ年限ノ信義ヲ失ハン樣アレバ、永久ノ融通無レ滯皆信ヲ失フヨリ、融通ノ道塞ル、然ル時ハ金銀ノ無レ德、天ノ陽ハ地ノ陰ニ融通シ、天地ノ德ハ人ニ融通シ、人ハ萬物ノ理ヲ融通ス、金銀ノ德ハ廣大ナルモノナレドモ、人ノ用ヒ樣ニテ、善トモ惡トモナル、是金銀ノナス事ニハ非ズ、扱フ者ノ其行ヒニヨル、譬バ刄物ハ柄ヲ持ニ極ツタル物ナレドモ、用ヒ樣惡ケレバ刄ノ方ヲ握リ、用ヲ爲サントスルニ同ジクシテ、却テ怪我過チアリ、祿アル者ハ年分ノ祿ヲ量リ、米穀下直ノワリヲ以備ヘ、儉約ヲ立公私ノ用ヲ辨ズル時ハ至テ安樂ナルモノナラン、是年分取所ノ祿ハ、最初ヨリ知レテ有也、市民ハ我業ニ身力ヲ盡スト不レ盡トニ有テ、金銀

ハ甚貯ヘガタキ物也、仍テ士民トモ無レ據借ル者ハ、信義ヲ失フベカラズ、又借ス者モ信義ヲ立テ高步ヲ貪ルベカラズ、扨前文ノ通、德政ト云事モ久シキコトヽ見エタリ、御當代ニテハ元祿十五年年閏八月中旬、江戶・京始、德政行ハルヽト是始メ也、大阪市中去年巳ノ年ヲ限リ、金銀ノ出入勿論、諸職人細工代出入ノ儀、可レ爲二相對一旨御觸有、右ノ通金銀出入公事訴訟、於二奉行所一御取上ゲ不レ被レ成旨也、尤家質可レ爲二同前一趣、神社・佛閣奉加銀、幷寺院死後渡銀附リ寺社官銀・座頭官銀等ハ、前々ノ通返納可レ仕トノ事、元祿十五年午閏八月、老中ヨリ奉行所ヘ被二仰出一候御書付、左ノ通

一　近年金銀出入多く、外に御用之差支にも罷成候間、十八年以來、丑年より去る巳年迄、金銀出入は取上無レ之、相對を以て埒明候樣可レ被二申渡一候、當年正月より之分可レ有二裁許一候、尤預り金銀・買掛り・賣物之前金銀・諸職人作料・手間賃惣而相對之節に而、金銀出入は同前之事

一　方々負せ方在レ之もの、身上を潰し、分散願之儀、借し主同心不レ仕者在レ之ば、相待候而目當等も無レ之ものは先願之通り、分散を以て一應埒明、後々身上仕直し候はゞ、其節訴候樣可レ被二申付一候事

一　只今迄は借用金、又は利付之分無二取上一、預り金と在レ之分は被レ致二裁許一候得共、畢竟內證は同前之事に候間、向後一樣に可レ被二申付一候事

一　奉公人引負又は取込仕候はゞ、請人方より給分は急度返濟させ、其外引負・取込之辨金は、請人より限り次第辨へさせ、不足之分は主人損失致させ、缺落仕候はゞ請人尋出し候樣に急度被二申付一、右之

不屆ものは、死罪にも又流罪にも可レ被ニ申付一候事

一　缺落・取迯・引負仕候はゞ、只今は其品により遠島被ニ申付一、大分引負取迯仕候はゞ、死罪にも可レ被ニ申付一候事

一　諸式之出入訴出候節、惡心を以僞り之筋に候はゞ、品により諸式相續不ニ申付一、家屋敷・家財等は、取上げ可レ被ニ申付一候事

一　神社・佛舍修造金之事

一　出家・座頭出世金之事

右二ヶ條ハ、向後無レ構可レ有ニ裁許一事

私云、此已下四ヶ條、德政ノ事ニ無レ之ト雖モ、文面ノ續キ故出シ、古代ノ制令ヲ知ラシム

一　在々之者公事・訴訟之外、江戸へ罷出候節、百姓宿仕候者、永々滯留させ金銀を費させ候樣に仕候、向後百姓宿仕候もの、永々滯留いたさせ候はゞ、大屋又は名主より急度吟味仕候樣に、可レ被ニ申付一候事

一　公事・訴訟をすゝめ、目安を認めたくみ成儀ををしへ、諸事出入之儀を取持、禮金を貪り、當と仕候者、常々致ニ吟味一、町々に不ニ差置一候樣に可レ被ニ申付一候事

一　難レ立ニ公事・訴訟ニ一遠國之者、目安裏判幷差紙を以て呼集め候はゞ、向後訴之者迄、急牢舍又は過

料出させ候樣に、可ㇾ被ㇾ申付ㇾ候事

一　輕き奉公人、町人・百姓等、喧嘩口論又は酒狂など仕候もの、只今迄は當分牢舍之上、追拂申付候處、無宿盜人にも罷成り候間、向後は其品により遠島にも可ㇾ被ㇾ申付ㇾ候事

元祿十五午年閏八月

江戶村盧ヨリ來狀之寫

午ノ閏八月十五日、小佐渡守殿・稻丹後守殿出座ニテ、評定一座ノ面々へ被ㇾ仰聞ㇾ御渡被ㇾ成候書付

一　公儀引負金銀ノ事　　一　拜借金ノ事

一　爲替金銀ノ事　　一　當座雇日傭賃

一　家賃金銀ノ事　　一　田畑質金銀ノ事

右ノ分ハ前々ノ通、年月ノ無ㇾ構裁許有ㇾ之事

御口上ニ被ㇾ仰渡ㇾ候通

一　家質銀ノ儀、先頃御取上不ㇾ被ㇾ成由被ㇾ仰渡ㇾ候得共、就ㇾ之町人難儀致ニ付、前々通家質銀無ㇾ相違ㇾ御裁許被ㇾ成候間、町中右ノ通相心得可ㇾ申候事

元祿十五午九月朔日

其後右元祿十五年已來ノ借金銀ハ、向後利金五分已下タルベシ、縱ヒ手形當暮ニ書替候テモ同事、又

元祿ヨリ已後、元利不ニ相濟一分ハ、減少ノ不レ及ニ沙汰一、右ノ通利下ゲノ上返濟滯候ハヾ、御奉行所へ訴可レ申旨、新規ノ借金ハ相對タルベシト、諸人勝手向難儀ニ付、右ノ通世上オシナベ利下被ニ仰出一、正德・享保年モ、借シ金銀高利ヲ取ベカラズ、二割以下タルベキ赴、毎度觸ラル、其後寬政元酉九月、江戶旗本衆御救ノ爲、淺草藏宿ノ者、旗本衆ヘノ高利借金濟方弃損被ニ仰付一、是又難レ有德政ナルベシ

弃損ノ事ハ、建武式目追加ニモアリ

一　弃損御判幷御下知等ノコト、應永十三年、被レ成ニ弃損一者、盡未來際不レ可レ有ニ改動一之、曾不　取上一者也、右守ニ此法一可ニ申沙汰一哉

前文德政に付騷動の事は、元祿年以前にもあり、東寺執行日記に

永享十三年八月、土一揆號ニ德政一在々所々より京中を責、淸水阪にて京極方と矢合、京極勢五十三人手負、土揆にも十人計と申候、同九月三日中略又々毎日京中へ責入候、一揆は十六ヶ處と申、諸奉行頭人有ニ評定一、九月十二日、一國平均之爲札を立らる、六口也

定德政事

右可レ論ニ一國平均之沙汰一旨被レ觸訖、早可レ令レ存之由被ニ仰下一也、仍下知如レ件

嘉吉元年九月十二日　　中務少輔源朝臣判

（私ニ云永享十三年二月ニ改元アリテ嘉吉ト云）　　于レ時侍所京極殿　在判管領細川殿

右ノ時モ、壁書德政ノ沙汰數條アレドモ略レ之、前言ノ通每度德政弃損等ノ事有レ之故、其頃米錢借用證文等ニモ德政ヲ怖レ、皆其事ヲ書入レシナリ、右德政ノ事モ前ニ述ル如ク、續日本紀ニモ、救病ノ方ハ實ニ德政ニヨル、延命ノ術ハ慈命ニシクハナシトアルモ、所レ謂仁政ノコトニテ、貸借ヲ弃損スル事ニテハナシ、是ハ足利ノ中世ヨリ頻ニ行ハレ、其以前ハ、イツゴロヨリ起リシヤ不レ知、元亨・建武年モハヤコノコト起リ、カシカリヲ弃損スルコトアリシトミユ、建武二年ノ古券ニ

券沽却田地事

合一段小者　字越來

在唐津加里十三坪、四至堺見本券文

右件田者、尼敎阿相傳之地也、而依レ有ニ要用一、直錢肆貫文仁限永代所レ奉ニ賣渡一、實積寺修二月壇供田實也、手繼證文九通副レ之、盡未來際不レ可レ有ニ他人之違亂妨一者也、若雖レ有ニ御德政一、通三寶物仁沽却之上者、敢不レ可レ申ニ一言子細一、仍爲ニ向後一龜鑑沽券之狀如レ件

建武二年乙亥二月十八日　　尼敎阿（花押）

コレニテミレバ、貸借ヲ弃々スル德政モ久シキコトナリ、古券書ノ類得ルニシタガヒ、左ニ寫シ置、文言古雅ニシテ、解セザルコト多シ

三貨圖彙附錄卷之四　古文書之部

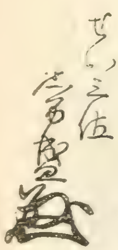
草間直方輯錄

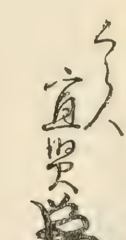
永代うりわたす、大井むらの事、ふしはらとも申也

合壹所者もくろく一ちわあり

右の在所は代々ちぎやうさをはなき地なり、しかりといふとも、よふ〳〵あるによりて、ちきせん貳百貫文に永代をかぎりて、宗壽ならびに福田十郎左衛門家老にうりわたす所、しちや・ほんやくは、年中兩度に八貫文このへどのへまいり候へども、うねをばうりぬしとしてべちに進上申べきよし申うけ候間、しさゐなきよし御一行を下され候、ちうしよに相そへ、こと〳〵く進じ候、さりながら又六分貳段をのぞき、その外こと〳〵くちぎやうあるべく候、萬一以後におきていらむわづらひ申もの候て、くばうにをきて、御さいくわにあづかり候ふべし、仍爲二後日一賣券如レ件

明應四年九月廿六日

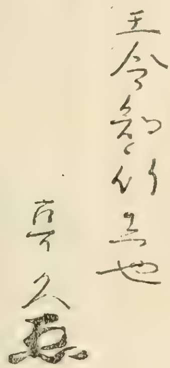




うらに

限永代參分壹享久藏

永正十一年甲戌四月廿一日



せいは　清原

沽却

地壹所事

清水寺塔本之北邊法樂院敷地之内

口肆丈奥陸丈貳尺伍寸

四至 東限岸上　南限岸
西限登路　北限雙照房中垣

右件地者、先祖相傳之私領也、而依レ有二直用々一、上品之絹陸疋、限永僧勝賀所二沽却一實也、敢不レ可レ有二他妨一、但於二本劵一は依レ有二類地一不レ能二副渡一、仍爲二後代龜鏡一新劵狀如レ件

嘉應貳季七月廿一日

散位源朝臣殿

謹辭　沽却進田事

合佰貳拾步者在山城國乙訓郡唐津之里、地子拾升參升三但油十三坪

限東御供田　限南溝

限北繩手　限西仲興寺

右件田者、源馬並末友先祖相傳所レ領也、雖レ然依レ有二直用要一、錢陸貫文仁、限二永代一源原江太殿仁賣渡進所實也、全不レ可レ有二他人之妨一、依後日爲二沙汰一、證文狀如レ件

元曆元年十一月五日

謹辭　沽却進加矢田新劵文事

合壹段半者

在山城國乙訓開戸院御領之內字加矢田之內

限東繩手　限南類地
限西黒　限北大道

右件田者、故長進士宗範令ニ寄進一所、寶積寺八講田、而令ニ寺僧衆議一於ニ淀江太夫殿一、限ニ永代一錢捌貫文所ニ賣ニ渡進之一實也、敢不レ可レ有ニ他妨一、仍爲ニ後龜鏡一、相副寄進狀書、分弃紛失狀、以ニ新劵文一、以解之狀如レ件

寛元四年二月廿五日　院主　阿闍梨　有慶（花押）

僧　頼玄（花押）

僧　琳慶（花押）

はまたのせうもん

謹辭　賣渡進梅濱田新立劵文事

合壹段六十之內、半三十分者字濱田 但平道

右攝津國小田村十條四里八坪

四至 限東他領 限西道
限北他領 限南濱

完直錢二貫百文、慥請取候事

右件田地、元者鶴松女之先祖相傳私領田也、雖レ然依レ有ニ直要用一、限ニ永代一黒石馬瓜仁所ニ賣渡一在地明白也、若於ニ彼田一有ニ後日違亂一時者、鶴松女之屋敷口二丈、南北江六丈候ヲ、此代ニ入タテ候得者、不レ可レ有ニ遺亂一、雖レ爲ニ子々孫々一、不レ可レ有ニ他人妨一、但本券文一通副相之候、(マヽ)仍爲ニ將來龜鏡一、所ニ賣渡一之狀如レ件

元享二年四月廿日　賣人鶴松女

相文タコミ次郎

嫡子尺加石丸

コレニテ元享年頃ノ票文知ベシト、昆陽漫録ニ出ヅ

東寺執行日記ニ

借中用途之事

合三貫文者　中坊口入

右件用途は、毎月貫文、別に四十文宛、加ニ利平一來ル十月中、此本利相當分可ニ返辨申一、萬一雖レ爲ニ德

政之儀ハ於ニ此料足一は不レ可レ有ニ無沙汰一、質物は針小路大宮𫝶、幷藪東西十丈・南北十二丈二尺、於ニ質物一入申候上は、一廻過候はゞ可レ有ニ御知行一候、爲ニ其借狀一如レ件

文明六年壬五月晦日　東寺執行榮僧判

雖レ爲ニ晦日借狀一、廿六日兩度請ニ取之一、永樂之下は撰レ之可ニ返辨一、時に如レ此之定也

三州大樹寺古文書

定　大樹寺

一　寺中寺外爲ニ私陳所一令ニ停止一事

一　竹木不レ可ニ伐取一事

一　寺中門前殺生禁斷之事

一　門前諸役如ニ近年一免除之事

一　寺領祠堂以下、德政之沙汰不レ可レ有レ之事

右於下背ニ此旨一輩上は、速可レ處ニ罪科一者也、仍而如レ件

天文十九年十月十日　御在判

治部大輔

永代むけ申下地之事

合五斗五升目は
右永代むけ申候分實正也、但彼米二石五斗八升かり申候間、大樹寺祠堂物之事に候間、天下一同之とくせゐ入申候共、於㆑此下地違亂申ましく候、仍而如㆑件
弘治四つちのへむま年正月吉日　松平源五　在判
大樹寺したう方へ參る

年記ニ申合米之事
合六俵ハ
右かのとの酉の年三俵、みづのへいぬの年參俵、合二年に六俵にて相濟申候、過分に罷成候へ共、年記に被㆑成御さしおき祝着申候、此上少も無沙汰申間敷候、仍爲㆓後日㆒如㆑件
永祿三かのへさる年十二月廿九日　貞廣　在判
光忠寺進譽上人さま
右ノ外略㆑之、又下民沽券古文書ノ寫
ゑいたいうりわたすきよみづしなのたうちの事
合一所　しなのたうのゐんないひんがしのつらのち
右くだんのやしき、ならびにをくのたかわらは、ぢうたいさうでんちぎやうさをいなし、しかるを、

きうようあるによりて、た十くわんにうりわたすこと、じちなり、てつきをつけわたすべしといゑども、あまたみやうてんともをかきぐして、さふらふほどに、そゑわたさず候、もしこのところにわづらいを申入いでき候はんときは、あきらめ申べきこと、くだんのごとし

正わ三ねん六月十一日　　御ちい判

増　金

貞　繼

清水北阪家下地共、代物百伍拾貫文、限ニ永代一所ニ賣渡申一實也、千萬後不レ可レ有ニ違亂煩一候、仍本賣券共賣申狀如レ件

應永十一年八月廿五日　　てんロやの　宗　伯

永代うり渡申候敷畠之事

合壹所は

右件畠はよふ〳〵あるによつて、直錢三貫文に、井上惣二郎方へうり渡申處、實正明白也、萬一此下地にいらんわづらひ申者候はゞ、うりぬし請人として、其明め可レ申候、仍而うりけん狀如レ件

天文七年正月廿四日　　うりぬし　淸　金

うけ人　桊　清

永代賣渡申家屋敷之事

合壹所は家口貳間、奥へ十五間、家ミヘイ兩ヘイ也
所ハあぶらの小路トチリふち本ノ町也

右件家屋敷は、我等雖レ爲ニ永領ト依ニ用々有ト、銀子六十目に與六殿へ永代賣渡申處、實正明白也、此請仁には町之與三兵衛殿也、若此家屋敷に付而、異亂煩是有候はゞ、賣主・請仁罷出、其明め可レ申者也、仍爲ニ後日ト狀如レ件

慶長六年壬十二月十八日　賣主　五郎右衛門

與三兵衛

五郎右衛門

與六殿へ參る

永代賣渡し申家屋敷事

一　丁銀三百目也

所は京橋之町西がわ、地口三間一尺也、うらへは町なみ、但し南となりすや與右衛門、北となりは與介、右之家屋敷永代賣渡し申所實正也、此家屋敷に付出入候はゞ、何時成り共口入六右衛門罷出相濟可レ申候、爲レ其仍而狀如レ件

慶長十八年丑九月二日

口入　六右衛門
家ぬし　源左衛門
、十人組　與衛門
同　助二郎
としより　與二衛門
同　甚衛門

大和屋ノ與三殿

靱町筋七丁目、革屋宗兵衛家屋敷之事、表口六間、裏へ拾四間之所、年寄中以ニ宰判ハ永代買取申心得候者也

元和七年辛酉九月十日　島清左
久忠左

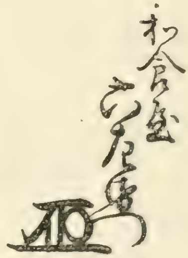
覺

眞島慶圓

一　私身體つぶれ申候に付、貴殿ゟ之預り銀拾壹貫目御座候處に、御損かけ申候段、千萬無念に奉ㇾ存

候、併し此度首尾能埒明候はゞ、一門を頼み身體に取付申候はゞ、其許へは少しも損かけ申間敷候、銀子相渡し申候節、手代共當利を申候共、相違仕間敷候、萬一此段僞候はゞ、蒙ニ神佛御罰一、私同女房子供迄、一生無ニ立身一、來世に而は浮世御座有間敷候、扨々其許へ此度御損かけ申候段、時節とは申ながら、ケ樣に成り申事に候はゞ、分別も可レ有レ之所に、行つまり如レ此、無ニ是非一次第に奉レ存候、乍レ去右之通私一念は、相違仕間敷候、爲レ其如レ件

寛永十六己卯年十一月四日



木屋伊兵衛殿

借請申銀子之事

一 銀百五拾目也

右之銀子慥に預り申候、萬一此銀子返濟いたし不レ申事御座候はゞ、人中において御笑ひ被レ成候共、其節一言之申分無レ之候、仍而如レ件

萬治三年子五月　　佐野屋喜兵衛

播摩屋嘉兵衛殿

右格別古キコトニテハ無レ之ト云ヘドモ、古代ノ餘風ノコリ、人氣シッボクナルコト文言ニ顯然タリ、借貸ナド返濟セザレバ、人ニ笑ハルヽト云ヒテ、大イニ耻辱トシ、公訴ニ至ル程ノコトハ無レ之、然ル所百年已來公訴スル所ヲ以テミルニ、八歩ハ金銀ノ出入ナリ、昔トチガヒ諸侯方公私辨用ノ借財、返濟滯ルコトモ、大抵七八十年來コノカタ、頻ニ多ク相成リ、仍レ之銀主モマタ返濟ノ不義理ヲ恐レ、官家名目銀頻ニ行ハレ、或ハ國内ノ庄屋・年寄ノ連印ヲ加ヘ、ソノ劵文種々ト六ツケシクナリ、武家・市民共借財方不辨理ニナレリ、皆双方トモ信義ヲ忘ルヽヨリ起リテ、年々薄情ニナレリ、イハンヤ無祿ノ市民ナドハ、諸侯方ヲ手本ニシテ、返濟不義理ヲ耻トセズ、依レ之スベテ質物引當テ無レ之テハ、借ザルヤウニナリテ、金銀借財融通ノ道ハ甚ダ不自由ニナレリ、手堅キハ諸藏正米切手ノ入替ナレドモ、ソレスラ其屋敷ニヨリテハ、不正切手ヲオコナハルノ類アリテ、容易ニ調達出來難タシ、大抵七八十年以來ノ時勢ニテ、イカントモナリガタシ

前書古代田地沽却ノ古文書、元暦・正嘉・弘長年ヨリ、寛永年迄ノ古劵、四五十通有レ之ト雖モ、コヽニ略ス、古代ハ借貸モ德政ヲ怖レ、天下一同ノ德政行ハルトモ、此銀ニオイテハ可二返辨一由、堅ク相對セシ信約モ、時勢ニヨリヤハリ德政ニナレルコトモアリシ故、其段ヲ後年ハ覺悟シテ、劵文ヲ借シ狀ニセズ、當座ノ預ケニシテ、預リ證文ニセシナリ、御當代ニイタリ、元祿年德政ノ時モ、貸主ヨリ預

ケ銀ノ韭ヲ以テ、公訴ニ及シ者數多有リシト云、然レドモ畢竟ハ借銀同樣ナルヲ以テ、裁許ニ不レ及旨被ニ仰渡一、今モ借用證文ニ間々書出シ、發端ニ預リ申銀子之事ト書、公訴ニ及ブモ、預ケ銀ノ出入ト云モ、皆德政ヨリ起リシ餘風ナリ

三貨圖彙 附錄卷之五

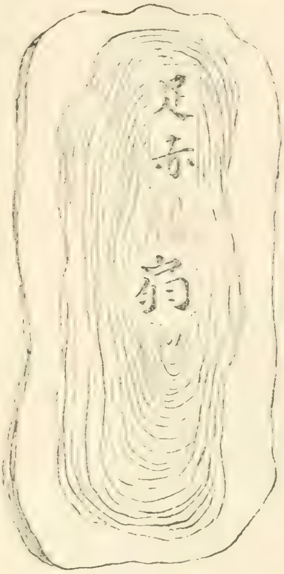
草間直方輯錄

昆陽漫錄ニ云、寛文年中、長崎ノ差出シノ書ヲ觀シニ、阿蘭陀船銀ヲ載來ルトアリ、阿蘭陀ハ銀ノ價賤シケレバ、我國ノ銅ト交易ヲナスハ宜キ故ナルベシト云ヘリ、或人ノ云、今モ阿蘭陀唐船產物ノ中藥種類ハ格別不益ノ品類ヲ省キ、金銀ヲ多ク持渡ルヤウニ致シ、銅ト交易ヲナサバ、我國ノ益ナラント云リ、寶曆年ヨリ安永年ノ頃迄、舶來ノ金銀幷近世持渡リシ「ヲロシヤ錢」ノ圖ヲ、木村孔恭模寫セルヲ、其ノ儘乞得テ茲ニ出ス、今古金銀ヲ翫ブモノ、印子金ト稱スルハ、右寶曆年舶來ノ赤足金、安南金ノ類ナリ、又赤足安南金ニアラズシテ、元寶足紋銀ノ極印ナキ、舟ノ形チニ似タル黃金ヲ、是モ印子金ト稱スレドモ、ヤハリ寛永。正保年ニ舶來ノモノナリ、夢溪筆談ニ云、印子金トハ別種ナリ不レ可レ惑、右ノ通印子ト唱來ルモノ、皆蠻人持渡リノモノニテ、五十年以來ノ分、凡左ニ記ス、又圖錄ニ、加賀ノ富商印子ヲ藏スト云モノ、今尾州ノ士人靑山氏ニモ、先代ヨリ所持ス、予是ヲ見ルニ、金色大佛大判ニ類ス、凡幅壹尺四五寸、長サ壹尺バカリ、其薄キ事紙ノ如ク、金色ヲ以テ是ヲ考ルニ、鎌倉時代ヨリ、足利中世義政公時代ノ手箱。香合等ノ梨子地、蒔繪ノ模ヤウ等ニ用ヒアル金カナガヒノ金色ニ

類シ、全ク右ニ云古代ノ金ナガヒノ殘リトオモハル、青山氏モカタナ。脇差ノ莊嚴ニ用ラレ、至テ金色見事ナリ、予知レルモノ鎌倉時代ノ鐵ノ水入ヲ所持セリ、則下地ハ鐵ヲ以テ造リ、其ウヘヲ右ノ延シ金ヲ以テ、燒キツケニシタルモノナリ、是又金色右ニ類ス、加賀ノ富商所持セルモ、三ツニ折。九ツニ疊ムト云モ、古代ノ良金ニテ、少シモ銀銅ノ交ヘモノナキ故、至テ精金ナルベシ、大判ノ部ニ出ス、大佛大判數品ノ中ニ、天然ト精金バカリ偏ク鑄出ヅルモアリトミエテ、厚サ量目モ常判ニ替ラズシテ、大判ノ耳ヲ以テ火ヲアヲツガ如クスレバ、ポン々々トナル、是等モ良金ノ故ナリ、至テ位ヨキ黄金ヲ印子金ニ準ジ、右ノ精金モ印子ト唱ヘ來ルナラン

寶曆癸未唐船齎來金銀之圖

長サ壹寸八分五厘



厚サ凡四分

横九分

金三品

一　足赤　掛目四十八匁八分　表ニ赤紙札有リ、足赤ト記ス、其下ニ扇ノ字ノ極印アリ、吹金ニテ印子ノ如ク表ニ濶アリ

一 九呈　掛目四十八匁八分

四十九匁八分位

表ニ赤紙札アリ、九呈ト記ス、其下ニ洪字ノ極印アリ、吹金ニテ印子ノ如ク渦アリ

一 八呈　掛目四十八匁八分

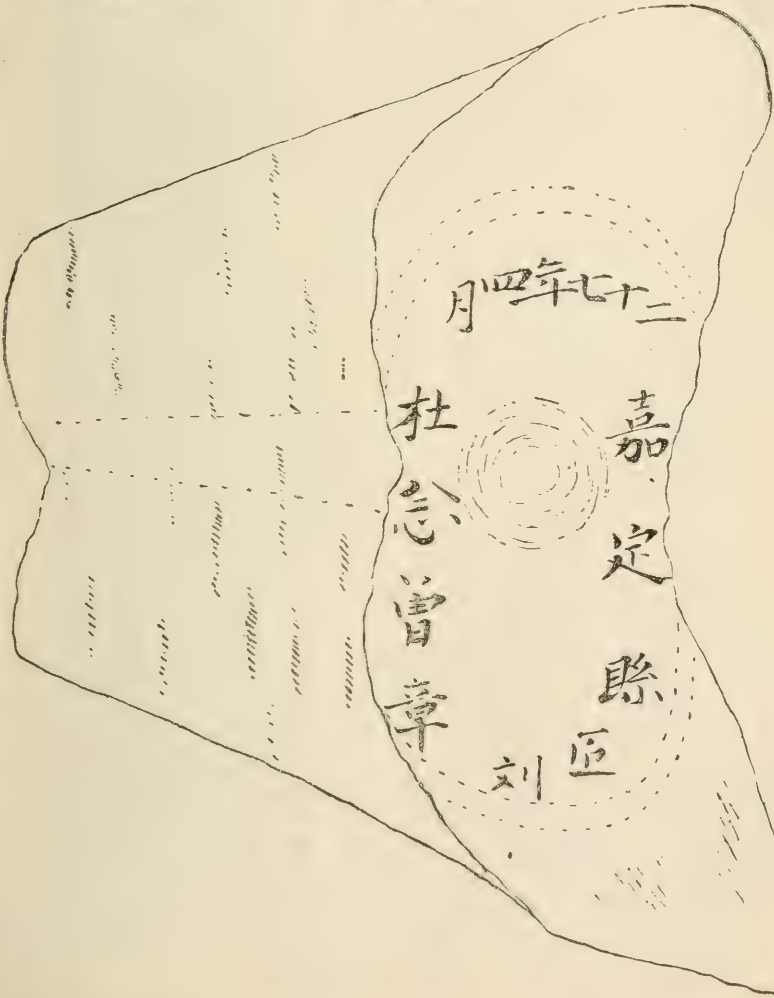
四十六匁二分位

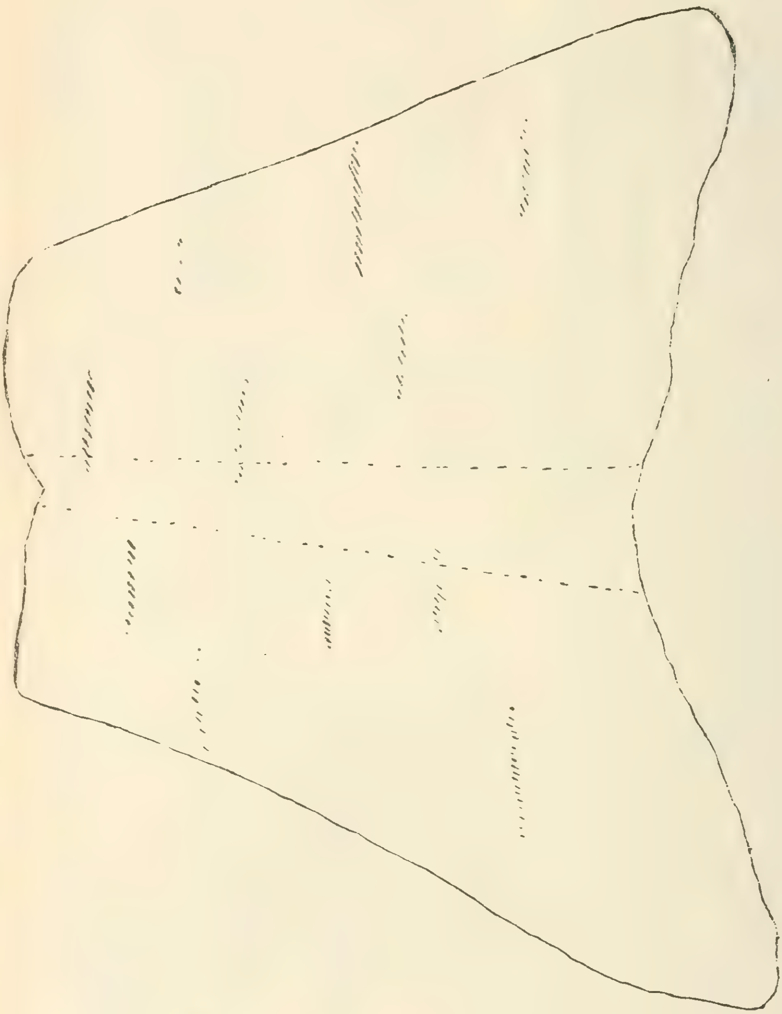
表ニ赤紙札アリ、八呈ト記ス、其下ニ瑞ノ字アリ、吹金ニテ印子ノ如ク、表ニ渦アリ

元寳足紋銀　位八分入

掛目四百九十九匁四分

形ナ猪口ノ似シ、如レ圖文字彫付アリ、ミ、ハゼ、石メノ如シ、表ニ自然ノクボミアリ

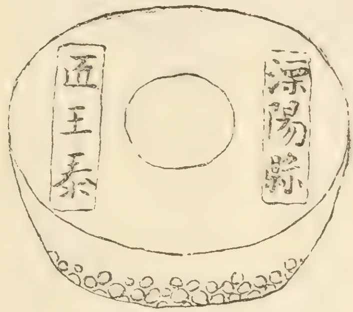




横ヨリ見タル圖

中形足紋銀

掛目四十九匁八分　　位同



横ヨリ見タル圖



形チコマノ如ク圖ニ極印アリ、尻ニ蜂ノ巣ノ如ク穴アリ

金百二十貫目銀五千貫目、内三千貫目銀座へ渡サル

長崎奉行石谷備後守殿ヨリ

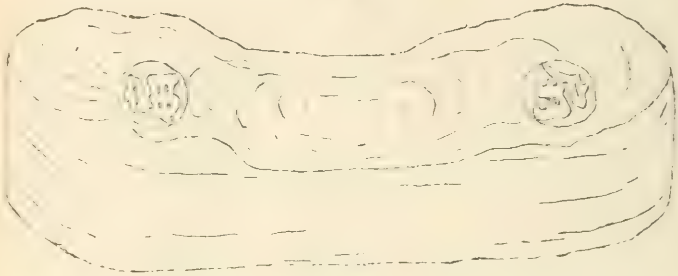
江戸御勘定一色安藝守殿へ參ル

癸未八月

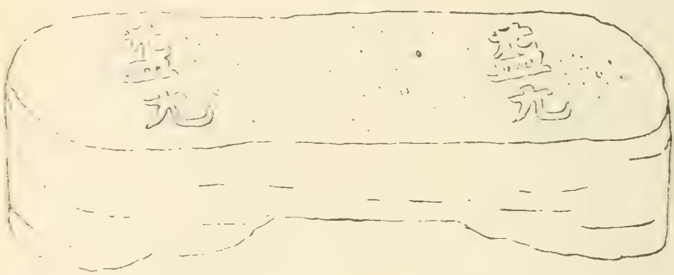
足赤金

寶暦十三未年、石谷備後守殿在勤之節、未九番船主王履階手本トシテ始テ持渡、掛目九百目位

表



裏



一 寶暦十三未年、九番船持渡高百四十六匁四分

一 明和二酉年、十番船持渡高、四貫五百卅目三分

一 同四亥年、一番船持渡高、四貫五十四匁七分

一 同七寅年、一番船持渡高、二貫九百九十八匁八分

一 同年、十三番船持渡高、二貫九百九十五匁六分

一 安永二巳年、一番船持渡高、二貫九百九十五匁三分

表



裏



九呈金

寶曆十三未年、石谷備後守殿在勤之節、未九番船主王履階手本トシテ持渡、掛目凡百目程

一　寶曆十三未年、九番船持渡高、百四十六匁四分

一　明和二酉年、拾番船持渡高一貫目

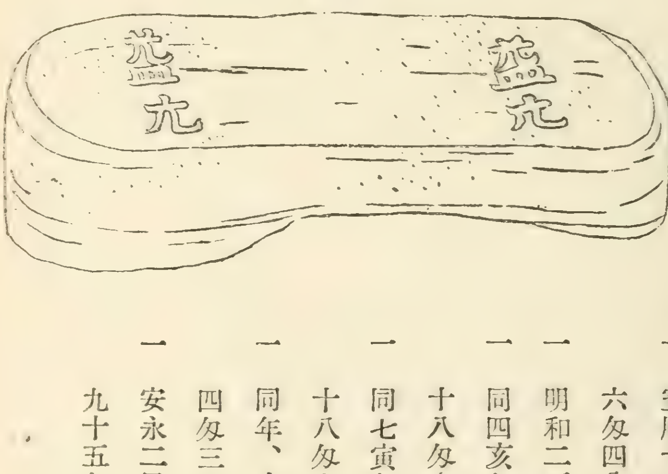
八呈金

寳曆十三未年、石谷備後守殿在勤之節、未九番船主王履階手本トシテ持渡、掛目凡百目位

表



裏



一　寳曆十三未年、九番船持渡高、百四十六匁四分

一　明和二酉年、十番船持渡高、一貫目

一　同四亥年、一番船持渡高、二貫六百九十八匁九分

一　同七寅年、一番船持渡高、一貫九百八十八匁七分

一　同年、十三番船持渡高、三貫九百九十四匁三分

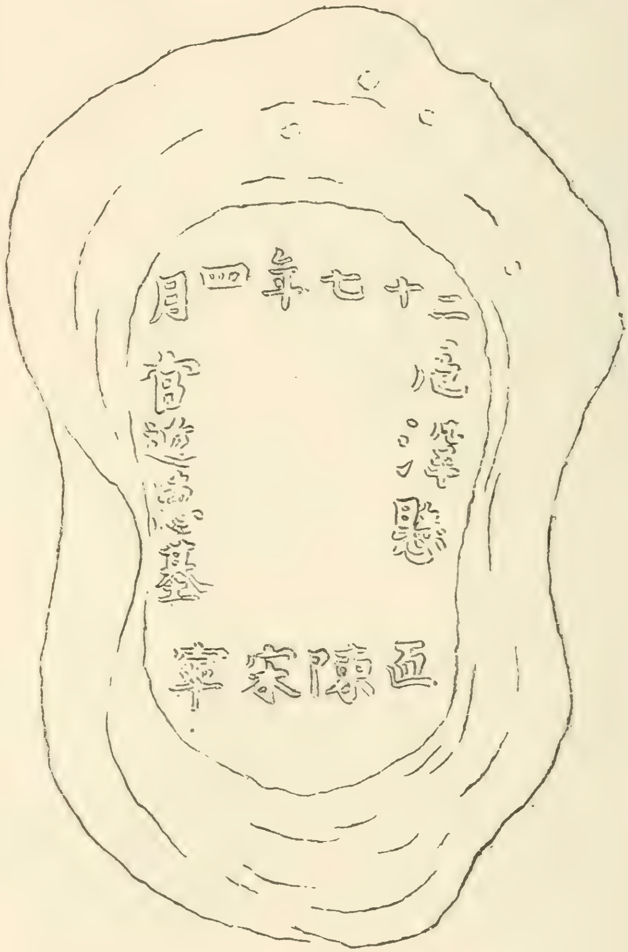
一　安永二巳年、一番船持渡高、三貫九百九十五匁一分

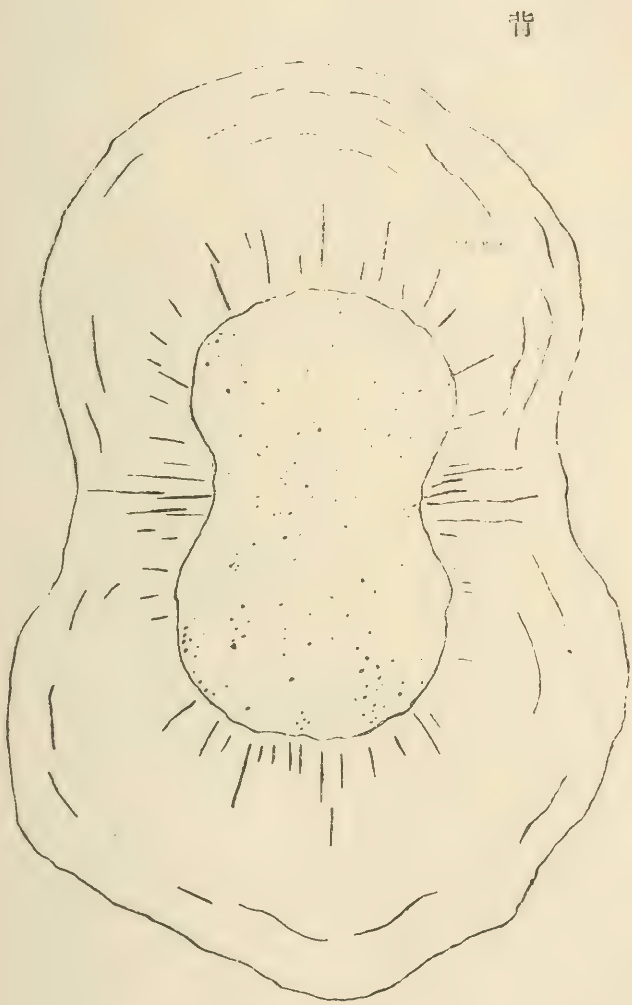
元寳足紋銀

寳暦十三未年、石谷備後守殿在勤之節、在唐荷主楊裕和、并未九番船主王履階御請トシテ始テ持渡



表




背

一 寳暦十三未年、九番船持渡高、十七貫九百七十九匁

一 明和元申年、四番船持渡高、九十三貫目

一 同二酉年、八番船持渡高、三十七貫目

外

大寳足紋銀九十六匁五分　申四番船ヨリ足シ銀用意トシテ持渡

内

貳拾六匁七分　本船持渡不足之内　差足

三十五匁七分　酉八番船、右同斷

廿六匁一分　戌五番船右同斷

壹分　右改ハ節々缺

三匁八分　亥拾番船、元糸銀百貫目之辻ニ差足

〆

殘四匁一分藏有

中形足紋銀

寳暦十三未年、石谷備後守殿在勤之節、在唐荷主楊裕和、幷未九番船主王履階、御請トシテ始テ持渡

掛目凡百目程



一 寶暦十三未、九番船持渡高、三拾七貫七百五十二匁九分

一 明和元申年、拾參番船持渡高、九拾三貫目

一 同二酉年、八番船持渡高、九貫五百目

一 同年、拾番船持渡高、八拾四匁

一 同三戌年、五番船持渡高、四拾六貫五百目

一 同四亥年、壹番船持渡高、九拾三貫目

一 同年、拾番船船持渡高、九拾三貫目

一　同五子年、壹番船持渡高、九拾三貫目
一　同年、七番船持渡高、百八拾六貫目
一　同六丑年、壹番船持渡高、九拾三貫目
一　同七寅年、七番船持渡高、百八拾六貫目
一　同八卯年、九番船持渡高、九拾三貫目
一　安永元辰年、壹番船持渡高九拾三貫目
一　同年、貳番船持渡高、九拾貳貫六百七拾七匁七分
一　同年、七番船持渡高、九拾貳貫四百七拾六匁四分壹厘
一　同年、拾貳番船持渡高、五百貳拾三匁五分九厘
一　同二巳年、壹番船持渡高、三十五匁
一　同年、拾貳番船持渡高、五拾三貫目
一　同三午年、壹番船持渡高、四拾貫目
一　同年、四番船持渡高、九拾三貫目
一　同年、六番船持渡高、九拾三貫目
一　同年、九番持船渡高、九拾三貫目

外

中形足紋銀百三拾壹匁九分　巳十二番船足銀用事トシテ持渡

同百六拾目　午四番船ヨリ右同斷

同五拾八匁三分　同六番船ヨリ右同斷

同三匁九分　同九番船ヨリ右同斷

同外ニ八拾五匁八分　午九番船ヨリ持渡九ケ所預リ

花邊銀錢

明和二酉年、石谷備後守殿在勤之節、酉七番船主崔景山御請トシテ、始テ持渡、掛目凡七匁二分程





一　明和二酉年、七番船持渡高、三拾壹貫十一匁七分
一　同年、拾番船持渡高、四貫三百八拾目
一　同三戌年、壹番船持渡高、拾九貫二百八拾九匁五分
一　同年、七番船持渡高、五拾貫目
一　同四亥年、貳番船持渡高、百貫目
一　同七寅年、三番船持渡高、拾貳貫五百廿九匁一分
一　同年、八番船持渡高、三拾七貫五百九拾五匁五分
一　同八卯年、四番船持渡高、拾貫貳百七拾目九分
一　同年、拾番船持渡高、九拾貫四十二匁三分
一　同年、拾二番船持渡高、貳拾七貫七百四十二匁七分
一　安永元辰年、六番船持渡高、廿三貫廿四匁七分
一　同年、九番船持渡高、五拾貫九百三拾貳匁
一　同年、拾壹番船持渡高、百貫四十三匁四分
一　同二巳年、九番船持渡高、百貫卅八匁壹分
一　同年、拾三番船持渡高、拾九貫六百八匁

一　同三午年、八番船持渡高、廿八貫百七拾三匁三分

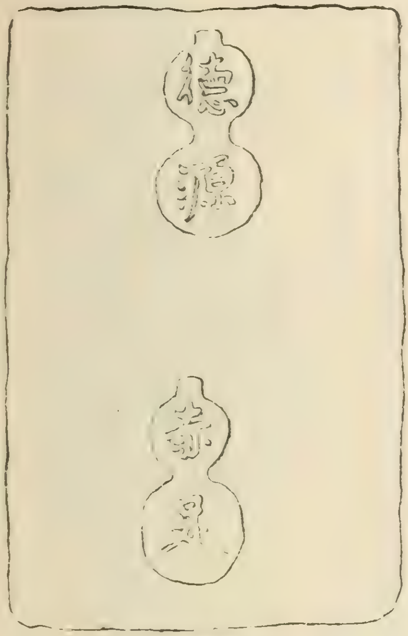
一　同年、拾壹番船持渡高、百貫目

外

花邊銀錢七百廿二匁六分　午十一番船ヨリ持渡足銀用意トシテ九ヶ所ヘ預リ

一　花邊銀　中形赤足銀　紅毛人頭銀　元糸銀

右四品ハ清人故有テ、寶暦十二・三年ノ頃ヨリ、長崎ヘ持來ルコト夥シ、則朱銀ノ地ガネト成由、各形ニヨッテ名付







金錢トカアト

明和二酉年、石谷備後守殿在勤之節、酉阿蘭陀船ヨリ御請トシテ始テ持渡、掛目凡壹匁程

此桁明和二酉年持渡、同年不レ殘出方相濟申候、圖鑑ノ儀ハ明和四亥年仕立被ニ仰付ハ其後持渡無ニ

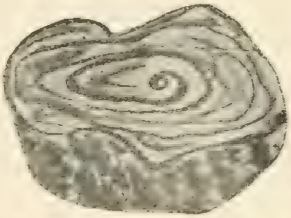
御座ニ候

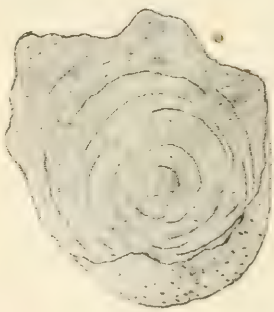
一 明和二酉年、阿蘭陀船持渡高、九匁三分

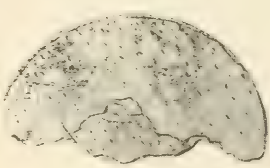
元糸銀

寶暦十三未年、石谷備後守殿在勤之節、在唐之荷主楊裕和并未九番船主王履階、御請トシテ始テ持渡

掛目凡拾匁程







一 寶暦十三未年、九番船ヨリ二百四十貫七十三匁二分二厘六毛

一　明和元申年、十番船ヨリ百貫目

一　同二酉年、四番船ヨリ百貫目

一　同年、十番船ヨリ四百廿四匁八分七厘七毛五弗

一　同三戌年、五番船ヨリ五拾貫目

一　同四亥年、一番船ヨリ百貫目

一　同年、十一番船ヨリ百貫目

一　同七寅年、一番船ヨリ卅六匁一分

一　同年、二番船ヨリ百貫目

一　安永元辰年、二番船ヨリ三百四十六匁五分五厘九毛六弗

一　同年、十二番船ヨリ百貫目

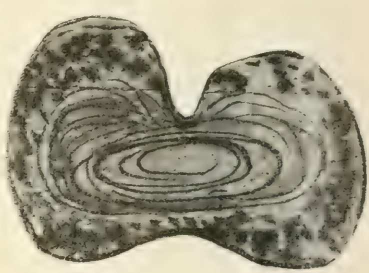
一　同二巳年、一番船ヨリ八十五匁三分

外

元糸銀三十目六分已一番船ヨリ足銀用意トシテ持渡

銀錢テカトン

明和二酉年、石谷備後守殿在勤之節、酉紅毛船御請トシテ始テ持渡、掛目凡八匁程



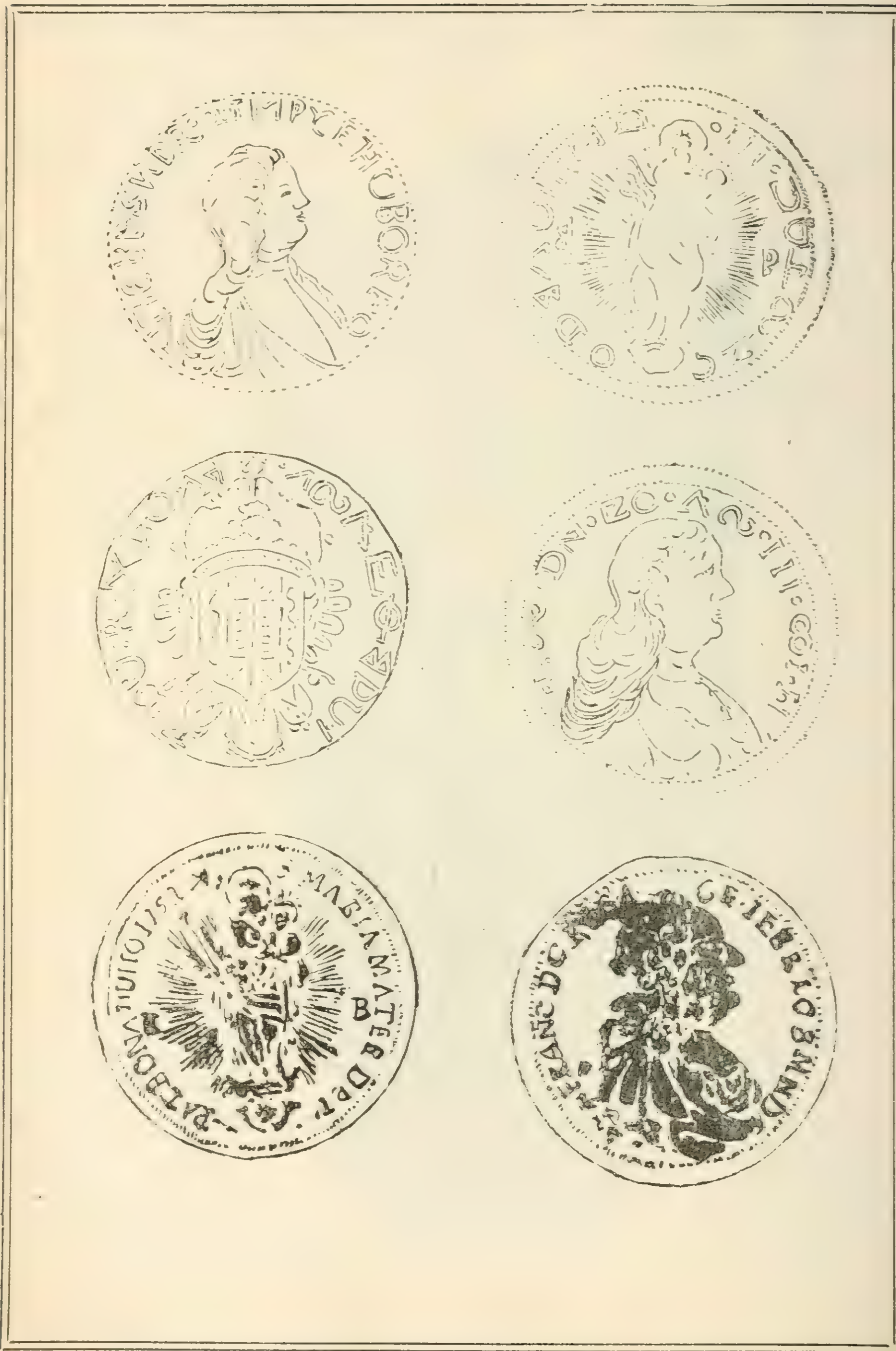




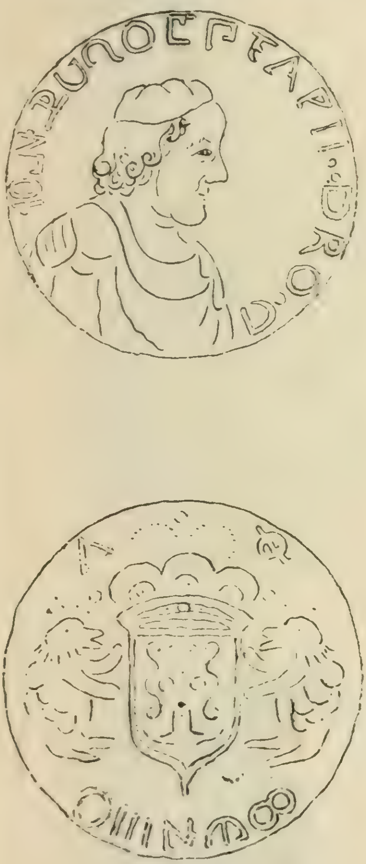




一　明和二酉年、紅毛船ヨリ十六匁
一　同三戌年、紅毛船ヨリ八百廿一匁五分
一　同四亥年、紅毛船ヨリ十四貫百廿三匁八分
一　同五子年、紅毛船ヨリ二百九十四匁五分
一　同六丑年、紅毛船ヨリ六十八貫七百廿六匁一分
一　同七寅年、紅毛船ヨリ八十六貫二百八十一匁九分
一　安永元辰年、紅毛船ヨリ七十一貫八百十匁八分
一　同二巳年、紅毛船ヨリ百卅一貫六百四匁八分



實曆十三未年唐船持渡リ

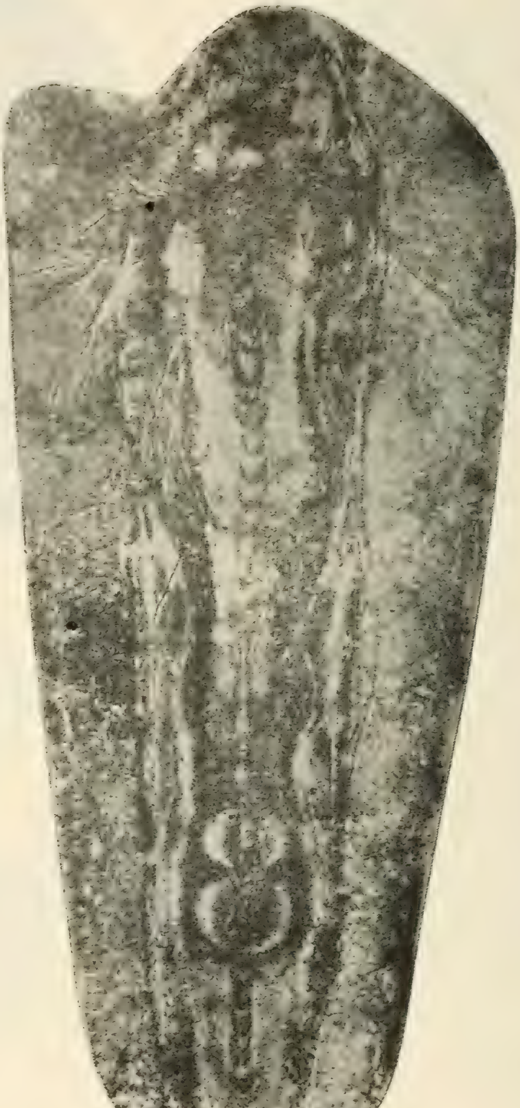




百目

銀錢ハロフテカトン

明和二酉年、石谷備後守殿在勤之節、酉紅毛船ヨリ御請トシテ始テ持渡、掛目凡四匁三分程





一 明和二酉年、紅毛船ヨリ九十九匁四分

一 同三戌年、紅毛船ヨリ六十八匁五分

一 同五子年、紅毛船ヨリ二十一匁五分

一 同六丑年、紅毛船ヨリ十六貫八百卅八匁二分

一 同八卯年、紅毛船ヨリ四百九十五匁

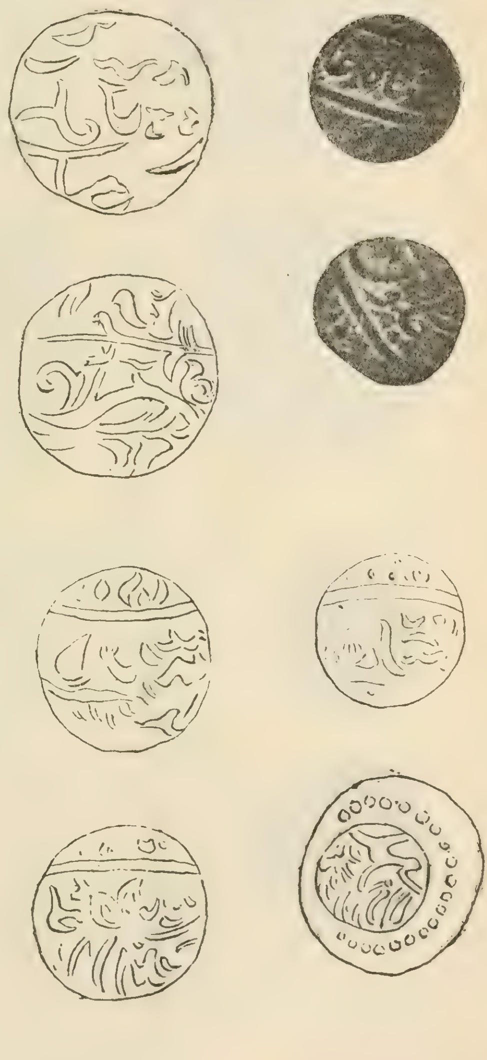
一 安永元辰年、紅毛船ヨリ百四匁

一 同二巳年、紅毛船ヨリ七百八十二匁七分

銀錢ロヘイ

明和二酉年、石谷備後守殿在勤之節、紅毛船ヨリ御請トシテ始テ持渡、但シ掛目凡三匁二分程





一 明和二酉年、紅毛船ヨリ二百四匁二分

一 同三戌年、紅毛船ヨリ一貫百十六匁五分

一 同五子年、紅毛船ヨリ三匁二分

一 同六丑年、紅毛船ヨリ六十九匁

銀錢咬𠺕吧ロヘイ

明和二酉年、石谷備後守殿在勤之節、酉阿蘭船ヨリ御請トシテ始テ持渡、掛目凡三匁四分程

此桁明和二酉年持渡、同年不レ殘出方相濟申候、圖鑑之儀ハ、明和四亥年、仕立方被ニ仰付一、其後持渡無ニ御座一候

一　明和酉年、阿蘭陀船持渡高、十匁二分五厘

銀錢スハンスマット

明和二酉年、石谷備後守殿在勤之節、紅毛船ヨリ御請トシテ始テ持渡、掛目凡一匁一分程

此桁、明和二酉年持渡、子年不レ殘出方相濟申候、圖鑑之儀ハ、明和四亥年仕立方被ニ仰付一、其後持渡無ニ御座一候

一　明和二酉年、阿蘭陀船持渡高、六十三匁八分五厘

安南板金

明和三戌年、新見加賀守殿在勤之節、酉八番船游樸菴手本トシテ、戌十一番船ヨリ始テ持渡

掛目凡百目程



一　明和三戌年、十一番船持渡高、七百九十八匁

一　同四亥年、四番船持渡高、七貫三百九十二匁九分

一　同八卯年八番船持渡高、六貫九百九十九匁三分

安南上板銀

明和三戌年、新見加賀守殿在勤之節、酉八番船主游樸菴、手本トシテ、戌十三番ヨリ始テ持渡、掛目凡百目程

表



裏

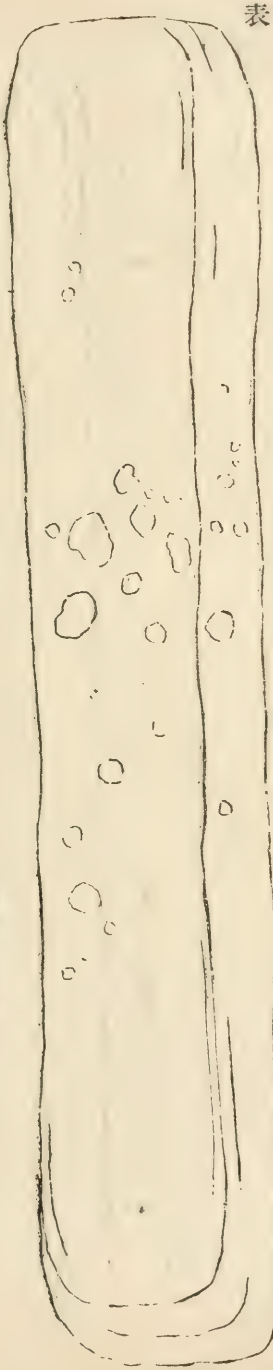


一　明和三戌年、十一番船持渡高、一貫四百九十四匁

安南次板銀

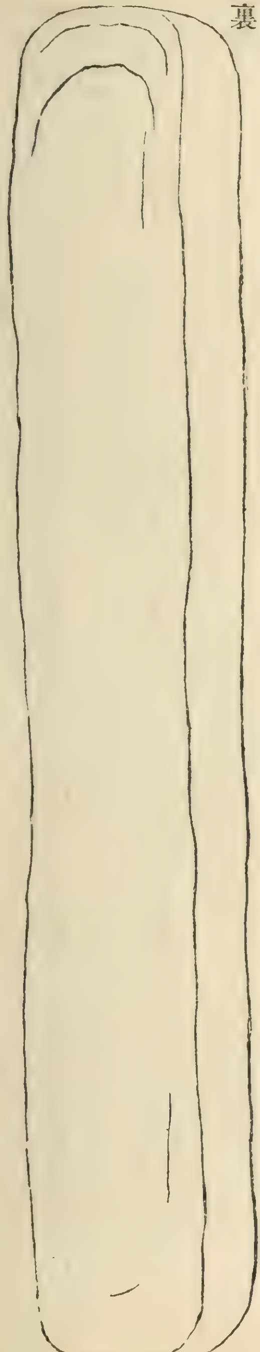
明和三戊年、新見加賀守殿在勤之節、酉八番船主游樸菴、手本トシテ戌十三番船ヨリ始テ持渡

表



掛目凡百目程

裏



一　明和三戊年、十一番船持渡高、一貫五百五匁

西藏金





明和四亥年、石谷備後守殿在勤之節、亥二番船ヨリ始テ持渡

掛目凡大形二百卅七匁程
小形九十七匁程

西藏金







一　明和四亥年、二番船持渡高、一貫百五十七匁六分
一　同八卯年、一番船持渡高、二百廿匁三分
一　安永元辰年、十三番船持渡高、二貫七百七匁七分
一　同二巳年、十三番船持渡高、一貫二百四十九匁五分
一　同三午年、十一番船持渡高、一貫三百目七分

外

西藏金二百廿匁八分午十番船ヨリ足銀用意トシテ持渡

魯西亜銭譜

インピリヤン　金銭　径リ五分半強　重サ三匁六分　當百銀銭十枚ニ當ル　千七百八十年ニ鑄



ヒヤチインピリヤン　金銭　径リ八分弱　重サ一匁八分　銀銭五枚ニ當ル　千七百八十年ニ鑄



大黒屋光太夫藏

森島中良摺



マネーターヌルップ　銀錢徑リ一寸三分　重サ六匁八分　古代ノ百文　千七百卅二年鑄



ルップ　銀錢徑リ一寸二分半　重サ六匁五分　當百錢　千七百六十五年ニ鑄

ピンテレヤテコッピヤカ



銀錢 徑リ一寸一分弱 重サ三匁五分

五十文ニ當ル 千七百五十五年ニ鑄

デワッチピヤーチコッピヤカ



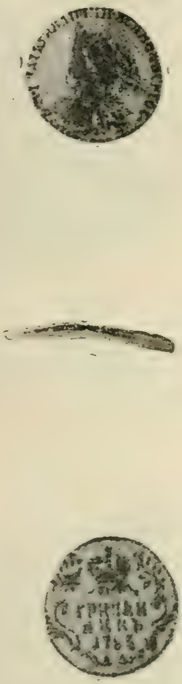
銀錢 徑リ八分強 重サ一匁五分五厘

古代ノ廿五文 千七百五十一年ニ鑄

デワツチコッヒーヤーカ　銀錢　徑リ八分　重サ一匁一分五厘　二十文ニ當ル　千七百九十年ニ鑄



セイセツコッピヤカ　銀錢　徑リ六分半　重サ六分三厘　十文ニ當ル　千七百八十五年ニ鑄



メズノイセニゲヌキリムネ
ヒーセツコツヒヤーカ

銅錢 径リ一寸五分 重サ十八匁五分

十錢ニ當ル 千七百七十二年ニ鑄

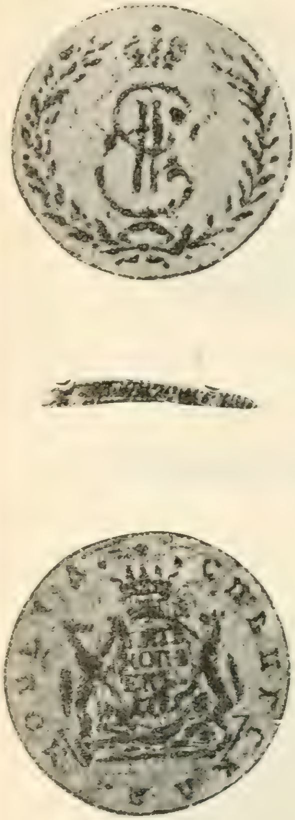


エカテリンホルグデ錢 此錢ハ都マデ通用ス

ピヤーチコツペエカ

銅錢 径リ一寸二分 重サ九匁二分

當五錢 千七百七十一年ニ鑄



同断　同径リ一寸三分 重サ十二匁五分　當五文 千七百六十七年ニ鑄



ウヂンスコイニテ鑄　此錢都ニテハ通用セズ

コロシヲイ又デワコッヒヤーカ　銅錢径リ九分半 重サ四匁　當二錢 千七百七十二年ニ鑄



エカテリンホルグニテ鑄、都通用

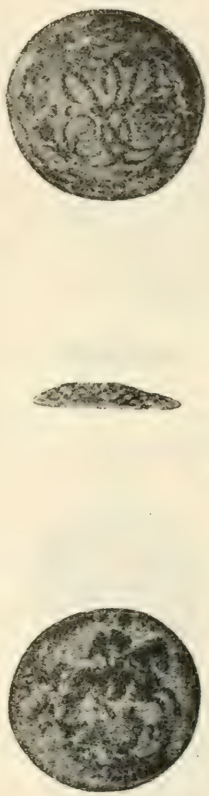
テワコツペヱカ　銅銭 径リ一寸 重サ五匁二分　當二銭 千七百五十六年ニ鑄



ウチンスコイニテ鑄、都通用ナシ

コツペヱカ　銅銭 径リ八分半 重サ三匁　一銭 千七百五十七年ニ鑄

同断



ゼンカ　銅錢 徑リ八分三厘 重サ二匁七分　半錢　千七百四十八年ニ鑄



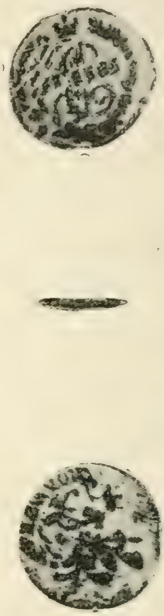
同斷

センカ　銅錢 徑リ七分 重サ七分　半錢　千七百六十九年ニ鑄



エカテリンホルヲニテ鑄

ポロンカ　銅銭径リ六分弱 重サ二分弱　二分半　千七百八十六年ニ鋳



ウヂンスコイニテ

ルツプ　銀銭重サ六匁五分　當百銭　千七百八十三年ニ鋳



此銭後ニ得タルニヨリテ、此ニ載ス

三貨圖彙 附錄卷六

錢幣略記序

錢幣は天下の大用にして、經濟に志ある者は、古今の制を審かにせざることを得ず、故に專ら文獻通考によりて、諸書を參考して、周より宋までの錢幣の變改を記して二卷とし、錢幣略記と名づくと云

棠求書青木敦書序

元文四年

錢幣略記上

周

太公望周の爲に、九府圜法をたて、顏師古が云く、周官の大府・玉府・內府・外府・泉府・肴府・職內・職金・職幣、みな財幣を主る故に、九府と云圜は均くして通ずるなり　黃金は方寸にして、重さ一斤、錢は圜にして、方を函、孟康が云、外圜くして內の孔方なるなり　金を寶とし、刀に利し、泉に流し、布に布く、如淳が云く、錢を刀に名づくるは、其民を利するを以てなり、泉は流行して泉の如くなり、布は民間にしくなり　太公望退きてこの法を齊國に行ふ

景王に至りて、錢の輕きを憂へて大錢を鑄る、その文寶貨といひ、肉好韋昭が云く、肉は錢のかたちなり、好は孔なり　みな周郭あり、百姓利を蒙る

秦

秦天下を幷せて、幣に二等あり、黃金を上幣とし、錢を下幣とし、黃金は鎰を以て名とし孟康が云く、二十兩を鎰とす、顏師古が云く、周の一斤の制を改て鎰を以て金の名寶とするなり　錢は形ち周の錢の如くして、文を半兩といひ、重さその文の如し、珠玉・龜貝・銀錫の屬は幣とせず

敦書按ずるに、秦銀を幣とせず、漢これにより王莽銀を用るなり

漢

漢興て秦の錢の重くして用ひがたきを以て、更に民をして莢錢を鑄せしめ、黄金は周の制を復して、斤を以て名づく（如淳が云く、莢錢は楡莢の如くなるなり）不軌（顔師古が云く、不軌は法度に循はざるなり）逐利の民、餘贏を以て群物を蓄積して、市物甚だ騰踊して米石にして萬錢に至る、天下すでに平ぎて高祖令して賈人は絲を衣て車に乘事を得ず、其稅租を重くして、困辱して農を務めしめんと欲す。（莢錢は楡の實の如くにて、小く輕き錢ゆゑに、一石の米萬錢に至るなり）

高后二年、八銖錢を行ふ、（秦の半兩錢なり、楡莢錢を人の患ふること甚だしきゆゑこれを行ふ）六年、五分錢を行ふ、（楡莢錢也）

文帝の五年、錢を鑄ること益々多くして輕し、四銖錢を鑄て、文を半兩とし、盜鑄錢の令を除きて、民をして放に鑄せしむ（顔師古が云く、盜に私に鑄せしむる也）

敎書按ずるに、漢の初め民をして莢錢を鑄せしめ、其後民の錢を盜鑄ことを禁ずる故、文帝盜錢の令を除くなり

賈誼諫れども文帝きかず、此時吳王は諸侯にして、山に卽て錢を鑄て、その富天子に均くして、後遂に叛逆す、大夫鄧通は錢を鑄て、其財王者にすぐ、故にこの二錢天下にしく

景帝の中六年、錢を鑄、黄金を僞るをば棄市するの律を定む

武帝の時、文。景二帝の蓄へに因て、四夷を伐を事として、數年にして財用たらず、縣官（縣官は、天子を指の稱也）大に空しくして、富商大賈は財を滯て貧を役し、車百轂に至るものあり、封君（封君は、公主及列侯の屬也）みな首を俯して、富商大賈にとりて給す

敎書按ずるに、治平久しき時は、上奢りて財たらずして、必ず財を富商大賈に借に至る、深く歎ずべし

元狩四年、武帝公卿と議して、幣錢を更め造りて用をたす、此時に禁苑に白鹿皮あり、少府に銀錫多し、建元以來縣官往々に銅山に卽て錢を鑄、民も亦盜鑄て錢ます／＼多くして賤しく、物ます／＼少くして貴し、（如淳が云く、錢を鑄て餘物を作らざるゆゑなり）有司の云く、古へは皮幣ありて、金に三等あり、黃金を上とし、白金を中とし、赤金を下とす、今の半兩錢は、重さ四銖にして、姦人盜て錢を摩て鋊（ヨク）を取（臣瓚が云く、鋊は銅屑なり、錢の漫面を摩て屑を取り、更に錢を鑄るなり）錢いよ／＼輕薄にして物貴し、白鹿皮方寸に繢を以て緣して（顏師古が云く、繢は繡なり、五綵を繪てなすなり）皮幣とし、其直ひ四十萬、王侯宗室の朝覲聘享には、皮幣を以てし、又銀錫の白金を造り（如淳が云く、銀錫を雜へ白金とするなり）白金に三等あり、一は重さ八兩にして圓くし、文は龍にて白撰と名づけ、（天の用は、龍にしくなければなり）直ひ三千、二は重さ半にして方にし（晉灼が云く、半斤の重さを以て、三品をなしてこれ六兩、下品は重さ壹兩なり）文は馬にて（地の用は、馬にしくなければなり）直ひ五百、三は又た小にして楕にし（顏師古が云く、楕は闇くしてながきなり）文は龜にて（人の用は、龜にしくなければなり）直ひ三百、縣官半兩錢を銷して、更に三銖を鑄て重さその文の如し、諸の金錢を盜鑄ものは皆殺す、吏民の其罪を犯すもの勝て數ふべからず、三銖を輕くして、姦治をなしやすきを以て、有司請て郡國にて五銖錢を鑄て、周郭して（孟康の云く、文漫みな郭をなす）鋊を摩とるべからざらしむ、此後吏民金錢を盜鑄て、殺さるゝ者數十萬人、しかれども天下大低みな金錢を鑄る

イ元狩
元鼎二年、郡國にて錢を鑄れば、民多く姦鑄して顏師古が云く、巧に錢を鑄て鉛・錫をまじゆるなり錢輕し、公卿請て京師の鑄官をして、赤仄せしめて、韋昭が云く、子紺錢なり、如淳が云く、赤銅を以て郭をなすなり一を以て五にあつ、賦官の用は、顏師古が云く、賦に光りて、官の用に給するなり赤仄にあらざれば行ふことを得ず、白金稍賤しく、民寶とし用ひず、歳餘にして行はれず、其後二歳赤仄錢賤し、これを用ひて便ならずとて廢す、こゝに於て郡國にて錢を鑄せしめず、專ら上林の三官にて鑄せしめ、天下に令して三官の錢にあらざれば行ふことを得ず、諸の郡國にて勝たる錢は、銷して其銅を三官に輸す、其費へ多くして利なきによりて、民の錢を盜鑄ます〳〵すくなし、眞巧の顏師古が云く、其術の巧妙のものなり大姦は盜鑄る

昭・宣・元・成・哀・平の六帝は、變改することなし、武帝の元狩五年、三官五銖錢を鑄てより、平帝の元始中に至て、錢を鑄こと、二百八十億萬と云

王莽が攝に居て、漢の制を變じて、更に大錢を造る、徑り寸二分、重さ十二銖、文を大錢五十と云、契刀錯刀を造る、契刀は環り、大錢の如して、形ち刀の如し、長さ二寸文を契刀五百といひ、錯刀は黃金を以て錯し文を一刀といひ、直ひ五千、五銖錢と四品幷び行ふ、王莽位を簒て、錯刀・契刀・五銖錢を罷て、更に金銀・龜貝・錢布の品を作る、名づけて寶貨と云、小錢徑り六分、重さ一銖、文を小錢直一といひ、次は七分、三銖文を、錢一十といひ、次は八分五銖、幼錢二十といひ、次は九分七銖、中錢三十といひ、次は一寸九銖、壯錢四十といひて、前の大錢五十と云なり、是を貨錢六品とし、直

ひはおの〳〵其文の如し、黃金は重さ一斤、直ひ萬錢、朱提の銀、（顏師古が云く、朱提は縣の名、異銀を出すなり）重さ八兩を一流とし、直ひ一千五百八十、他銀の一流は直ひ千、これを銀貨二品とす、元龜、距冉長さ尺二寸、（孟康が云く冉は龜甲の像なり、距は玉なり、背の兩緣の尺二寸なるなり、臣瓚が云く、元は大なり）直ひ二千一百六十、大貝の十朋とし、（蘇林が云く、兩貝を朋とし、朋の直ひ二百十六、十朋にあつる故二千一百六十也）公龜九寸、直ひ五百、壯貝十朋とし、侯龜七寸以上、直ひ三百、公貝十朋とし、子龜五寸以上直ひ百、小貝十朋とし、是を龜寶四寸とす、大貝四寸八分以上、二枚を一朋とし、直ひ二百十六、壯貝三寸六分以上、二枚を一朋とし、直ひ五十、公貝二寸四分以上、二枚を一朋とし、直ひ三十、小貝寸二分以上、二枚を一朋とし、直ひ十一寸二分に滿たざるは、朋とすることを得ずして、數ごとに直ひ三錢、これを貝貨五品とす、大布・次布・弟布・壯布・中布・差布・厚布・幼布・公布・小布あり、小布は長さ寸五分、重さ十五銖、文を小布一百といひ、小布より以上は、おの〳〵相長きこと一分、相重きこと一銖、おの〳〵その布の名を文とし、直ひはおの〳〵一百を加へ、大布に至て長さ二寸四分、重さ一兩、直ひ千錢、これを布貨十品とす、（顏師古が云く、布も錢なり）錢布を作るはみな、銅を用ひて連錫を殺り（顏師古が云く、鏈は銅の屬なり）千質周郭漢の五銖錢による、其金銀の他物を雜へて色の純ならず、龜の五寸にみたざる貝の六分に盈ざるは、皆寶貨とすることを得ず、元龜を蔡とし、四民は居ることを得ず、あるものは大卜の宮へ入て、直ひをうけしむる、百姓憒亂して其貨行はれずして、民私に五銖錢を以て市買す、王莽之を患へて詔を下して云く、五銖錢を挾む者は、四裔に投じて魑魅を禦がしめん、是に於て農商業を失ひ、

食貨ともに廢し、公卿大夫より庶人に至る迄、錢を鑄て罪に抵す者あげて數ふべからず、王莽民の愁ふるを知て、唯小錢直一と大錢五十との二品を行はしむ、龜・貝・布の屬は寢とす、天鳳元年、重ねて金銀龜貝の貨を下して、其直ひを增減して、大小錢を罷て貨布を作る、長さ二寸五分、廣さ一寸、首の長さ八分餘、廣さ八分、圓好の徑り二分半、足數の長さ八分、間の廣さ二分足數の間なり その文は右を貨といひ左を布といひ、重さ二十五銖、貨泉の二十五にあつ、貨泉は徑り一寸、重さ五銖、その文は右を貨といひ左を泉といひ、枚ごとに直ひ一貨布と並び行ふ、大錢の行はるゝこと久しきを以て、これを罷れども民の止ざらんことを恐れて、令して獨り大錢を行ひ、貨泉と共に直ひ一にして並び行ひ、六年を盡して大錢を挾むことを得ざらしむ、錢を易ることに、民業を破て大に刑に陷る、王莽誅せられざる時に、天下の戶口半を減ず、漢の兵王莽を誅す

敎書按ずるに、周・秦・漢の黃金は、天子の頒賜、王侯の薦璧の用にして、民間の通行の物にあらず、王莽金銀をして錢とひとしく行使せしめて、民ならはずして、錢貨大に亂れて民業を失ふなり

公孫述、銅錢を廢して鐵錢を鑄る、貨幣行はれず、敎書按ずるに、鐵錢之を始とす

後漢

光武帝の建武十六年、始て五銖錢を行ふ、天下その便による

靈帝の中平三年、四出文錢を鑄る

献帝の初平元年、小錢を鑄る人用に便ならず、貨賤しくして物貴く、穀石ことに數萬

三國

劉備、蜀を取て直百錢を鑄る

魏の文帝の黄初二年、五銖錢を罷て、穀帛を以て市をなす、明帝の世に至て、錢を廢して穀を用ること久しくして、詐僞漸く多し

明帝五銖錢を行ふ

呉の孫權の嘉平五年、大錢を鑄て一にして五百にあつ

赤烏元年、當千錢を鑄る、百姓便とせず、これを罷て鑄て器物となす

晉

晉は魏の五銖錢を用ゆ

元帝、江を過て其の孫氏の舊錢を用ひて、輕重雜行す、大なるものを比輪といひ、中を四文と云、呉興の沈足錢を鑄る、これを沈郎錢と云

宋

文帝の元嘉七年、四銖錢を鑄る、文を四銖と云、重さ文の如し

孝武帝の孝建の初め、四銖を鑄る、文を孝建と云、一邊に四銖をなす、後は四銖を去て専ら孝建とす

群書備考に云く、錢文に年號を用ゆるはこれを始とす

廢帝の景和二年、二銖錢を鑄る、文を景和と云、民間摸效して、大小厚薄みな及ばず、輪郭なく磨剪鑿せざる者を求子と云、尤も薄輕の者を荇葉と云、市井これを通ず、永光の頃、錢貨亂政して、千錢の長さ、三寸にみたず、大小之に稱ふを鵝眼錢と云、これより劣たるものを綖環錢と云、水に入て沈まず、手に隨て破碎す、數十萬の錢一掬にみたず、斗米一萬商賣行はれず

明帝の太始の初め、鵝眼・綖環を禁じて、其餘は通用し、民の錢を鑄ることを禁ず、尋でたゞ古錢を用ゆ

敦書按ずるに、孔覬が云く、漢五銖錢を鑄てより、宋の文帝に至る迄四百餘年、錢の制度は廢興あれ共、五銖を變ぜざるは、その輕重貨の宜さを得ればなり、四百餘年の際、錢を鑄ること一ならざれども、五銖ひとり久しく行はるゝゆゑ、孔覬之を云ふなり

梁

梁の初め、京師及び三吳・荊郢・江襄・梁益は錢を用ひ、其餘の州郡は穀帛を雜へて交易し、交廣の域は金銀を貨とす

敦書按ずるに、漢の後より金銀を民間に通行すれども、錢の如く天下の通用の物にあらざるなり、元・明に至りて銀を以て天下に行使するなり

武帝、錢を鑄て、肉好周郭して、文を五銖と云、重さ四銖三絫二黍、又別に周郭を除く、錢を鑄て公

式女錢といひ、徑り一寸、文を五銖といひて、錢並び行ふ、百姓或は私に古錢を以て交易するは、其五銖錢の徑り一寸一分、重さ八銖、文を五銖といひ、三吳の屬縣これを用ゆ、女錢は徑り一寸、重さ五銖輪郭なし、郡縣みな通用す、太平百錢二種、並びに徑り一寸、重さ四銖、文字は朴にして、文は並びに太平百錢と云、定平一百五銖、徑り六分、重さ一銖半、文を定平一と云、雅錢五銖、徑り一分半、重さ四銖、文を五銖と云、その源は五銖より出て狹になり、東境これを雅錢五銖と云、徑り七分半、重さ三銖半、その源は雅錢より出て、銖を以て朱として、文を五朱と云、三吳これを行ふ、又對文錢あり、豐貨錢、徑り一寸、重さ四銖半、これを男錢と云、（婦人此錢を佩れば男を生ずるなり）此等輕重一ならず、詔して新鑄の二種の錢にあらざれば用ゆることを許さず、然れども私に用ゆること甚し

普通中に鐵錢を鑄て、銅錢をやむ、鐵の得やすきを以て、大同以後は鐵錢丘山の如くして、物價騰貴し、商旅姦詐して利を求め、破嶺より以東は、八十を百として東錢と云、江郢以上は七十を百として西錢と云、京師は九十を百として長錢と云、（通鑑綱目に云く、梁の太平二年四月、鑄四柱錢、一當二十、[illegible]錢一）

大同元年、詔して足陌を通用せしむれども從はず、末年に至ては、三十五を以て陌とす

陳

陳の初め、梁の喪亂の後をうけて、鐵錢行はれず、初め梁の末より、又兩柱錢・鵝眼錢をまじへ用ひて價ひ同じ、兩柱は重くして鵝眼はかろし、民多く盜鑄し、又聞するに鉛錫を以てし、兼て粟帛を以

て貨とす

文帝の元嘉五年、改て五銖錢を鑄て、一を以て鵝眼十にあつ

宣帝の太建十一年、大貨六銖を鑄て、一を五銖の十にあて、五銖と並び行ふ、後に當一とす、人みな便とせず、いくばくならずして帝崩じて六銖を罷て五銖を行ふ、嶺南の諸州は多く米布を以て交易して錢を用ひず

北魏

北魏の初め、太和錢貨を置て用ゆる所なし

孝文帝、始めて詔して錢を用ゆ

十九年、泰和五銖を鑄て通用し、內外の百官の祿みな絹に準じて一匹を錢二百とす錢を給す

宣武帝の永平三年、又五銖錢を鑄る、京師及び諸州鎭式は用ひず、或は古錢を用ひて、新錢を用ひずして商賈通ぜず

孝莊帝の時私鑄の錢ます〳〵薄にして、五銖の文ありて二銖の重さなし

永安二年、改め鑄て文を永安五銖と云

北齊

神武の霸政のはじめ、永安五銖を用ひ、鄴に遷りて後に、百姓私鑄して體制漸く別にして、おの〳〵

以て名とす、雍州。青州。梁州生厚緊錢古錢河陽生澁赤牽の稱あり、冀州の北は錢を行はず、絹布を以て交易す、神武更に錢を鑄て舊文による、いくばくならずしてまた細薄にして、姦僞競ひ起る

武帝六年、文襄王錢文五銖なるを以て、錢を秤して重さ五銖のもの、市に入て用ゆることをゆるし、或は重さ五銖ありといへ共、鉛鑞を雜るは用ることをゆるさず

文宣帝、東魏の禪りを受て、改めて常平五銖を鑄て、重さ文の如し、其錢いまだ行はれずして、私鑄おこりて、乾明・皇建の間に至ては、往々私鑄して、鄴中は赤郭・青熟・細眉・赤生の異なるあり、河南は青薄鉛錫の州あり、青齊徐兗梁荊河等の州おの〳〵殊なり

武平の後は、私鑄甚だしくして、生鐵私銅を以てして、齊亡るまで禁ずることあたはず

北周

北周の初め、魏の錢を用ゆ

武帝の保定元年、更に布泉の錢を鑄て、一を五にあて、五銖と並び行ふ、梁益の境は古錢を用ひて交易し、河南の諸州は或は西域の金銀の錢を用ゆ、建德三年、更に五行大布錢を鑄て、一を十にあて、布泉錢と並び行ふ

四年、邊境の人盜鑄の多きを以て、五行大布を禁じて四關に出入することを得ず、布泉錢は入るをゆるして、出るを許さず

五年、布錢漸く賤しくして用ひず、齊平いで以後は、山東の人齊の舊錢を用ゆ

大成元年、永通萬國錢を鑄て千にあて、五行大布五銖と三品並び行ふ

隋

文帝の開皇元年に、更に新錢を鑄て、背面肉好みな周郭あり、文を五銖といひ、重さ文の如し、此時百姓私に鎔鑄するあり

三年、詔して四面の諸關に、おの〳〵百錢を付して樣として關外より來るものは、樣に相似たるは過る事を得せしめ、樣に同じからざるは壞て銅として官に入、また詔して新錢を行ふ、以後前代の舊錢五行・大布・永通・萬國及び常平を所在日々に用ひて、貿易して止ざるを以て、五年、詔して其制を嚴にす、是より錢貨始めて一にして、所在流布し百姓便とす、此時見用の錢和するに錫鑞を以てす、錫鑞賤しきゆゑ、私鑄の錢多くして禁ずべからず、詔して錫鑞を出す所にて、私に採ことを得ず、其後姦猾私鑄して鉛錫をまじへて錢薄し、惡錢の禁を下す、其後數年の間、私鑄頗るやむ

煬帝の大業以後、王法亂れて私鑄多く錢薄惡にして、一千の重さ一斤に至る、或は鐵鍱を（銅鐵を拆練して斤をたすものを鍱と云也）剪て裁衣糊紙して、錢として雜へ用ひ、貨賤しく物貴くして隋亡るに至る

唐

武德四年、五銖錢を廢して、開通元寶錢を鑄て、十錢の重さ一兩、一千の重さ六斤、四兩にして輕重

大小の中を得るなり、銭監を洛并に幽益等の諸州に置て、秦王・齊王に二鑪右僕射裴叔に一鑪を賜て鑄る、盗鑄のものは、殺して家屬を沒す、（沒は上へ取上る也）初め高祖の關に入時に、民間の鐶錢の輕少なるを以て、開通元寶を鑄る、その文は給事中歐陽詢詞を制して、書するに及びて八分・篆・隷の三徳をなす、其詞は上を先にし下を後にし、次は左り右にし右を後にして讀む、上より左りに及び回環して讀むも、其義又通ず、歐陽詢初め蠟様を進る時に、文徳皇后一甲跡を掐するゆゑに、錢上に掐文あり

顯慶五年、盗鑄の惡錢多きを以て、官ために一善錢を以て、惡錢五を貿、民間惡錢を藏めて、禁の弛ぶを待

儀鳳四年、惡錢多きを以て、東都に令して遠年の糙米及び粟を出して市糶し、斗ごとに別に惡錢百文を納めて鑄破しむ

乾封元年、改めて乾封泉寶錢を鑄る、徑り寸、重さ二銖六分、一を舊錢の十にあつ

二年、商賈通ぜず米帛踊貴す、また開通元寶を行ふ、天下の私鑄日々に蕃く、舟筏に乘て江中に鑄者あり、巡江官に詔して、銅・錫・鑞を載せて、百斤に過る者をば、督捕して官に沒す

永淳五年、私鑄のものは死に抵し、鄰保は從坐す、（隣佑、保甲まで、その罪に及ぶなり）

武后の長安中に、様を市にかけて、百姓をして様に依て錢を用ひしむ、俄に揀擇しがたく、交易留滞す、令して錢の穴を穿ち、及び鐵・錫・銅一液にあらざるは、みな用ることを得ず、これより盗鑄蜂起し

て、江淮尤甚し

先天の際、兩京の錢ます／＼監なり、郴衡錢はわづかに輪郭あり、鐵錫五銖の屬みな用ゆべくして、或は錫を鎔して錢に模し、須臾にして千百をなす

玄宗の開元の始め、宰相宋璟惡錢を禁じて、二陳四參錢を行ふことを請、江淮に官鑪錢・偏鑪錢・稜錢時錢あり、監察御史蕭隱之を遣して、惡錢を括せしむ、括は捜索して、上へ取上るなり 蕭隱之嚴急にして、怨嗟路にみつ、蕭隱之を坐して官を貶す

二十二年、勅して貨幣を兼用ひて、莊宅江馬の交易に、絹布・綾羅・絲綿等を用ひ、その餘の市買の一千以上に至るは、錢物を兼用ゆ、違者は罪に科す科は處分するなり

二十六年、宣潤等の州に錢監をおく、時に兩京錢を用ひて、米粟ます／＼下る、其後錢又漸く惡く、銅を出す所に監を置て、開元通寶を鑄る、京師の庫藏皆みちて、盜鑄ます／＼起る、江淮の偏鑪錢數十種にして、鐵錫を雜へて輕漫にして錢の形ちなし、一を以て偏鑪錢七八にあつ、兩京の錢に鵝眼・紙環の別ありて、一貫の重さ三四斤、鐵を剪て緡するに至る

天寶中、天下の鑪九十九にして、鑪ごとに毎歲錢を鑄こと三千三百緡、銅を費すこと二萬一千二百斤鑞三千七百斤・錫五百斤、千錢ごとに錢を費すこと七百五十斤にして、天下の錢を鑄ること毎歲三十二萬七千緡

肅宗の乾元元年國用たらざるを以て、戸部侍郎弟五琦請て乾元重寶を鑄る、徑り一寸、緡ごとに重さ十斤、一を十に當て、開元通寶と參へ用ゆ

敎書按ずるに、一緡を一貫文とする說よろし、一緡を百錢とするは誤りと見えたり

弟五琦が相たるに及びて、重輪乾元重寶を鑄て、一を五十にあて、緡ごとに重さ十二斤、三品の錢と並び行ふ、物價騰踴して、斗米七千に至り、餓死の者道にみつ

上元元年、重輪錢を減じて、一を以て三十にあて、開元舊錢・乾元十當錢は、みな一を十にあつ

史思明、東都に據て得一元寶を鑄て、徑り一寸四分、開元通寶の百にあつ、得一の長祚の兆にあらざるを以て、文を改めて順天元寶と云

代宗位に卽て、乾元重寶一を以て二にあて、重輪錢一を以て三にあつ、三日にして大小錢みな一を以て一にあつ、人はなはだ便とす、其後民間の乾元重稜の二錢は、鑄て器として出さず、諸道鹽鐵轉運使劉晏江嶺の諸の出す處の重租、賤弱の貨を京師に輸して、道路の直ひを供するにたらざるを以て、これを江淮に積て、銅・鉛・薪・炭にかへて、廣く錢を鑄て、年ごとに十餘萬緡を得て、京師及び荊・楊の二州に輸す、これより錢日々に增

建中二年、諸道鹽鐵使包倍奏す、諸州の地寄にみな私鑄ありて、姦究漸く深し、今より後本道の觀察使に委して、明かに賞罰を立て、切に禁斷を加へん

貞元九年、張滂奏す、銅錢一千を銅となして六斤あり、器物に造れば一斤の直ひ六百餘にして、利の厚きを以て、與販の徒潛かに銷鑄すること多く、江淮の間錢ます〱耗す、前敕の文に從て、鏡を鑄るの外は一切に禁斷せん

十年、勅して今より後銅器を鑄て買賣するは、禁止すべからず、その器物の銅は、一斤の價ひ百六十文に過ることを得ず、もし錢を銷して銅とするものあらば、盜鑄錢の罪を以て論ず

憲宗、錢の少きを以て、また銅器を用ゆる事を禁ず、時に商估京師に至て、錢を諸路の進奏院及び諸軍諸使に委して、輕裝を以て四方に趨き、劵を合せて錢をとる、これを飛錢と云

　敎書按ずるに、唐の飛錢及び宋の便錢は、今のかはせなり

此時天下年ごとに錢を鑄こと、十三萬五千緡、令して商賈の錢を蓄る者は、出して市貨せしめ、天下の銀ある山は必銅あり、銀は人に益なし、五嶺以北、銀一兩を取るものは他州に流し、官吏は罪に論ず

　敎書按ずるに、漢の後金銀を行使すれ共、錢の如く貴びざること見るべし

元和四年、京師錢を用ゆるに、緡にして二十をかく、鉛錫ある者は捕ふ

六年、貿易の錢十緡以上は布帛を參用す、蔚州三河等の五鑪、鑪ごとに毎月三十萬を鑄る、是より河東の五鑪みな廢す、京師飛錢の家に滯藏することを禁じてより、物價頓に輕し、判度支盧坦等請て、

商人に許して戸部・度支・鹽鐵の三司に於て、飛錢して千緡ごとに百錢を增給す、商人至る者なし、また許して敵貫して易れ共錢重く、幣輕きことももとの如し、憲宗これがために內庫の錢五十萬緡を出して、布帛を買て每匹に舊估の（舊估は舊價也）十の一を加ふ、七道の兵を以て吳元濟等を伐に會て經費つく、皇甫鎛議して內外の用る錢、緡ごとに二十を墊するの外、また五十を抽して（抽はくちまへなり）度支に送りて軍を贍はす

十二年、勅して今より文武の官僚及び士庶商旅寺觀坊市に至る迄、私に錢を貯ふること五千貫に過ることを得ず、時に京師の里閈區肆の積所、多く方鎭の錢、少きもの五十萬貫に下らず、こゝに於て競て地屋を買て錢を變じて、高貲の大賈は多く、左右軍官の錢を依倚して名とす、府縣の官究治することと能はずして、竟に行はれず

敎書按ずるに、姦民の官人の名をかりて事をなすは、千古の大患

穆宗、位に即て京師の金銀を鬻賣するは、十兩にて一兩を墊し、（墊もくちまへなり）米鹽を糴するは、百錢にて七八を墊す、尋で墊百一ならず、詔して俗の宜き所に從て給用し、緡ごとに八十を墊す、寶曆の初め、河南尹王起請て錢を銷して佛像となす者は、盜鑄錢を以て論ず

大和三年、詔して佛像は鉛錫土木を以て飾とし、帶るに金銀・鍮石・烏油・藍鐵を以てす、たゞ鑑磬鈕は銅を用ひて、餘はみな禁ず

四年、詔して凡そ交易百緡以上は、疋帛なかばに居る、いくばくならずして罷
八年、河東の錫錢また起る、飛狐鑄錢院を蔚州におく、天下年ごとに錢を鑄ること十萬緡に及ばず
文宗、幣輕く錢重きを病て、方鎮に詔して縱に錢穀交易す、時に銅を異とするを禁ずといへ共、江淮嶺南は列肆にて鬻いで、千錢を鑄て貨となして、其利數倍あり、宰相李珏請て鑪にかへて、錢を鑄ること六千斤、こゝに於て銅器を禁じ、官より銅器を賣る、天下の銅坑五十年ごとに銅を採こと二十六萬斤（武宗の會昌五年）浮屠の法を廢す、永平監李都彥請て、銅像鐘磬鑪鐸を以て巡院に歸す、州縣の銅も亦多し、諸道の觀察使に許して、みな錢坊をおく、淮南節度使李紳請て、天下の州名を以て開元錢を鑄て、京師に鑄るを京錢とし、大小徑寸、開元通寶の如し、舊錢を用ることを禁ず、此開元錢は鑄所の郡州の號名を背文とす、京（京北）洛（河南）興（鳳翔）梁（汴梁）荊（江陵）桂（廣西）潭（湖南）廣（廣東）福（浙東）越（浙東）洪（江南）潤（鎮江）昌（成都）鄂（湖廣）袞（袞州）梓（東川）襄（襄州）丹（河北）益（西川）宣（宣州）平（燕山）楊（楊州）藍（藍田）の二十三なり

敦書按ずるに、高祖の開元、玄宗の開元、武宗の開元の三品あり
宣宗、位に即てまた會昌の改を出して、新錢の字の辨ずべきを以て、鑄て像となす
昭宗の末、錢を用るに八百五十を貫とし、河南府は八十を以て百とす

錢幣略記下

五代

後唐の同光二年、勅して京師及び諸道の市に於て行使する錢の內、雜惡の鉛錫を檢點して並に宜く禁斷すべし

天成元年、中書門下奏す、諸道州府の買賣する處の銅器、價ひ貴くして多くは錢を銷して利を求む、宜く遍く告曉して元舊の如くすべし、破損の器及び碎銅は碎して銅器に鑄造せしめ、生銅器八斤ごとに價二百、熟銅器八斤ごとに四百に定め、もし違ひて價ひを省て賣買する人は、盜鑄錢の律文に依て科斷すべし、勅して三京諸道州府城門出す處の錢、もし五百以上は放に出すことを得ず、二年、勅して云く賣買の人の使ふ所の錢もて百ごとに八十文、近ごろ京及び諸道の市肆の人戶、短百を以て長錢に換と訪聞す、今より後凡賣買は八十百錢を使ふべし、もし短百を以て輿敗せば所在にて收捉（收捉はとらへる也）して禁治、四年、勅して今より後は行使の錢百の內一文二文を捉到し、鉛鐵錢を帶るに係るは、使ふ所の錢の多少を計らず、官に納て罪に科す

晉の天福三年、詔して三京諸道州府公私を問ふとなく、銅ある者は許して錢を鑄せしめ、天福元寶を

以て文とし、左還してよみ、一錢の重さ二銖四參、十錢の重さ一兩、仍て鉛錫を雜じへ鑄ことを禁ず、諸道の久廢の銅冶あるは、官課利を取らず、（課利は運上なり）鑄錢を除くの外は銅器を鑄ことを得ず

四年、勅して天下公私の鑄錢、鉛錫を雜へて缺小にして條に違ふを以て、今より後只官鑄造して私下は禁ず

漢の隱帝の時、舊制に錢の出入、みな八十を以て百とす、王章が三司使となりて、聚斂して始て入るもの八十、出すもの七十七とす。之を省百と云、周の顯德二年、民間多く錢を銷して、器皿及び佛像となして、錢ます〱少きを以て、監をたて銅をとり錢を鑄て、縣官の法物軍器及び寺觀の磬鐘鈸鐸の類の、留ることをゆるすにあらざるよりは、民間の銅器佛像は、五十日の內に官に輸さしめ直ひを給す、期を過て隱匿して輸さざること五斤以上は罪死す、五斤に及ばざるは刑に論ずること差あり、銅鏡は官にて東京に鑄て、坊を置て貨賣す

唐主李璟すでに江北を失ふて、兵を用るに困む、鍾僎請て大錢を鑄て、一を十文にあて、文を永通泉貨と云、鍾僎罪を得て、大錢廢す、韓熙載して鐵錢を鑄て、一を二にあつ、錢に銅鐵の二等あり

五代は唐の錢をうけ用ひて、諸國割據の者は、江南を唐國寶通といひて、別に鑄て唐の制の如くして篆文なり、其後鐵錢を鑄て、十錢ごとに鐵錢六銅錢四つにして行ふ、乾德以後は、只鐵錢を以て貿易して、十を銅錢一にあつ、兩浙・河東は銅錢を鑄て、唐の制の如し、四川・湖南・福建は皆鐵銅兼行す、

淮南は文を乾封泉貨といひ、徑り一寸にして、十を十にあつ、福建は唐の制の如し
敦書按ずるに、智囊補に云く、楚王馬殷湖南を得て、湖南の地鉛鐵多し、軍判高郁請て鑄て錢とな
す、商旅境を出て之を用ゆる所なきを以て、みな他貨にかへ、去て國用富饒なりと、これにて鉛鐵
錢の行はるゝと、行はれざるとは、時勢によるもみるべし

宋

宋の初めの錢、文を宋元通寳と云
建隆二年、諸の鐵鑞錢を禁じて、民間ある者は悉く官に送る
乾德五年、輕少の惡錢を禁じて、一月を限りて官に送る
太平興國の後太平通寳を鑄る
太宗、親淳化天寳を書して、眞・行・草の三體有、日後改元すれば必更に錢を鑄て、年號元寳を以て文とす
咸平四年舊制に、銅禁を犯すと七斤以上は奏裁して死に處す、詔して今より五十斤に滿る以上は裁を
とり餘は減ず
天禧三年、詔して銅鍮石を犯すは、並に極刑を免ず
鐵錢は川陝福州舊制をうけ用ゆ
開寳三年、雅州百丈縣に監を置て、鐵錢を鑄て、銅錢は兩川に入ることを禁ず、後に兼行せしめ、銅錢

一を鐵錢十にあつ
太平興國八年、福建銅錢少きを以て、建州に於て大鐵錢を鑄て、銅錢と並び行ふ、尋で鑄ことをやむ
凡そ銅錢を鑄るに、饒州の永平・地州の永豐・江州の廣寧・建州の豐國の四監ありて、千文ごとに銅を用ること三斤十四兩、鉛一斤八兩、錫八兩にして、重さ五斤となす、建州は銅五斤を增て、鉛を減ずること共數の如し
至道中、年ごとに八十萬貫を鑄る
景德中・一百八十三萬貫に至る
大中、祥符の後は銅坑多く發せず
天禧の末は、一百五萬貫を鑄る
鐵錢は卭州の惠民、嘉州の豐遠、興州の濟衆の三監ありて、歲にすべて二十一萬貫を鑄る
諸路の錢、年ごとに京師に輸す、四方これによりて錢重くして貨かろし
景祐の初め、三司に詔して江東・福建・廣南、歲ごとにいだせる緡錢を三十餘萬を以て金帛となして、錢民間に流す、凡そ銅錢の劑千錢の重さ八十兩にして、銅六分餘、鉛錫三分餘、大鐵錢は鐵二百四十兩を用ひて、千錢の重さ百九十二兩なり、許申と云もの三司度支判官となりて、議して藥を以て鐵を化して銅と雜へ、鑄て輕重銅錢の法のごとし、銅三分餘、鐵六分餘、詔して京師に鑄る、鉛錫をまじゆれば、液の

流るゝこと速かにして成やすく、鐵を雜ゆれば、濫て多くならず、工人これを苦て、卒に成ことなし

仁宗の寶元中、年號に元の字あるを以て、學士に詔して議せしむ、因て改めて豐濟元寶と云んと請ふ、仁宗特に命じて皇宋通寶を文とす

慶曆以後、又年號を以て冠らしむ、時に軍興て陝西移用たらず、始めて知商州皮公容が議を用ひて、洛南縣の紅崖山、虢州の青水の冶、青銅をとりて阜民・朱陽の二監を置て錢を鑄る、すでにして陝西都轉運使張珪等、請て大銅錢を鑄て小錢と兼行す、大錢一を小錢十にあて、又大鐵錢を河東・晋澤の二州に鑄て、一を十にあて、關中の軍費を助く、いくばくならずして、三司奏して河東の大鐵錢を鑄ることをやむ、陝西又儀州の竹尖嶺の黄銅を采て大錢を鑄る

　敦書按ずるに、この黄銅錢は自然の黄銅錢にて、天下に通行するにあらず、明の萬曆の倭鉛を入て製したる黄銅錢、天下に通行するなり

因て江南に勅して、大銅錢を鑄る、地鏡儀虢州小鐵錢を鑄て、關中に致して數州の錢雜行す、大推小銅鑄三を、當十大銅錢の一にあつ、故を以て民間盜鑄もの多く、物價騰踊して公私これを患ふ、是に於て張珪奏して、晋・澤・石の三州及び成勝軍（地小きにして、州をなさざるを軍と云なり）にて、小鐵錢を鑄て河東に行ふ、盜鑄もの利を得て、その患へ陝西のごとし、知幷州鄭戩請て、河東の鐵錢二を以て銅錢一にあて、行ふこと一年にして、三を以て一にあて、或は五を以て一にあて、官鑪鑄ることを罷て舊錢を行ふ、知澤州

の李昭遘が云く、河東の民盜鑄して、北虜鐵錢を鑄て銅錢にかへ去て、害する所大なり

慶曆の末葉、淸臣張方平陝西の錢議を上て、請て江南儀商等の大銅錢一を以て、小銅錢三にあて、又請て小鐵錢三を銅錢一にあつ、すでにして河東の小鐵錢、三を以て一にあて、官鑪をやむ、其後商州に詔して、靑黃銅錢を鑄ることを罷、又陝西に令して大銅錢大鐵錢みな一を二にあつ、盜鑄やむ

神宗の煕寧四年、陝西轉運使弼請て、舊銅鉛を以て番二錢を鑄る、其後折二錢遂に天下に行はる、折二錢は二文錢なり、當二錢と云も同じ事なり 先に慶曆中、陝西は銅錢大鐵錢を用ゆることを許して、小鐵錢四十萬緡、積て同華二州にあり、河東に詔して鐵を以てこれを償ふ、王安石政をなして、始て銅禁をやめ、姦民錢を銷して器となし、邊關海船の錢の出入を減ぜず、國用日々に耗す

八年皮公弼又請て鐵錢の折二錢を鑄る

諸路の監すべて廿六にして、毎年銅鐵錢を鑄ること五百四十九萬九千二百卅四貫、內銅錢十七監、錢を鑄ること五百六萬貫、鐵錢九監、錢を鑄こと八十八萬九千二百卅四貫、銅錢十三路行使

開封府界	京東路	京西路	河北路
淮南路	兩淅路	福建路	江南東路
江南西路	荊湖南路	荊湖北路	廣南東路
廣南西路			

銅鐵銭兩路行使

陜府西路　　河東路

鐵銭四路行使

成都府路　　梓州路　　利州路　　夔州路

宋のはじめより景德中に至て、銅銭九監をまして、銭三百餘萬貫をまし鑄る、鐵銭六監をまして、銭六十餘貫をまし鑄る

哲宗の元祐六年、銭幣闌出の禁を（闌出はみだりに銭界をいだすなり）ゆるし、銅銭界を出せば、徒・流・編、編首從の法をたつ、（徒流は、徒罪・流罪なり、編配は編藉して配するなり、首は本人從はその中間なり）

徽宗の崇寧二年、初めて陜西に令して、折十銅銭と夾錫銭を鑄せしむ、左僕射蔡京、奏して陜西の夾錫銭を精好ならしめて、銅銭二にあつ、河東の運判、洪中字が云く、二虜中國の鐵銭を兵器とす、雜ゆるに鉛錫を以てせば、脆くして用ゆべからず、請て改めて夾錫番三當十銭を鑄る、尙書省の云く、崇寧監御書、當十銭を鑄る、貫ごとに重さ十四斤七兩、銅を用ること九斤七兩に、銭鉛四斤十二兩六銭、錫一斤九兩二銭にして、火耗一斤五兩を除て、一銭の重さ三銭

四年、尙書省の云く、東南諸路の當十銭を盜鑄する者多し、詔して廣南・福建路は、當十銭を行使せしめず、小平銭を鑄せしむ、又詔して荆・湖・江・浙の當十銭を改めて、當五銭とす

五年、詔して當十錢は、京師・陝西兩河に行ふことを許して、諸路はやむ、崇寧の初め、鑄錢廢弛して、祖宗の數の多きに及ばず、魯公政をとりて、舊額に（額は何程と定たる數を額と云也）復せんと思へ共、銅少くしてあたはず

大觀元年、大錢を造り、一を以て十にあつ、大觀の時、天子親ら錢文を書す

三年、當十を改めて、當三・當五となし、大錢遂に廢す、爭て錢を鑿して黄金を買

重和十三年、韓求膽銅錢を鑄て、わづかに十萬緡、信州の鉛山場に歳額あり、（膽銅の制は、經濟纂要前集に載するなり）高宗の紹興三年、劉大中請て、泉司の官屬を省く

宋の初めの鼓鑄は、（鑄冶の時にあたりて、その火を扇熾するを鼓鑄と云なり）饒地・江州・建寧府の四監にして、歳ごとに銅錢を鑄ること百三十四萬緡、上供に充（上供は上の用に供するなり）イ・睿・嚴・鄂・韶・梧の州の六監、歳ごとに鑄こと百五十六萬緡、逐路の支用に充つ、建炎の亂に鼓鑄みな廢す、紹興の初め、歳ごとに鑄ることわづかに八萬緡、銅鐵鉛錫の入こと舊に及ばずして、官吏の稟稍（稟稍は扶持米なり）工作の費はもとの如し、千錢を鑄て本錢二千四百文を用ゆ

二十八年、御府の銅器を出して泉司に付し、民間の銅器を大索して、（告る者は賞あり）銅二百餘萬を得、寺觀の鐃磬・鐃鈸、すでに籍定して務に（務は役所なり）投ずるの外は、添鑄ることを得ず

二十九年、限制をたてゝ、命家の官は錢二萬貫を存留して、（存留はとめ置くなり）庶民はこれに半ばす、其餘は二年

を限て、金銭に變轉せしむ
馬端臨が云く、民間銭少くして流通することあたはず、縣官費へ重くして廣く鑄ることあたはざるを以て、この末策をなすなり

孝宗の隆興元年、詔して當二小平銭を鑄る

乾淳より嘉泰開禧に至る迄、みなかくの如し

淳熙二年、わづかに新鑄の十五萬なり、宋の制に浙閩廣に市舶を置て、（市舶は今の長崎の唐船商賣の如きなり）舶商の往來に銭寶の泄るを以て、臨安より門を出る禁あり、江を下るの禁あり、海に入の禁あり、こゝに於て江海の州軍銅銭を以て海に入ものは罰あり

五年、詔して蕃商の（蕃商は外國の商也）往來に、銅銭五百文を帯て、岸を離て五百里の外は界を出る法に依る

六年、司農丞辥子中が云く、舒蘄黄州皆鐵を産す、監を置て折二銭を鑄るべし、戸部に詔して廿六萬貫を支流して本とす、舒蘄黄の三監、毎歳おの〳〵卅萬貫を認め、其大小銭を兩淮に通行す

光宗の紹熙二年、師漕司に詔して賑糴し、及び破缺の鐵銭及び私鑄を收む

三年、度牒二百道を（度牒は僧の度牒なり、道は通の事也）降して、私鐵銭にかゆ

十五年、利州の紹興監を置て、銭を鑄ること十五萬緡、これを以て銭引を救ふ、其地山林多くして炭鐵に宜し、仍て十五萬緡を增鑄る、末年に減じて十萬を鑄る

二十二年、嘉州の守臣王知遠去て、豐遠惠民の二監を復して、小錢を鑄る

寧宗の嘉定元年、利州にて當五大錢を鑄る

三年、制司舊引を收んと欲して、又紹興惠民の二監を置て、錢を鑄ること共に三十萬貫、その料は當三錢に同じ、議するものは引の直ひの日々に低するを患へて、盜鑄すれども禁ぜず

緶錢

太祖の時、唐の飛錢の故事を取て、民に許して錢を京師に入て、諸州に於て便換す、此後京師の用度ます〳〵多し

開寶三年、便錢務を置て、商人の錢を入ものをして、便錢務に至て牒を陳し、卽日に錢を左藏庫に致し劵を給す、仍て諸州に勅して、凡そ商人の劵を賫して至れば、當日に給付して住滯することを得ず、違者は科罰す、これより停滯なくして、至道の末は商人の便錢一百七十萬貫、天禧の末は一百二十三萬貫を增

交子

初め蜀人鐵錢の重きを以て、私に劵をなして貿易に便りして、之を交子といひ、富人十六戸これを主る、其後富人稍衰へて、負所を償ふこと能はずして、爭訟しば〳〵起る、寇瑊蜀に守たる時に、交子を禁ぜんと乞ふ、薛田轉運使として議して云く、交子を廢せば貿易便ならず、官に請て務をおき、民の私造

を禁ぜん、詔して其請に從ひて交子務を益州におく
天聖以來、百二十五萬六千三百四十緡を額とす、熙寧元年、始めて僞造の罪をたつ
二年、臨州交子務を置、いくばくならずしてやむ
五年、交子二十三界、三年を一界とするなりまさに易んとして界に從れて給用すること甚だ多し、詔して更に二十五界の者、百二十五萬を造りて、二十三界の數を償ふ、交子の兩界あるは、これより始まる
九年、陜西の交子の法を罷
紹聖元年、成都路の漕司、印を更て製せんと請ふ、詔して一界に十五萬緡をます、是歳舊額に通じて書數すること百四十六萬三千四百緡
崇寧元年、また陜西の交子を行ふ
大觀元年、四川の交子を改めて、錢引として云、費を助く天聖の一界に較れば、二十倍にこえて、價ひいよ〳〵損じ、界年を更に及びて、新交子一を舊の四にあつ、又詔して陜西・河東の引は直ひ五千より七千に至る、成都は僅かに直ひ二三百豪右利を規て法を害す、民間の貿易十千以上錢と引と半して用ひしむ、大凡舊歳は一界を造れば、本錢三十六萬緡を備へ、新舊相よる
大觀中、本錢を蓄へずして、增造りてかぎりなし、引一を鑄錢十枚にあつるに至る
崇寧の間錢引を京東西淮南京師諸路に行ふて福建・江浙廣は行はず

敦吉按ずるに、交子錢引は、みな手形買なり

會子

高宗の紹興元年、婺州屯駐に因て、見錢關子を造りて、婺州に付して、商人を召して入中し、（河北にて商人を募りて、芻粟を邊に輸して、劵を要して鹽及び緡錢香藥寶貨を京師によりて、或は東南州軍陝西は鹽を兩地にうく、これを入中と云也）關子を執て搉貨務に赴て錢を請ひ、茶鹽香鈔引を得ることを願ふ者はゆるす、こゝに於て州縣關子を以て、糴本に覺て抑配を免れず、（抑配は望まざる人へ無理に配當するなり）搉貨務日納の三分の一を以て償ふ、人皆嗟怨す

六年、詔して行在に（行在は天子の在す所なり）交子務を置く、臣僚極めて其不可を論ずるを以て、交子務をやめ、搉貨務をして見錢を（見錢は見在の錢なり）挿垜して、（挿垜は重疊して貯るなり）關子を印造せしむ

二十九年、公據（公據は書付也）關子を印給して、淮南湖廣おの〳〵關子八十萬緡、淮の公據四十萬緡十千より百千に至て五等あり、關子は三年行使し、公據は二年行使と作し、錢銀中半入納することを許さず

三十年、戸部侍郎錢端禮、旨を被りて會子を造り、見錢を城に挿して、宮錢を發すべきは許して會子に兌して（兌はかゆる也）左藏庫に赴て送納す

三十一年、詔して會子務を都茶場正に隷して、客旅の茶鹽香礬等を算淸するを以て、歲ごとに一千萬貫を以て、陰かに助けて稱提すべし、（稱提は會子のすたらざる様に擧げしむる也）獨り見錢を恃見て本とせず

三十二年、詔して會子を僞り造るの罰を定め、（犯人は斬に處し、告る者は錢一千貫を賞す、もし賞を願はざる者は、進義校尉に補す、もし徒中及び窩藏の家、自から告首するものに罪を免し、上

件の如く錢を賞す、或は進義校尉に補せんと願ふはゆるす、徒中は中間の事なり、窩藏の家は其宿をして藏し置くの家也、告首は白狀なり　日々に會子を造り、一萬道ごとに、戶部に解赴して（解赴は送りつかはす也）覆印す、當時の會紙は徽池に作る、會子は初め兩浙に行ふ、後に詔して淮浙・湖北・京西に通行す、水路を通ぜざる處は、上供等の錢をこと〳〵く會子を用ゆることを許す沼流の州軍は錢と會子と中半し、民間の田宅平畜車船等を典買するも（典は質に入るゝ也）かくの如くす、或は有て會子を用ゆることをゆるす

孝宗の隆興元年、詔して隆興尙書戶部官印會子之印を以て文とし、更に五百文令三百文會を造る

五年、江州會子務をおく

乾道三年、度支郎中唐琢が云く、紹興三十一年より乾道元年七月に至て、會子を印過すること二千八百餘萬道、乾道二年十一月十四日以前、共に一千五百六十餘萬道を出す、官司に在て椿管し、循環するを除くの外、その民間にあるもの九百八十萬道、十一月十四日以後措置して收換し截（これは舊札を上へ收めて、切捨る也）三年五月六日に至て、共に一百十八萬九千餘貫を繳進す、（繳進は舊札を上へかへす也）いまだ收めざるもの八百餘萬貫、大抵每月收換すること六七十萬に過ぎず、諸路の綱運は（綱運は舟を組みて、公儀の物を運するなり）十分見錢を要するに（是はのこらず錢にてとり行ひて、會子を取らざる也、要は求むるなり）會よりて州縣の民戶は、會子を輸し納ることを許さず、これ外にある會子の、往々に賣買の低價（低價は下直也）して收買し、行在に輻湊することをいたすなり、詔して度牒及び諸州の助教の帖、おの〳〵五千道を降して、擢貨務に付して、召人宜く會子を以て入納し、出し賣を候てこ

と〲く中取せんとす、六月戸部曾懷が云く、會子收還を除くの外、四百九十萬貫民間にあり、存留し行使せんと乞、十二月、民間の會子破損ある者を以て、別に五百萬を造り換給し、他日又詔して換會の貫百の照すべきは、並に上供錢となして解發せしめ、鉅賓（鉅賓は富人を云也）の低價を以て收る者は罪す

四年、舊會を取到し、毀抹截して（毀はやぶるなり、抹は墨にてけすなり、截はきる也）會子局に付して重て造て三年を一界とし、界ごとに一千萬貫を額とし、界を逐て新らしきを造りて舊きをかゆ、陳俊卿奏して云く、四月一日に工を興して印造して、歳の終りに一千萬貫を造りて、措置して收換し、舊會一道ごとに糜費錢卄を改め、零百は（零百は貫より下の百札なるべし）これに半ばし、舊會の破損して、貫百の字存して、印文の驗す可きは兌換せん、十二月一日、始めて局を置て收換し、明年三月に至てこと〲く絶、更に行用せず

淳熙三年、詔して第三界四界おの〳〵限りを展ること三年、都茶場會子庫に令して、第四界の銅板を以て接續して、會子二百萬を印造して、南庫に赴して樁管す、當時戸部の歳入一千二百萬、その半は會子たり、南庫金銀を以て收換するもの四百萬、外に流行するは二百萬のみ

光宗の紹熙元年、詔して第十界を造り畢限を立定む

寧宗の慶元元年、詔して會子の界三千萬を以て額とす

嘉定三年、詔して封樁庫の金銀度牒官誥綾紙乳香を湊成して二千萬、臨安府の官局に添貼して、舊會を收換し、舊會二を以て新會の一に換て、新會を稱提すること最も嚴にして、苛政出て酷吏志を得

川引

祖宗の時、蜀交の書放するは、兩界のもの一百二十餘萬、三界をして通行せしめて、三千七百八十餘萬とす

紹興の末年に至て、積で四千一百四十七萬餘貫に至る、有所の鐵錢但に七十萬貫、又鹽鐵を以て陰に稱提をなす、餉臣王之望朝廷久遠の慮をなさずして、錢引を添印して、請て目前を救ふ、詔して三百萬を添印して、王之望に委す、王之望たゞ百萬を添印す

孝宗の隆興二年、餉臣趙沂前、指揮に依て二百萬を添印す

淳熙五年、蜀中の錢引ましして、四千五百餘萬に至るを以て、臣僚乞て定額をたつ

光孝の紹熙二年、詔して川引を界を展て行使す

寧宗の嘉泰の末、兩界の川引書放すること、凡そ五千三百餘萬緡、三界の書放に通じてます／＼多し

嘉定の初め、每緡鐵錢の四百以下にあたる、金銀度牒一千三百萬を出して、半界を收回す、期するに歳の終用ひざることを以てす、四川諸州の總所を去こと遠きもの千數百里にして、期限甚だ逼て受給の吏（受は上へうけとるなり、給は上より引かへて渡すなり）姦をなす、こゝに於て民みな嗟怨す、一引の直ひ僅に二百錢に售、制司榜を揚て收差する一千三百萬引を除くの外、三界は通行せしめ、又成都に場を置て收兌す、民心稍定る、自後引の直ひ鐵錢五百餘、關外は銅錢を用ひて、引の直ひ百七十錢

嘉定五年、制總司九十一界、二千九百餘萬緡を收換（茶馬司の羨餘錢制司の定名の官告、總所の金銀・度牒、九十三界の錢引を以て收換する也）又九十四界の錢引五百餘萬緡を造りて、前の宣撫程私が增す所の數を收む、民間の輸納する者は、引百帖ごとに八千、其金銀品搭は（類書纂要に云く、品搭は高低なり）率新引七分、金銀三分、その金銀品色官の稱少虧あり、舊引百帖ごとに二十引を帖納す、（別に二十引を納るゆゑに、帳納と云なり）元年より舊引を兩收すれども、引直もとの如し

淮交

紹興の末、會子の行るゝ兩淮湖廣の分あらず、乾道元年、戶部侍郞林安宅が云く、督府妄りに會子を費すこと多くして本錢たらず、遂に幣あることを致す、別に會子二千萬を給し、背印して淮南州軍に付して行使せしめ、他路に超過することを得ずと乞

二年、詔して別に二百・三百・五百・一貫の交子三百萬を印し、たゞ兩淮州縣に行使す、其舊會は對換することをゆるし、入納買賣は交子見錢を中半せしむ、もし往來不便ならば、詔して交る會子おの〳〵環して使用す、紹興の末年より以前は、銅錢を淮に用ゆることを禁じ、鐵錢を以てかゆ會子すでに淮に二十萬を鎭江建康府の攉貨務に付して、淮人の江を過ぎ、江南の人の淮を渡る者のみな日々に對換循用ひて易るに交子を以てす、こゝに於て商賈行はれずして淮民くるしむ、右司諫陳良祐交子の不便を奏す、詔して銅錢會子舊に依て江を過ぎて行使せしめ、民間の交子は許して見錢となして官に納め、官にある交子は數をつくして、行在の左藏庫に赴して交納せしむ、後又詔して銅錢會子舊さに依て江を

過ぎて行使せしむ、又詔して江南の州郡の民間、淮交を行使する者は、便に従はしむ
嘉定十五年に至て、三百萬を増し印す、其數日々にまして價ひ日々に損す

湖會

孝宗の隆興元年、湖廣の餉臣王珪が云く、襄陽郢復等の處の大軍の支請錢銀を以て品搭す、今措置して大軍庫の堆垜、見錢に於て五百一貫の會子を印造せん、朝廷その議をやめて再び湖北會子二百萬貫を給して、舊會を收換す

嘉定十四年、詔して湖廣の會子三十萬を造りて、破損の會子を對換す、自後因仍して行ふ

敦書按ずるに、會子關子は札づかひなり、宋の世國用たらずして、色々の法をなせども、ますく乏しく、下いよく苦むことと見るべし、政をとる人尤も心をつくすべき所なり

三貨圖彙附錄卷之七

新井筑後守源君美編輯

國朝舊章錄

本朝寶貨事略

天武、白鳳三年三月、對馬より銀を貢す、人皇より四十代、曆數三百三十四年を經て我國の銀は始て出たり、延喜式に、太宰府より每年銀八百九十兩宛貢すと見えしは、對馬より出せる處なり、此比鳥羽・堀川の比迄、對馬より銀を出せし由見えたり

一　元明、和銅元年春、武藏國より銅を貢す、人皇より四十三代、曆數千三百六十八年を經て、我國の銅は始て出たり、是より先にも本朝にて銅を用ひられし事ども見えたり、是等は皆外國より來る處なるべし、倭國の銅是を始とすれば年號を和銅とす、倭和相通じて用る

一　聖武、天平二十一年三月、陸奧國より黃金を貢す、人皇より四十五代、曆數千四百九年を經て、我國の黃金は始て出たり、是より先にも本朝にて黃金を用ひられし事どもゝ見えたれども、皆々外國より來れる處なり、此時大佛の像を造られしに、是を裝るべきの料の黃金なければ、異國に求められんとせしに、陸奧國より始て黃金を九百兩貢しかば、歡ばせ給ふ事限なく、やがて年號を天平勝寶と改ら

れたり、延喜二年にも陸奥國より毎年砂金三百五十兩づゝ貢せしとあるは、奥州の貢金といひしもの也、其後後白川の比まで、此貢金はまゐらせしなり

一　延喜式に、下野國より毎年砂金百二十兩、練金は十四兩づゝ貢せしよし見ゆ、此國より金銀出し始は、未だ詳にせず

謹按、本朝國ひらけし始より千餘年を經て、我國の金銀始て出づ、天地の大寶を秘事は、又其時代の財用とぼしかりし事どもを思ひはかるべきか、是より後我國の金・銀・銅出るといへども、年毎に出る所のすくなきを以て、國用のゆたかならざるを又おもひはかるべし

一　佐渡國より黄金出し由は、宇治大納言物語に見えたり、されば此國にはむかしより有しが、世に是を採るすべを知らず、近き比ほひ上杉謙信入道彼國を攻取しより後、金銀を採りて國用を足す、太閤秀吉兼てより此事を聞傳へて、世をしられし後、謙信の子中納言景勝を欺て、奥州へ移して佐渡國を押取て金を採られしが、金出ずして程なく薨ぜられたり、慶長五年、關ヶ原事終りし明る年より、此國の金出ること夥しともいふばかりなし、かゝることは我國のいにしへより傳へきかざる處なり、同十三年の比より、金出ること始の如にはあらず、是より年々にすくなくなりて、或は又黄金をもまじへて出せり

一　石見國より黄金を出せること、其始め出ること多からず、慶長六七年の間より、出づる事多くな

れり、程なく此國の金を採る事をやめられき

一　伊豆國より黄金・白金を出す、古へは此國より出し事も聞えず、是も慶長十一年の比より出て、其數大かたは佐渡の國より出る事の如く、程なく出ること多からずして、採ことをやめらる

一　陸奥の南部より黄金出る事、是も慶長十三年の比、出し事殊に多して、程なく出でず

謹按に、佐渡・石見・伊豆・奥州の南部より、金銀を出せしこと古へ聞ず、當家代をしろしめされし始より出し事、本朝の古へよりつひに聞ざる處也、是より此かた酉の年の今に至る迄、我國の金銀萬國にすぐれ多くして、財用のゆたかなること、偏に我國のいにしへにためしなきのみにあらず、外國にも類なき事ども也、今の世の人かゝることをも知らずして、神祖の恩徳を萬代の後迄、至るべき御事をも知らず口惜き事なり、是又我國の天地の運、慶長五年より新たに始りし事をも知りぬ、されば聖子神孫に祖業を守らせ玉ひ、天下の貴き賤きおの〳〵神祖の御後は、天下とともに久しかるべきこと、うらなはずして知りぬべき御事なり

又按に、神祖かくれ玉ひし後にも、是かしこより金銀出し事、代々に聞しかど、其數多からず、纔に佐渡・薩摩等の地より出づることあるよしを申す

金銀の制の事

一　天武、白鳳十三年、用二銅錢一廢二銀錢一、是より先の代々には物を交易すること、米穀絹布を用ひ、

白鳳三年、我國の銀出しより、銀銭を用ひられしと見えたり、共十二年に及で、銅銭を用ひて、銀銭をやめられし也、但し此比の銅は、外國より來れる所なるべし

謹按に、是我朝にて銅銭を寳貨とせし始歟

一 元明、和銅元年、始て行二銀銭銅銭一」（世にいはゆる和同銭也）此時より我國の銅にて銭を出し、又銀銭を用ひられしなり

一 孝謙天皇、寳字四年、鑄二新銭一」此時銅銭を改鑄らる、（萬年通寳）又銀銭を改鑄らる、（太平元寳）銀銭一を以て銅銭十に當つ、又金銭を新に造らる、（開基勝寳）金銭一つを以て銀銭十に當つ

謹按に、本朝黄金を以て、寳貨として通用することの始歟

一 稱徳、（孝謙重祚の尊號）天平神護元年、更に銭を鑄る　神功開寳

一 桓武、延暦十五年、更鑄レ銭　隆平永寳

一 仁明、承和二年、同　承和昌寳

一 同、嘉祥元年、同　長年大寳

一 清和、貞觀二年、同　饒益神寳

一 同十二年、同　貞觀永寳

一 宇多、寛平二年、同　寛平大寳

一　醍醐、延喜七年、同　　　　　　　　　　　　延喜通寶

一　村上、天德二年、同　　　　　　　　　　　　乾元大寶

此已後本朝にて錢を鑄られしこといまだ聞かず、皆々異朝歷代の錢を用ひしと見えたり、かくて大明永樂の天子、太宗新代に及で、鹿苑公方義滿彼國の封爵を受けられしかば、其比異朝よりして永樂新錢を鑄られしかば、我國へも頒賜へり、是永錢、我國に始て來りし也　其後東山公方義政の世に、奢侈を好て國用甚乏しかりしかば、寬正五年・文明七年・同十二年三度迄、大明の天子に錢を賜るべきよしを望受申さる、中にも文明十五年には、十萬貫をだに賜りなば、我國の用足りなんとなげき申されき、其比にはヶ程迄に我國の財用は乏しかりし

謹按に、一說に永祿・天文の比より、我國にて永樂を通用せしといふ事有、是は永樂一貫文を以て、古錢四貫文に當て、永樂錢を法にて古錢を用ひしといふこと也

一　天正十六年、造₂黃金大判小判₁、織田殿は財を生ずる才略おはせしかば國富たり、秀吉又其才おはしたれば、天下を知玉ひしより、天下の財を聚斂して國用を足されき、天正十六年に新に大判・小判等を造られ、是世に天正十六年判といふもの也

但是より三年前、天正十三年の秋に、金賦とて大名・小名に金銀を玉ひしこと有、金五千枚銀三萬枚されば其比既に大判・丁銀にありし也、是より古に有しものにて、十六年の制とは同じきものにて、十六年の制と

は同じからざる歟、此年は秀吉薨じ玉ひし明年にて、關ヶ原の前之事也、おもふに秀吉の末年に、此事をたくみ出されてかくれ玉ひ、後に功成て世に行はれしなるべし

謹按に、已上は皆々當家より前代の事共なり

一 慶長六年の後に大判・小判・壹歩判・丁銀・豆板等の制改る、駿河判・江戸判などいふは、皆々造られしを以て稱す、此外に甲州判といふあり、是より後に永祿八年迄、年々に造り出せし處の金銀の總數、先は金七千兩・銀八十貫目程の積りと申歟 一本金七千萬兩・銀八千萬貫に作る

一 慶長十三年十二月、止二樂錢一用二京錢一、京錢といふは異朝代々の古錢の事也、是より永樂錢の法はやみしなり

一 寛永十三年六月、新鑄錢寛永通寳 江戸と近江國坂本と兩處にて鑄らる、是よりして本朝の銅錢ゆたかになりたり、猷廟の御恩德も又難レ有御事なり、是より後に寛文年中、又新錢を鑄らる、表に文の字をしるす 元祿年中金銀を改造せられ、其後又銀をふたゝび改め造られ、また大錢を鑄られし事どもは、人々しる所なればしるすに及ばず

謹按、已上の事どもを以先しるべし、國家の財用古へは艱難にて、今は賑富し事どもなり

本朝金銀外國へ入し總數之事

一 慶長五年より前、上古よりの事は暫論ぜず、室町殿の代より、信長・秀吉兩代に至る迄、西國・中

國の地より、外國へ入し金銀の數、いか程といふ事しるべからず是一

一　慶長六年の夏、交趾の船來り、其舟に乘しもの千二百人ありき是當家に及で海船の來れる始なり、是より正保四年迄、四十六年が間、我國の金銀外國へ入し事いか程といふことしれず是二

一　慶長六年の夏、外國の船を我國へ來り始て、寛永元年迄四十二年の間は、九州の內いづれの浦へも、心儘に船を寄て商賣したり、本國へも船つきて商賣せし事もあり、慶長五年に、上總大瀧浦に黑舟着しこと有長崎より外津津の商賣を禁ぜられし事は、寛永二年に始れり、されば廿四年が間、諸國の浦にて外國船商賣せし時、取引し金銀の數はしるべからず是三

一　慶長六年より寛永十一年迄、三十三年の間　御朱印船とて我國の商人共、今の吳服師共の先祖、又は富る商人共ゆるされて行しなり亞馬港・ノヒスパン・暹羅・安南・呂宋等の國々耳、年毎に行て商賣し此外にも私に行て商ふ事年々に絕えず、其時に我國の金銀を持行し事、其數いくらといふことを知らず是四

一　寛永の始めまでは、今來れる國々の外に、交趾・占城・安南・呂宋・ノヒスパン・イキス・レウク・イタリヤ・亞馬港など、いふ國々より年々に來りあきなひしたり、其後耶蘇の法をいたく禁ぜられしより、是等の國々來ることを許されず、是等の國々へ行し金銀の數も、又知るべからず是五

一　寛永の始、耶蘇の法をいたく禁ぜられしより前かた、三四十年が間、我國にて其法を信更せし者共、年々に其國々の師の元へ遣せし禮物の金銀、是等は商賣の外なりいくらといふことをしらず是六

一　近年に至て、長崎にて商賣の外、私の商賣に抜荷と云外國へ入し、金銀の數をしるべからず是七

一　慶長の始より今年に至て、對馬國より朝鮮へ入し金銀の數、いくらといふ事を詳にしるべからず是八

一　いにしへより今に至て、薩摩國より琉球へ入し金銀の數、いくらといふ事詳にしるべからず是九

右九ヶ條の事は、いづれも詳にすべからず、是等某が思なる、心付し所なり、此外にもあるべし此九ヶ條の外に、長崎一所より外國へ入し金銀・銅大數、先知れ候處、左の如し

一　金貳百卅九萬七千六百兩餘正保五年より寳永五年迄、凡六十一年の間、外國へ入し大數也

一　銀三十七萬四千二百九貫目餘　右同斷

一　銅壹億一萬一千四百四十九萬七百斤餘

寛文三年より寛永五年迄、凡三十六年の間、外國へ入し所也、但銅は慶長六年の比より寛文三年迄、六十年が間の事、分明ならずといふ

謹按、長崎一所より、外國へ入し處、六十一年の間の大數も右の如く、まして前に記せし處の數はかう知るべからず、九ヶ條の大數も思ひやるべし、今暫法を立て、長崎へ入し大數を以て、九ヶ條の大數を推量するに、慶長五年より正保五年迄、四十六年の間、外國へ入し大積、幷正保五年より此かたの總數なり

一　金六百十九萬二千八百兩餘

一　銀百十二萬二千六百八十七貫目餘慶長六年より正保四年迄、四十六ケ年が間、外國へ入し大積、幷正保五年より、此かたの總數なり

右金銀の事は、正保五年より寶永五年迄、長崎一所にて外國へ入し大數を二倍にして、兩口都合せし積也

一　銅貳億二萬二千八百九十九萬七千五百斤餘慶長六年より寬永五年迄、六十一年が間、外國へ入し大積也、幷寬永三年より此方の總數也、是は寬永三年より此方の數を二倍せし積也

右者慶長六年より寬永五年迄、百七年が間、我國の金・銀・銅、外國へ入し所の大數なり、此處の大數を以推す時は、外國に入し金は、只今我國にある所の金の數三分が一に當れり、我國只今の新金は、古金二萬二千兩を以て造り出せし處なりといふ、六百九十萬兩を三ッ合すれば大數、二千萬兩にちかし我國に有所の銀の數よりは二倍ほど多く外國へ入し也、我國の中古、銀の數萬貫目ならではなしといふ、然るに外國に入し數百二十貫目ちかくなれば、我國の銀は殊の外減ぜしなり

但し此數は餘程引入たる積り成べし、外國へ入し所の金・銀・銅の總數、是よりなほ夥しき事にや

異朝の寶貨、古今の事を按に、漢の代程黃金多かりしはあらずと申傳へたり、其後代々を經て次第に金銀少くなりし程に、宋の代の中比より、交鈔といふて我國の紙錢の如くなるものを用ひて、國用を通ずる事になりて、元朝に至りては、專ら此交鈔計を通し用ひ、明朝に及で銅錢を以て、此交鈔に雜へ用ひ今に至れり、是漢の代より後に、金銀共に世に出る事多からぬが故也、されば彼國代々の人の論ぜし所は、凡金銀の天地の間に生ずる事、是を人にたとふれば骨の如し、其餘の寶貨は皆々血肉皮毛の

如也、血肉皮毛は傷れきず付とも、又々生ずる物也、米穀・布帛を始め、もろ〱の器物然る也骨の如きは一度折損して抜出でぬれば、二度生ずるといふ事なし、金銀は天地の骨也、五行の内木・火・土・水は血肉皮毛、金は骨也是を採る後には、ふたゝび生の利なし、こゝを以て上古より漢の代に至る迄、採盡し後、中國の金銀二度生る理なしといへり、又漢の世にさばかり多かりし金銀の、後の世に及んでうせはてし事は、五朝・五代・遼・金・元の代々の亂に、夷狄之地にとり行、又海外諸國の商賣の爲に失たり、我國のむかしより寛永の比迄、六十餘州の中にて用ひし銅錢は、皆々異朝の錢也、日本一州に取來りし計も夥敷事也、まして萬國に取行しをはかるべし次に佛事興れるによれりと申傳へたり是は異國にても、世の常金銀の薄にても多く用ゆる事なし、又殿閣等の鑄とても、金銀をちりばむことはまれ也、佛像を造り、佛殿・佛閣を造るには、夥しく金銀を費す故なればなり

是論によりて我國の事を考るに、此國ひらけ始りしより後、千餘年が間は、金銀銅出る事もなく、是等の世にも世はゆたかに治り、其後是等の寶貨我國に出しが、其數は殊にすくなくありし事、又千年に及べり、我　神祖の起り玉ふに至て、天地も其物をたすけさせ玉ひしと見えて、我國の金銀銅の出し事、我國はさておき、萬國の中にかゝるためしを聞かず、然りといへども我國土の骨一度生ぬれば、二度生ずべからざる理也、此後千萬年を經るとても、神祖の御時の如く金・銀・銅の多く出る事あるべからず、漢の代より後の事を以て、推はかるべき也然るに夫より後百餘年が間、外國に流れ入し所の數、かの五代・遼・金・元の代々にとぼしき、中國の金銀を夷狄の地に取行し數にくらぶれば、猶多かるべし、かくて此後も今迄の中の如くに、毎年に十四五萬兩を失ひなば、十年にて百四五十萬兩をうしなふ、百年にして千四五百萬兩を失

ふべし、神祖より當代に及ばせ玉ひて、既に百年に及びぬれば、是より後又百年を過とも、四五世の御ほどには過べからず、されば聖子神孫萬々世の御後には、我國にて用ひあふべき金・銀・銅とぼしき事、異國の如くなるべし、我國の昔金銀なかりし事、千餘年がほど世もゆたかにをさまりしといへども、其代々は時代ことの外に上りて、人の心も俗にすなほなりしが故也、今より百年千年の後次第に、時代も下りて人の心も俗もうすくなりゆかんには、世はいかになるべき事にや、すべて異國のものゝ中、藥物は人の命を救ふべきものなれば、一日なくてもかなふべからす、是より外無用の衣服翫器の類のものに、我國の開け始りしよりこのかた、神祖の御代に始て多く出たりし、國の寶をうしなはん事、返々も惜むべき事也、我國萬代の後の世迄の事を思しめされ　神祖の御心を以て御心となさんには、今の時に及で甚其御心得有べき事、ありがたき御めぐみなるべし、さらばおのづから神祖の御後は、天地と共に長く久しくおはしまして、その世にも民ゆたかに國治りぬべき事、掌を見るが如くなるべし

太閤記金賦之事

豐臣秀吉譜ニ云、天正十七年五月、秀吉謂、我既握ニ扶桑六十餘州于掌內一、金玉滿レ堂復何求哉、不レ用則金玉與ニ瓦石一何異之有、不レ如分ニ授之一、而富ニ贍其人一、乃於ニ聚樂門內二町之間一、積ニ金銀拾臺一而倚ニ疊之一、見者眩レ目、聞者驚レ魄、秀吉御座在ニ門戶邊一、秀吉座在ニ其東一、六宮古佐丸與ニ秀吉一同レ座、菊亭右大臣晴季・勸修寺大納言晴豐・中山大納言親綱・烏丸大納言光宣・日野大納言輝資・廣橋中納言兼勝等來會、其餘雲客猶多、民部卿法印玄以・帥法印・淺野彈正少弼長政・前野但馬守長康・增田右衞門尉長盛・石田治部少輔三成監ニ金銀事一、而出ニ金臺若干于庭上一、每レ臺各載ニ百枚一、四人持ニ舁之一、玄以・長政等謂ニ金銀若干賜ニ于誰人一、則其人出而拜ニ禮之一、其品數者賜下黃金二千兩・銀一萬兩于六宮古佐丸・內大臣信雄・大權現、黃金三千兩・銀二萬兩、于秀長、黃金三千兩・銀一萬兩、于秀次・秀家、黃金千兩・銀一萬兩、于毛利輝元・上杉景勝、銀一萬兩、于前田利家上、又賜ニ金銀二十萬七千兩于中將二人・少將五人・侍從十三人一、其餘贈ニ金三千兩・銀一萬兩于大廳、金一萬兩、于北廳、五千兩、于駿河御前・備前姬君、金千兩、于丹波少將秀勝之母一、凡是度所ニ恩賜一之總計金銀三十六萬五千兩也

八物語ニ云、秀吉公御藏入領二百萬石餘有シカバ、金銀米錢聚リヌル事夥シキ事ナリ、カヤウニ逐年財

寶アツマリ來ルヲ施サヾレバ、慳貪クヅレトヤランニ逢由ナリ、左モアル事モヤト由巴法橋ニ問ヒ玉フニ仰イト宜ク侍ル旨申上シカバ、サラバ施シテンヨトテ、天正十三年初秋ノ頃、金子五千枚・銀子三萬枚、諸侯大夫等ニ施シ玉ヘリ、聚樂惣門ノ南ノ方ニシテ、臺ニスヱナラベ、御賦有シガ、朝ヨリ晩ニ至テ事盡ニケリ、又此後其沙汰ニ及ビ給ヘリ、京童見物シテ興サメツヽ言ヤウハ、活潑々地ナル事カナ、古今ニ傑出シ給ヘル君ナリトテ感ジアヘリキ

評曰、兩度ノ賦金、幷薨ジ玉ヒシ時ノ御遺物、何レモ子孫ノ爲ニシテ、民ノ爲ニアラズ、大臣小臣ニヨラズ、金銀セイニ持シ、人々ヲ猶富シ給フ事、實々虛々ノ患而已、寔ニ急ニハ周ネカラズシテ富ルヲ繼ナリ、金銀ヲ多ク分銅ニシ給ヒシ事モ、兵民ヲカラクセメ取玉ヒシニ因テ也、然レバ爲ニ、百分一モ施シ給ハンコソ、聊道ニモ近カルベキニ、何ゾ瓦礫ニ同ジモテ行ヒ、千枚分銅ノ數ヲ悅ビ珍シキ調度ヲ翫テ、身獨ヲ多ク樂ミ給ヒツル、或人問、民ノ爲ニハ何レノ事ガ宜シカラン、答曰、

一　宰相ノ職ヲ撰ミ、奉行所ヲ淸クシ給ベキ事

一　萬儉約ヲ守リ、下情ニ通ゼラルベキ事

一　國家ノ安否ヲ心ノ明カナル者ヲ以聞屆給ベシ、心盲ナル横目ヲ以テ聞玉ヘバ、却テ邪惡彌增ニ成行モノニ侍ル事

右ノアラマシヲ以、政ヲ物シ給ハヾ、民ノ父母タルベシ、又度々施ヲ諸侯大夫ヘ沙汰シ、或ハ大伽藍

等ヲ多ク營ミ、或ハ高麗ヲ劫カシ、上下ヲクルシメ、餘多ノ金銀ヲツカヒ捨テ給ハンヨリ、國々ノ橋代々ニ依テ成敗アリ、然ル間五間・十間、或ハ一間、或ハ五尺・三尺ノ橋ヲバ其國ノ守護人ヘ金銀ヲ與ヘ遣シ、右ノ橋ニ掛ケ可レ申旨被ニ仰付一候ハヾ、民ノ爲永代盡セヌ恩澤ニテ有ルベシ、シカハアレド其費ヲ厭ヒオボサレナバ、一年軍役ヲユルシ玉フテナリトモ、右ヲ以掛給ヒナバ、イツヲ限ノ德澤ニテ侍ルベキニ、心學クラキ故、心ニマカセ世ヲ自由シ侍ベリシニ依テ、秀頼公御代、ハカバカシキ事ナフテ滅亡シ給ヒキ、御遺物ニ名物ノ器、并刀・脇指・金銀等恩賜有シモ、秀頼公モシヤノ衰ヲ救ヒ侍ルヤウニ、アラマホシクオボシヨリテノ事ナンメリ、左モアルニ大阪寅卯ノ急難ニ、誰カ秀頼ヲ見續侍リシ、降レル世ノシルシ、上下ノ義理、オロソカニ成シ故ニモ侍ランカ、サレドモ大旨ハ秀吉公、亡君信長公御運拔ニ對シ、義理ヲ違ヘ侍リテ、又秀頼ニハ諸臣義理ヲ存シ忠ヲ奉レトヤ、カクアラマホシク思サレナバ、信長公ノ厚恩ヲ御子達ニ對シ、何ゾ報謝シ給ハザル、カヤウノ事ニハ闇クシテ、秀長・秀次・秀俊ナドヲバ甚シク取立玉ヒシガ、何レカ獨御用ニ立給ヒツル、噫サレバ異朝ニモ符節ヲ合ス事コソアレ、呂后ノ呂氏ヲ取立テ呂祿・呂産ヲ大官ニ擧、高祖ノ子孫ヲ蔑ニシ、王莽ガ王邑・王尋ヲ官爵ニスヽメ、高祖ノ苗裔ヲ亡セシモ、卒ニ其身ノ讐トナリ、氏族門葉皆絶ス、呂后劉氏ヲ取立、王莽君孫ヲ守立ナバ、我家門ノ繁榮モ永ク傳リナンモノヲト、今コソ思ヒ合サレケレ、凡テ理ニ背キ富ナラントシ、榮エントスレバ、必亡ビ果ルモノナリ、齋藤山城守道三・松永彈正少弼久秀等モ、右ノ惡德ニ

彷彿セリ、故ニ跡カタナフ亡ビニケリ、和漢合符之妙理、心アラン人々ハ默識シ侍ンカシ、威勢富有兼至キ人達ノ心マカセニ、一旦オゴリツヽ恣マヽニ榮華ヲノミシテ、天意ヲ憚カラザレバ、必シモ天トガメ給フ也

此太閤記ハ、小瀨甫庵道喜ノ輯錄也、寛永二ノ春行ニ于世ニ、下卷八物語ノ序ニ、元和二仲春トアリ、太閤薨後年數不レ久シテ記セル書故、實錄ト見エタリ、惜哉所々闕テ文面不レ解所アリ、本ノ儘記レ之

三貨圖彙附錄卷之八

天壽隨筆

久かたの天地ひらけ始り、人民あつてよりこのかた、四夷八蠻の洲の唐を中國と稱し入貢し、或は封爵を請て臣の如し、唯我國に於ては日の出る處なればとて、日の本と稱す、彼の中國をさして日の沒する處といへり、今泰平の幸民財貨乏しからず、御聖徳宇宙に及て、戎狄蠻夷も其豐饒なるを羨み、交易を求めて清洲の津に來りしかど、邪宗外道の道を傳へ來り、國人を迷すの憂ひ有るが故に、是を禁ぜられ、肥の前州長崎の一所を唐・紅毛通津の地と定め給ひぬ、唐・紅毛は諸邊を通商するものなれば、所々の産を集てこゝに來り、亦今の大清は古の中國なれば、奇珍古器までも持來りて交易をなす、おもふにむかし漢の代には、黄金を千萬斤寵臣に賜ふ事有しかど、後には乏くなりけり、（宋杜鎬曰、兩漢時佛事未レ興故、金價甚賤）我國治平數百年、風不レ鳴レ枝、上下和睦財貨豐にして、萬歲を唱、博識の才子出て、溫故知新、文化唐國に醜ることなく、正徳の頃、新井白石朝恩に深く沐して、御政事の一端を補闕せんと志を勵して、朝鮮の使翰往來の式を論じ、華夷通商の損益を明す、寶貨事略を著し、正保年中より寶永に至る迄、外國に先じ金銀銅の大數をあげ、掌を握て嗟歎す、享保の頃

國朝御仁惠普く廣く、往昔より我國にあらぬ藥草樹穀を、其名產の地より求め、倍々國民普救の施し有、（侍醫某著二普救類方一）亦見も及ばぬ鳥獸など、國中にやしなはしめ（享保十三申年、大象來る、其後生たる珎珇など品々不ㇾ可二枚擧一）功藝能才有もの渡り來れば、其道を尋問はしめ玉ひし故に、闕疑發憤して、不ㇾ待ㇾ諭さとれる事多し、水國は河を作て患をとゞめ、潮水を掟て水田を開かしめ、（關東甲信北越の新田）今已に社倉三年の民糧を貯へ、萬物乏しからず、雖ㇾ有御惠ども也（貯糧の事）

一　金銀の出る處、佐渡の國には、今に絕せず、陸奧・石見・但馬・攝津などの國々よりも出て、興衰は有といへ共、更に絕る事なし、銅とても北國・西國・四國・九州の內より出る處、擧てかぞふべからず、白石が所ㇾ謂世移り時過て、其骨を疾んこと、悲しむもむべ成かな、いま長崎一港の通商なれども、寶永以來を絕て、玆にあらはし見るに、大略左の如し

寶永六丑年ゟ明和元申年迄

阿蘭陀船數百廿四隻紅毛也（寶永五年より申年迄、五百艘）

唐船千三百七十六隻則大清商客也（慶長元子年より明和元申年迄、千四百五十艘）

一　金卅四萬四千八百五十一兩、紅毛へ渡（寶永六年より明和元年迄）慶安元子年より寶永五子年迄、六十一年の間、一年に積りて長崎一口より渡す處、三萬九千九百兩餘に當る、寶永六丑年ゟ寶曆十二年迄、五十四年の間、一年に積り六千三百八十八兩に當る、但し此內享保元年の頃より、一年三千兩に過ず、又延享の

頃より八千兩づゝ也、明和元申年は、此千兩を銅七萬斤に代て、金を渡さず、酉の年は銅錢五十貫文に代

一　銀千拾五貫八百七十一匁、唐へ渡、前同斷

慶安元子年より寶永五子年迄、六十一年の間、一年六千百三十五貫九百目、寶永六丑年より寶暦十三年未年迄、五十六年の間、一年二十三貫目餘に當る、明和五年よりは參蛇銀をば總てわたさず

一　銅壹萬七千三百四十三萬三千九十斤餘

五千八百六十五萬六千八十斤餘　　紅毛へ渡

壹萬千四百七十七萬七百斤餘　　唐方へ渡

慶安元子年より寶永五子年迄、一ヶ年百七拾六萬七千八百六十斤餘、寶永六丑年より明和元申年迄、五十六年の間、二百七十九萬七千斤餘に當る、銅は少し多

金銀の數は今古に比せば、甚少しといへども、持行事絶ずんば再生がたきの財、星霜重りては盡る道理やみがたし、有司議論して、黄金を銅に代て渡し、銀を參蛇にかへて是を省く、生理猶考べし、海内にて價の尊き品なりとも、金銀に代とならむ、其様國の益成べし、いにしへ銅錢を唐土より渡せし例あれど、金銀のことをいまだ聞ざるに、未のとし大清の商客國用鑄錢有よし、銅を求んことを願ひて、唐國の金銀を持渡れり

唐元糸銀六千貫目 一年三貫目づゝ、銅七十萬斤に定、三分は三蛇を渡す

自二癸未年一起、壬寅年止

日本通用銀にして

壹萬貳千二百四十三貫四百目餘と成る

一とゝせ三百貫の定足紋銀・足赤金・九程金・八程金を交て兩數に合て持渡る、亦明和酉のとし西洋の

花邊銀錢を渡し來る

花邊銀錢三十五貫三百目餘

日本通用銀にして

六十九貫八百目と成

其外金銀箔をも持來れり、海中の所産に代渡せり

一　慶長以來國中たえず出る所の金銀造らせ、通用せしむるが中にも、時世に隨て程色を改らる

慶長金銀を造られし事は、寶貨事畧に載る故略レ之

一　元祿八年乙亥年　小判一分二朱判を造る　元字金

一　寶永七庚寅年　小判一分を造らる　乾字金

一　正德四甲午年　又更に造らる　新金 今古金といふ

一　元文元丙辰年　　又更に造らる　　文字金

銀の程色も、其折々更造らる事有り、銅錢は品々程色改りたりとも、寛永年の文字を今に用ひらる、先にいふごとく唐・紅毛へ持行し事はあれど、來ることなきゆゑ、唐商に大清人を通じて、今唐人といふ語ひて館内に持居たる金を出さしむ、館内とは唐人屋敷也、古は長崎市中町宿に有しが、元祿年中より長崎村十善寺郷地へ、唐館を建て是に居らしむ、又紅毛を出島といふ所に置て、いづれもみだりに市中民家に出ることをゆるさず、密賣の事を禁ず

寶暦五亥年より明和二申年迄に、折々船主どもあつめ出す處、左のごとし

一　黄金　壹枚
一　元字金　貳十四兩
一　乾　金　七兩
一　正德今古金　貳千六百九十三兩餘
一　文字金　三千四百九十三兩餘

員數合六千貳百十七兩

斯旅館にさへ持貯たれば、唐土に入し内にも、未吹改ざるあらんかと求るに、彼國有福成もの貯持たるよしにて、酉どし持來る

一　慶長の古金　三兩駿河判
一　元字金　八兩

一　乾　金　　　　　　　　　　四兩二歩
一　正德の古金　　　　　　　　百四十三兩二歩
一　文　金　　　　　　　　　　千九百八十九兩三歩

員數合二千百四十八兩一歩

古より年々に取行し所に比せば、其僅なれども、右の如く今我國通用なき品さへ、彼地にとゞまりあれば、萬一ほどづゝも持來らんは、天地の壽を養ん一助なるべし、國中に金銀山を穿ち初めたるより其益甚し、猶其心もて生理はかりごとをなさしむべし

右者佐久間氏書繼之由也

夫崎陽は華夷の交ひ、互市の要會なるをもて、海外諸州の商船日々月々輻湊して、居民生年に乏しからず、其富五都に並ぶべき、是もまた國家仁德の光被する所にして、抑も猶餘りあり、然はあれども彼海外諸州の舶に載せ來る所のものを見るに、書籍藥種の外は衣服翫器の類にして、此國に於ても求め得べき品なり、夫が爲に吾邦有用の財貨を費さんことを恐れ、正德中新井氏出で、寶貨事略を著して後世の龜鑑となせり、繼で佐久間士寶曆中役を崎地に抵し公務の暇に天壽隨筆を著述して、寶永六丑年より明和元申年迄、五十六年の間に公より異邦へ渡されし金銀銅の總數、或は彼方より貢せし處の金銀錢の員數を記し後世に傳ふ、其功新井氏に讓るべからず、予いにしへ天明二寅の秋より崎陽に

在役して、華夷通商の大略を見聞せり、是によりて寶貨事略・天壽隨筆に繼て、明和二酉年以來、異邦へ渡されし所の金銀銅の大較を書して、密かに同志に傳ふ、後の人足らざる所を補著し、連綿して廢絶なからしめば、吾邦の寶貨異國へ失費する所の凡數を至からん、爰にまづ明和二酉年より天明三卯年迄、十九ヶ年の間、唐商へ渡されし所の銅の員數大略を計較するに

一　銅二千八百九十七萬三千四百五十四斤餘

但し此內二千三百七十三萬四千三百六斤は、一ヶ年に唐船十三艘と定め一艘へ渡す所、銅十萬斤と極て、十九ヶ年の間各船へ渡せし所の總數也、又十八萬九千百四十斤は、公の命によつて此方へ持渡りし物の代として賜る所なり、又五百五萬斤餘は彼方より貢せし金銀錢の代りとして賜ひし處也、此三條の總凡合せて、上件のごとし、此外に一万九千三百卅五斤は、明和二酉年より天明三卯年迄の間、各船へ銅器にて渡せし銅の斤數、已上は皆唐商へ渡せし處也、又

一　銅千六百三十九萬五千斤餘

是は明和二酉どしより天明三卯どし迄、十九ヶ年の內、十八年（天明二酉どし紅毛船來朝せず）紅毛へ渡せし處の銅總數也

但寶曆十三未年以前は、一ヶ年の定額百十萬斤也、近世已來、諸國の出銅乏しきが故なり、明和元申

年より一ヶ年に八十萬斤を賜るべきよしの　上諭ありき、其後四ヶ年を經て、明和五子年より十萬斤を足され、一ヶ年に九十萬斤を給はるべき由、再び　上諭有て今に至て定額となる、但此外に金子千兩の代りとして、銅七萬斤を渡す事は、明和元申年よりはじめて今に絶えず、また

十七萬四千七百八十五斤

是者明和二酉どしより天明三卯年迄、十八ヶ年、紅毛へ渡せし銅器の斤數なり、此外に

銅錢五萬四千七百四十貫二百文餘

是は明和二酉年より天明三卯年迄、十八ヶ年の間、諸品の代として紅毛へ渡せし和錢の總高也、上件記する所の唐商幷紅毛へ渡されし處の銅數の總數を、計較するに

一　銅四萬五百三十六万八千四百五十四斤餘

一　同拾九万四千七百二十斤

一　銅錢五萬四千七百四十貫二百文餘

是は明和二酉年より天明三卯年迄、十九ヶ年の間、紅毛へ渡せし處の、和錢の總數也

銅數合四千五百五十六萬三千百七十四斤餘

右明和二酉年より天明三卯年迄、十九ヶ年の間、紅毛へ渡せし處の銅の總數也

一　金二百三十九萬七千六百兩餘

一　銀三十七萬四千二百九十貫目餘
一　銅一億一萬千四百四十九萬八千七百斤餘
右寶貨事略に載る處の、正保五子年より寶永五子年迄、六十一ヶ年の間、長崎一港より異國へ持行し員數也
一　金三十四萬四千八百五十一兩
一　銀千拾五貫八百七十一貫目
一　銅壹萬七千三百四十三萬九十斤餘
右は天壽隨筆に載る所の、寶永丑どしより明和元申年迄、五十六年の間、長崎一所より異邦へ渡せし處の總數なり。各惣合て計較するに
一　金貳百七十四萬二千四百五十一兩
一　銀三十七萬五千三百五貫目餘
一　銅一億三萬三千三百四十九萬四千九百六十斤餘
一　銅錢五萬四千七百四十貫二百文餘
是は正保五子年より天明三卯年迄、百卅五年の間、唐・紅毛へ長崎一港より渡せし處の總數なり、其餘國國より外國へ失費す處の凡數は、寶貨事略に載る故爰に略す

謹而按るに、慶長五年已來天明三年迄、百八十三年の間、吾　邦の金銀銅、異國へ持去し惣數幾億萬といふ事、詳にはかり知るべからず、斯年々に持去りて、千萬年の後はおのづから此國の金銀乏しく成行む理なる事、先輩の論ぜし處のごとし、近世已來昇平ます〱つゞき、恩澤四異に盈し、寶暦十三年已來唐商の來る毎に、異國の金銀錢を貢來りて、國恩の萬ヶ一を酬ゆるに似たり、ついで紅毛の商船、唐商に傚ひ彼方の金銀錢を貢する事とはなりぬ、是をもつて年毎に持去る處に比するに、其數足らずといへども、年々貢し來りて廢絶なからしめば、實に國用の一助とも成べし、亦天壽隨筆に繼で爰に

一　眞鍮錢　明和五年造出さる、古錢四文を以一文に換、寛永通寶の文字を表にし、青海波を裏に摸す

一　南鐐銀　明和九年造出さる、貳朱銀と唱へ、八片を以小判一兩に換

將爰に寶暦十三未どしよりより天明二寅年迄、二十ヶ年の內十八ヶ年、唐商の貢せし金銀錢の大數を計較する

一　唐銀五千四百貫目餘　元極元糸銀也

此文字銀凡一萬九百九十二貫九十三匁餘

此內

元糸銀九百九十貫九百十八匁七分餘

元寶足紋銀百四十七貫九百七十九匁

是は元糸銀百五十九貫百十七匁二分餘の代りとして持渡る、但天寶足紋銀八十三匁に付、元糸銀百目に當る

中形三千三百二貫五百四十七匁餘

是は元糸銀三千五百五十一貫十八匁餘の代として持渡る、但中形足紋銀九十三匁に付、元糸銀百目に當る

足赤金三十貫六十三匁餘

是は元糸銀四百八十一貫十四匁の代りとして持渡る、但足赤金一匁に付元糸銀十六匁に當る

八程金拾五貫六百八十七匁

是は元糸銀二百三貫九百卅一匁の代りとして持渡る、但八呈金一匁に付、元糸銀十三匁に當る

九程金一貫目

是は元糸銀十四貫目の代りとして持渡る、但し九呈金一匁に付元糸銀十四匁に當る

以上の惣數を合て、上に記する如し、又明和二酉年より天明二寅年迄、十八ヶ年の内十六ヶ年、持渡りし所の銀錢左の如し

花邊銀錢千五百貫目

花邊銀錢千百九十五貫八十六匁

此文字銀千六百卅七貫百四匁一分程

但此花邊銀壹一貫目に付文字銀

唐阿蘭陀金銀錢圖鑑　但し圖鑑は爰に略す粗左に年號或は掛目を記す

足赤金一つ掛目凡百目　九星金一つ掛目凡百目

八呈金一つ掛目凡百目　元寶足紋銀一つ掛目凡五百目

中形足紋銀一つ掛目凡百目　元糸銀一つ掛目凡十匁

右者寶暦十三未年唐商始て持來

花邊銀錢一つ、掛目凡七匁二分人頭錢

右は明和二酉どし

始て持來　右安永六酉どし始て持來

銀錢テカトン五種程ハロフテカトン一種　掛目一つ四匁三分より八匁迄

同　ロヘイ四程　掛目一つ三匁六分程

右明和二酉年紅毛商船始て帶來

安南板金

安南棹銀　各一つ掛目凡百目

安南次棹銀

右明和三戌年唐商始て帶來

西藏金二種　大形二百卅七匁程　小形九十七匁程

右明和四亥年唐商始て持來

傳云、天子の夷狄における、其義覊縻して絶る事なしと、粗花夷通商の大略を見聞するに、遠く慮り深く計る時は商利のみに拘らず、先哲の論ぜしごとく、國々の骨たる金銀銅を望み、草根木皮或は奇工・絹布・瓷器・鳥獸をもつて交易をなす、是を制せんとせば、市を禁じて異國の賈船を招集することを廢するより他に術なかるべければ、暫く此議論は捨て、近世彼國々よりも金銀を貢して、銅或は海產の種と交易するを察するに、今時來朝する處の商客等、あながち國益を重んじ論る輩にあらず、唯眼のあたり商價の利益を貪るのみならんか、今奧州南部・羽州秋田・永松・豫州の別子・立川等より穿ち出す處の銅、專ら異國へ渡さる、その餘國々より出る銅は、其數至て乏しく、國用とするにも足らざる程也、前に擧る銅の員數年々に渡しなば、星霜久しからずして、國々の出銅衰滅せんとす、速かに商法を換んとするとも、異客等容易に許諾すべからず、且盛衰は有べき事なれば、國の勞れを異國へ知らするに似たり、然らば今の時に當て、力を盡し心を用て、吾邦よりも海產の品或は木皮草根瓷器絹布の類を以て交易し、銅を渫す事を日々減ずべきこと也、彼紅毛の輩、萬里の波濤を凌ぎ、性命を輕んじて此土に來る事、皆淮力の利を求んがため也、彼等が載來るもの、近世大抵宝價有之、譬ば其品の稀成を持て來り、又は

公命によつて積來るものといへ共、定りたる價の猥りに加ふることを得ざるが故に、其利の足らざるを愁ひ、奸をなす賈客もまゝ是あるなり、謹而按ずるに花夷の輩來去久しく、理にくはし

三貨圖彙附錄卷之九

庶有編

源定信撰

書經洪範ノ三ノ八政ニ曰、「食貨祀」、易ノ大傳ニ曰、「何以守レ位、曰仁、何以聚レ人、曰財、理レ財正レ辭、禁ニ民爲レ非曰義」、其他六經傳記ニ、食貨ヲ以テ政事ノ本ト說シ事擧テ數ヘ難シ、夫人主タル人、食貨ノ二ツヲ喪フ時ハ、聚人テ國用ヲ爲スコトアタハズ、故ニ富貴ノ二ツヲ兼テ國ヲ治御ヲセザレバ、其國家ヲ保コトナリタマハス、孝經ニ「富貴不レ離ニ其身一、然後能保ニ社稷一、而和ニ其人民一」、トアル是ナリ、爰ニオイテ朝廷ノ財用ニ匱シカラザルヤウニ事ヲ執ル、是人臣ノ務ナリ、上、財ニ乏シケレバ權柄ヲ失ヒテ敎導ヲナスコト財アル人ニ遷ル、是ヨリ敗亂ノ端ヲナスコト、古今其例スクナカラズ、此故ニ在上ノ富有ヲ謀ル事、人臣ノ專務トスベキ事ナリ、然レドモ上タル人利ヲ欲シテ下ト聚斂ヲ爭フトキハマタ甚ナル害トナル、禮記ニ所謂聚斂臣アランヨリハ、盜臣アレトイヘル是ナリ、又云、國家ニ長トシテ、財用ヲ務ルモノハ、小人ヨリストモ、小人ヲシテ國家ヲ治メシムレバ、災害幷ヒイ

タル、賢者アリトイヘドモ、イカントモスルコトアタハズトイヘリ、是財ハ天下家國ノ至寳ニテ、民ヲ斟酌スルノ柄、是ニ有リトイヘドモ、其聚ムヘキ道ヲ以テセザレバ、民其利ヲ利トスルコトヲエズシテ、畔逆ノ意ヿレヨリ生ズ、孔子ノ利ニ放テ行ヘバ怨多シトアル是ナリ、夫レ天地ノ貴キハ、生々化々ノ妙ナリ、人民ヨリ動植ノ類、昆蟲ニイタルマデ、皆其中ニ生ズ、然シテ形ハ物トナリ、利ヲ爲スコト、ミナ下地ヨリ出タス、天ハ陽ノ升降ヲナシテ、地ニ配感シテ凝テ形ス、故ニ萬物ノ利ハ下ヨリ生ゼザレバ出ル所ナシ、譬ヘバ一粒ノ種萬鍾ノ粟モ、府庫ニ入レオキテハ終ニ殖セズ、必地ニ委ネザレバ倍生ノ理ナシ、是ヲ以テ古者ノ聖人ハ皆利ヲ下ニ布ク、是貨殖ノ要本ナリ、然レドモ此利ヲ下ニ布ニモ、又道アリテ布様ノ道ニ違アル時ハ、貧リテ富貴者ハ日々ニ富テ、貧窶ニ至ル者ハ日々ニ飢寒ニ適ルヤウニナリテ、壞亂マタ是ヨリ生ズ、孔子ノ不足ヲ患ルコトナカレ、齊シカラザルヲ患ヘヨトノタマヒシ是ナリ、往古ヨリ世太平ニ至リテ二三世マデ、人々危キヲ忘レズ、故ニ人儉約ヲ重ンジテ浮華ノ事ヲ爲サズ、各質素ヲ尊ンデ財用ノ費ナシ、夫ヨリ程スギヌレハ、後ニハ不虞ノ備ヲワスレ、富有ノ人ハ奢侈ニ競ヒ驕リ、華美ヲ好ミ榮耀ニ耽リテ、亂世ノ懼レヲ知ラザルガ故ニ、種々ノ活計ニ財寳ヲ費シ、終ニ貧キニ至ル、是ニヨリテムカシ富貴トイハル丶人モ、正直ニテアリシ人モ、思ハザル諂諛ヲモスルヤウニ成リテ、是ヨリ上下ノ辨別モ、道義ノ敎訓モ頽ル丶ニイタル、是道ヲ思フ人ノ歎嗟スル所ナリ、今ノムカシニ富有ニテ有シ人ノ貧シクナリタル人ト、敎ヲ以テ身ヲ立シ、二品ノ人ノ中ニ、

富家ノ一向ニワカテモナク、酒色等ニオボレテ家ヲ喪ヒ、產ヲ破リシ族ハ論ニ及バズ、大低漸々ニ財ヲ失ヒシ類ノ人ハ、大略餘多ノ人ヲモ養ヒ、農商ノ論ニテハ別家トイヘルモノモアル屬アリ、又敎ヲ以テ身ヲ立ルノ人ハ、嘗テハ弟子モ尊師ト仰ギ、膝ヲ屈シテ物學ビセシモ、今ハ來リ學ブノ人尠クテ、束脩ノ客モ寡キ故ニ、師ノ方ヨリ學ブ弟子ヲ請フヤウニ成リテ、此等ノ事ニテハナキモノヲトオモフ類アリ、此ノ二品ノ人ハ假ヘ身ハ溝壑ニ仆ルトモ、時ニ媚ビ勢ニ諂ルマジトハオモヘドモ、父母妻子ノ給養ニツケテハ、是非ナク志ヲ奪レ、顏ニ泚シ心外ノ辱ヲ堪ヘテ事ヲ爲スノ類、根本ノ建ハカハレドモ、此二品ノ人ハ、大凡末下ヨリハ貴ブヘキ義理アル人ノ衰ヘタルモノナリ、此故ニ是等ノ人ハ常ニ憤ル所モアリ、忍所モアリ、世間ノ盛衰、上下親疏ノ順逆、浮沈アルコトヲモ歎息シ、同情同愁ノ人ハ、相互ニ中モ睦シク、他人下々ニモ憐マルヽ者、之又貧富ヲ爲スノ倫ハ是等ノ衰ヘタルヲ見ルニツケテモ、何ニモセヨ金銀サヘ多ク持スレバ、貴者モ烈士モ畏ルニ足ラズ、義理モ爵位モ唯金銀ニシカズト、ヒタスラニ富ヲ欲シテ、前後ニ廉耻ヲ思ハズ、親戚故舊モ富者ニトヾマルト、立テ世ノ憐モ人ノ譏モイトハズ、是ヲ專務トスルヲ以テ衣食ノ用ヲ忍ビ、利ヲ求ムルヲ晝夜ニ工夫スル故ニ、オノヅカラ利ニ諭クナリテ富ムナリ、是ヲ羨ノ賤夫下ニ出テ風俗自然ニ推移リ、外聞順義モ無用トナシ、誰ノ家ハ斯々ノ賤シキ人ニテ、何々ノ隱惡是々ノ掠妄ニシテ、無慈悲無懺ノコトヲ爲セシ人ナレドモ、今ハ豪富トナレル故ニ、高貴ノ人モ腰ヲ折手ヲ束ネテ崇ブナレバ、金銀ホド貴キモノナシ、マ

シテヤ今吾儕ガゴトキ極窮ノ者ハ、衒賣贋僞ノ業ヲナストモ耻ベキ事ナラズ、誰々ハ誰ノ別家、某弟姪ナレドモ、舊主ヲモ伯叔父兄長ヲモ、今ハ奴隷ノヤウニスレドモ、同前コレヲ咎ムル人モナケレバ、義理モ法モ律義タテスルハ却テ痴ナリト、是ヲ本意トスルガ故ニ、爲ベシト思フコトニ耻ナク、爲ズトイフコトナシ、其徒皆欺誑ヲ以テ、工夫ノ要トナスニヨリ、漸々ニ超過シテ竊盜ノ類ヲナスニ至ル事ナリ、大抵下民ハ禁令ノ外ニ敎トイフコトヲ聞ズ、農商トモニ富家ニ因テ生活ヲスル類ノ者ハ、子弟マデモ其出入スル富家ヲ懼レテ、其手マヘニテ爲シタキト思フコトヲモ遠慮シテ、惡事ヲセヌガ多キモノナリ、此故ニ其出入スル所ノ富家ノ風ガアシク貪欲ニテ、不法ノ事ヲナセバ、夫ニ效ヒテアシキ業ヲスルコト多シ、其辨ノアル出入ノモノ、又ハ下部ノ者等ハ、面ニイタサネドモ、親戚舊知ノ辨別ヲ失ヒ、風俗次第ニ薄ク成リ、下賤ノ者惡業ヲ爲コトヲ屑トモ思ハヌヤウニ成行、必竟ヲ尋ヌレバ、其本原ノ貧富家ガ、金銀サヘアレバ、諸侯ノ出入モ目見エモ拜領物モ世間ノ用ヒモ、是ヨリ成事ニテ、道義モ親族モ皆是ニトドマルトイフ本意ヨリ建立シタルモノナル故ニ、其家ニ因メル者ハ、其風儀ヲ意ニ狹ムニヨリテノ事ナリ、ムカシ國初ノ時ヨリ富メル家ハ、亂ヨリ治ニ入リ、危キヲ經テ泰平ヲ得タル冥加ヲ思フ故ニ、信義ヲ尙ブ風アリ、此故自然ニ廉耻ヲ知ル、後ノ貧夫ハ信ヲ知リ耻ヲ思ヘバ、義理合外聞ニ失墜アリ、是ヲ闕テツトメヌヲ第一ト心掛テ、一槪ニ慳貪ヲ本基トシテ、哀憐アリテハ金銀ハ貯ラレヌト究メテ、子孫ノ禍トナルモ思ハズ、鬼神ノ畏ベキヲモイトハズ、俗ニイフ金

デツラヲハルトイフヲ建ニシテ、無慈悲ヨリ了簡ヲ究テ、富得ノ趣向ヲ爲ス者甚夥シ、コレヨリ下タルモノハ、人ヲ殺シテ寶ヲ奪ヒ、放火シテ人家ヲ燒ノ類、其根ザシヲ尋ヌレバ、皆廉耻ヲ關テ仁愛ヲ思ハズ、有財ヲナス者ニ作ル、其證據トイヘバ、近世ニテ家ト呼ルヽ者ニ、家督遺物ノ多少ニヨリテ、公訴ヲ歷ザルハスクナシ、其事無キ家ニモ、親族和睦セルハ甚希ナリ、是人倫ノ薄ク、貪鄙ノ心厚ニヨレリ、此風次第ニ蔓衍シテ、後ニハ上ヘ移ルヤウニナル故ニ、貨財ノ用共本用ヲ喪ヒ、怨讐ヲ買ノ器トナルコトヲ知ラズ、其家産ノ破ルヽニ臨ンデ、人是ヲ哀傷スルナク、親舊ニ厭棄セラルヽヤウニ成リ果ルコトナレドモ、貨財ノ用貨財ノ德ヲ失ヒ、風俗ニナルコトハ思ハザルガゴトシ

凡物ハ多ケレバ諸方ヘ配リモヨク、通用ニ宜シキコト定リタルコトナリ、然ルニ天文ノ初年ニ、金銀吹カヘアリテ、新金銀ハ古金銀ヨリハ六割半多クナリタリ、金銀多ナレバ錢ハスクナキニアタル道理ニテ、錢高直ニ成リタルニヨリテ、大阪高津。江戶足尾。小梅、其外諸國ニモ鑄錢所御免アリテ、諸方ニテ吹立シ故、銅ノ費多ク紅毛渡指支ニヨリ、此時銅座ヲ仰付ラレタリ、シカル所ニ鑄錢諸カニ出來タルニヨリ、金銀ト適合ヨク、新古ノ錢ハ古金銀錢ノ通用ニ均シク、銅座モ引取セラレテ、銅貴買モ前々ノゴトク成リタリ、其後寶曆中ニ至リテ、又錢多ク御用アルベキ風聞出テ、關東スヂニテハ金一兩ニ錢三貫五六百文ヨリ、三貫一二百文ニナリタルコトアリ、是ニヨリテ又鑄錢ノ思召アリテ、此度ハ亦銅ノ不足センコトヲ計リタマフニヤ、前方ニ銅座ヲ立サセラレ、錢モ鑄錢モ仰付ラレ、次第ニ

錢モ多クナリ、今ニテハ金一兩ニ錢六貫文餘トナレリ、四文錢モ出來二朱銀等モ出タレバ、元文已前ニ比スレバ、元ノ金銀六割半多クナリタル上ニ、又錢ト銀ト夥シク吹立シ故、金銀錢ノ三幣世ニ多クナリタルコトハ、目前ニ知ラレタルコトナリ、然ルニ近年ニイタリ享保年中ヨリハ金銀ノ通用自由ナラズ、下々マデモ錢ノマハリアシキトイフニ至ル、是ニヨリテミレバ物多クナリテ、寡キ時ヨリ配リタラザルトイフベキモノナランカ、シカルニハアラズ、物多ケレバ配當モ多キハ必然ノ理ナリ、金銀ニ限リテ足ラザル道理ハナキ筈ナリ、是ニヨリテ熟々其本原ヲ考フルニ、夫金・銀・錢ノ三幣ハ、其體堅剛ニシテ朽ズ、美ニシテ貴シ、是ヲ以テ華夷トモニ是ヲ人ノ信ニ比シテ、彼ト是トヲ変易スル中間ノ運用、此幣ノ信形ノ器ヲモッテ、所望ノ求メニ適トイフノ象ニ造リタル物ニテ、約テイフ時ハ信ノ象器ナリ、故ニ互ニ信ヲ立テコトヲ行フ中ニハ、金銀ノコトハ賤シンジテイハズ、君臣・父子・夫婦・兄弟ノ中ニテハ、信ヲ重ズルガ故ニ、金銀ヲ以テ親ミトセズ、朋友ノ中ニテモ、信友ニハ財ヲ以テ交ルヲ貴キ交リトハセザルナリ、親和アル中ニハ、金銀ヲ用ヒザレドモ、諸物ノ通更ハナルモノニテ、萬事滯リハナキナリ、故ニ孔子ノ和スレバ寡コトナシト示シタマヘルナリ、是ヲ以考ルニ、大抵享保ノ季元文年中マデハ、居催促スベカラズトノ御觸アリシコトアリ、近年ニ至リテハ、居催促トイフコトヲ聞ズ、予幼年ノ頃ニハ、居催促ニ雇レ行コトヲ業ニシテ、渡世スル者田舍ニハ多クアリシナリ、其頃ニハ此居催促ヲ雇テ債ヲ責ル、貸者ヲバ人ガラノ能カラヌコトヲ爲トイヒテ、傍ヨリ賤ミシコトニテ有シナ

リ、今是ヲ案ジミルニ、今時トハ人モ厚情ナリシ故ナリ、其頃マデハ人ノ交際ニ信約ヲ重ズル風アリシ故、契券ニテ貸借ヲシテ、其貸借ノ返濟滯リタル故ニ、彼ノ居催促ヲ遣リテ其債ヲ責リシナリ、此頃マデハ契券ノ信約印記ノ證モタシカニシテ、無典當ニ貸借ノナリタル故ナリ、近年ニ至リテ彼居催促ノ無クナリシ譯ハ、引當ナシニ金銀借貸セラレヌ樣ニ、印記ガ證據ニナラヌ、是ニヨリテ皆握タルヤウナル典當ヲトリテ、借貸ヲスルガ故ニ、其約束ノ返辨限日ヲ過ヌレバ、居催促ニ及バズ、彼ノ引當物ヲ以テ債ニトリテ濟ガ故ニ、居催促人ハ用ヌモノニナリシナリ、是契券ノ信用ナク成リシ故ナリ、予幼年ノ頃ニハ商家固ヨリ農工ノ家ニモ、契券ハ實ニ正金銀同事ニ思ヒテ、人ノ券ヲ持居レバ、イツニテモ正金銀ニ代ルモノト思ヒ居タル故ニ、契券印證ヲ尙シ事一統ナリシ也、是人々信義ヲアガメシ故ニ、印證ハ貴ナリシナリ、今ハ予ガ產鄕ナドニモ、先年ノ如クニ契券ヲ出シテ慥ニ思ハレテ、通用ノナルトイフ家ハ、農商ノ家トモニ一軒モアラザルヤウニナリタリ、予ガ故鄕ノミニアラズ、イヅレノ國モサルコトナリトイヘリ、商家農工トモニ我家ヨリ出ス契券ガ信ニナラヌトイフコトハ、普ク通用スル金銀錢ノ信ノ器ヲ正眞ニツカハネバ通用ナラヌ道理ナリ、タトヘバ百金ヲ貯ル家ニテ、百金ノ契券ヲ出シテ、正金ニヒトシク通用スル時ハ、元ノ正金ト契券ノ百兩ト、彼是二百金ノ通用ニテ、倍ノ便用ナリ、此契券ヲウタガハレテ、貯ヘタル正金ノミナレバ、倍ノ便用ナラズ、百金ハ百金ナリ、元文年中ヨリ金銀錢多ク吹出タリ共、享保年季マデノ金銀錢ニ、倍スルホドノ金銀錢ハ吹出ヅベカラ

ズ、契劵ノ便用ノ倍スルノ辨利缺ゲテ、金銀錢倍出ザルトキハ、配當ノ通用不足スルノ理ナリ、信約ノ塞リナキトキハ、過急當座ノコトニハ辭バカリニテモ、多カラヌ金銀ハ交用成リシナリ、今ハ苟且ノコトニモ、正金銀ヲ直ニ用ヒザレバ事辨ゼズ、其上先年契劵通用ナリシ節ニハ、引當モノモ我家ニオイテ見分ノ通利ニナリシ物ガ、今ハソレモ銀主ヘ渡シオカネハナラヌニヨリテ、利用ノハタラキ倍ノ違ヒアルニヨリテ、金銀ハイヨ〳〵入用オホキ道理ナリ

鉅萬ノ富ヲカサヌルトモ、信和ノ道立ザルトキハ、財用ノ足ルトイフコトハ有ベカラズ、古語ニ謂ル財ヲ以テ不盡ノ欲ヲ給ストイヘリ、有餘ト不足トヲ齊シクセントシテ、富家ノ財ヲ減ゼントスルモ亦金銀ノ用塞リテ弊トナル、易ノ繋辭ニ財ヲ利シ辭ヲ正シウ・テ、民ノ非ヲ爲スヲ禁ズルヲ義ト云ト見エタリ、聖人ノ敎至レリ盡セリト謂ベシ

名目銀ノ貸付ハ、富貴權家ノ威ヲ假リテ、債ヲ取收ルノ趣向ナリ、是ハ始ニ貸時ヨリ償ノ滞ルベキヲハカリ、高貴ノ名目ヲ付オキテ、返辨滞レバ其借リ主ノ町所家主マデモ難儀トナル故、是非濟ス理屈ヲ考ヘテ、名目銀ト立テ貸コトナリ、貸借兩家トモ果ハヨカラヌ道理ナリ、タトヘバ此所ニ塵芥捨ベカラズト札ヲ立オク所ニハ、究テ塵芥ガ棄テ有モノナリ、如何トナレバ其モトニ札ヲ立ル人ヨリシテ、此所ニハ塵芥捨ルニ然ベキ場所ト、我モミタテヽ立ルナレバ棄ル者ハ有筈ナリ、實ニ棄ルコトヲ厭ハバ棄ヌヤウニ取繕ガヨキナリ、名目銀モ是ニ同ジ、モトヨリ濟シ兼ルモノト思ヒテ名目ヲ付シモノ故

ニ、果シテ濟カネテ訴訟ニイタル名目ヲ付テ、貸ノ取ル工夫ヲシテ貸付レバ、借ル人モ亦名目ヲ付テ、借リテ濟サレヌトキハ斯スレバヨシトイフ工夫ヲシテ借ルニヨリテ、終ニハ名目貸モ立ヌヤウニ成ルナリ、元來人ノ情ニ物ヲ借ウケテ返スマジキト、初ヨリ思フモノハ人非人ナリ、シカレドモ其返濟ノトキニ臨ンデ償ヒカネテ、據ナク耻ヲ忍ビテ返濟ノコトワリヲスルモノナリ、名目ヲ付ル意ハ彼レハ返濟モ心モトナク、耻ヲモ耻トオモフマジキ族ナレバ、彼ニ貸テ其利息取リ得ント思フニハ、威勢ニテトラネバトレヌト見立シ本意ヨリ、名目ツケテトルコトナレバ、借リ人モ初ヨリ右ノ見立ニ遭フテ借ルホドノ人ナレバ、耻ハ合點シテ借ル故ニ、貸主ニ恵ナク借人ニ恩モ思ハズ、義理ハ初ニ闕テ終リハ互ニ仇怨ニナリテ、寶ヲ人ニ貸、人ノ難儀ヲ濟ヒ、仇ヲマフクルハ仇ヲ買ナリ、人ノ貨ヲ借リテ困究ヲシノギナガラ、其貸者ヲ仇トスルハ、恩ヲ讐ニスルトイフモノナリ、如ㇾ此ノアシキ事ニイタルモノヲ、寶ノ徳トハイフベカラズ、是金銀ノ科ニアラズ、扱フ者ノ罪ナリ、且高貴權家ハ、仁恩ヲ以テ衆人ヲ憐ミタマフ事ナルニ、カヽルコトニ威ヲ賣レタマヒテ、仇讐ノ本基トナラセラレンハ、イカヾナルコトナラズヤ、是等ハ殊ニ風俗ニ拘ルコトナレドモ、人是ヲ思ハズ、イカナル事ナラン

攝州大阪ノ地ハ、輻湊第一ノ地ニシテ、四方ノ都會コヽニ増レルハナシ、故ニ吾國ニオイテ金銀トモニ大阪ノゴトク交通ノ多ク自由ナルハアラズ、熟々ト是ヲ考フルニ、浪華ノ地ハ海陸トモニ便宜ナルノミニアラズ、往古此地ハ難波ノ京ニテ、仁徳天皇コヽニ皇居ナシタマヘリ、此時百濟・高麗・新羅ノ

人、此帝ノ德ヲアフギ歡ビ、貢物ナド多ク献ジテ來朝セシコト、日本紀其外諸傳記ニモ誌シ傳ヘリ、且此帝ノ御時、天下ニ七年稅租ヲ免シタマヘリ、是ニ由テ考フレバ、津トイヘルハモトヨリ、津渡ノ地ニテ韓人ノワタリ來レルノミナラズ、船競フ堀江ト歌ニモ詠タル地ナレバ、我國ノ通行モ繁ク、交易ノ饒ジキコト、上代ヨリ此攝津國ニシクハナカルベシ、桓武天皇ヨリ皇居今ノ平安ニ遷ルトイヘドモ、運漕ノ利ハ津ノ國ニアリ、後平氏ノ時ニ、淸盛皇居ヲ福原ニ移シ、兵庫ヲ築キシノタグヒ、皆運漕ノ便利ヲ冀フニヨレリ、殊ニ淸和源氏ト稱シタマフ武將ハ、極メテ此攝ノ國ニ治世ヲ得タマフニ似タリ、奇瑞トイフベシ、其證徵多キ中ニ、平家津ノ國ニ沒落シテ、賴朝公鎌倉ニオコリタマヒ、楠氏津ノ國ニ亡ビテ、足利氏オコリ、當

御代モ攝ノ亂平治シテ、江戶御開基ナリ、此事不思議ナルコトニシテ、其祥瑞ノ眞ナルコトモ亦ナシトイフベカラズ、誠惶々々シテ其ムカシヲ稽explorerルニ、神祇感應ハ著明ナリトイフベシ、往昔　淸和天皇ノ第六ノ皇子貞純親王ノ御嫡六孫王經基公、始テ源ノ姓ヲ賜リ、是ヲ淸和源氏ノ正始トス、經基公ノ御嫡ヲ滿仲公ト稱セリ、此滿仲公ノ御時ニ、源家永世ノ業ヲ攝ノ住吉ノ祠ニ御祈願アリ、則神託ニ因テ攝北多田莊ヲ開キ、爰ニ居ヲトシタマヘリ、此時ニ新田ヲ開キタマフニヨリテ、新田稱コヽニ始リ、後ニ剃髮シタマヒテ、新田ノ新發意ト申奉レリ、御廟モ此地ニ殘リテ、鳴動ノコト普ク人ノ知ル所ナリ、此滿仲公ヨリ、淸和源氏ノ姓著クナリ、御子賴光公ニ至リテ、攝津守ノ任ヲ歷タマヒ、源家次第

ニ廣大ニナレリ、皆是此攝津ニ興リタマフ、島津忠久卿モ同ジク淸和ノ胤ニシテ、住吉ニ誕生シ玉フ、皆住吉ノ冥護ナシ玉フコト彰明ナリトイフベシ、住吉明神ハ水德ノ神ニテ、五龍王ヲ祀ルナリ、其旺ニヨラセタマフニヤ、淸和ト稱スルモ源トイフモ、水新田ト申モ、德河ト稱シ奉ルモ、參河モ駿河モ江戶モミナ水ノ旺、其餘田安・一橋・淸水ノ御稱號マデモ、皆水ニ屬セルコト、豈疑ヒヲ容ンヤ、俗說ナリトイヘドモ、貞純親王ハ白龍ト化シテ、天ニ昇リタマフトイヒ、經基公ハ八尺ノ龍トナリタマヒテ、今ニ西八條ノ池ニ住タマフト言フコト、前太平記・年代記等ノ野史ニモミエタリ、此等皆水旺ニヨリテノ御事諍論スベカラザル所ナリ、且攝津ノ國ハ源平ノ亂ノ時、須磨ノ軍場、八島ノ陣列、天下ワケメノ大軍ナリ、其時ノ運漕金銀ノトヾマル所、此津ニノコレリト知ラルヽ、其證ワヅカナリトイヘドモ、尼ケ崎ニ借證文等ノコトヲシテ知ベシ、奥州ヨリ黃金多ク出テ、平家ノ時吉次信高兄弟等、タリ荷ヲツクリテ、平安ニ登リシ事傳ヘ聞トコロナリ、後醍醐天皇吉野ニ皇居ヲナシタマヒテ、其時ニ調御ノ滯リナカリシハ、全ク吉野ノ金山ノ金ヲ以テ供用トナリシナリ、平氏楠氏トモニ皆此國ニ終レリ、其貿財ノコヽニトヾマルコト知ルベシ、近クハ大阪ノ御陣ニ、日本國中ノ諸侯コヽニ陣列アリシ、其軍用ノ三幣他ニ出ズ、皆津ノ國ニ止リタルナルベシ、コヽニ斯ノゴトクニアラズンバ、今ノ大阪ニテ諸侯ノ財用ヲナシ、今ニ滯ナキ事ハ得ザルベシ

國初ヨリ大阪ニテ諸侯方ノ財用調供スルガ故ニ、其庇蔭ニテ貨殖スルモ多シ、近年ニイタリテハ、過

體ノ損亡ニ及ビシモ多ク出來タリ、今是ヲ平均スベキモノナラバ、大阪ハ金銀ムカシヨリ滅ジタルカタナルベシ、攝州ノ榮エハ前段ニイヘルゴトク、清和ノ御代ニ相好ノ事ナルニモアラバ、此地ノ繁昌ハ永クアラマシタキモノナリ、コヽニオイテ熟考シオキタル一條アリトイヘドモ、恐レ多キニ任セテ是ヲ密ニセリ、寧聽ンコトヲ思フ人アラバ、敢テ藏スルニハアラザルモノナリト云爾

天明年間識レ之

三貨圖彙遺考卷之一

草間直方輯錄

文化十三丙子年正月四日、初相場

筑前米壹石ニ付　代六拾匁五分、

肥後米同　代六拾壹匁五分

中國米同　代五拾目

廣島米同　代五拾五匁

金　壹兩ニ付　代六拾五匁四分

錢　壹貫文ニ付代九匁四五厘

右之通にて少々宛高下あれども四五月に到り凡不ㇾ替、當五月七日、夏米相庭建て替

加賀米壹石ニ付　代五拾三匁五分

金　壹兩ニ付　代六拾五匁九分五厘

錢　壹貫文ニ付代九匁三四厘

當五月末六月に至り、九州邊時々雨繁く洪水有レ之、麥作取實なく、中國・西國筋・五畿内邊格別の難無レ之、六月土用中炎著強く、七八月に至ては海内上作の唱へあり、依レ之蟲つきの風評もあれども暫時に止み、只諸國上作之唱ありて、堂島米商之者も勢ひ薄く、賣手のみにて買人無レ之、八月上旬より中旬に至りては、加賀米四十七八匁、肥後米五十六七匁、津輕・庄内はじめ、北國米の下米にては卅六七匁位、依レ之相場も時々潰る程の下落なり、然る處八月下旬より雨繁く、閏八月四日大風雨有レ之、江戸初め關八州東海道筋都て大荒にて、樹木吹倒し、遠・參始め其近國大洪水、矢矧橋流落、大井川はじめ諸々川々數日支へ、飛脚往來も止り、田畑土砂に埋れ窮民多し、奥州仙臺・南部・津輕・秋田・庄内邊は同樣ながら、作も實入の上にて風水の痛みすくなく、依レ之平均七步餘之作、西國・中國筋は六七步之作、九州邊は又至て痛み強く、元來蟲つきも有レ之程の痛の上にて、肥後・豐前・豐後邊凶作なり、筑前・筑後・廣島・中國筋是又七步作、右國々大抵おしならし六步半・七步位之作なれども、取入實入すくなく、米症宜からず、北陸道加賀・能登・越三國邊は、格別風雨は強く無レ之、然れども春來不氣候にて、時々寒冷行はれ、雨繁々にて蟲入も有レ之、大きに凶作し、加州など家中之扶助もなされ難き程の由、越前も同樣之唱あり、依レ茲九月中旬より追々米價引き上げ、九月廿日、肥後米六十三四匁、筑前米五十九匁六十目、其後彌々諸國不熟の唱へ有レ之、寸陰の間に米價引上げ、十月十七日、新穀稿相場建て替

肥後米壹石ニ付　代七十四匁五分

筑前米同　代七十匁五分
中國米同　代五十八匁三分
廣島米同　代六十六匁五分
備前米同　代七十一匁
金　壹兩ニ付　代六十五匁五分二厘
錢　壹貫文ニ付　代九匁

右之通諸國作毛不熟之趣を以て、去る申年被㆓仰渡㆒候、諸家方大阪登せ米の内二歩通減石之儀、當年御免被㆓仰出㆒候（但し去る文化七午年より、同九申年迄、此三ヶ年、諸家の大阪廻米高平均し、其高の内二歩減石し、是を籾圍にして其國々に圍ひ置、殘り八歩通を、大坂へ相廻し候樣、去る申年八月被㆓仰出㆒、右減石登せに付而は、勝手作廻すも迷惑せらる方は、御金夫々其知行の内、右圍籾を引き當て拜借被㆓仰付㆒、此拜借金は大阪市民へ被㆓仰付㆒し御用金の内を以て、借し渡しに相なり、無利足なり）當年は諸國凶作之趣を以て、右之通御免なる二歩減石米之儀も僅なる事なれ共、一ヶ年六十萬俵か百七拾萬俵之減じにて、濱方仲仕日雇之者都て賃米を取り渡世致す者、其外上荷茶舟之類幾千人となく迷惑せしもの、今年二歩減石相止むに付、悦ぶ事限なし、其上諸國不作にて、又米價貴く米掛り渡世の者皆踊喜す、然れ共其國々凶作にて御免之二歩減石程は登せ難く、近例之八歩登せ位にて殘念なるものなり、然れ共近年之直段とは凡十匁餘高直にて、諸家勝手向都合よく滿足せらる、偖去る戌年被㆓仰付㆒し市中御用金、當年其儘になし置れ、年三朱宛之御利足御下げ被㆑遣、此御銀凡千貫目公儀より御拂出しに相成、難㆑有も恐入候ことどもなり、右御

用金之内諸家無利御拜借の分も、當年先づ御沙汰も無レ之、返納御宥免有レ之候、諸家之内阿州侯・伊豫松山侯は、當八月頃より國内闌米を以て領内にて連々賣拂、其代銀を以て當子年より寅年迄三ヶ年に割合、右拜借返納被レ成度願立られ、是又御免なされ、右兩家は當冬より割方御返納に相なる、其餘は今子年も拜借なり、米價も當十月より十二月迄格別高下なし、然れ共當十二月下旬、銀不融通にて少し下落なり、十二月廿三日仕廻相場

肥後米壹石ニ付　代七十一匁八分

筑前米同　代六十六匁九分

中國米同　代五十六匁一分

廣島米同　代六十二匁八分

金　壹兩ニ付　代六十五匁六分五厘

錢　壹貫文ニ付　九匁一分

當年濱方越年有米二百三萬九百九十五俵

昨亥年よりは當有米四十萬五千四百四十俵餘增米なり、全く當冬は諸家之二歩減じ米御免故、登せ米多き故と見えたり、市中商家引受、納屋米之儀は御免無レ之、今子年も近例之通にて增米引受之儀は不ニ相成一趣被ニ仰出一、右納屋米も今年は諸國とも凶作にて、家中米・百姓作德米共、其國の領主へ買上に相成

り、領主より大阪へ廻米に相成趣にて、依レ之市家引受の納屋米も、近年に無レ之程の減じ登せなり、凡近例之半石也、但し川口米船改御役所も、今年共儘に差置る

文化十四丁丑年正月四日初相場

肥後米壹石ニ付　代七十三匁三分

筑前米同　代六十八匁六分

中國米同　代五十七匁八分

廣島米同　代六十四匁五分

金壹兩ニ付　代六十五匁六分五厘

錢壹貫文ニ付代八匁九分五厘

二月下旬に至りては、肥後米七十匁位なり、舊冬諸家方國關之分御免にて解放れに相成に付而、國方幷兵庫灘邊にて、追々古米之賣捌有レ之、仍て何となく人氣も寛み、彌相場下落に及び、五月七日、夏米相場の建替前肥後米六十七匁五分位になる、尤昨年は北國筋至而凶作にて、例加賀米も當年は漸く二萬石之登せ米にて、今年加賀建て米になりがたく、依レ之筑前米を以て夏米之建ものとす

五月七日

筑前米壹石ニ付　代六十四匁四分

肥後米同　代六十七匁五分
廣島米同　代六十目六分
中國米同　代五十四匁八分
金　壹兩ニ付　代六十五匁三分三厘
錢　壹貫文ニ付　代八匁八分九厘九分

當五月下旬、梅雨に入りても雨希にて、から梅雨と云程の事也、然るに氣候不順にして、五畿內はじめ西國邊時々寒冷被レ行、六月二日頃より、加・能・越、其外奥羽秋田邊、洪水の唱へあり、都て北陸道寒冷にて人民も痛む程の事なり、五畿內邊・西國筋も同樣にて不氣候なり、然る所六月中旬より天氣快晴になり、俄に氣候も立直り、土用中もいよ〳〵炎暑強く、五畿內・西國邊都て稻作勢ひよく、農民も安堵す、七月に至て、攝・河はじめ九州邊まで稻蝗付き、追々廣大にならんとする勢ひあり、依レ之御代官衆よりも嚴しく世話なされ、鯨の油等を打灑ぎ、晝夜其防ぎのみにて喧すし、依レ之七月下旬になりては、蝗も退き追々豐穗の唱あり、然れ共九州路・肥後・豐前・豐後邊、七月二日强風有レ之、小倉邊津浪と申唱候程之風波有レ之、併し格別農作之痛にも無レ之、其後打續き快晴にて殘暑強く、二百十日放生會等も至て平穩に而、諸方豐熟之聞えありて、八月下旬は日々米價も下落す、筑前米六十匁、肥後米六十二匁位、且つ今年四五月の頃より、江戸住石橋彌兵衛（當時公邊御用聞の町人なり）の御公用之內意も有レ之哉、今年之不

氣候故、凶作之考も有レ之に哉、大阪に於て正米買入れ、又帳合米とも都て百二十五萬俵程之事にて、濱方多分賣方にて追々敷銀もされ、不都合に相成り、七月十九日、帳合相場言ひ合せ潰れ濱方騷動す、買方問屋住吉屋喜助・傳法屋庄助・紀伊國屋嘉右衛門此三人の手より突潰し、算當立がたく種々もめ合、右七月十九日より九月十一日迄、帳合相場立會無レ之、正米ばかりの賣買なり、正米十萬石程之事にて、是は追々江戸へ積取候と申す事、然れ共これも敷切れにて賣出す由風說す、依レ之時々相場高下あり、當年は四國筋旱魃にて、讃岐別して痛み強く、餘國は大抵豐穗之唱へあり、八月より九月迄米價格別高下なし、十月十七日、新穀相場建替

筑前米一石に付　代六十五匁一分

肥後米同　代六十八匁五分

中國米同　代五十一匁一分

廣島米同　代五十七匁五分

備前米同　代六十匁九分

金　壹両に付　代六十五匁三分

錢　壹貫文に付　代八匁九分五厘

右相場は夫々藏々の初札の直段なり、所謂祝儀札直にて、翌十八日は新穀筑前米五拾八匁三分、肥後米

六拾匁五分、中國米四十九匁前後にて下直なり、依レ之又江戸石橋手さき問屋より正米・帳合米も買立候に付、十月下旬に至りては、諸藏共二三匁高直に成れり、且つ諸侯方近例之二歩減石登米も、昨年之通御免有レ之、去る申年拜借被ニ仰付一し公金も、當丑年より來寅年十月、兩度に返上納可レ有レ之趣、諸家へ被ニ仰渡一、則今年十月分追々大阪御金藏へ納めらる、金は京都へ持登り、後藤包銀は大阪常是役所にて包立になる、偖市中へ先年被ニ仰付一し御用金之內、五百兩以下之分夫々年三朱之積りを加へられ、元金今十一月一統へ御下金有レ之、誠に廣大之慈愍難レ有諸民歡踊す、凡諸家拜借之分

肥後五萬兩　筑前二萬五千兩　廣島
備前　中國　阿波

且つ市中問屋へ引受居候、諸國納屋米之事は、去る申年被ニ仰渡一趣之通相心得、今年石高餘計引受候儀は不ニ相成一、諸事近例之通急度相守候樣、今十月又被ニ仰渡一、依レ之川口御米改役所、昨・今年共儘に被ニ差置一、入津米・納屋米石高御改有レ之、當十二月廿三日納相場

筑前米壹石に付　代五十九匁
肥後米同　代六十一匁五分
中國米同　代四十九匁五分
廣島米同　代五十四匁五分

金　壹兩に付　代六十五匁六分

錢　壹貫文に付　代九匁五厘

當年濱方越年米百七十七萬八千九百廿俵、昨年より廿五萬二千俵減石なり

今年三月二十一日禁裏御所・仙洞へ御遷行、九月廿一日御即位有レ之、五萬石以上諸侯方使者上京、御上使松平讃岐守殿・井伊掃部頭殿、其外十萬石以上諸侯方使者上京、依レ之京地賑はしく諸民恐悦す

文化十五戊寅年、今年四月廿二日改元、文政元年　正月四日初相場

筑前米壹石に付　代五十八匁六分

肥前米同　代六十一匁

中國米同　代四十八匁七分

廣島米同　代五十四匁五分

金　壹兩に付　代六十五匁四分二厘

錢　壹貫文に付代八匁九分

二月中旬迄米價右之前後、下旬より追々下落、肥後米五十九匁餘六十匁、都て諸藏下直になる、古米は一昨子年秋作不熟にて、痛み毛入多く、藏出し米喧し、筑前米其節建米ゆゑ、江戶石橋彌兵衞はじめ市中買持米多く、出米殘り二三月の頃、廿四五萬石有レ之、多分痛み毛入にて買戾しも追々有レ之風

說にて、二月下旬より筑前古米のみ、段々相場引き上げ廿五六日頃より七十三匁に相成る、當年二月より三四月迄、氣候不順にして時々寒冷行はれ、加・越・出羽・若州はじめ北國筋雪降り、五畿內邊三月朔日霰ふり、又雨も屢々多く、仍て麥作諸國都て不熟、一石に付四十五六匁、茲に於て米價引立べき處、先づ下直なり、昨丑年四月、濱方有米百四十萬九千四百俵餘、今四月百四十六萬八千俵餘、大抵有米同じ、米價昨丑年四月、筑前米六十四匁八九分、肥後米六十八匁前後、今年筑前米五十八匁位、肥後米六十匁位にて、都て諸藏とも昨年今年四月にて、七八匁づゝ當時下直なり

五月七日、例夏米相場建替

米子米壹石に付　代五十匁五分

但し今年加州登り米二萬石（內二千五百石江戶廻し）にて無ㇾ數、又筑前古米買戾し一件にて、濱方もめ合、是非なく米子米を建米とす、四十八年以前有ㇾ之てより今年始めてなり、然る處近年不勝手にて、借財等返濟斷に及び、其上久留米藏同樣不正之出切手有ㇾ之趣にて、市中危踏氣受宜しからず、依ㇾ之切手入替等商人不信仰にて、彼是差支多く當夏建米威光無ㇾ之、濱方迷惑之趣也

肥後米壹石に付　代六十匁四分

筑前米同　代五十七匁九分

中國米同　代四十八匁七分

廣島米同　代五十四匁一分

金　壹兩に付　代六十一匁前後

錢　壹貫文に付　代八匁八分五厘

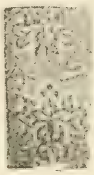
今年通用金之位を以て、初而新貳歩金を鑄らる、形ち角長さ八歩、幅四歩

御觸

一　此度世上通用之ため、二歩金新規に吹立被仰付候間、右二歩金二つを以て金一兩の積り、尤銀錢にても、兩替小判一歩判同樣之割合に相心得、取交無滯可致通用候事

右國々へも可觸知者也

四月二十五日





右今年より十五ヶ年之間、吹高百二十萬兩、一ヶ年吹高八萬兩宛なり、右二歩金出る趣を以て、當四月中旬より日々金相場下落し、前六十五匁の處、五月中旬に至りて五十九匁九分、六十匁前後當五月、市中諸商人受拂仕切、是迄諸物代銀を金にて取やり仕來りし、絹布・綿・油・酒等之諸商人、仕切出

入之分金相場直段違ひ齟齬多く、市中商人ども甚喧し、兩替屋方家々により、莫大の損銀有ㇾ之迷惑に及ぶ、尤今通用之金小判・切金多く、千兩之内精金を撰れば、漸く五六百兩程にて、改の手數もいり通用も滯り、諸人迷惑の趣により、近年南鐐二朱判を貴重せる故を以て、是に準じ右二歩金を鑄らるなるべし、五十年以前とは海內の人民も增倍せしなるべし、然者今通用之金銀ばかりにては、全體不足之方なるべし、新二歩金百二十萬兩、大金といへども海內におし平均しては、大數とも言ひがたし、又年々歲々人民も增倍し、且つ諸家方も近年借財返濟の不義理なる方も多分有りて、仍ㇾ之今公私臨時非常之用銀を、出入之町人に賴談有りても調ひ難し、此の辨じ難き故を以て、非常之備を圍ひ貯へ、國內之金銀も他邦へもれざるやうと仕法立らると言ふが當然にて、今二歩金莫大之增鑄ありても、海內おしならしては漸く一二歩之寬みにて、三四歩にも至り難かるべし、然れば格別金小判相場下落の事はあるべからず、然共眼前百二十萬兩といふ大金を吹出しある故、追々相場下落にて損銀計り難く心得、此頃頻に下落なり、當時に至り是迄之通用金にて、格別海內融通之差支も無ㇾ之處、右二歩金增鑄有りては、先づ金の方は潤澤なる方にて金の位卑しく、銀は今迄の通故、拂底なる道理ありて、銀の位光自然と強く、依ㇾ之銀直段の物は相場下落になる道理も可ㇾ有歟、關西は銀を專一に用ゆる場所ゆゑ、米價はじめ銀相場之物は、直段卑數方なるべき歟、當時米價の賤しきも、少しは銀位貴き所謂も可ㇾ有歟

右金相場追々下落に付、五月十七日、於ニ大阪ー十人兩替之者を召れ、關東より御下知として、金高九萬兩御買上げ金被ニ仰付ー、儀之儀にて調達出來難く難澁申立、漸く三萬兩に相成る、右上納金輕目切れ金御定法通之分は除に不レ及、切れ輕目金有り合差交へ上納可レ致被ニ仰付ー、全く近來切れ金等撰嫌强く、市民迷惑の趣により、右之通被ニ仰付ーと相聞え、善政難レ有事なり、江戸表六月十日より世間可レ致ニ通用ー趣令せらる

一　此度世上爲ニ通用ー吹立被ニ仰付ー二歩金之儀、當六月十日より可レ致ニ通用ー候、先達而相觸候通、小判一歩判取交、無ニ差別ー取引可レ致候條、通用滯らせ申間敷候

一　小判金之儀年久敷相成り、自然と疵金等多く、世上難儀之趣相聞え候、追而沙汰に及び候迄は、五歩以上切れ金は勿論、夫以下之疵金にても無ニ差別ー、二歩判・一歩判・二朱判取交無代に而引替可レ遣候間、武家在町共取扱候者は、六月十日より、後藤三左衞門役所初め別紙名前之者方へ、早々差出し引替致可レ遣候、尤五歩以下疵金通用之儀に於ては、是迄之通にて、心得違致間敷候

一　二歩判切賃之儀は、一歩判同様に相心得、不相當之儀致間敷候旨、兩替屋共へ申付置候間、其旨可ニ相心得ー候

右之通可ニ相觸ー候

江戸兩替方

三井治郞左衞門　殿村佐五郞　三谷三九　竹原文右衞門

升屋源四郞　播磨屋新右衞門　泉屋吉次郞

右之通被ニ仰渡一趣尤二步金一萬兩づゝ、右七軒之者へ拜借被ニ仰付一、六月十日より引替始り申候、京・大阪六月中沙汰なし、九月十五日、江戶御觸出し之趣一二步判金之儀、御年貢幷に諸物上納金は勿論、諸問屋拂諸家爲レ替納め、且遠國爲レ替之儀も、二步判金取交可レ申候、尤皆二步判に而も勝手次第、彌世上無レ滯通用致、差滯らせ間敷候

一　二步判金通用之儀、小判一步へ取交、無ニ差別一取引可レ致候、切賃之儀も一步判同樣相心得、不相當之儀致間敷候、此段兩替屋へ申渡置候處、場所により切賃に不レ及兩替致候兩替屋も有レ之哉に相聞え候、小判一步判へ取交取引致候上は、步判同樣切賃も取遣り可レ致候儀に付、相當の切賃を以て取引可レ致候、以上

九月十七日

右大阪も同樣相觸らる、切れ鍛金之儀も、江戶同樣觸らる

一　貳步判金吹立之儀、是迄觸置候處、今度爲レ替組之內、江戶本兩替町三井治郞左衞門請取、大阪へ爲ニ差登一、高麗橋三井元之助店に而、上方筋鍛金無代にて爲ニ引替一候間、鍛金所持之者は、來る十八日より右店へ差出し早々引替可レ申候、以上

十一月十七日

當年春以來四五月に至り、北國筋寒冷行はれ不氣候にて、五畿內邊屢々雨あり、麥作不熟之所、五月にいり六月へかけ、日々氣候立直り、六月土用前より雨無ㇾ之、七月に至り凡七十日程も照續き、先づ諸國とも旱年にて、西國筋都て水渴し難儀之處、程よく大雨など有ㇾ之、草たち大きに潤ひ、攝・河・五畿內同樣にて、追々東西諸國豐熟之唱へあり、依ㇾ之六七月に至り、米價自然と賤しく、市場氣配よろしからず、九月に至ては米子米四十六匁前後、肥後米五十五匁前後、十月十七日新穀相場建替

肥後米壹石に付　代六十一匁五分
筑前米同　代六十四匁五分
中國米同　代四十七匁
廣島米同　代五十二匁九分
備前米同　代五十二匁七分
金　壹兩に付　代六十二匁九分
錢　壹貫文に付　代八匁九分二厘

右之通なれども、これは十月五日・六日頃、新米入札の直段なり、依ㇾ之十月十八日は、肥後米・筑前米とも、六十匁一分位なり、夫より諸國とも、豐作の聞え彌あり、日々相場下落に至り、十一月四日・五日

の頃には、肥後米五十三匁八九分、筑前米四十八匁七分、中國米四十目四五分、廣島米四十五匁前後なり、十一月中旬に至りては、江戸石橋彌兵衛の手より、公用之買米ある趣風說あり、諸國とも二三匁づゝの直段上れり、金も時々御買金被仰付、十一月中旬六十三匁二三分にて、少々宛高下有り、當年も前文之通米價下落に付、市中商家引受納屋米も近例之通りに增米引替候儀停止被仰付、然れ共何分諸國より入津米多く、濱方不景氣なり、又市中御用金今年も其儘になし置かれ、夫々近例之通年三朱之割を以て御下金有之

當十二月納相場

肥後米壹石に付　代五十四匁五分

筑前米同　代四十九匁五分

廣島米同　代四十六匁

中國米同　代四十一匁五分

金　壹兩に付　代六十三匁三分

錢　壹貫文に付　代九匁六七厘

當年濱方越年米二百卅八萬八千拾五俵

昨丑年より六十万九千九十五俵在米多し

（原本此ノ所ニ題名著者名アリ一本ニ據リ除ク）

文化二己卯年正月四日初相場

肥後米壹石に付　代五十三匁八分

筑前米同　代四十九匁

中國米同　代四十目六分

廣島米同　代四十五匁五分

金　壹兩に付　代六十二匁九分三匁

錢　壹貫文に付代八匁八分七八厘

正月十日頃より段々下落し、十七日に至りては、肥後米五十匁四分、筑前米四十六匁、中國米卅八匁六分、廣島米四十二匁七分なり、舊年入津米多く、灘・兵庫邊西國米・北國米夥く有レ之趣、又加州例登り米近年減石にて江戸廻し共、漸く二萬石程之所、當年國方仕法改革有レ之、今年より古格之通諸事舊復に相なり、依レ之當年登り高八萬二千五百石（内二千五百石は江戸廻し）外に二萬石（是は十萬石之内に二歩減之御届け有レ之）此二萬石は兵庫拂

に成る趣、右之通當地入津有米多き上、灘目・兵庫有米多く、其上加州登り米有レ之故、彌々相場下落に及ぶ、然る處江戸も同樣にて、武家方迷惑之趣、且二月は旗本衆御渡し米御貸米之時節故、一統難儀之趣、仍レ之米價引立之御勘辨なくては不二相濟一故、市中米商人幷に十組問屋共へ、無利の拜借金被二仰付一、旗本御救として米を市商の者へ御買を被レ成趣風說有レ之、依レ之相場動搖し、日々少々宛引立、二月上旬五日六日頃に至ては、肥後米五十四匁五分位にて、夫より四月閏四月中旬迄格別高下なし、尤去る申年被二仰渡一酉年御調べ之上、市中他國米三ヶ年平均高引受可レ申、依レ之當所安治川口・傳法川口兩所に入津米俵數改役所被二仰付一、夫々入津米御改請來り候處、今年閏四月十五日より、右兩所御改め役所は御引拂に相成り、酉年已前の通に相成る、尤諸屋敷米も先例登せ高より、餘計登せ申候儀者、去る子年停止被二仰附一、仍レ之諸屋敷米皆夫々登り高俵數この役所にて御改有レ之、然る處前文之通り此度御定にて、諸屋敷留守居夫々惣じて被二召出一、是又前文之通被二仰渡一

口達

一　當表町人共他所他國より賣買引受來り候石高之儀、去る酉年取調之上、三ヶ年平均分量を以て一ヶ年分引受石數申渡、右量分より過米、幷新規に他所他國米引受候儀致間敷段申渡、年々右入津米、當地兩川口に於て改爲レ請候得共、右役方之儀今十六日より先相止め候事

卯閏四月

右之通被二仰出一候間、町内末々迄入念可レ被二相觸一候、尤是迄御改之節、御改濟之小旗、町人之内手元に殘り有レ之候はゞ御役所へ早々可二差出一旨、是又被二仰出一候間、此段町内末々迄不レ洩様、可レ被二申達一候、已上

卯閏四月十六日　　總年寄

但し諸藏米先例登せとは、前々より肥後・筑前、鍋島等は十萬石以上、廣島七萬石餘、中國三四萬石、其外諸藏とも大抵年々増減極り無レ之處、去る文化七年之頃、米價至て下落に付、直段引立之ため大阪入津米を減ぜらる、此時諸家登せ米御調有レ之、文化七年年より同九申年迄、大阪登せ米三ヶ年平均せられ、其一ヶ年の登り高之内、二歩通減石被二仰付一、是を國々にて籾にて囲置、殘り八歩通を以て、大阪へ差登せを可レ申趣被二仰渡一、此二歩減じも去る文化十三子年十月御免被二仰付一、然れども登せ高之儀は、右三ヶ年平均高より、餘計差登せ申儀は不二相成一趣被二仰渡一、自然其高より餘計も差登せ可レ申哉之御考にて、近例川口兩所之米穀俵數改役所其儘に差置れ、昨寅年今四月迄不二相替一役所にて夫々登せ米俵數御改被レ成候事、然る處今閏四月十六日より前文之通り改役所御差止めに相成る、依レ之諸屋敷より登せ石高之儀、やはり前文之通、三ヶ年之平均高より餘分差登せ申儀不二相成一哉被レ伺候處、江戸表へ御伺になる、其後當五月三日諸屋敷被二召出一、此儀は是迄之通勝手に可レ致趣被二仰渡一、尤改役所は永く相止らる趣被二仰渡一候

右之通市中へ被二仰渡一依レ之已來は酉年以前之通、國々より勝手に米穀積登せ申事故、此後大阪入津米は年々過分に相成るに付、又相場下落に及ぶべきに、右川口御役所引拂の風說有レ之より、打續き諸米一匁づゝ直段引き上げ、肥後米五十五匁四分の處、五十六匁より七匁に相成る、筑前米五十二匁位之處五十三匁、廣島米四十七匁七八分之處四十八九匁に成る、世界之事理屈にばかりにても推およぼし難し、先年より市中御買米仰付られたる時も、其通にて直段引立べき定理なれども、是非一旦は猶々下落に及ぶ、全く人氣陰に偏よる故なるべし、世界の事は廣大なるにて、人力の儘には行ひ難し、米價之高下は商家之私より起り、公道之理屈ばかりにて、高低平等にはなしがたし、士農とも下落は皆合點の上なれば又其覺悟あるべし、高直なるは是非其年の凶作不熟なる故の事なれば、農民之艱苦を推量り、ともに愁悲すべきに、高直なるを悅べるは甚不仁の至也、蓋思はざるの甚し、米價之高下も天地消長の道なれば、十年平均を以て見れば、直段も平等なるべし、然れば米價之高下はすて置も可ならん、是を人力を以て高下あらしめんとせば、世話のみ多く勞して功なき事あらん

一　金錢之類、道具錺に用ひ候分は、前々より其入用申込、其坐方に而買入候得共、灰吹銀其外潰し金銀は、三都に下た金屋と申株有レ之、是へ直々賣渡來り、大阪市中下た金屋と申す者、是迄四軒有り

近江屋　富太郎　　升　屋　傳兵衛

最上屋　善兵衛　　河内屋　久兵衛

右之通に而前々ゟ仕來り候處、此度又右當下タ地金屋之外、江戸ゟ七人出店株出來、左之通相觸らる

一　灰吹銀其外潰銀類、銀座幷に下買之者へ賣渡し、銀道具下銀入用之者は、銀座に而買受他所に而賣買致間敷旨、先達而ゟ追々相觸、右下買當表に四人有レ之候處、買集め方不行屆之趣相聞え候間、此度江戸表下買之内

荒木屋　伊三郎　　殿村屋　佐五郎　　山本屋　忠次郎　　茗荷屋　治兵衛
萬　屋　辰　藏　　中島屋　忠　七　　中田屋文右衛門

右七人之者共當表へ差出、銀座手に付市中灰吹銀・潰し銀類、下買所取建、灰吹銀・潰銀道具類、銀座下買と相認め候、看板札爲レ相掛ケ、當表是迄之下買共一同買集方爲レ取計レ候間、前以觸置之通灰吹銀・潰銀類は勿論、其外燒丁銀・折丁銀・鑄丁銀・疵丁銀・見苦丁銀等之類迄も、銀座下買共へ賣渡し。銀道具下銀入用之者は、銀座に而買受、他所に而堅く賣買致間敷候、以上

卯五月

一　文字金之儀、元文元丙辰年より今文政二己卯年迄、年數八十四年海内通用なれ候へ共、元來古金と違ひ位下品なる故、年を經るにしたがひ切れ折れ輕目批け等の疵金多く、仍レ之市民撰嫌通用滯り候に付、是迄年々通用滯らせ間敷旨制止を加へられ共、市民信用せざる故、昨寅年新規に文の字金の

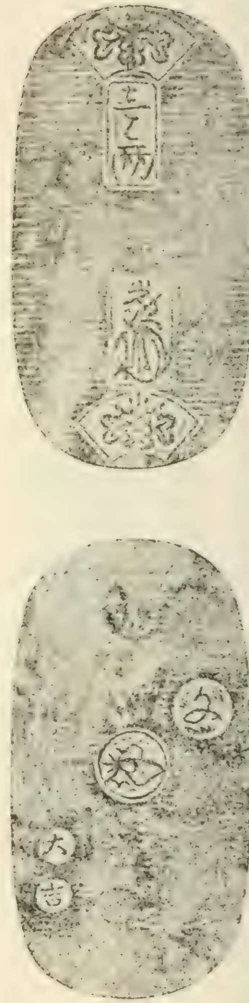
位を以て二歩金を鑄られ、是迄通用滯り候瑕金の類、無賃にて右二歩金と引替可レ申趣を觸らる、仍レ之市民追々座方へ引替に出るものありといへ共、此度之二歩金通用之文字金より又位劣候趣申し唱へ、是より又自然と市民瑕金を厭はざるやうになれり、然れども文金年數を經るにしたがひ、是非瑕金も多く出來、其儘差置れてはやはり世上通用の妨に可二相成一趣を以て、今年文金を吹改められ、目方は是迄の通にし、小形に厚く吹改らる、一歩判も同樣に被二仰付一、制令

一　世上通用之爲、去る寅年二歩判金吹立被二仰付一、且は小判瑕金多く難儀之趣に付、追々爲二引替一候へ共、今以瑕金有レ之、畢竟元文之度吹替之儘に而、此上年を經候に隨ひ、彌々瑕金も多く相成際限無レ之儀、世上之難儀可レ爲候、依レ之憂無レ之ため、此度小判金是迄之目方を以て、厚目に吹直し被二仰付一候、一歩判之儀も年久しく相成、座方之極印分り兼ね候も有レ之に付、是又同樣爲二吹直一候間、兩替等是迄之通に相心得、無レ滯可レ致二通用一候、尤右引替之日限等之儀は、追而可レ及二沙汰一候

右之通國々へも可二觸知一者也

文政二卯年六月

吹替新文字金　　掛目三匁五分



同壹歩判　　掛目八分七厘五毛



一　昨寅年瑕金之儀、後藤三右衛門へ持參次第、無差別新二歩判・小判・一歩判・二朱判取交、無代に而引替可レ遣候之段、諸家市中へも被二仰渡一候處、今卯年十二月被二仰渡一

一　瑕金引替之儀、先達而相觸は、小判・二歩判・一歩判・二朱判取交無代に而引替遣し候得共、以來は小判・一歩判・二朱判は不二相渡一、皆二歩判を以て、是迄之通無代に而瑕金引替可レ遣候間、右之趣相心得、後藤三右衛門役所を始め、本兩替方瑕金差出し引替可レ申事

十二月

右之通被ㇾ仰渡ㇾ候

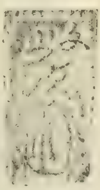
一　文政十一戊子十二月十一日御觸

二步判之儀世上通用不足之由相聞候間、此度吹增被ㇾ仰付ㇾ候、然處是迄之二步判は金座極印之文字は眞字ニ候處、此度ゟ小判・一步判同樣草字に相直し候筈に候間其旨相心得、是迄通り二步判に無ㇾ差別ㇾ致ㇾ取引ㇾ通用差障申間敷候

右之趣從ㇾ江戶ㇾ被ㇾ仰下ㇾ候條、三鄉町中可ㇾ觸知ㇾ者也

子十二月九日　　山　城

　　　　　　　　隼　人



惣年寄



一　去る文化十酉年四月十三日、江戶に於て菱垣廻船十組問屋願ひ候に付、伊勢町にて米會所新規取立之儀御免仰付らる、尤仲買之もの百二十人に株式相極め、武州米を建て米とし、帳合延賣買大阪堂島之仕法を以て取引いたし、年々冥加として金千二百兩と、又口錢之內を以て五千兩づつ上納仕べき趣を

以て願ひ上候處御免仰付らる、然れども冥加金幷に口錢之内を以ての上げ金等當時上納に不ㇾ及、萬端正路に取計ひ、聊にても不正之取計致間敷趣被二仰渡一、酉年より來丑年まで先づ五ヶ年之間、右米會所御免有ㇾ之、其後丑年限に相成り申候に付、其節又永々御免之儀願出候處、元來博奕同樣之儀にて、家を倒し身を敗るもの多く、下民之ためには不ㇾ宜趣御聞に達し候に付、翌寅年より先づ辰年まで、三ヶ年之年延べ被二仰付一、其儘に會所被二差置一候得共、段々不正之筋も有ㇾ之に付、今年六月年限中ながら、俄に延賣買差止められ、右會所取拂被二仰付一、且又他國買入燈油も延賣買之儀先年有ㇾ之趣なれ共、中絶致し有ㇾ之に付、是又十組之者より油延賣買之願、一ヶ年運上金千兩づゝ上納可ㇾ仕趣申出、依ㇾ之去る八ヶ年以前申年願之通被二仰付一候得共、是とても米同樣にて、總體土地之ためよろしからずに付、これも當年米會所と一時に差止め被二仰付一、且永代橋・新大橋・大川橋此三大橋は、前々ゟ公儀御入用を以て、掛替又は修覆に至る迄被二仰付一有ㇾ之、往來武家之外は農民迄も一錢づゝ橋錢出し候儀、古來より御定之所、是を無錢にて往來致させ、三大橋とも新規掛替、又は修覆に至る迄、十組之者引受可ㇾ申、其入用として大阪より廻船の荷物、米・油・綿・紙類・蠟・傘・酒・醤油・鰹節はじめ、一切積下る廻船荷物に准じ、夫々運上をかけ、三橋會所取建、十組問屋より是を差配致し、冥加金上納致し度趣、去る文化五辰年、右十組之ものより願出候處、是も御免被二仰付一、今卯年六月迄、相續致し來候へども、右之通士民日用之荷物諸物に、都て運上掛り候故、此十ヶ年已來、日用諸色年々高直に相成、諸侯方は勿論、士民一

統之難澁困窮に至り、追々迷惑之趣相聞え、仍レ之右諸運上差止被二仰付一、三橋會所取拂被二仰付一、今年六月より古來之通、農民共往來一錢づゝ橋錢を出し、三橋諸入用古來之通、町年寄之取扱に被二仰付一右等都ての目論見、杉本茂十郎と言る奸佞の者の工み出せし事にて、諸家士民の難澁となる、此茂十郎と言は、江戸飛脚問屋大阪屋茂兵衞と言ふものにて、才智辯佞の勘者なり、去る文化七八年の頃、米價至て下落之砌、諸侯方は勿論、士民とも都て難澁せるに依り、公儀へ御忠節御奉公、或は冥加のためと稱し、米價引上る手段等、佞辯を以て言上に及び、表には忠節をかざり、內心己れが私欲を構へ、大阪市中御買米等申勸め、表へ發顯無レ之內十組之者をかたらひ、密に大阪へ買註文數萬石問屋へ申遣し買〆置、市中御買米發顯を致し、直段高直に可レ成を見込、右之通十組之者と申談、奸計を巧み候へども、天の憎む處故、却而新古米之買替に大損出來、其損失之償として、大阪米問屋のはた賣を責つのり、公用米と申立、數人を牢舍の苦しめにあはせ、皆此の頭取茂十郎の奸智よりいでし事にて、始終は却て十組之者も損失と相成る、全く天の罰する處也、前條一件は江戸南御奉行榊原主計正殿、英智より出て諸事糺しに相成り、張本杉本茂十郎をはじめ、十組菱垣廻船積仲間大行事總行事總代等悉く皆過料御呵り等御仕置被二仰付一、夫々會所取拂被二仰付一、諸侯武家方はじめ市民其善政を恐歡す、右主計正殿、前役の砌より、菱垣十組仲間并三橋會所の者共、不正の筋を企、諸物日用の品迄高直に致させ、剩つさへ御爲御奉公と稱し、內心己等私欲を構へ、此十ヶ年以前より士民これがために苦しめ

らるゝを、兼て見聞せられし處、當春南御奉行職被ㇾ蒙ㇾ仰、出勤早々先づ右一件糺明せられ、悉く差止られ後來の美談とす、然れ共江戸之儀は至て不案内故、其くはしきは不ㇾ知、江戸來書を以て、其善政を記し後年へ傳ふのみ

一　此度吹直被二仰付一候、小判・一歩判之儀、來る廿日ゟ追々引替可ㇾ遣候、尤有來り小判・一歩判之儀は、追而及二沙汰一候迄は、新金取交請取方・渡方・兩替共に無ㇾ滯可ㇾ致二通用一候、上納金も可ㇾ爲二同前一事

一　引替金之儀は小判・一歩判之無二差別一、たとへば皆小判、皆一歩判にて差出候共、引替之儀は小判七歩・一分判三分之割合を以て、取交引替候筈に候條、來る廿日ゟ後藤右右衛門役所始め、別紙名前之者共方へ差出し、引替可ㇾ申事

一　武家方其外共町人へ相對に而申付、右名前之者共方へ差出し引替させ候儀も、勝手次第に候事

一　引替可二差出一小判・一歩判共、員數相知れ候事に候間、貯置不ㇾ申段々引替可ㇾ申候、若貯置不二引替一者相知れ候はゞ、吟味之上急度可二申付一候事

右之通被二仰渡一候

本町一丁目 後藤三右衛門役所	駿河町三井組 爲替御用取扱所	本兩替町十人組 爲替御用取扱所
本革屋町 三谷三九郎	上槇町 泉屋吉次郎	室町三丁目 竹原文右衛門
金吹町 播磨屋新右衛門	堀留町 升屋源四郎	大傳馬町一丁目 殿村佐五郎

三河町 島屋吉兵衛

田所町 井筒屋善次郎

一 米價當正月より七月中旬の頃迄、米價格別高下なし

肥後米壹石に付 代五十匁前後

筑前米同 代四十八匁三四分

中國米同 代三十八匁七八分

廣島米同 代四十二匁二三分

凡右之通なり、尤當年旱天にて暑氣例より甚しく、然れども時々潤雨ありて季候よろし、六月十二日地震有之、京都より尾・勢・濃・江州に至て强く、大阪より西國筋・中國邊段々ゆるやかなり、九州肥後邊は地震無之、同日至て嚴しく雷雨有之、全く海路隔地脈通ぜざる故なるべし、右地震五六十年も無之程の事にて、今年の農作如何あらんと商夫の疑惑より、其頃暫く一時に米價引上げ、肥後米五十八九匁、其外准じ引上、然る處諸國共農作之害なく炎著强く潤雨等ありて豐穗のきこえあり、依之追々米價下落に及ぶ、尤春來大阪・灘・兵庫邊入津古米多く、東國筋同樣にて、江戶廻米も無之、古米引け方なく、既に當八九月、大阪濱方有米百五十八九萬俵もありて、灘・兵庫邊有米七八十萬俵も有り、其上當地十分之聞えにて、是より日々月々米價下落せり、諸色日用の品類は、近年江戶の諸物高きに準じ、京畿內同樣高直にて、米價の卑しきに比しては位相當せず、士民難澁の趣を以て、制令を出さる

一　近來米直段下直に候處、諸色之直段は高直に付、諸人及二難儀一候、酒・酢・醬油・味噌之類、米穀を以て造り出し候品は勿論之儀、其餘諸色共米穀を元として可二賣出一道理に候處、米の直段は下直に候得共、諸色之直段は追々引上げ不埒之事に候、以後米穀之直段に準じ、可レ成丈は諸色之直段引き下げ可レ申候、直段引下げ候而も品物を劣らせ候而は無レ詮事に候間、諸事正路に賣買可レ致旨、仕入元を始め問屋・仲買等、夫々商賣方之者共へ可二申付一候、右之通申付候上にも、猶直段不二引下一候はゞ、其筋に遂二詮議一急度曲事可二申付一候、此趣國々へも相觸候間、諸色仕入元直段引下げ不レ申、或は買〆等致候者有レ之候はゞ、其手寄之商賣人共ゟ可二訴出一候、若打捨置候はゞ、是又可レ爲二曲事一候

右之通相觸候間、私領之内國産物有レ之面々は、元直段引下げ方之儀、其領主・地頭ゟ精々遂二吟味一可レ被二申付一候、若此上元直段不二引下一、又は不正之儀も有レ之趣相聞え候はゞ、領主・地頭之越度たるべく候間、厚く可レ被二申付一候

右之通江戸表ゟ被二仰付一候間、此旨三郷町々末々迄も不レ洩樣に念入可二相觸一候

卯七月廿一日

右の通被二仰出一、江戸表諸物直下げ之儀、嚴しく御糺被レ成、彼是御世話有レ之、京都・大阪同樣にて、總て諸物直段一割づゝ引下げ可レ申趣被二仰渡一、元來江戸表十ヶ年このかた、前件之通十組仲間不正筋企候により、諸色高直に相成り、京都・畿內へ押移り、都て高直になれり、然る處今年十組會所悉く差止

らるに付、諸色引下げ可㆑申所、十ヶ年此方の惡しき風俗殘り、諸商人等此度之善政は恐歎すれども、諸色之直段は不㆓引下㆒、依㆑之種々商民共へ教諭せられ、前文之通被㆓仰出㆒、一と度もの變じ再び元の如くに改むる事の難きは常にて、是世の情態のならひなり、今年都て古米多きうへ、諸國とも豐作にて江戶・大阪共米穀充滿し、又昨寅年新に二歩金を造鑄せられ、今年古文金を小形に鑄改められ、其上に二朱銀等通用有りて、此三幣又潤澤なる道理ありて、當時先づ米金は卑しく、銀はいまだ吹改の制令なくして、古元文銀の儘にて拂底なる道理ありて故に貴く、殊に關西は都て諸物銀相場たてにして銀を貴む、然るに銀の吹改增鑄なくして、拂底なるときは彌貴く、米金と位相當せず、依㆑之彌米金の直ひ卑しく、關西の諸侯市民難澁に及ぶ事必然なり、故に無㆑程丁銀之改革增鑄あるべし、然れ共今年其沙汰無㆑之故、茲には今年之情態を以て記す、元文元年金銀改鑄之時も此例有り、金銀一ヶ時に改鑄は無㆑之ものなり、一ヶ時にては都て士民騷動する故あるを以てなり、且又前文之通去る文化十年の頃より、江戶にて十組會所被㆓仰付㆒候而より、此文政二卯年まで凡七八年之間、諸物皆價高直に相成り、京・大阪始め海內都て江戶の響にて、諸物高直に相成り、武家方始め市民迷惑せり、然る處右十組會所差止られ、猶又物價之事迄、格別之御仁惠を以て、直下げの事迄御教諭之被㆓仰渡㆒等有㆑之、公之制令無㆑之てなんぞ一日を安穩に暮すべけんや、其廣大の御仁惠難㆑有事察て知るべし、然るを共わきまへ無㆑之利欲に迷ふ人情、度々之制令を不㆑用、依㆑之今年追々制令有㆑之、其家業品類夥敷事にて、米之外薪・鹽・

味噌・醤油・油はじめ、其外凡八十餘家悉く皆諸物直下げ被仰付、尤直段之儀日々相高下により賣出候へども、凡二割直下にて賣出候樣との事に而、町々諸賣買人名前夫々御吟味有之、諸物之直段是迄は何程に賣候へども、當時は何程に直下げ致し賣出候段、其ものより書付御取被成候、右等之御世話手數も入候儀にて、誠に難有も恐入たる儀共なり、何分今年米價下落にて下民は暮しよく有之候へども、都て米之外日用之品類高直なり、然共右之御教諭有之てより少々づゝ物價下直になれり、米價今年諸國とも豐穗の聞えありて、九十月に至り追々下落し、古米十月九日

肥後米壹石に付　代四十二匁六七分
筑前米同　代三十八匁七八分
廣島米同　代三十五匁六七分
加賀米同　代三十五匁五六分
金　壹兩に付　代五十七匁八九分
錢　一貫文に付　代八匁八分四五厘

十月十七日、新穀建替相場

肥後米壹石に付　代五十二匁五分
筑前米同　代五十一匁八分

中國米同　代四十二匁

廣島米同　代四十匁二分

肥前米同　代三十六匁五分

備前米同　代四十匁九分

加賀米同　代三十五匁三分

秋田米津輕米　代二十七匁ゟ廿九匁

金　代五十六匁二三分

錢　代八匁八分四五厘

右は夫々藏々、此頃入札落札之直段なり

十月十八日

肥後米　代四十九匁五分

同古米　代三十七匁六七分

筑前米　代四十三匁八分

同古米　代三十四匁三分

中國米　代三十五匁六分

同古米　　　　　　　　　代
廣島米　　　　　　　　　代三十九匁七分
同古米　　　　　　　　　代三十二三匁

十一月十日頃に至りては、肥後米四十六匁六七分、筑前米四十一匁六七分、廣島米卅八匁六七分にて時々相場も潰れ、市場商人甚喧しく、依レ之公邊より内密御吟味有レ之處、正米・帳合米に甚不正筋のもの有レ之、前々より制禁之空米を以て場所をさわがし、强て相場を下落させんと謀るもの有を以て、此者共召捕れ吟味に及ぶ、是より不正筋の賣買止みて、追々自然と相場引立ち、十二月に至りては肥後米五十一匁餘になれり、善政の制令なくば奸民のために諸侯奉祿之士は迷惑に及ぶべし、其厚恩謹で思ふべし、金も小形金に吹改らるに付て、人氣引立ず、十月廿一日頃、金五十五匁二三分相庭なれども賣買四匁四五分にて、市民迷惑之趣を以て、十一月に至り御買金等一萬・二萬連々被ニ仰付一、仍レ之一二匁程づゝ引立といへども、右御用濟候後は又下落に及ぶ、凡金五十六匁前後七匁位迄なり、偖此度之小形新吹金、當十二月に至り上み方筋古文金と引替べく旨被ニ仰出一、二萬兩程江戸より差登せらる

一　此度吹直候小判・一歩判を以て、上み方筋是迄之小判・一歩判引替之儀

高麗橋三丁目爲替三井組

御用取扱所

平野町二丁目爲替十人組
御用取扱所

右兩所に而爲ニ取扱一、無代に而爲ニ引替一候間、明十日より右兩所之内へ差出、早々引替可レ申候、尤瑕金等無代に而引替、輕目金御定外之分は、金目一匁に付銀十八匁八分替之割合を以、足金代差出引替可レ申候、此外之儀は當六月相觸候通ニ可ニ相心得一候

卯十二月九日

昨寅年四月新二歩金を鑄らる、依レ之金相場次第に下落し、當正月初相場六十二匁より三匁にて、七八月頃は六十目前後なり、然る處今年文金を小形に吹改られ、追々増鑄有レ之趣にて京・大阪兩替屋共へ連々差登せられ、古文金と引替らる、仍レ之九・十月の頃より段々相場下落し、十月廿一日五十五匁三分、四匁八九分なり、十一月に至りては凡五十七匁前後なり、錢相場は當正月より十一月に至り、八匁八九分前後にて高下なし、今卯年より八十四年以前元文元丙辰、今の通用文金銀改鑄ありし頃は、錢相場一貫文に付銀卅一二匁より卅目前後にて至て高直なり、元文元年迄は、正徳年之古金銀なり、則慶長之品位にて、小判一兩掛目四匁八分ありて、金銀とも至て良品にて、是を以て海内通用なれし處、前文之通元文元年今の文金銀に吹改り、品位劣り卑しく市民不レ服、上み方畿内は勿論、西國・九州筋北越之諸侯方はじめ市民までも、右文金銀位卑しくまた極印迄も少しづゝたがへる故、新文金銀の眞僞を危

踏み欺かるゝを恐れ、諸國より例大阪へ運送之米穀はじめ、諸貨物の代金銀、皆錢にて積み下だすべきの註文有之に付、京・大阪の問屋どもより、月々國々へ積下す錢廣大なる事にて、錢拂底し日々相場高直になり、一貫文代内證取引卅四五匁にて、都鄙市民迷惑せり、仍レ之是迄錢を以て交易せしも、成べき程は銀直段に引直し可レ申趣令せられしなり、茲に於て錢下直になるべきために、大阪高津又は加島村等にて新錢を鑄らる（寛永は錢の部に記し、茲に略す）此度鑄らるゝ新二歩金并に小形金・古文金之位にて少しも勝劣は無レ之といへども、極印はじめ全く新鑄之金故、西國・北國はじめ國々、元文年之如く眞僞を危踏み、正金の引替或は諸貨物の代も、專ら銀を好む故、自然と上み方銀拂底と見え、今年米金の卑しきも一つは此理もあらん歟、右之通元文年は錢にて取扱ひせしも、當時は銀にて取扱ふ樣になりて、銀相場立の國處は迷惑なきかたなるべし、是等は元文年と違ひ、錢多き故卑しむに仍てなり、然れば不レ遠銀の吹替增鑄あるべきなれ共、先づ當年大阪の情態を以て茲に演ぶるのみ、市中御用金當年も其儘に差置れ、年

三朱之御下げ金被二下置一

當十二月二十三日納相場

肥後米壹石に付　代五十一匁五分

筑前米同　代四十六匁五分

中國米同　代三十七匁

廣島米同　　代四十二匁五分

金　一兩に付　代

錢　壹貫文に付代

當年濱方越年有米貳百六十五萬千八百俵

昨寅年より貳十六萬三千七百八十五俵增米

三貨圖彙遺考卷之二

草間直方輯錄

文政三庚辰年正月四日、初相場

肥後米壹石に付　代五十匁五分

筑前米同　代四十六匁二分

中國米同　代三十六匁四分

廣島米同　代四十壹匁八分

金　壹兩に付　代五十六匁三分三厘

錢　壹貫文に付　代八匁八分

舊年來至て米價下落にて、市民都て迷惑なるにより、公邊より又直段引き立べき御沙汰可ㇾ有ㇾ之を見込、正米幷に帳合米數萬貫持ものもあり、危踏て賣者も有りて人氣穩かならず、空米賣等を以て時々賣崩し相場を下落させ、買しむるものを損失させんと謀る者又すくなからず、仍ㇾ之右不正筋を以て相場下落させんとはかる者共召捕糺明せらる、依ㇾ之不正筋之賣買止むといへども、賣崩し損失せしもの買

持之者共を嫉む、然れどもいかんともなしがたし、玆に依りて肥後之建米を筑前に替んとたくむ、是は右買持之者多分肥後米を買しむる故、今建米を筑前に替る時は筑前米の勢ひ强くなり、肥後米是非二三匁引下る事必然成るを以て、舊冬已來建ものを替んと風評區々なり、依レ之當初相場右建替之風評を疑惑し、正米賣買相場人氣よりの多不景氣なる方にて、相場各舊冬より五六分程宛下落し、肥後米は一匁餘下落にて無二賣買一例よりも初相場さびし

但し建てもの相場、正月・五月・十月年に三ヶ度建替申候儀、濱方舊例ニ有レ之よし、今年より七十五年程已前、建もの中國なるを肥後に建替し例有りて、其後無レ之

右之通にて大問屋の分に損失多きもの多分有レ之て、人氣それに偏り、七歩は筑前、三歩は肥後と云ふを以て、遂に當正月八日又建てもの替しなり

筑前米壹石に付　代四十六匁五分

肥後米同　代四十九匁五分

中國米同　代三十六匁四分

金　壹兩に付　代

錢　壹貫文に付代

一　東西御奉行内藤隼人正樣・高井山城守樣御立會にて、先年其方共へ被二仰付一候御用金之儀、是迄年

年三朱宛之御手當被二下置一候處、此度御金繰ゝ有レ之に付、已來右御手當金被二差止一候、元金之儀は凡十ヶ年先其儘に被二差置一候、追而御沙汰も可レ有レ之趣、江戸より被二仰下一候間、其段承知致し、御受書差出し可レ申樣被二仰渡一、右之通被二仰渡一候、御用承り候町人共（凡二百八十人計りのよし）誠に存掛ヶ無レ之事にて一統當惑恐入候得共、即刻受書御取被レ成候而、兎角可二申上一樣無レ之、無レ據皆々調印仕、受書差出申候也、右之通江戸表にては當月四日、當地にては九日、一統之者、東御奉行所へ被二召出一被二仰渡一、仍レ之難澁之趣書附を以て融通仲間より願出候得共、御取上げ無レ之

一　今年三四月の頃より雨繁く、五月に至り中旬より大雨度々有レ之、十八九日五畿內邊大水湛植付け苗等水下たに相成り、河州邊苗植直し等多分有レ之、六月に至り中旬肥後。筑前。筑後洪水有レ之、筑前。肥前蟲付も有レ之、北國。東國筋も所々大水有レ之といへども、格別の洪水は無レ之、右所々損亡之場有レ之に付、米價引上ぐべき勿論之處、大阪濱方在米多く、昨卯年五月之有米とは、四十三四萬石も多く、其上所々近年之國團米、追々入津有レ之、仍レ之米價下落なり

五月七日夏米建替相場

加賀米壹石に付　代四十九匁五分

米子米同　代三十八匁四分

筑前米同　代五十壹匁

肥後米同　代五十三匁八分

廣島米同　代四十七匁三分

右之通なり、其後追々下落に及ぶ、七月五日六日ごろ、加賀米四十三匁五分、肥後米四十六匁五分位

當辰六月晦日濱方有米二百二萬四千六百十俵、去卯六月晦日同所有米百六十六萬千四百八十俵

殘三十六萬三千百三十俵增米

六月中旬より快晴打續炎暑强く、七月中旬迄氣候よく、大抵豐熟にも有レ之べく聞ゆるを以て、又々相場下落に及ぶ、其上今年又銀之吹替被二仰出一

一　金銀之儀元文之度吹替之儘に而、小判・一歩判は先達而吹直し被二仰付一候處、銀之儀も年を經候に付、折銀・燒銀・錆銀又は極印相分り兼候も有レ之候間、此度吹直し被二仰付一候、兩替等是迄之通相心得、無レ滯可レ致二通用一候、右引替等之儀は、追而可レ及二沙汰一候

右之趣國々へも、可二偏知一者也

右之通被二仰出一、元來銀之儀も近年拂底に相見え、融通も澁滯之氣味有レ之、此儀は近來豐州邊・四國・九州邊銀札不融通にて、市民正銀を望み、其國之札場々々へ銀札を正銀と引替る事多く、依レ之銀札場正銀拂底し、引替滯る時は、其一國のみならず隣國迄も騷動に及び、此以後銀札之融通不レ宜を以て、其國々手當として、正銀を大阪表へ買入之市民へ額談に及び、窃に取入用意をなす、此下し銀も莫大な

る事にて、自然と大阪も正銀拂底と見え、其上近年打續米價下落により、諸侯方取入銀薄く、依ㇾ之市民よりの借財銀も返濟滯り、又は利下げ等之難澁も有りて、市中惣體不融通之聞え有り、仍て銀拂底にて位貴く、彌々米價位賤しく、五十目の物は四十匁に成る道理あり、其上七月中旬に至り、公金の御拂有り、當時二萬五千兩（高八萬兩といふ）御拂金被二仰出一、此代又銀上納被二仰出一、仍ㇾ之猶々銀、融通之氣配不ㇾ宜、七月十七日頃には、加賀米四十匁二分位、肥後米四十六匁位、筑前米四十三匁位、雲州・秋田并津輕・庄内米等に至りては、各々廿七、八匁位也、全く銀拂底にて位貴く、米穀潤澤にて位賤しと見えたり、尤右之通銀拂底なれども、既に此度銀の吹替被二仰付一、行々の所は銀潤澤になるといふ考あれば、左のみ當時米價下落に抱り候儀は無ㇾ之儀なれ共、眼前の道理によつて下落に及ぶと見えたり、右之通下落に及ぶ事は、安永八九年このかた無ㇾ之、天明五六年に至りては、海内不熟にて一統飢饉ありて米穀金玉の如く、一石代二百匁・三百目といへども買もの無ㇾ之、漸く公儀の御救ひ仁恩を以て飢渴を助りし事其前にしるすが如し、然ば市民兼て其の覺悟のため、かゝる下落の時節分限相應買貯置も可ならん、然る時は少々相場の引立にも相なるべきなれども、去る戌年市中へ仰付られし御用金、今以て御下げ無ㇾ之、年々被二下置一し三朱之御利足も、當二月御差止被二仰出一、是等より何程米價下落に及びても、市民買持氣配無ㇾ之、彌々相場下落に及ぶなれ、今年銀之吹替有ㇾ之て、天下金銀潤澤になりなば、少しは金銀之威光劣り米穀貴くなるべし、何れ米價卑しくては、諸侯方も市民迄も迷惑ならん、乍ㇾ恐今新

金銀を以て、右之御用金を御下げ被ﾚ遣、其分限に應じ、又買持被ﾆ仰付ﾆなば、決て相場引立べき儀勿論ならん、然れども先年の如くおしなべ强て嚴しく被ﾆ仰付ﾆては、又金銀の用差支諸侯方はじめ市民迄融通滯り、米價の引立とならず、自然被ﾆ仰付ﾆなくても、其含だにあらば、是非相場動くべし、然れば先年被ﾆ仰付ﾆ候過半通りの買持にても、決して相場引き立つべし、大阪は海內の大都會にして、諸國に超え萬貨自然とあつまる土地にて、諸相場も大阪を第一とす、然るに大阪金銀拂底にては、萬貨捌けがたく、おのづから相場も下落に至るなり、此下直の相場諸國に流布して、都て萬物賣捌不景氣に相なる道理なり、白川公之庶有編にしるしおかる通り、大阪衰微すれば海內の衰微とならん、今難ﾚ有泰平盛隆の世にあひて、別而大阪の風儀花奢に押移り遊樂に耽り、市民豐饒になるやうに見ゆれども、內實は前々と違ひ、金銀多分減じ齟齬する事多し、近世驕りならずして、莫大の金銀を借し失ひ退轉せし家又すくなからず、四五十年前とは、大阪の集り金銀も過半減じたるべし、實は前々と違ひ、衰微の方なるべし、長崎は海內の又別世界にて、一廓の都會にて、年々唐藥の貨船茲に入津して繁昌他に超えたる土地なれども、金銀之融通は大阪を以てし、渡來の貨物も多分捌き方は大阪を第一とする事なれ共、大阪衰微し金銀の融通滯る時は、自然と貨物捌け難く、近來唐藥の貨物捌けがたきは、大阪衰微の道理もあらん歟、仍ﾚ之渡來の貨物直段安く、仍て又貨物も年々麁卑になれり、いづれ時世なればいかんともなしがたし、只々大阪衰微せざるやう願ふ事なり、米穀の事も前に記す如く、

安永年の頃迄は、其以前より大抵豐凶十ヶ年おしならして六十目なれ共、天明五六年の頃海内飢饉し、諸侯士民とも飢渇に及びしより、其後諸國とも年々山澤をひらき沼地を埋め新田ひらけし事、何十萬石ともはかり知るべからず、仍之海内豐熟の聞えある時は、一時に諸國津々浦々迄米穀の入津多く、凡四五十年前迄は此事稀にて、凶年といへば市民迄甚おそれ、我等幼少の時は穗に穗も咲けよと、只豐年を幼稚迄も願ひしなり、然るに右之通三四十年このかた、諸國新田ひらけ、豐熟といへば津々浦浦米充滿し、五十年前の凶作にて、六七分の作といふも、當時にては十分の作にあたれり、然れば諸侯方五十年已前之經濟を以て、當時も同樣と心得、勝手向取行ひては、萬事齟齬するべし、前文之通天明年飢饉によりて、市民迄も私の圍米ありて、三都市中の備米も出來、又諸國とも年々圍米被仰付、當時一兩年飢饉有りても、士民飢饉に及ぶ程の事も有るまじく、右夫々飢饉手當の圍米潤澤なるうへ、豐作打續ては、彌々米穀海内に充滿し、直段下落に及ぶ道理にて、幾萬々年も同樣なるべし、然れば諸侯方勝手作廻も、五十年前米たての算用を以て、當時は勿論此行末とも取賄ひありては、年年算用不足たち、國家難澁あるべし、當時は一石代卅匁位と立て、一萬石之勝手なれば五千石・千石の暮し方ならば五百石とたて、萬事省略し改革の儉約をたてざれば、暮し方齟齬すべし、又昨・今年の如く米穀潤澤にては、年々豐熟ならんとんじ、自然と米穀を麁末におもふ故、必遠からず凶年飢饉有るべし、近世は人氣さかしく天理を守らず、無理を行ふ事有る故、天も物事考の通にはなさずして、

反する事ありと見ゆ、諸民豐熟をうとんずる氣あれば、猶々豐熟打續、御買米等被ニ仰付ー、種々人力をつくされても、理の通には不レ行、可レ怖は此うらにて、不レ遠凶年有らば、其時又豐作を辭ふてもしるしなく。打續凶年有りて、天地人に反し災害あるべし、然ば兼て其覺悟有りて、分限相應圍米ありたきものなり、尤寛政年、大阪市中飢饉の備として、其分限に應じ圍米被ニ仰付ー、三郷手當米の土倉へ納米被ニ仰付ー、或は其者之手元に諸藏米之切手を以て圍ひ、其分は不レ殘公儀より切手に封印を付られ、其者へ預けらる、右市中圍米有るを以て、別段自分一己の圍には及ばざると思へども、大阪市中にても數萬人の事にて、自分一家の飢餓は無レ之ても中分以下貧民への施しは迚も行足らず、飢饉兩三年も續かば、猶以不足すべし、今市中銘々圍ひ米は、私一己の手當と思ふもの有りて、不足には思ふべからず、是は心得たがひにて、市中一統の手當米は義倉と同じく、自然飢餓に及ぶ程の事あらば、たがひに救ひ施すといふ御趣意なれば、自分一己の手當ならず、其覺悟あるべし

爲替三井組年番
三井次郎左衛門
同十人組年番
荒木伊左衛門
兩替屋
井筒屋善三郎
島屋　吉兵衛

一　當七月、江戸町中へ被ニ仰出ー書付

石川屋庄兵衛

一此度吹直し被二仰付一候新銀引替御用被二仰付一候間、吹直し金同樣相心得、日々引替銀納方相增候樣出精可二相勤一候、右御用相勤候に付而は、金と違ひ銀は嵩取候品故、日々銀座之納方、其外諸雜用可二相掛一哉に付、格別之譯を以て引替銀納方百目に付、爲二諸入用一銀三分づゝ被レ下候間、其旨可二相心得一候

一此度吹直し被二仰付一候銀之儀、來る廿日より追々引替可レ遣、尤有來り候銀も、追而及二沙汰一迄は、新銀取交請取方・渡し方・兩替共、無レ滯通用可レ致候、上納銀も可レ爲二同前一候事

一引替銀之儀は、丁銀・小玉銀無二差別一取交引替可レ遣候、勿論折れ銀・燒銀・錆銀幷極印相分り兼候共、勝手次第に可二差出一候、是又無二差別一引替可レ遣候條、來る廿日より銀座役所初め、別紙名前のもの共へ差出し、引替可レ申候事

但し丁銀差出し、小玉銀に引替、又小玉銀差出し、丁銀に引替候儀も、勝手次第に候事

一武家方其外共、町人へ相對に而申付、左之名前之者共方へ差出し、引替候儀勝手次第に候事

一引替に可二差出一丁銀・小玉銀共、員數相知れ候事に候間、貯置不レ申段々引替可レ申候、若又貯置引替不レ致候者、相知れ候はゞ吟味之上急度可二申付一候

吹替新文銀



一　大阪にて金小判・一歩判・新金引替之儀、市中へ被二仰渡一候御觸

一　此度吹直し小判・一歩判之儀早々引替可レ申旨、觸書差出し置、然處過分金高一時に引替に向候而は、混雜可レ致事に付、新金に可二引替一貯金高之分、早々銘々より封書に認め、居所年寄迄可二差出一候、右金高見合日割を以て引替候間、其町々年寄共儀も、右封書取集め、封之儘當月中奉行所へ可二差出一候、

夫迄にも成る丈け引替相進申候樣可ㇾ致候、且又商賣筋等日々取引に付、右封書之金高增減に及候共不ㇾ苦候條、聊無㆓差支㆒取引可ㇾ致候

但し兩替座之分は、十人兩替屋へ封書取集め候而差出候樣被㆓仰付㆒候間、兩替渡世之分、町々年寄手前に而、封書取集めに不ㇾ及候事

七月十七日

右の通被㆓仰渡㆒候といへ共、諸侯方は勿論市民たりともわが身上貯金高他へ其員數もらすべきものの一人も無ㇾ之、自然無ㇾ據書出すならば、是非員數を減じ、不貯の趣に書出す事眼前なり

右の御觸より、都て金銀を隱藏するやうになり、常時暫くは金銀不融通になり迷惑せし也、仍ㇾ之御觸の注意之通にはならず

一　八月五日

加賀米壹石に付　代三十五匁二三分

筑前米同　代三十七匁二分

肥後米同　代四十目

中國米同　代三十一匁二分

廣島米同　代三十三匁二分

秋田津輕米同　代二十五匁六七分
米子米同　代三十一匁二分
肥前米同　代二十九匁九分
金　壹兩に付　代五十九匁四分七八厘
錢　壹貫文に付　代八匁八分六七匣

八月十三日御觸

一　慶長金・武藏判・享保金・元祿金・乾字金、右古金類上み方筋には所持之者も有レ之趣に相聞え候、此度御買上有レ之候間差出し可レ申候、尤御買上步合之儀は、別紙書付之通相心得、早々月番之奉行所へ可ニ差出一候、若貯置不ニ差出一後日に相知れ候はゞ、急度可レ令ニ沙汰一候

慶長金
武藏判
享保金
百兩
此御買上代金百六十五兩　但御定步合、外に五兩充、此度諸入用として増金相渡候積り
元祿金百兩

此御買上代金百三兩二步但右同斷
永百卅八文二步五厘四毛二絲、此銀八匁二分九厘三毛四絲
但し六十匁替外に五兩迄右同斷

乾金百兩
此御買上代金七十八兩三步但右同斷
永百六文八步九厘五絲、此銀六匁四分一厘三毛四絲
但し六十匁替、外に五兩迄、右同斷

八月十七日御觸
一　此度吹直し候丁銀・小玉銀を以て、上み方筋是迄之丁銀・小玉銀引替候儀

高麗橋三丁目爲替三井組
御用取扱所
平野町二丁目爲替十人組
御用取扱所

右兩所に而爲取扱候間、明十八日より右兩所之内へ差出、早々引替可申候、尤引替方共外之儀共、當七月に相觸候通可相心得也

八月十七日

一米價八月より九月十一日頃迄大抵不レ替、然れども少々づゝ高直になり、加賀米四十三四匁、肥後米四十六七匁、筑前米四十三四匁、然る處九月十七八日頃より、諸國不作の唱有レ之、俄に日々相場引上げ、廿日に至り加賀米五十一匁、肥後米五十六匁、筑前米五十二三匁、其後又引下げ、廿八九日頃は各々八九匁づゝ下落し、加賀米四十二匁五分、肥後米四十六匁なり、九月廿八日肥後新米初札六十匁、筑前米五十一匁也、此六十目は祝儀札なり

十月十七日、新穀相場建替

肥後米壹石に付　代五十六匁五分

筑前米同　代五十三匁六分

中國米同　代四十一匁五分

廣島米同　代四十五匁七分

昨卯年冬建物肥後米之所、當春正月に至り、筑前に建て替り、濱方衆人、當冬之所建物の入札まちまちにてよりかね候へ共、兎角筑前出米方不レ宜、又當春の肥後のたてかへ古例にも稀なる事にて、其後たて替へ之功も無レ之旁々にて、當冬之處又肥後に人氣かたより建て物となる、今十二月上旬より、少々づゝ相場引上げ中旬に至りては肥後米五十八九匁六十目餘になれり、依レ之濱方の中より、多分肥

後米買入候により、建物のみ追々上り、下旬に至りては六十二匁七八分なり

十二月廿五日納相場

肥後米壹石に付　代六十二匁五分

筑前米同　代五十五匁

中國米同　代四十三匁五分

廣島米同　代四十九匁

金　壹兩に付　代

錢　壹貫文に付代

當年濱方越年有米二百八十一萬九千二百卅俵

昨卯年ゟ拾六萬七千四百三十俵增米

文政四辛巳年正月四日初相場

肥後米壹石に付　代六十二匁五分

筑前米同　代五十四匁四分

中國米同　代四十二匁一分

廣島米同　代四十九匁五分

・金　壹兩に付　代五十九匁七分五厘
錢　一貫文に付　代八匁八分六厘

近年米價下直にて、諸家方も迷惑せられ、又濱方も損失多く、仍て米價引立之御主意等も可ㇾ有ㇾ之風評、舊冬より頻々有ㇾ之に付、濱方之中五六人、其含を以て諸國米之內肥後・筑前・廣島をより〳〵買入、別て肥後米を買入、凡七八萬石も有ㇾ之旁々にて、建物舊冬より頻に高直になり、此建て米諸藏米に超え、高すぎては帳合賣買にも構ひ、又肥後のみ買〆候問屋共をも憎み、舊冬より昨年春の如く、建てものをかへんと企、濱方も喧しく、遂に正月八日より中國米を建てものにせり、中國米建てものは七十ヶ年も無ㇾ之事にて珍らし、是等も右の如く肥後にては、相場高すぎる故なり、尤筑前米にても可ㇾ有ㇾ之處、筑前藏近年出米の事に付渡し方不ㇾ宜趣を以て無㆓其儀㆒中國になれり、廣島藏は建て物になり候儀、先年より濱方へ斷に及び有ㇾ之、自然建てものに致し候儀は、濱方之勝手により致候事にて、此方に頓着無ㇾ之、然ば建てものに致候とて、肥後・筑前等の如くに、祝儀銀など遣し候儀は無ㇾ之と申事にて、此事も四藏のうち廣島は建てものゝ論無ㇾ之

正月九日、但し八日庚申にて休日
中國米壹石に付　代四十四匁六分
肥後米同　代五十九匁六分

筑前米同　代五十三匁五分
廣島米同　代四十八匁五分
金　一兩に付　代
錢　一〆文に付代
右建て替後より中國米四十六七匁、肥後米六十匁二三分になれり、右之通建てもの替りに付、肥後米買〆のものより、同米を少々賣出し掛候處人氣不ㇾ宜、五十八匁前後なる故賣方をやめ、都て又買入候氣配に成り、無ㇾ據うるもの無ㇾ之、買ふものも無ㇾ之、是より肥後米のみ相場すはり六十三匁となり賣買無ㇾ之、四月下旬より建てもの中國米はじめ段々下落し、中國卅七八匁より四十匁前後、筑前四十八九匁、廣島四十四五匁と成る、然共肥後米のみは買〆のものより行先之勝負をはかり、一切賣出し不ㇾ申故、やはり六十二匁にて、相場所賣買無ㇾ之
五月七日、例夏米相場建替
加賀米一石に付　代四十六匁五分
米子米同　代三十七匁五分
筑前米同　代五十匁二分
肥後米同　代六十二匁

廣島米同　　代四十五匁七分

中國米同　　代四十目

今年も春來天氣續よく、雨稀にて菜麥とも出來よく、是等之風評も有レ之に付、兎角米價不ニ引立一、且又近年諸家方米價下落に付ては、取入銀薄く、勝手向作廻六つかしきに付ては、無レ據空米出切手を以て借財等有レ之、既に先年筑後久留米侯藏屋敷空米之事に付、濱方市中迄も難澁に及び、公邊に訴へ候上年賦銀に相成り、夫れすら一兩年にて年賦返濟斷に及び諸人難澁せり、右筑後藏のみにあらず、肥前米子藏等はじめ、諸家にも有レ之趣にて、今公訴に及びても、右筑後藏の例を以て落着有レ之時は、銀主難澁に及ぶ事勿論也、然ば正米出切手といへども、容易に銀入替等にも出來難くといふを以て、自然と正米相場に拘り、下落に及ぶ事必然なり、仍て相場の引立にも相成るべき旨を以て、當二月諸家方留主居召出され、左之通嚴しく被ニ仰渡一、市中へも共趣相觸らる

一　大阪表諸家藏屋敷拂米之儀、廻着米高之外空米を書加へ、有米高ゟ過米之切手を出し相拂、且廻米都合致し度節は、右過米切手の分買戻し候類有レ之由相聞え、正米直段幷自餘之切手米賣買に相障り、甚不レ宜に付、堅く令ニ停止一候之旨、去る巳年相觸候處、近年に至り諸家藏役人共、心得違不束に取計方有レ之哉、米切手之出入有レ之、米渡方差滯候趣相聞え候、右之通に而は切手米之取引情弱に而、商人共賣買を危踏買持之見込薄く、切手之位惡しく成り、正米直段へ差障り候、無レ謂藏々ゟ米渡方差支させ候

へば、則停止之空米に相當り候間、此旨急度可ニ相守一候、若違犯之輩有レ之においては可レ爲ニ曲事一者也、右之通明和七年相達し、其後度々相觸候趣も有レ之候所、近來切手米渡方兎角差滯候由相聞え、に右付而は米直段へも相障事に候間、以來決而渡し方不レ滯樣役人共へ申付られべく候、若此上右樣之次第も有レ之においては、及ニ沙汰一候儀も可レ有レ之條、可レ被レ得ニ其意一候

右之趣從ニ江戶一被ニ仰付一候條、三鄕町中可ニ觸知一候也

右の通諸家藏屋敷へ被ニ仰渡一、市中一統難レ有歸服致し候へども、前文之通筑後藏之例も有レ之故、何となく疑惑之氣配も有レ之、格別米價の引立ともならず、全くは近來米之出方多き故、大阪は勿論、灘・兵庫・堺邊までも米充滿せる故、自然と相場下落なり、又濱方にもはた賣繫賣と唱へ、帳合米多く賣込、正米を賣崩し候ものも多分有レ之、彌々相場の引立とならず、依レ之左之通被ニ仰渡一

一　近來切手米渡り方兎角差滯候由相聞え、右に付而は米直段にも打障り候事に候間、以來決而渡方不レ滯樣、諸家藏屋敷幷市中一統へも相觸候趣申渡候、然る處觸後追々下落に及、右は全く米直段引立之爲めに有レ之候へ共、諸家米切手之趣意のみの儀と相心得居候哉、既に一昨年卯年端賣致し候もの、吟味之上嚴しく申付置候儀忘却致し、矢張はた賣致し候者、又繫賣と唱へ帳合米多分賣込置、正米を賣崩し候もの有レ之哉に相聞え不埒の至に候、彌右體のもの有レ之においては召捕吟味之上急度可レ令ニ沙汰一候、尤此方ゟ人を廻し立聞せ候間、右體之者無レ之樣、仲買之ものへ可ニ申聞一候、猶又其方共も兼

而心を用ひはた賣等、其外相場賣崩し、直段に障り候儀致し候者有レ之候ばゞ、早々可ニ訴出一候、若等閑に致し置候はゞ、急度可レ及ニ沙汰一候

右之通濱方年行司共へ被ニ仰渡一、依レ之一と際直段引立つべき所、却て濱方氣配不レ宜、彌々下落に及べり、全くは相場之下落より起り、商ひの儲けすくなき故ならん、尤はた賣・繋賣といふも、濱方商人の術にて此事一切止みては、又濱方賣買の勢ひぬけて不景氣にならん、端賣つなぎ賣といふも濱方一ッの道具なり今諸國之内變動之風評あらば、其時は又はた賣つなぎ賣を以て買ひ崩し、又一と際相場引立る事も有りて、高潰れに潰る事も有りて、正路一偏之賣買にては、思入れに買しめるものも無レ之、依レ之端賣繋賣買とも急度停止せらるにては無レ之、此趣公邊へも濱方年行司ども召され教諭せらる、仍て

御請書

一　近年切手米、諸家之御渡方兎角差滯候由、達ニ御聽一候に付、御觸渡之處、仲買共之内には、端賣又は繋賣米と唱へ、帳合米多分賣込、正米賣崩し候者有レ之哉に被レ爲レ及ニ御聞一候間、右體之儀無レ之樣、仲買之もの共へ得と可ニ申聞一、猶又私共儀も兼而心を付け、直段に障り候儀仕候者御座候はゞ、早速可ニ申上一旨被ニ仰渡一奉レ畏、則仲買之者共へ急度申聞置候、然る處仲買共之内には、正路之繋米も不ニ相成一樣、心得違候者も有レ之哉に被レ爲レ及ニ御聞一候間、是迄仕來候繋米幷に正路之賣買之儀は、御差構ひ無レ之間、心得違無レ之樣、其段仲買之者共へ篤と申諭候樣可レ仕旨被ニ仰渡一奉レ畏候、早々一

統へ申諭候樣可ㇾ仕候、仍而御請奉ㇾ申上ㇾ候、以上

文政四巳年四月十三日

一　當春より雨天稀にて、五六月より土用に至り旱天にて、奥州邊植付後雨なく、別て關八州都て旱損多く、江戸大渇水にて、市中日用呑水も無ㇾ之程之儀にて、屋敷々々堀ぬき井戸の水をもらひ凌ぎ候へ共、是さへ渇水致し、自由に飮み申事も出來がたく程の儀にて、總州など水一升廿四五文位、市中之賣水一荷三匁位にて不ㇾ怪候難澁之趣、奥州之内南部・秋田邊は、隨分出來宜趣屋敷より申參る、中國路・西國邊・四國など隨分無事、別て九州邊皆作並宜き趣、五畿内天水場大和・和泉邊其外山田の分皆旱損、攝・河無事、旁々にて兎角米價引上げ不ㇾ申、尤關八州函根邊迄旱損之聞え有ㇾ之、仍ㇾ之追々江戸より註文有ㇾ之といへども、大阪下り米にては、何角と上荷はじめ舟かゝり費用も多き故、江戸より直船を以て灘・兵庫・下之關・堺邊其外津々之有米を買積に致し、江戸へ積取候故、兎角大阪有米引け方薄し、仍て無ㇾ據やはり下直なり、六月中旬江戸は金一兩に下り米八斗四五升、奥州幷地米九斗位、併し右江戸高直之趣を以て、六月十四・五日・廿日頃迄、加賀米四十六七匁前後、筑前米四十八匁前後之所、追々引上げ、七月下旬、加賀米四十九匁・五十日、筑前米五十一二匁位、然る所江戸八月四日晝頃、東北風吹出し段々强く、暮後頻に吹、夜九つ時頃漸く鎭り、去る安永三年午八月廿四日の大風此かたの事なり、しかし其節程には無ㇾ之穩に有ㇾ之候、然れども此勢ひに乘じ、八月五日より八日九日頃、加賀米五十

三匁より六匁、筑後米五十六匁より七匁七八分迄引上げる、然る處右之大風、西國邊は灘・兵庫邊まで吹き、西國・九州邊・五畿內邊、格別風之痛み無ㇾ之趣を以て、又八月中旬は右之直段より一二匁も引下る、尤江戶は高直なれども、大阪は有米多き故歟、相場不ㇾ引立、但し肥後米は前件之通の事にて賣買無ㇾ之、右之通諸藏米皆高直に引上候へども、やはり肥後米相場六十二匁なり

長州下之關邊、八月十四日朝より十五日まで大風のよし、仍ㇾ之八月中旬後も、少々直段引上げ候得共、格別之儀にても無ㇾ之候、然れども右關八州大旱、西國筋大風にて何となく人氣引立、十月五日肥後新穀初札七十匁五分、筑前六十五匁三分、廣島六十一匁位

十月十七日例新穀相場建替

中國米壹石に付　代五十六匁一分

肥後米同　代六十八匁五分

筑前米同　代六十五匁三分

廣島米同　代六十一匁

今年も建てもの中國なり、近例建てもの肥後にては高直すぎ、筑前藏出しの評判不ㇾ宜、旁々にて中國なれども、中國米は二ッ半俵にて、帳合相場には勝手不ㇾ宜趣を以て、傍筑前米を以て立用致し候趣なり、

翌十八日肥後米六十八匁五分、筑前米六十匁四分、中國米五十二匁、廣島米五十六匁一分、然る處前文

之通關八州都て大旱損にて、江戸有米拂底にて、灘目・兵庫・泉州邊・下之關邊有米、皆江戸買積相成り、大阪有米、引け方すなく、依レ之自然と有米多く、相場引立不レ申、茲に於て日々米價下落に及び、十一月下旬、中國米四十八匁四五分、肥後米五十九匁餘、筑前米五十七匁七八分、廣島米五十三匁位なり

十二月廿四日納相場

中國米壹石に付　代四十七匁五分

肥後米同　代五十九匁

筑前米同　代五十七匁

廣島米同　代五十二匁

金　壹兩に付　代六十一匁九分八厘

錢　壹貫文に付　代九匁二三厘

當年濱方越年米、二百七十八萬五千八百俵、昨辰年より、三萬三千四百三十俵減米

一　明和二年之頃より、江戸幷奥州・伏見・水戸・長崎等にて、追々新錢吹出し被レ仰付、又明和五子年四月より、江戸において眞鍮之四文錢被レ仰付、年々一萬貫文づゝ吹方被レ仰付、段々世上錢潤澤になり、明和已前は、錢相場凡十五匁位の所、天明六七年之頃に至りては、八匁六七分になり、下民迷惑に及び、前々より錢直段にて賣買せし貨物も銀直段と成り、都て錢極めのもの、又貨錢を以て今日を送る

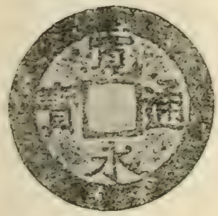
備夫のもの、錢直段下直にて困むに付、天明八申年四月に、右四文錢七歩通、吹方減少せられ、又此冬十月に、更に吹方差止められ、其外諸國にて前文之通吹方被二仰付一候錢座悉く相止めらる、然る處今巳年又右眞鍮四文錢吹出し被二仰付一

一　眞鍮錢吹方先年被二差止一候處、遠國之内には未拂底之場所も有レ之趣に付、猶又此度吹增被二仰付一候間、國々において彌無二差支一可レ致二通用一候

巳十二月

右の通被二仰付一、仍レ之錢相場不景氣にて、賣買八匁八九分にて、下民又迷惑に及ぶ、又新金銀も追々吹立被二仰付一候、古金銀と引替候樣仰付らる

眞鍮新四文錢





〔原本此所端ナ更メテ題名著者名アリ〕

文政五壬午年正月四日、初相場

中國米壹石に付　代四十八匁二分

肥後米同　代五十九匁

筑前米同　代五十七匁六分

廣島米同　代五十二匁

金　壹兩に付　代六十二匁二三分

錢　壹貫文に付　代八匁八分二三厘

正月八日、例又建てもの立替なり、前年にも記す如く、肥後米にては相場高直すぎ、又筑前にては氣受も不ㇾ宜、旁々舊年の盡中國に相成り、四十七匁二分にて格別高下なし、然る處新金銀手馴見なれ候ための御主意とし、大阪市中・京都市中富家之もの共へ、新金銀を以て貳千兩或は三千兩、公儀より御かし渡被ㇾ仰付ㇾ利足八朱づゝ年々上納可ㇾ致趣被ㇾ仰渡ㇾ大阪融通仲間はじめ、先年御用金被ㇾ仰付ㇾ候

者共、都て凡二百軒計りなり、先年被二仰付一候御用金は、年々被二下置一候御利足年三朱づゝにて、此御下げ金も、去る辰年一統御差止めに相成り、元金共儘御かり上げに相成り、御下げ之儀は追て御沙汰可レ有レ之趣にて、今年に至り未御下金無レ之、此度之御かし渡は一統難レ有承知致候へども、御用金之御利足は不レ被レ下うへ、此度利足として八朱づゝ納め候儀は、大に迷惑致候趣にて、歎訴有レ之といへ共御用捨無レ之、仍レ之年々八朱づゝの御上納に相成り、追々右之金市中之者共へ御貸渡有レ之、右御貸渡し之儀有レ之により、金銀之融通宜きを見込み、是より米價にひゞき、正月廿二三日より、相場引立中國米四十八匁四五分の所、俄に五十匁四五分に成り、閏正月二十七日は、五十三匁六分、肥後米六十四匁一分、筑前米六十一匁三分になれり、尤昨巳年關八州旱損にて、江戸買積も多き故也、其後に至りては、二月中頃より又少々づゝ下落し、中國米五十一匁八九分、肥後米六十二匁七八分なり、四月十八日入梅にて五月に入、頻に雨天續きといへども、諸國ともに洪水といふ程の出水も無レ之平穩なるにより、五月下旬より肥後米五十七匁五七分、中國米四十九匁五十匁位にて、六月土用中炎暑強く順氣よく、依レ之六七月の頃、肥後米五十四五匁、中國米四十三四匁なり、九十月の頃、又一匁程宜敷、今十月十七日、例新穀立替相場

中國米壹石に付　代六十匁一分

肥後米同　代六十六匁五分

筑前米同　　代六十五匁一分
廣島米同　　代六十匁一分
今年も又中國米相場建て物なり、元來中國米は、二つ半俵にて、八斗だてにて本一石にて無レ之故、建物にては濱方勝手不レ宜、然れ共肥後米にては直段高過、筑前米は藏出之砌意地强、不勝手なる事共有レ之、問屋・仲買之氣受不レ宜、右等之事共にて無レ據中國米を建物とせしなれ共、帳合相場には手數入面倒なり、此儀中國藏より藏元へ掛け合有レ之、昨巳年より濱方心見として、始而外藏同樣三つ俵になれり、內實本一石なり、廣島米は三つ俵にて九斗九升なり、依レ之大抵中國も廣島米と直段同樣になれり、然れども建てものゝ威光と、少し升目の違にて、三四匁直ひらき有り、右新穀初相場、凡其藏々之初入札之祝儀直段なり、翌十八日中國米五十九匁一分、肥後米五十八匁七分位なり、是正當之直段なり、此後極月に至り高下なし
十二月廿五日年內納相場
中國米壹石に付　　代五十九匁
肥後米同　　代五十九匁五分
筑前米同　　代五十八匁
廣島米同　　代五十四匁

金　壹兩に付　代六十三匁四五厘
錢　壹貫文に付　代九匁二三厘
當年濱方越年米、二百五十五萬八千二百八十五俵
昨巳年より二十二萬七千五百七十五俵減石なり
先今年大抵諸國共平穩にて、水旱の禍無レ之と雖も、今年四月より五月に至り、雨繁く苗植付の頃にて水痛み有レ之、國所によりて二度苗植直す場所も有りて、惣體にては苗に痛み有りて草たち不レ宜、依レ之又實入も薄き方なれば、今年は上作とも言ひがたし、然れば米價引立申べき年がらなれども、今年十月諸家方へ被二仰付一候は、去る文化七八年、大阪廻米之内二歩通減石登せ被二仰出一、其二歩減石米は其國々にて圍ひ持可レ申、左候へば又銀作廻不レ宜、迷惑せらるゝ方は、右糶圍米を引き當、御銀無利足にて拜借被二仰付一候、此拜借金今年より七ヶ年之間、年割を以て返上納被二仰付一候、依レ之右是迄年々詰め替圍候、糶米勝手に賣拂候樣被二仰出一、此圍米も諸家にては夥しき事故、追々大阪へ入津有レ之候はゞ、大阪古米至て多く相成る道理との見込ある故、今年も自然と米價引立不レ申、連々下落す、又今年右之通雨繁く雨濕を受く、其後土用中炎熱を受け、九十月之頃は、霍亂症の如く卒然として大腹痛し、暴吐暴瀉四肢厥冷し、脈絕るの病流行し、三日を待ずして死するもの多し、參附四逆五苓葛根湯等を以て服藥すれども一人も治せず、霍亂にあらず、痢病とて其藥を用ゆれ共痢病にあらず、只雜病

にて、醫師多く人をころす、三都之内大阪至て此病多し、十月に至り自然と止む、京都鎌田碩庵老より申來るは、其病發より頻々人參入本方之敗毒散を用ゆれば、百人之内一人もあやまちなしと申來る、人參は御種かんとうの類にてよしとあり、我親族多分用ゝ之其病一人もなし、猶後の考にもとて玆にしるす

文政六癸未年正月四日初相場

中國米壹石に付　代五十九匁四分

肥後米同　代六十匁四分

筑前米同　代五十八匁四分

廣島米同　代五十四匁五分

金　壹兩に付　代六十三匁七八厘

錢　壹貫文に付　代八匁八分二三厘

今正月建替も中國其儘にて六十匁より五十七八匁前後にて

五月七日例夏米建替相場

加賀米壹石に付　代五十二匁四分

米子米同　代四十六匁五分

筑前米同　代五十六匁一分
肥後米同　代五十八匁三分
廣島米同　代五十二匁四分
中國米同　代五十七匁一分

今年も春來天氣續きにて、別て四五月雨無レ之、五畿內渇水にて苗植付等も出來がたく、農民雨を祈り所々より水論有レ之、大和・河內別て旱强く喧し、又中國・西國筋・九州筋等は、時々潤雨も有レ之、草立も宜候へ共、關八州渇水にて、是又植付出來がたく、然る所五月下旬、武州利根川筋大雨にて大出水有レ之、又水害之場所出來、仍レ之都て江戶筋農民痛み、江戶より買註文等有レ之、六月五日六日頃より、頻に米價引立加賀米六月上旬中旬は、六十一匁八分、肥後米六十三匁一二分迄も賣買有レ之、六月中旬より又關東筋も時々潤雨、或は出水等も有レ之上、奥羽作並宜しき趣を以て、江戶表へ米船七八十艘も入津有レ之、依レ之米價も又段々と下落に及び、七八月に至りては、加賀米五十匁位、肥後米五十七匁八分、筑前米五十四匁四分、中國米五十四匁九分位なり、今夏諸國とも旱年にて、新地米等大に痛み、昨午年に見競べては、出來方減石にて、高直にも相成るべき處、濱方昨年米殘り多く、納屋もの迄も多き趣を以て、旱年にくらべては、米價高直ならず
十月十七日例新米建替相場、尤昨年之通中國建てものなり

中國米壹石に付　代六十八匁五分
肥後米同　代六十五匁三分
筑前米同　代六十四匁二分
廣島米同　代六十一匁一分
右は例新米初札祝儀相場なり、翌十八日
中國米壹石に付　代五十六匁八分
肥後米同　代五十八匁五分
筑前米同　代五十六匁五分
廣島米同　代五十三匁一分
右之通にて、十一月十七八日頃、諸方藏拂相濟候後より、追々相場引上申候、是は今年諸國とも旱損多く、別て五畿内大和邊大旱にて、京近國日用飯米潰し米多く、日々諸藏共出米相嵩み夥しく、肥後・筑前・廣島等十一月中出米二萬三千俵程づゝ有レ之趣にて、日々米價引上げ、十二月納相場
中國米壹石に付　代六十四匁前後
肥後米同　代六十六匁前後
筑前米同　代六十二匁九分

廣島米同　　代五十九匁五分

金　壹兩に付　代六十五匁三分五六厘

錢　壹貫文に付代九匁二分三厘

金相場、今正月六十三匁前後之所、來酉年日光御社參被ㇾ仰出有ㇾ之、依ㇾ之今五月中頃後より、連々高直に相成り、六十五匁前後なり

當年濱方越年米百八十二萬七千三百五十俵

昨午年より七十三萬九百三十五俵減石なり

三貨圖彙 遺考卷之三

草間直方輯錄

文政七甲申年正月四日、初相場

中國米壹石に付　代六十四匁

肥後米同　代六十五匁九分

筑前米同　代六十二匁八分

廣島米同　代五十九匁七分

金　壹兩に付　代六十五匁一分四厘

錢　壹貫文に付　代八匁九分七八厘

右米價元來昨未年諸國共旱損多く、既に昨十二月濱方越年米も、一昨年ゟは七十萬餘も有米減じ有レ之に付、今春來相場引下可レ申所、大阪舊年ゟ相場高く、諸國津々は安き方故、舊冬已來早春へかけ大阪納家米兵庫灘邊へ賣拂米入津夥く有レ之趣、其上奥羽邊昨年は平穏にて、追々江戸表へも入津米有レ之、旁々江戸筋へ引け方無レ之、大阪へ買註文無レ之、依レ之濱方賣買も無レ之、初相場已來格別之高下なし

一　今年二朱銀又吹改被二仰出一御觸

一　金銀之儀先達而吹直被二仰付一候へ共、二朱判手摺等に而、極印文字消え相分り兼、紛しく相見え候二朱判も有レ之趣相聞え、此度吹直し被二仰付一候、然處二朱判目方重き故、平日持運にかさばり、粗難儀之旨相聞え、其上遠國へ遣し候へば猶更之儀、仍レ之此度は一枚に付、目方七分づゝ相減じ吹直し申付候間、兩替等是迄之通相心得、無レ滯可レ致二通用一候、尤引替日限之儀は、追而可レ及二沙汰一候

右之通國々へ可二觸知一もの也

申二月

新吹二朱判　　重さ貳匁五厘



右之通三都へ御觸出し有レ之、依レ之金相庭二月九日十日頃は、六十五匁餘之所、十一日六十二匁位に相成り、五十九匁迄俄に相庭下落致す、然所御買金等被二仰出一、其後二十二三日頃より少々引上げ、六十二匁七八分・三匁位なり、全く右二朱吹増被二仰付一に依ての事なり、新二朱二百萬兩といひ、又風說有レ之、二月下旬江戶にて御買金二萬兩被二仰付一、尤上納古二朱を以て被二仰付一候

一　二月十四日、御番所より左之人數被二召出一、内藤隼人正様・高井山城守様御立合にて被二仰渡一は、大阪表古金銀引替之儀、是迄御爲替御用方三井組同十人組へ、當地之分被二仰渡一、追々正金銀被二差登一、市中賄金銀諸家方賄金銀等、新金銀と引替可レ申趣被二相觸一、是迄連々引替候得共、未殘金銀多く有レ之候へども、一向引替相進み不レ申、依レ之猶又新金銀追々被二差登一、引替候樣可レ被二仰付一に付、當所において右爲レ替御用開之外、新に此度十五軒召出し、引替取扱之儀申付候段被二仰渡一、則融通御用金株

一　一　一

一　一　一

一　一　一

一　一　一

右之外

一　平野屋五兵衛　一　鴻池庄兵衛　一　米屋喜兵衛

一　天王寺屋忠右衛門

都合十五軒之者へ被二仰付一候、尤右人數之内、本兩替株にて無レ之者六軒程有レ之、此者兩替賣買不レ仕候に付、平世金銀手馴不レ申、目利之儀無二覺束一候に付、此度之御用之儀御免相願候處、尤には相聞え候へ共、銘々縱兩替賣買不レ致候共、平世渡世何賣買致し候而も、金銀受渡し不レ致候而は不二相成一儀勿論之儀に候、左候はゞ右新古金銀引替之儀、受渡之振合を以て取扱致候に可二差支一儀、又は手馴不レ申

と申儀は一切有レ之間敷段御利解有レ之、依レ之皆々無レ據御請相濟申候、江戸表則三井組はじめ十五軒之者へ、右之段被ニ仰渡ー候趣、仍レ之市中へ今四月御觸渡

覺

一　金銀吹直に付、古金銀通用之儀、來る酉年二月迄は、只今迄之通新金銀一樣に可レ致ニ通用ー候、其以後は古金銀通用停止たるべく候間、古金銀所持之者は無ニ油斷ー早々引替可レ申候、尤御領御代官私領は領主地頭か申付、遠國に至る迄不レ殘候樣に引替させ可レ申候、若遠國幷渡海等にて、引替方不都合之場合は、其代官領主地頭にて、彌世話致し最寄引替所へ差出させ候樣可レ致候、以上

吹直し金銀引替所之儀

高麗橋三丁目　爲替三井組御用取扱所　平野町二丁目　爲替十人組御用扱所

豐後町　住友吉次郎兩替店

右三ヶ所にて取扱候段、先達而觸渡置候處、此度引替相增

今橋二丁目　鴻池善右衞門　玉水町　加島屋久右衞門

大川町　加島屋作兵衞　內平野町　米屋平右衞門

和泉町　鴻池新十郎　今橋二丁目　鴻池善五郎

吉野屋町　辰巳屋久左衞門　立賣堀四丁目　近江屋休兵衞

安土町　炭屋ナヲ　　今橋一丁目　平野屋五兵衛
梶木町　升屋平右衛門　　玉水町　島屋市兵衛
今橋二丁目　鴻池庄兵衛　　平野町二丁目　米屋喜兵衛
過書町　天王寺屋忠次郎

右之もの方にても爲ニ取扱一候間、右之内勝手之場所へ、古金銀差出し引替可レ申候、其外之儀は先達而相觸候通、可ニ相心得一候

申四月十一日

一　此度之金銀吹替、文政二卯年被ニ仰付一、同三辰年、銀も同樣吹替被ニ仰付一候、右新金銀引替之儀、最初より文政六未年十二月迄、凡引替高

一　金六百十五萬三千三百七十一兩三歩
但四百廿一萬八千八百九十兩一歩　江戸奥羽都て東國之分
百八萬兩　大阪之分
八十五萬四千四百八十一兩二歩　京都之分

一　銀十萬貫五百十貫七百目
但二千六百五十貫七百目　江戸之分

六萬九千九百六十貫目　大阪之分

二萬七千九百貫目　京都之分

右之通のよし、其後之所不レ知、猶又追々古金銀貯居候もの、早々引替候様毎度御觸有レ之候得共、引替兎角無レ數、仍レ之兩替方御役所へ被レ爲レ召、如何之譯に哉御不審有レ之、御尋有レ之候得ども、海內廣き事にて諸國有金銀何程有レ之哉計りがたく、兩替商賣は致居候へ共、右引替無レ數譯は何とも難レ申上、何分にも此上は兩國・四國・九州とも、引替之儀嚴しく其領主地頭へ御下知無レ之而は、引替之儀中中容易に進み不レ申趣申上候、尤元文年吹替有レ之、其砌古金銀とも皆慶長幷正德年之金銀にて、結構に有レ之に付、新金銀引替之儀も、其割合を以て格別に增金銀被レ下、古金百兩には新文金百六十五兩、古銀十貫目には新文銀十五貫目づゝ被レ下候、然れども新古金銀位之甲乙申たて候而、兎角それすら引替滯候へ共、何分眼前百兩之ものは、六十五兩增步被レ下、十貫目のものは、五貫づゝ被レ下候事故、人欲に引かさるゝ處も有レ之候而、兩三年之內に悉く引替り申候、此度之新金銀は、文之極印違ひ候のみにて、新古甲乙無レ之故、別に增步と申事無レ之、新古一やうに遣ひ申候而も、差支之儀無レ之故、下民相進み引替不レ申道理も有レ之、又新金銀は新吹之事故、形體きらめき、遠國下民之分も、眞僞疑はしく事も有レ之、旁々遠國の者は引替に出しかね可レ申、尤元文年吹替之節も同樣、下民疑ひ有レ之、只紛敷遠國など似せ金にて欺かれし事も有レ之而迷惑に及ぶ、夫故元文之新金銀をいやしめ交易滯り、依レ之錢

にての賣買多く、大阪へ登し候貨物之類、皆代物を錢にて遠國へ積取申候、依レ之元文二三年之頃は、錢相庭殊の外高直に相成り、壹〆文代卅四五匁之事も有りて、其頃嚴しく錢賣買之儀御沙汰有レ之、一貫文代三十匁を限り、夫より已上に賣候ものは、嚴敷咎め被二仰付一、兩替商賣之ものども大に難儀せし事有レ之、是等新文金銀眞僞をあやぶみ、錢は前文之通手馴見馴候而案內ゆゑ、新文金銀之代りには、皆錢にて取下げし候樣に相成り候事故なり、此度は昔と違ひ錢も段々と相場下落に相成り、元文之振り合にも參りがたく、旁々にて此度之新古金銀引替滯り可レ申哉、尤引替年限等被二仰出一、限過候はゞ金銀共潰し直段に相成候樣嚴命有レ之故、是に恐れ追々引替可レ申、然共新古甲乙無レ之同樣之事故引替年限濟候而も、今の如くやはり新古取交通用致し、融通滯候樣成る儀は有レ之まじくと察せられ候、往古通用之慶長金銀・武藏小判・其外享保・元祿之金・乾金等、結構成り、又金も目方重く、元文之引替之時も、少少づゝ隱し貯引替候を惜みしと見え、此頃御觸に付而持出し候ものも有レ之、是等は御定法之步合を以て御引替被レ遣候、右は文政三辰年八月、御觸も有レ之候へ共、又改て被二仰出一候は

一　慶長金・武藏判・享保金・元祿金・乾字金、右金御買上代之儀は、御定之步合も有レ之候得共、已來猶出進み之爲、是迄古金御買代之外、百兩に付五兩づゝ諸入用之名目を以、古金取扱之者へ、別段增金可二相渡一積り、去る辰年相觸置候に付、追々古金持出候者も有レ之處、右增金之儀、引替方諸入用之名目を以て相渡候儀故、若心得違等に而、古金之賣上主へは不二相渡一引替方世話致候者へ相渡候樣之

儀も難㆑計候に付、猶又觸知らせ候間、若世話方之者へ相渡候者も有㆑之候はゞ、以來は世話方之者へは不㆓相渡㆒賣主へ相渡可㆑申候

右之通町中へ可㆓觸知㆒者也

一　吹替新二朱と、古二朱引替之儀、左之通被㆓仰渡㆒

一　此度吹直し被㆓仰付㆒候二朱判之儀、來る廿一日より追々引替可㆑遣候、尤有來二朱判之儀も、追而及㆓沙汰㆒候迄は、新二朱判取交請取方。渡し方。兩替共、無㆑滯可㆑致㆓通用㆒候、上納之儀も可㆑爲㆓同前㆒候事

一　引替二朱判之儀は、燒二朱判幷極印相分り兼候分共、差出次第引替可㆑遣候條、來廿一日より銀座を始め別紙名前之ものども方へ差出、引替可㆑申事

一　武家共外共、町人共へ相對に而申付、右名前之者共方へ差出し、爲㆓引替㆒候儀も勝手次第に候事

一　引替に可㆓差出㆒二朱判員數相知れ候事に候間、貯置不㆑申、段々引替可㆑申候、若貯置不㆓引替㆒候者、相知れ候はゞ、吟味之上急度可㆓申付㆒事

申三月二十四日

駿河町　三井爲替組　　兩替町　十人爲替組

上槇町　泉屋吉次郎　　室町三丁目　竹原文右衛門

金吹町 播磨屋 新右衛門
堀留町 升屋 源四郎
大傳馬町 殿村 佐五郎
田所町 井筒屋 傳次郎

右は江戸にて被仰渡、當地も同様被仰渡、引替所は當四月被仰出候通略之

一 例無之一朱金之吹立被仰付候、尤重さ凡三分八厘にて、七分通は銀にて、三分通は金を吹交申候而、銀臺之似せ小判之類色にて、手扱ひに割れ候事も有之、殊に至て形ち微小にして紛失も難計、交易通用には不便利なる方も可有之、此一朱判も新小判・二朱判、金銀共古金銀と引替通用可致候趣、爲替方大阪引替御用町人共へも、被仰渡候

一 此度世上通用之ため一朱之歩判金、新規吹立被仰付候、右歩判十六を以て、金一兩之積り、尤銀錢共、兩替小判・二歩判・一歩判・二朱判、同様之割合に相心得、取交無滯可致通用候

右之通、國々へ可觸知者也

申九月

新一朱金





重サ壹分三厘

右一朱判當七月、江戸より登り、引替町人共へ、御渡被ㇾ成候

一　壹步判（イ壹朱）着致し去る廿二日ゟ吹直し、金銀引替相勤居候者共方へ引替候間、爲ニ通用一早々古金又は吹直金二步判・二朱判等を以て、引替に可ㇾ被ㇾ越事

申七月二十六日

右引替御用聞方へ御渡有ㇾ之候へども、在々市中とも、一向歸服不ㇾ仕、外金銀と引替に參り候もの一人も無ㇾ之、御用聞共も大に迷惑之趣、依ㇾ之其段公邊へも申上候而、此後御差登せ被ㇾ下候儀は、御免被ニ御付一可ㇾ被ㇾ下候趣、一統より相願候、仍ㇾ之七月後は、右一朱金は登り不ㇾ申候

一　米價も正月初相場より少々づゝ追々下落し申候、尤昨年は諸國旱損場所も多く、濱方越年米も例より減じ有ㇾ之事に付、一際引立可ㇾ申處、左も無ㇾ之濱方も不景氣に有ㇾ之候、五月七日、例夏米建替

加賀米壹石に付	代五十六匁
米子米同	代五十匁一分
筑前米同	代五十九匁三分
肥後米同	代六十二匁二分
廣島米同	代五十五匁九分
中國米同	代五十九匁一分

今年六月中より、雨稀にて五畿內邊農民雨を祈申候、六月七日・八日は、肥前佐賀・同蓮池邊、大雨洪水有レ之、五十年計りも無レ之程之儀、七月廿八日九日兩日、大風雨有レ之候へども、格別農作に構ひ不レ申、何分今年も旱にて、諸國共上作のよし聞え、追々米價下落に及ぶ、加賀米四十九匁位、肥後米五十七匁、筑前米五十五匁位、尤加賀・越前少々水災有レ之趣に候へども、加賀米漸々五十目位、江戶表七月廿三四五日、一日二夜大風雨有レ之、樹木も吹倒し候程之儀に候へども、近國共田作には格別障り不レ申よし、海道筋も同樣、函根等も殊の外荒れ申候、人馬往來も留り申候程に有レ之候へども、是以て田畑には障り不レ申、八月十四日、下總古河・上州館林・總州關宿邊、大風雨洪水有レ之、別て古河大洪水にて、所々堤切所三四十ヶ所、御城內本丸・二之丸床上段迄も水上り申候、尤家中皆同樣、來四月には日光御社參も有レ之、御止宿に相成り申候故、近來段々と御普請も有レ之、此八月には江戶より見分として、御老中水野出羽守樣はじめ、大目附御下向之處、前文之通洪水にて大破に及び、來年之御止宿には相成り不レ申趣、仙臺も城下洪水にて、廿萬石計は水亡も有レ之趣、仍レ之來酉年日光御社參も戌年御延引に相成候趣、今十月御觸有レ之候事、扨新古金銀引替之儀も、國主御代官其所々の札場にて、國內之分引替被レ遣、猶其諸侯方大阪御館入、藏元掛屋へ連々被レ遣引替に相成り候、尤其は嵩高く、道中費用も多く迷惑に被レ及、登せ金銀之分多分新金と引替に相成り、其手筋より買入候事故、自ら金相場高直に相成り、其上新金吹方澁滯有レ之、急速にも參りがたく、尤新金增吹も有レ之、又新二朱判も增吹有レ之候

はゞ、行々は金も出方多く、相場も自然と下落不ㇾ仕といふ見込も有ㇾ之、前文之通銀は引替上下夥しく、費用も掛り候事故、只々引替いたし候運に參り不ㇾ申、國々商家之儀も同樣と聞え申候、尤古金銀引替之儀、昨年被ㇾ仰出、來酉二月限り之趣に候へ共、古金銀出方少きは全く引替之雜費もかゝり申候故之事に被ㇾ思召ㇾ候而、又々御觸被ㇾ出候

一　古金銀引替之儀、國々之内には最寄引替所迄も、道法相隔候場所も、又は遠國より態々金銀座に持越し引替候者も有ㇾ之趣、右體遠國路之處、壹度に金銀高多く差出し候而は、道中持運之入用も相掛り申候に付、おのづから金銀見計幾度にも差出し候樣に可ㇾ相成ㇾ候、古金銀通用之儀は、先達而相觸候通、來る酉二月に而停止之事に候へば、向後古金銀差出候者之住所より、金銀座并其最寄引替所へ道法五里餘相隔、金銀高一度、金は五百兩、銀は十貫目已上差出候を以て、員數金銀高に應じ、諸入用被ㇾ下候筈に候間、御料は御代官私領領主地頭に而、右諸入用相願候はゞ取調、江戸金銀座へ申立候樣に可ㇾ致候、若當人又は其身寄を以て、直に金銀座へ申立度旨申候はゞ、其通爲ㇾ致候而も不ㇾ苦候間、何れにも厚く世話致し、古金銀所持之者へ、早々爲ㇾ引替ㇾ候樣可ㇾ致候

閏八月

右之通被ㇾ仰渡ㇾ候へども、兎角引替すゝみ不ㇾ申哉に聞え申候

一　西國筋・北國筋之古金銀、皆大阪兩替引替之其手筋藏元町人へ追々差登し、集り金銀は、皆大阪御爲

替仲間へ引替に出し、又其手筋より遣し、登り合之新金銀と引替申候、尤右集り之古金銀、夫々其手元にて眞僞相改め申候上、御爲替仲間へ相渡申候、然れども廣大之金銀員數故、御爲替仲間にて、又再改も迷惑に付、其段公儀へ申上、其家之集り金銀極印を打、其ものゝ包之儘上納に相成り、直樣江戸表へ差下し申度、御爲替仲間より願出候處、尤には被ニ思召一候得共、左樣口々之改に相成り候而は、金銀座も又改候に手數入、面倒に有レ之故、右家々集り古金銀改候上、大阪公儀御掛屋鴻池善右衛門。米屋平右衛門此兩家へ納め、此兩人之改封印にて、江戸表差下し候樣被ニ仰付一候、右樣相成り候而は、此兩家も又甚迷惑に付御斷申上候得共、御聞入無レ之、是非兩家之包にして相納候樣被ニ仰付一、仍レ之乍ニ難澁一御請に相成り、古金銀悉く右兩家之改包に而、御爲替方へ納め申候、同所より御用傳馬を以て、江へ差下申候、右に付而は兩家も廣大の金銀故、筆紙之雜費も夥しく掛り申候、依レ之右筆紙墨往來持寄之人足賃はじめ、雜費諸入用として、銀百目に四分づゝ、一〆目に四匁づゝ、諸入用として兩家之掛戸屋へ被レ下候金は、雜費も少々薄く有レ之候故、其引替金高に應じ、御心添として時々員數定不レ申、御銀被ニ下置一候、引替御用方都合十五軒之内、兩掛屋引殘り十三軒は、皆右兩家之掛屋へ引合に相成り、兩家は御爲替方之引合に成り申候事

一　米價は五月七日夏米建替後より、八月上旬迄、今年六月より雨も稀にて、先諸國旱年之聞え有りて、作並も宜き趣を以て、追々相庭も下落いたし、濱方氣配も不レ宜、八月五七日頃、加賀米五十目前

後、米子米四十六匁、肥後米五十七匁位、然る處肥前・肥後洪水之唱も有りて、東國筋・關八州水災も有之、旁々にて段々相庭も引立、閏八月中旬に至りては、加賀米五十五匁六匁、肥後米六十四匁六七分、此振合を以て

十月十七日、例新米建替相庭、今年筑前建てものなり

筑前米壹石に付　代六十六匁三分

肥後米同　代七十一匁

中國米同　代七十五匁一分

廣島米同　代六十一匁六分

右例之祝儀相庭にて、翌十八日

筑前米壹石に付　代五十九匁七分

肥後米同　代六十匁二分

中國米同　代六十目

廣島米同　代五十六匁二分

右之通にて、今年十二月まで、格別の高下なし

十二月廿五日年內納相場

筑前米壹石に付　代六十匁五分
肥後米同　代六十一匁五分
中國米同　代五十八匁
廣島米同　代五十四匁五分
金　壹兩に付　代六十五匁一分九厘
錢　壹貫文に付　代九匁四分八厘
今年濱方越年有米、二百十五萬二千四百八十俵
昨未年より、三十二萬五千百三十俵増米なり
（原本此ノ間餘白アリ）

（原本此所端ヲ更メ題名及著者名アリ）

文政八乙酉年正月四日、初相場

筑前米壹石に付　代六十匁四分
中國米同　代五十七匁五分
肥後米同　代六十一匁七分
廣島米同　代五十四匁八分
金壹兩に付　代六十四匁三分
錢壹貫文に付代九匁三分六厘

今正月八日例建替、凡右之通にて、夫より先追々下落致し、三月下旬に至り候而は、肥後米五十八匁四五分、筑前米五十六匁か七匁位也、元來去申年所々旱損之場も有レ之、又關八州邊八月には洪水も有りて日光御社參も來戌年へ御延引有レ之程之事、先諸國とも十分之作並とも聞え不レ申、旁々にて追々米價も引き立可レ申處、左樣にも無レ之、仙臺・南部・秋田邊ゝ、風評有レ之程之不作に無レ之、依レ之江戸廻

し米も多く、又御社參御延引に付而は、米穀之入用も無ㇾ數旁々にて、江戶ゟ之買註文無ㇾ之、濱方米之引方も無ㇾ之、不景氣に有ㇾ之、自然と相場も下落之氣配に有ㇾ之候、併し江戶表は昨年關八州之洪水にて水損も有ㇾ之、有米も少々は減じ、米價も當地よりは二三匁も高き當りに有ㇾ之候へども、近年は灘・兵庫・泉州邊ゟ直積有ㇾ之、昨秋已來追々灘・兵庫・泉州邊ゟ積下り申候事夥敷事、依ㇾ之大阪濱方之米穀引ヶ方無ㇾ數、旁々濱方も近年不景氣に相成申候、又灘・兵庫・泉州邊は不ㇾ怪賑ひ申候、是は諸國納屋もの都て北國・西國邊之船頭之思ひ入買積み、則ち之掛米大阪へ出し申候ては、大阪濱方ゟ有米多く、納家ものといふを以て直段も安く、又沖取上荷艀賃仲仕之僱米等、都て運賃多く掛り申候故、少々直段安くても、右入用運賃見競べ申候ては、やはり灘・兵庫邊にて問屋へ直賣致し候方勝手宜しく、代銀等も右から左へと申す如く受拂も宜しく、又江戶よりの買註文、大阪ゟは直段利口に付、海邊之事故舟から船へ直積み致し候事故、是も船頭之手ゟ多分持運び、都ての運賃も薄く、旁々勝手宜敷に付、近來は右之通に相成り、江戶積ゟ大阪註文無ㇾ數、依ㇾ之濱方年々淋敷、灘・兵庫・神部・泉州邊は、段々勢ひ強く、大商人も次第に出來彌々賑ひ申候、願事には無ㇾ之候へども、諸國凶作にて米價高く相成申候時は、中々灘・兵庫邊之手には合ひ不ㇾ申、自然と皆々大阪へ持込可ㇾ申候、旣に肥後米と筑前米とには、俵之内實五升餘も肥後米は多く、筑前米は先正實一石餘にて、此違目も有ㇾ之故、是非直段は二匁ゟ四匁も、肥後米は直段宜敷道理當り前に有ㇾ之處、漸々一匁位之直ひらきにて賣買有ㇾ之候、是等も全くは

近來諸國共米之出方多ク故、格別其價へ內實には頓着致し不レ申故之事なり。是等今米穀拂底に有レ之候はゞ、直段に不レ構內實之所に人々眼がつき申候故、其時は急度肥後。筑前直段之開きは顯れ申候、何分此十ヶ年此方、諸國新田新地等出來、此米之出方夥敷事にて、既に尾州。肥後。備前等、皆十萬石餘之新田出來、其餘國々都て海邊を築出し、山澤沼地を埋め、新田新地に開けし事夥敷事なり、尤奥羽邊東國筋之事は不案內にて不レ知、仙臺など三四十萬石程之新田も有レ之趣、左候へば海內にて夥敷新地米と推察せらる、今年より卅九年已前、天明七未年我等江戶へ出府致居候、其五月に至り申候而は、江戶は勿論京。大阪、都て國々天明三卯年信州淺間燒之年ゟ年々諸國水害多く、右未年に至りては、海內一統之飢饉となり、諸人難澁致し、渴命に及び、無二是非一富家之家々を打壞ち米穀を盜み、其狼藉言語同斷之事にて、公儀之御政道にも及び難き程之事也、我等在江戶にて旅宿に米穀一粒も無レ之、三日程之間朝夕大豆計を煑食し申候、米に相場なく、錢百文に一合位之事なれ共、夫すら賣もの一人も無レ之、大阪も右同樣市中家々をこぼち、其騷動大方ならず、米相場も公儀より嚴敷命有レ之、無レ據相庭も立合申候へ共、五月十四日五日頃より、廿日頃迄は、立合ものも無レ之、無レ據休み申候而、廿日頃之相庭、一石に付二百八十目位なれ共賣買無レ之、野菜迄も夫れにつれ悉く直上げ致し、輕きものは段段困窮致し、町方ゟ施行等有レ之といへども、多分銀錢にて口腹を養ひ申候に至らず、殊の外困勞致し、仲仕長ろく、輕きものは、中國屋敷之濱、肥後。筑前。備前等之屋敷內、平世出米有レ之場所之砂地へ

こぼれ有之米を掘おこし、直様川筋にて砂を洗ひ除け、此米を銘々食ひ申候而、露命を漸く繋ぎ申候程之事也、右飢饉之騷動より諸侯方はじめ市民共、米穀之貴き事金銀も不及と申事、漸く覺え申候、依之天明七八年の頃より、諸侯方諸役人も心付き、國內海邊山澤沼地はじめ、無益に捨り申候場所等見立、可成程は新地新田に取立申樣になれり、五十年已前ゟ今見競べ候はゞ、海內之出來米三ヶ一は多く相成り可有之、其上農民も次第に作り方も功者に相成り、今豐作打續き候はゞ、右之新地米と打合廣大之出來米成べし、右等之事は三貨圖彙物價之部初編に委しく出しおけり、依之今大抵之飢饉有之候而も、四十ヶ年已前之困窮程に至る事は不可有之と推量し候、全く治世之餘澤難有事なり、右之通り先米穀においては諸侯方も無油斷世話やかれ候事故、先不自由は無之候へ共、右に付ては自然と近年米價も下落に及び、貢物金銀之取入薄く、公私之辨用難調難澁と見申候、依之右米穀之外產物無之而は、又金銀之融通も滯候事故、國內五土之場所を試み、木材・炭薪・絹・蠶・蠟・紙・南艸・澁・椎茸・蕨・ぜんまい・石灰・藥種類・瀨戶物類・茶・木具・挽物類・五倍子・紅花・紫根等、其外國產と可成ものは、其役人を見立、精力を盡し世話致し、諸事勸農有之、米穀之外產物にて金銀を取入る工夫無之而は、金銀之融通に差支候事なれども、其心得無之、米穀之出來計を賴みにしては、末世之相續成りがたし、近世は國々諸侯方も右之心得にて、肥後・筑前・豐後邊、專らはぜ蠟を作り出し、種種半紙・卷紙・杉原・奉書類、國々より頻に出で申、當時紙類など段々直段下落致し、仕入方も引合不

㆑申樣に相成り迷惑せられ、又大阪紙問屋之分も、江戶積はじめ東國筋得意ささも何となく困窮にて、代銀も滯濟世も難㆓出來㆒、大阪內紙問屋之分も、段々潰れ申候家數軒有㆑之候、半紙などは前々ゟ中國吉賀を第一として、小藏納屋紙等は至て無㆑數ありし故、其屋敷も問屋も辨理よかりし也、其時節と只今にては半紙一〆にて四五匁も下り、夫につれ卷紙・花紙の類に至る迄も段々と直段下落せり、依㆑之小藏納屋紙も引き合がたくに付、大阪へ廻し不㆑申、江戶東國へ直積致し拂候故、江戶に紙類不自由に無㆑之故、大阪問屋へ買註文無㆑之、前之紙代銀は滯り返濟無㆑之、旁々都て江戶積紙屋之分、渡世難㆓出來㆒休み居候紙株數軒出來申候、まづ紙類ハゼ蠟は、大きに損銀も多かるべし、依㆑之筑前之蠟は藏拂も近年止めに成り、肥後も引合不㆑申故、段々近年は登せ方も減じ申候、ハゼ蠟も三十ヶ年前は、一斤二匁四五分より三匁位に有㆑之候處、近年出方多きに付一斤九分位より一匁四五分位に成り、右ハゼ蠟之儀も凡三十ヶ年前、國々農民迄も造り候へば、格別德用にも可㆓相成㆒、田畑之堤等に植付候而も、田作之構ひに成り不㆑申、田畑之堤山都て不用にて、明地有㆑之候はゞ精々植付可㆑申、諸國御代官衆もハゼ蠟仕付方委しく書付、農民どもへ御渡し被㆑成候儀も有㆑之、是ぞ其時節は蠟之出方も薄く、又日用非常之らうそく等に至る迄、遣ひかた廣大成儀にて、直段も宜敷有㆑之候故、勸農被㆓仰付㆒候、依㆑之諸國とも段段とハゼ蠟之仕付方多く相成、依㆑之又出方も多く當時之振合に成申候、然れば當時蠟紙類は仕入方引合不㆑申哉にも聞え申候、左候へば外之產物類心がけたきものなり、大侯は只大き成事に役人も眼を掛け

申候而、小事は埒之明ぬやうに存候人有レ之、强て世話致し不レ申打捨候へば、俗諺の如く大取よりは小取と申如く、無益其功も無レ之と存候、さゝい成事を心がけ、無役之ものゝ申渡し、さゝい成事も產物に成候ものは世話致し取立度ものなり、大道も小徑よりすと申事有レ之、諸品產物と成候程之ものは、役人をかけ世話いたし度ものなり、たとへ大阪へ出し錢金に成り不レ申候而も、又國內之益に成申候、只々米穀と双べ精々產物之心得有レ之たし、行末はまた一ツの備にも相成り可レ申候

一　新古金銀引替之儀、當酉二月を限り、其後は新金銀計通用可レ致、古金銀も二月後は潰しに相成、通用停止之趣、昨申年諸國へも御觸渡し有レ之候得共、海內廣き事故行屆きがたく、今以て新古金銀取交通用いたし申候故、無レ據猶又引替之儀、今七月迄御猶豫有レ之候

申渡

古金銀通用之儀、當二月迄を限候樣、去申年三月相觸候處、今以古金銀引替殘り有レ之趣に候、遠國等いまだ不二行屆一哉に付、古金銀之儀、當酉七月を限り不レ殘引替可レ申候、尤遠國之分は、去申年八月相觸候通り、引替之儀金銀高道法遠近に應じ、道中入用も被レ下候事に候へば、御料は御代官私領は領主地頭に而、猶厚く致二世話一、最寄之引替所へ爲二差出一、不レ殘引替候樣可レ被二申付一候、當酉年八月か古金銀通用彌停止たるべく候間、無二油斷一引替に差出可レ申候、尤停止已後通用致し候もの於レ有レ之者、急度可二申付一候

酉二月

右江戸ゟの御觸有レ之、其後も兎角引替無レ歟、依レ之猶又引替月延等被二仰出一、精々新古引替候樣被二仰渡一古金銀通用之儀、當八月より彌停止たるべく候間、無二油斷一引替に差出し可レ申趣、當二月相觸候處、今以引替殘有レ之趣に付、猶又來戌年二月迄は、是迄之通古金銀通用致し、三月ゟ停止たるべく候、尤遠國等より引替方、御料は御代官私領は領主地頭に而、致二世話一爲二引替一候樣にと先達而追々相觸候通、此上共急度致二世話一、來戌年二月迄に不レ殘引替させ候樣可レ致候

右之通從二江戸一被二仰下一候條、此旨可二觸知一者也

酉七月

一　今年春來不氣候にて、別て四月下旬梅雨中は勿論、日々快晴稀にて、六月四日土用に入、漸々快晴有レ之候へども、朝夕冷氣にて不順なり、右之通四五月は雨多く、諸國大水と申程之出水は無レ之候へども、北越・加州・南部邊水多く、苗痛み皆無に而も可レ有レ之所、此土用之快晴にて先々見直し、凡半作にても可レ有レ之樣子、津輕・秋田邊二三歩位之作之樣子、西國邊肥前は大抵之作、九州地六七歩、四國同樣、東國關八州都て先半作位之樣子、依レ之米價一と際引立べきの所、近來灘・兵庫・泉州邊始め、小藏納屋もの米入津年々多く有レ之、出方も江戸積始め他國へ積出し候も、船より船へと申如く直積之勝手よく、其上大阪へ廻し候而は、上荷船賃仲仕之賃米等之雜費引ケ方多く、俵之實入も違ひ、少々大阪より

直段高くても、右等之引方算當しては、やはり灘・兵庫・泉州筋より買積候方利かたに付、近年段々と右之場所繁昌致し、江戸はじめ諸國の買注文夥敷有之、仍之大阪濱方有米引方薄く、此四月濱方有米も凡百七八十萬・二百萬計も有之趣にて、まづ右等之趣を以て有米多、依て諸藏とも米價下直なり、大阪濱方も年々淋しき氣配に可相成哉歎敷事なり

五月七日、夏米建替相場

加賀米壹石に付　代五十二匁一分

筑前米同　代五十七匁二分

肥後米同　代五十八匁四分

廣島米同　代五十二匁三分

中國米同　代五十五匁八分

金壹兩に付　代六十四匁四分七厘

錢壹貫文に付　代九匁八分七八厘

凡右之通の處、追々東西不作之趣風評有之、七月盆後より、追々米價引上げ、八月中旬加賀米六十三匁二分、筑前米六十八匁一分、肥後米七十匁二分なり、然る處八月に入、又屢々大雨有之、諸國ともいよいよ不作の聞えありて、口々高直になれり

一　日光御社參之儀、今酉年と被二仰出一候得共、前書の如く關八州筋洪水にて、田畑不作に付、無レ據又御延引被二仰出一、來戌年御社參可レ被レ遊御觸渡し有レ之處、御道筋荒地多く、其上諸國とも今年又水害にて、不作之趣達二上聞一、今十一月又々御延引之段御觸有レ之、難レ有諸民悅候

來戌年四月、日光山御參詣可レ被レ遊旨被二仰出一候處、當年諸國違作に而、一同可レ爲二難儀一と被二思召一候、依レ之來戌年御參詣之儀御延引被レ遊候、猶御次分之儀者、追而被二仰出一候而可レ有レ之旨被二仰出一候段、從二江戶一被二仰下一候

酉十一月九日

右之通被二仰出一、士民一同御慈愍難レ有事感服いたし候、近年金相場之高直に相成り候儀も、多くは右御社參之御用多きを以て、自然と引立申候儀と相聞え候、然る處右御社參御延引被二仰出一、其上近來新古金銀吹改被二仰出一、或は新二步金吹方被二仰付一、南鐐二朱吹改り、一朱金等之吹出し有レ之、海內通用之增金等ゟ夥敷事可レ成に、やはり金相場高直なるは不審なり、おもふにこれは右御社參御延引と計被二仰出一候事故、是非不レ遠近年之內に御社參可レ有レ之儀勿論之事故、供奉之諸侯方旗本面々幷家中迄も、其用意金備へ被レ置候而、容易に出方無レ之、依レ之世間へ之融通無レ之故の事成るべし、又諸侯方も近年嚴敷儉約を被レ立、國內之金銀他邦へもれざるやう被レ致、只產物を以て金銀に替、國へ取入るを專らと被レ成候事も有レ之、旁々人不レ知偏よる氣味も可レ有レ之歟、農商迄も專とする所なれば、容易之金銀吹

増等有ㇾ之候而も、海内にては不足之事成るべし、然れば猶々金銀は大せつにすべし、宣化紀に「黄金萬貫アリト雖モ不ㇾ療ㇾ飢、白玉千箱何能救ㇾ冷」とあれども往昔と違ひかゝる隆盛太平之御世に生れ、殊に米穀海内に充満し、金銀さへあれば米穀はじめ山海之美味・衣服・家居、萬事心之儘に可ㇾ成、皆是治世之恩澤有故也、然れば公儀之掟を守り、身を慎み貨殖し、わが天祿を守りむさぼらず奢らず、只勤め勵むべし、大富は運によるとも、われら如きの小富は必勵によるべし、死生命ありといへどもみなおのれにあり、長壽之相ありとも、養生を勤めざれば必短命なり、富貴天にありといへどもかせぎ勤めざれば必貧窮なり、右等聖語といへどもかならず頼とすべからず、えては心得違ひ果報は寝てまてと怠るものあり、果報はわが勤切磋琢磨之功をつみて、其時節を練りて待といふ事なるを、わが勝手より心得違ひの方に引付るものなり、よく〳〵心得油断すべからず

十月十七日、新穀建替相場、今年中國建ものなり

中國米壹石に付　代八十目
肥後米同　代八十五匁五分
筑前米同　代七十七匁一分
廣島米同　代七十匁五分
備前米同　代八十目

金　壹兩に付　代六十五匁一分
錢　壹貫文に付　代九匁八分八厘
右等大抵例御祝儀入札にて、正當にあらざる事、年々如ㇾ此、然るに今年は諸國之不作聞えありて、初相場後も格別高下なく先高直なり
同十八日
中國米壹石に付　代八十五匁
肥後米同　代八十三匁六分
筑前米同　代八十一匁五分
廣島米同　代七十七匁五分
凡右之通にて、十二月下旬迄、二三匁づゝの高下あり
十二月二十三日、納相場
中國米壹石に付　代七十五匁五分
肥後米同　代七十六匁五分
筑前米同　代七十四匁五分
廣島米同　代六十八匁五分

備前米同　代七十三匁五分

金　壹兩に付　代六十四匁六分五厘

錢　壹貫文に付　代十匁

岡大豆壹石に付　代七十一匁五分

大淵大豆同　代七十六匁

肥後小豆同　代五十九匁五分

今年濱方越年有米、二百二十七萬二千八百五十俵

昨申年より十二萬三千七十俵增米也

（一本此の卷尾に、物價之部第十卷の卷尾に記しある、「天正・慶長年より」

云々と同文の一文を、附記しあり）

宮崎幸麿
小西武六　校

大正五年九月十七日印刷
大正五年九月二十一日發行

日本經濟叢書　卷二十八　非賣品

編者　瀧本誠一

發行者　佐藤卯兵衛
東京市神田區駿河臺鈴木町拾六番地

印刷者　中田福三郎
東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地

印刷所　株式會社秀英舍第一工場
東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地

發行所　東京神田區駿河臺鈴木町拾六番地
日本經濟叢書刊行會
電話本局三一八五番
振替口座東京二六八二〇番

理事　高木範之丞
佐藤卯兵衛

CONTENTS

of the twenty-eighth volume

SANKWA DZUI, *or a graphical cyclopædia of the three (gold, silver and copper) coins, i. e. an encyclopædical history of coined money in Japan, with appendices on the history of prices, especially of the price of rice, on the history of weights and measures, together with reprints of useful pamphlets on the history of money and prices by contemporary and other writers.*

1793-1815

Part II.

By **KUSAMA NAOKATA**

(1753-1831)

BIBLIOTHECA
JAPONICA
ŒCONOMIÆ POLITICÆ

VOL. XXVIII

TŌKIŌ
NIHON KEIZAI SŌSHO
KANKŌKWAI

1916.

BIBLIOTHECA
JAPONICA
ŒCONOMIÆ POLITICÆ

VOL. XXVIII

TŌKIŌ
NIHON KEIZAI SOSHO
KANKŌKWAI

1916.